

第3節 土木園地区1次調査区

1 調査の概要

土木園地区1次調査区は、大分県豊後大野市千歳町長峰字土木園（旧大野郡千歳村大字長峰字土木園）に所在し、高添台地上に位置する高添遺跡の南西端にあたる。遺跡の内容として、弥生時代後期～古墳時代前期や中世の遺構群が主体であり、このほかにも旧石器時代・縄文時代の遺物も確認できる。これまでの調査では、昭和61年に大野川中央地区畑地帯総合改良事業に伴う試掘調査で、今回の発掘調査区と重なる位置において弥生時代終末の竪穴住居跡を検出しており、遺構群の存在はかねてより確認されていた。発掘調査は、平成14年5月から平成15年3月まで11ヶ月間にわたり実施したが、今回の発掘調査における成果として、弥生時代後期～古墳時代前期の方形竪穴住居跡34基をはじめとした遺構群が検出されている。

第3表 土木園地区1次調査区遺構一覧表

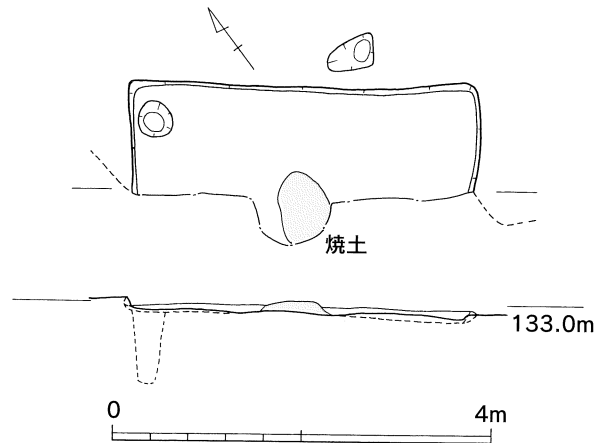
本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の時期	特記事項	掲載頁
1号竪穴	1号住居	竪穴住居	古墳時代前期前葉	製塩土器出土	120
2号竪穴	2号住居	竪穴住居	古墳時代前期前葉		120
3号竪穴	3号住居	竪穴住居	—		121
4号竪穴	4号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉		121
5号竪穴	5号住居	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代前期前葉		121
6号竪穴	6号住居	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代前期前葉		122
7号竪穴	7号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉		122
8号竪穴	8号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉		126
9号竪穴	9号住居	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代初頭		126
10号竪穴	10号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉		127
11号竪穴	11号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉		130
12号竪穴	12号住居	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代初頭		130
13号竪穴	13号住居	竪穴住居	古墳時代初頭以降		131
14号竪穴	14号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉		132
15号竪穴	15号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉		133
16号竪穴	16号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉		135
17号竪穴	17号住居	竪穴住居	古墳時代前期前葉		135
18号竪穴	18号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉～古墳時代初頭		141
19号竪穴	19号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉～終末		142
20号竪穴	20号住居	竪穴住居	古墳時代前期前葉		146
21号竪穴	21号住居	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代初頭		147
22号竪穴	22号住居	竪穴住居	古墳時代前期前葉		147
23号竪穴	23号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉～終末		147
24号竪穴	24号住居	竪穴住居	古墳時代前期前葉		147
25号竪穴	25号住居	竪穴住居	—		148
26号竪穴	26号住居	竪穴住居	—		148
27号竪穴	27号住居	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代初頭		148
28号竪穴	28号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉～終末		150
29号竪穴	29号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉～終末		150
30号竪穴	30号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉～終末		152
31号竪穴	31号住居	竪穴住居	弥生時代後期後葉～終末		152
32号竪穴	32号住居	竪穴住居	—		155
33号竪穴	33号住居	竪穴住居	—		155
34号竪穴	34号住居	竪穴住居	—		
35号竪穴	35号住居	竪穴住居	—		155
1号土坑	1号土坑	土坑	弥生時代中期		166
2号土坑	2号土坑	土坑	弥生時代終末～古墳時代初頭		166
3号土坑	SX 1	土坑	15世紀末～16世紀初頭	祭祠土坑	170
1号地下式壙	—	地下式壙	中世		

2 遺構と遺物

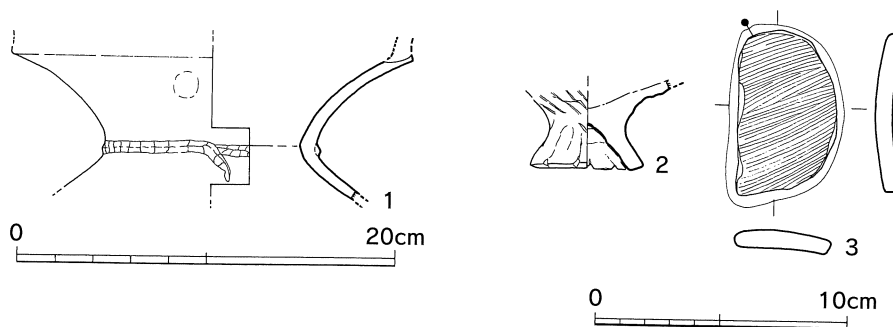
1号竪穴 (第135図)

調査区の北端において確認された方形竪穴住居である。遺構の南西側の大部分が攪乱による削平を受けており、一辺3.7mの北東側部分のみ残存している。中央部には焼土の塊が確認されており、北端コーナーからピットが1基検出されている。床は西から東に向かい、わずかに傾斜している。

出土遺物は第136図に示した。1は複合口縁壺の破片であり、頸部には上下から連続して指押さえした断面三角形の突帯がめぐらされ、結節点ではネクタイ状に突帯を垂下させている。2は製塩土器の底部片である。3は半月形の土器片加工品であり、側辺を全面研磨している。



第135図 高添遺跡土木園地区1次調査区1号竪穴実測図 (1/80)

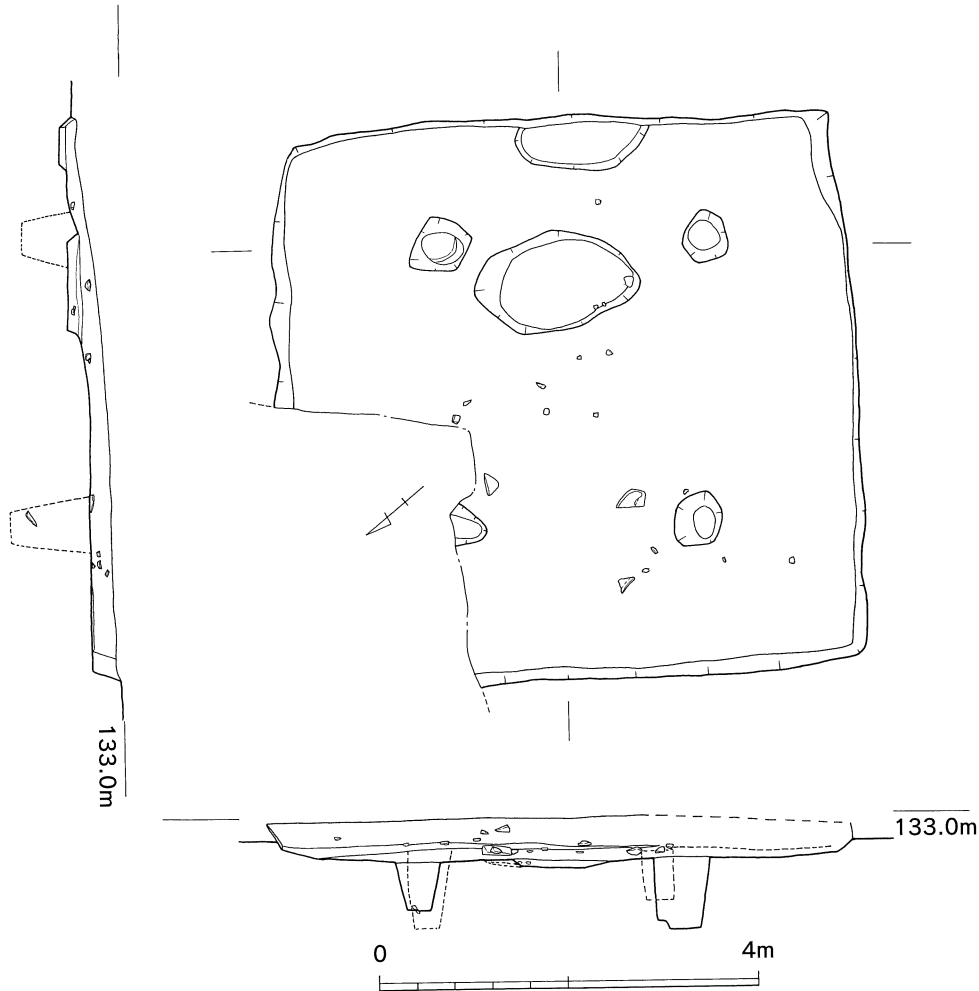


第136図 高添遺跡土木園地区1次調査区1号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

2号竪穴 (第137図)

調査区の北東端において確認された方形竪穴住居である。遺構の北側部分が攪乱による削平を受けているが、6.2×6.0mのほぼ正方形を呈するものである。柱穴は4本柱であり、南東側の2本の柱穴間に長軸1.8m、短軸1.0m、深さ15cm程度の楕円形を呈する浅い土坑が確認できた。炉跡である可能性があるが、顕著な焼土・炭・灰などは確認できなかった。また、竪穴の南東辺に接して中央部に長軸1.4m、短軸0.5m、深さ10cm程度の楕円形を呈する浅い土坑が確認できた。

出土遺物は138図に示した。1・4・6は高坏である。1は丸く膨らむ坏部から大きくS字状に外反し、口縁部は水平に延び端部を丸く仕上げる形態をもつ。内外面とも坏部は縦方向のミガキが施されており、丁寧な作りである。4は脚が比較的高いタイプであり、屈曲部に円形透かしが穿たれている。6は脚が比較的低いタイプであり、中央付近に円形透かしが穿たれている。2は複合口縁壺の破片であり、斜刻目文が施文された断面三角形の突帯がめぐらされている。3は甕であり、比較的器壁が薄い。5は小型壺である。7～11は半月形の土器片加工品である。12・13は鉄器片であるが、用途は明らかでない。



第137図 高添遺跡土木園地区1次調査区2号竪穴実測図(1/80)

3号竪穴(第139図)

調査区の東端において確認された竪穴住居の壁面の一部である。削平が著しいが円形プランを呈していた可能性が高い。遺物は出土しておらず、時期の特定は困難である。

4号竪穴(第140図)

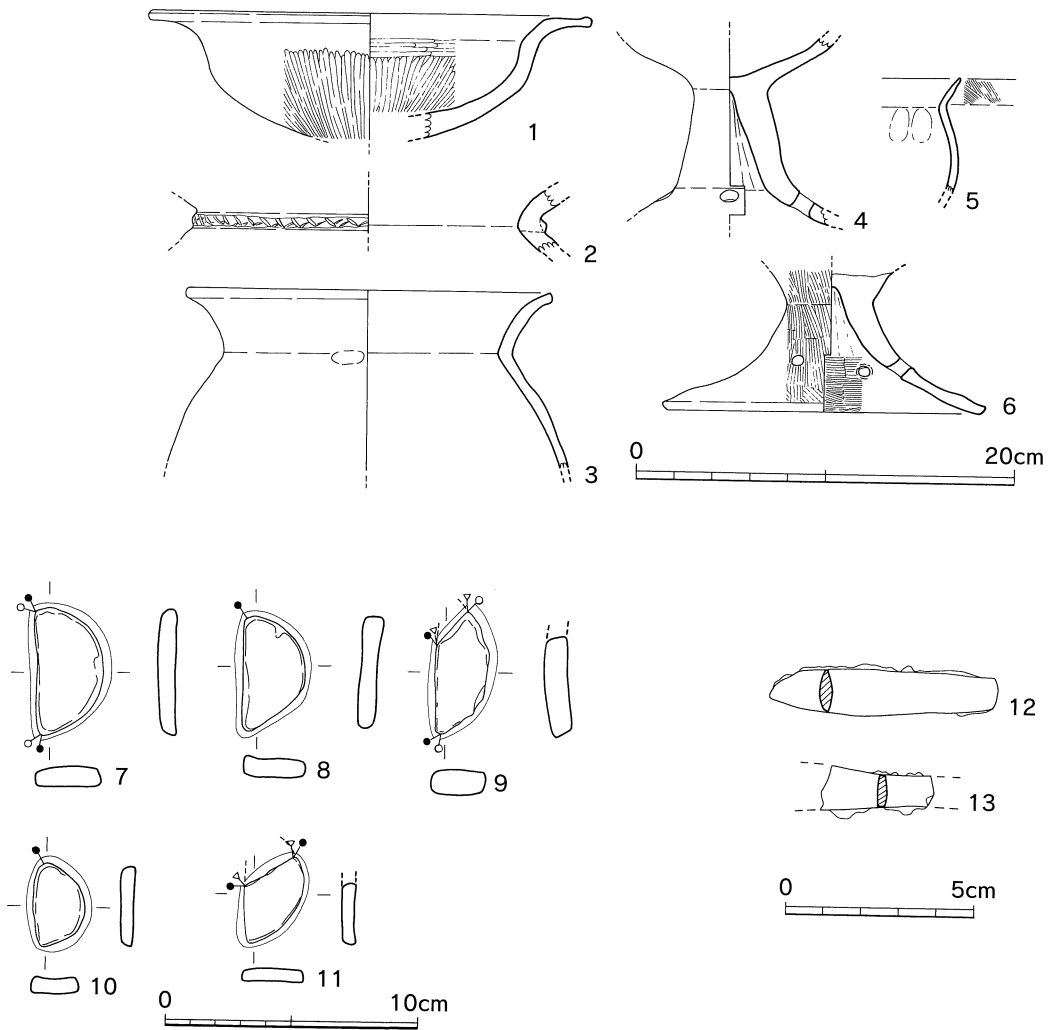
調査区中央よりやや南西側において確認された方形竪穴住居である。東コーナーが10号竪穴から切られている以外はほぼ完存しており、7.0×6.4mの正方形に近い平面形を呈するものである。柱穴は2本1単位で4ヶ所に配するものであり、南東側の2単位の内側にはさらに1本ずつ柱穴が並列して付加されている。床には貼り床が施されており、竪穴の西コーナーおよび南コーナーには不定形の落ち込みが確認できる。

出土遺物は141図に示した。1は高坏である。丸く延びる坏部の中央付近で屈曲し、外反しながら口縁に至る。2は複合口縁壺であり、口縁の立ち上がりは低く、外面に櫛描波状文が施されている。3は甕であるが、口縁の成形が手づくねで行われており、やや歪である。

4～7は半月形の土器片加工品である。

5号竪穴(第142図)

調査区中央よりやや南西側において確認された方形竪穴住居である。西コーナー付近で6号竪穴を切っている。5.8×5.9mのほぼ正方形に近い平面形を呈するものである。柱穴は4本柱であり、竪穴の南東辺近くの中央部に長軸1.0m、短軸0.8m、深さ15cm程度の不定形を呈する浅い土坑が確認できた。また、中央よりやや北西側に長軸0.7m、短軸0.4m、深さ15cm程度の長方形を呈する浅い土坑が確認できたが、炉跡に相当するものであろうか。このほかにもピットが数基確認されている。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。竪穴埋土中には焼土



第138図 高添遺跡土木園地区1次調査区2号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)

等が浮いた状態でまばらに堆積していた。

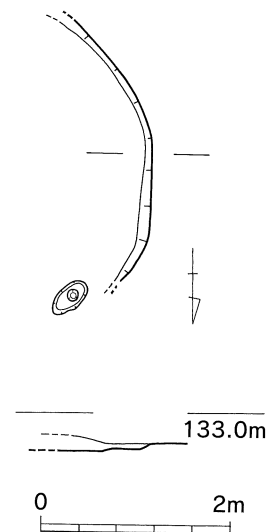
出土遺物は143図に示した。1は複合口縁壺であり、直立する口縁の外面に櫛描波状文が2条施されている。2は甕である。比較的張りの小さい胴部に外反する口縁がつく。3～14は半月形の土器片加工品である。6のように弦部にキザミを入れ、弧部にノッチを1ヶ所入れるものもみられる。

6号竪穴 (第144図)

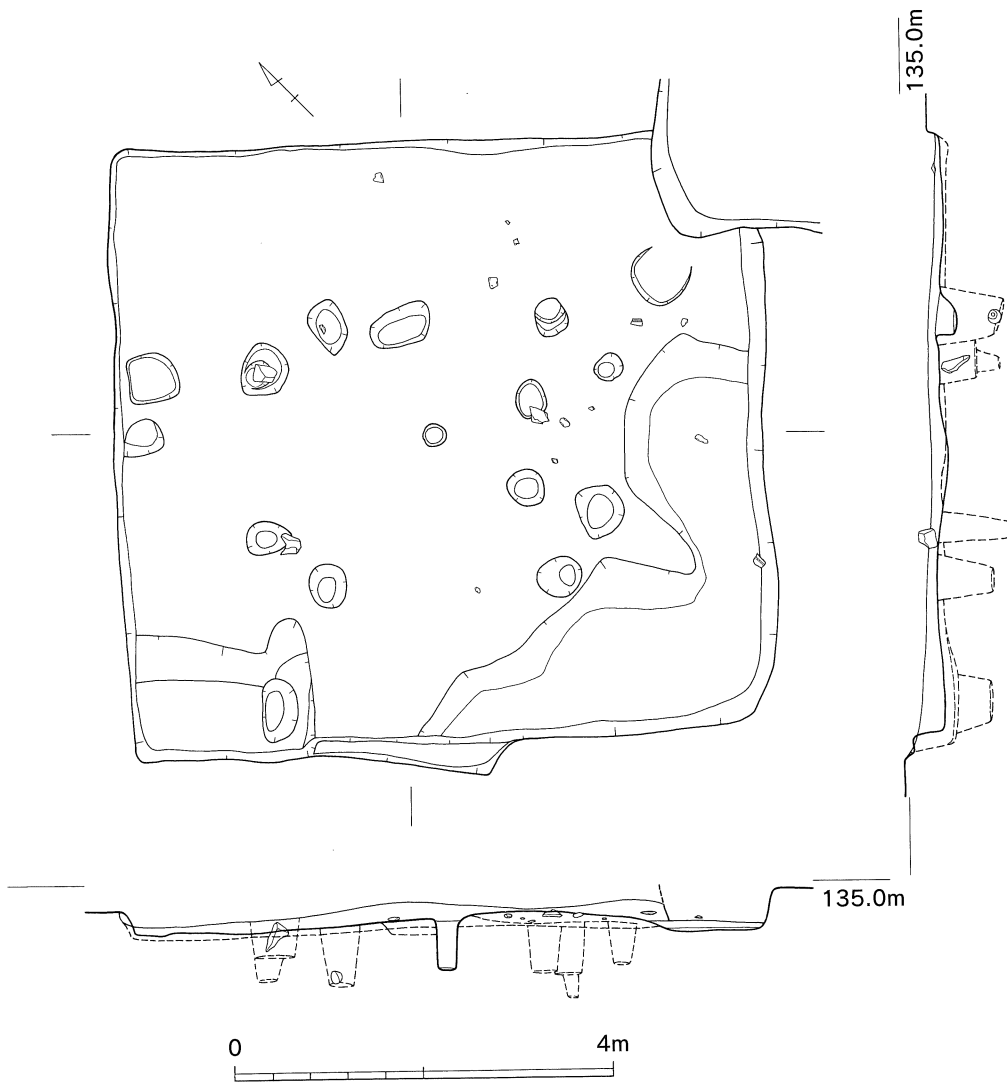
調査区中央よりやや南西側において確認された方形竪穴住居である。東側が5号竪穴から切られている以外はほぼ完存しており、残存する辺は5.6mを測る方形の平面形を呈するものである。柱穴は4本柱であり、南東の2本の柱穴間に長軸0.7m、短軸0.6m、深さ10cm程度の浅い円形土坑が確認できた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。遺物は細片が多く図化しえるものはみられなかったが、壺胴部のベルト状突帯の破片がみられ、時期の指標になる。

7号竪穴 (第145図)

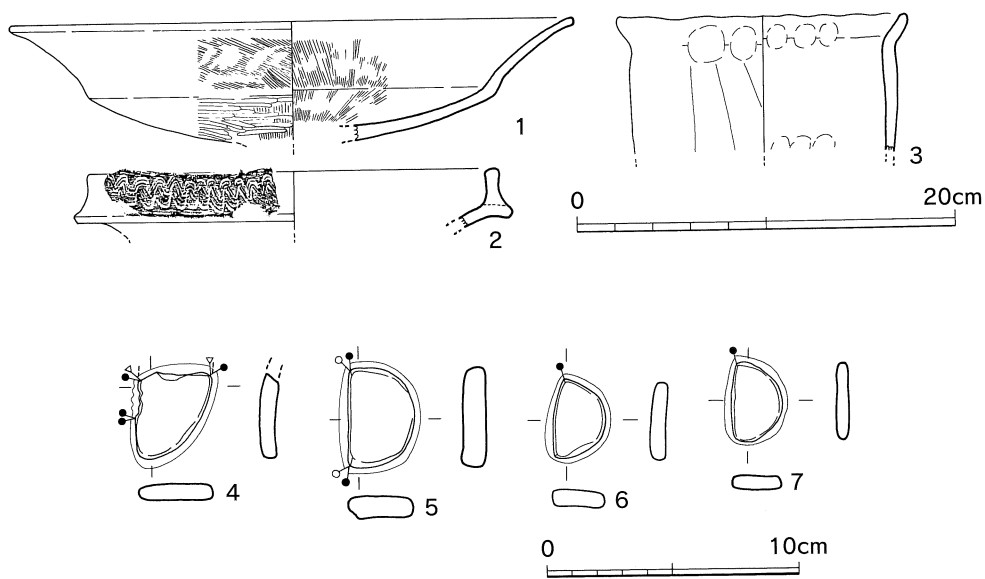
調査区の南西側において確認された方形竪穴住居である。平面形はやや歪だが、1.6×4.6mの方形に近い平面形を呈する。埋土中からの出土遺物は少なく、図化しえるものは146図に示した甕の1点のみである。



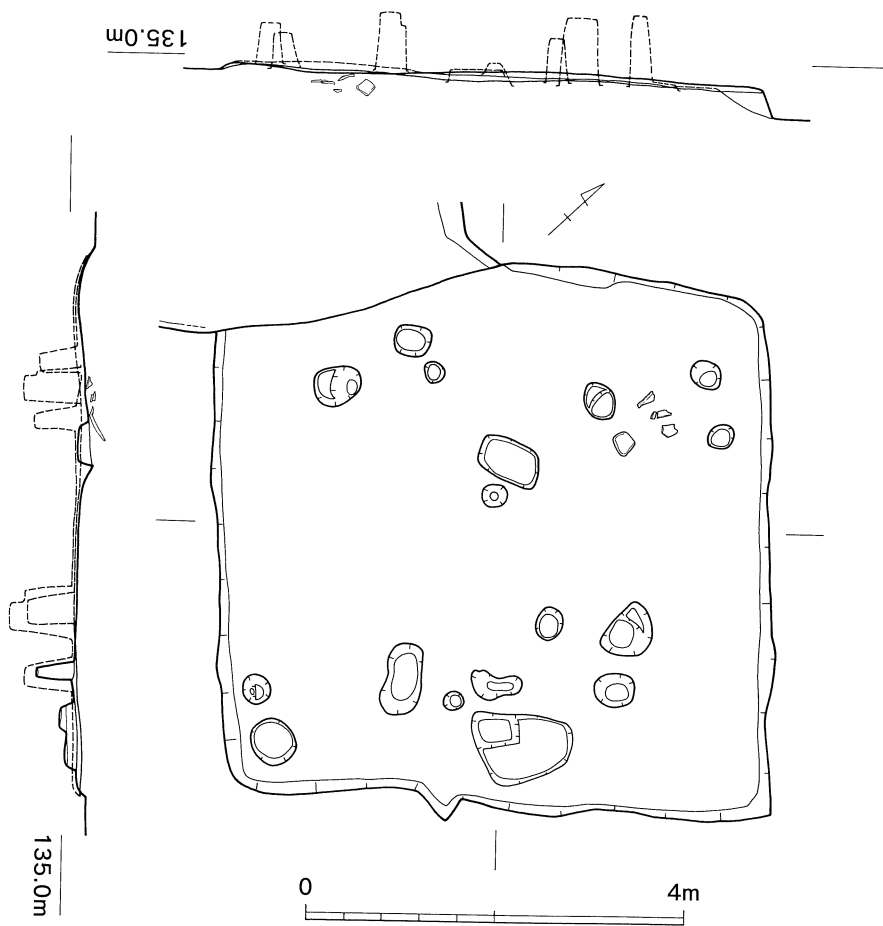
第139図 高添遺跡土木園地区1次調査区3号竪穴実測図 (1/80)



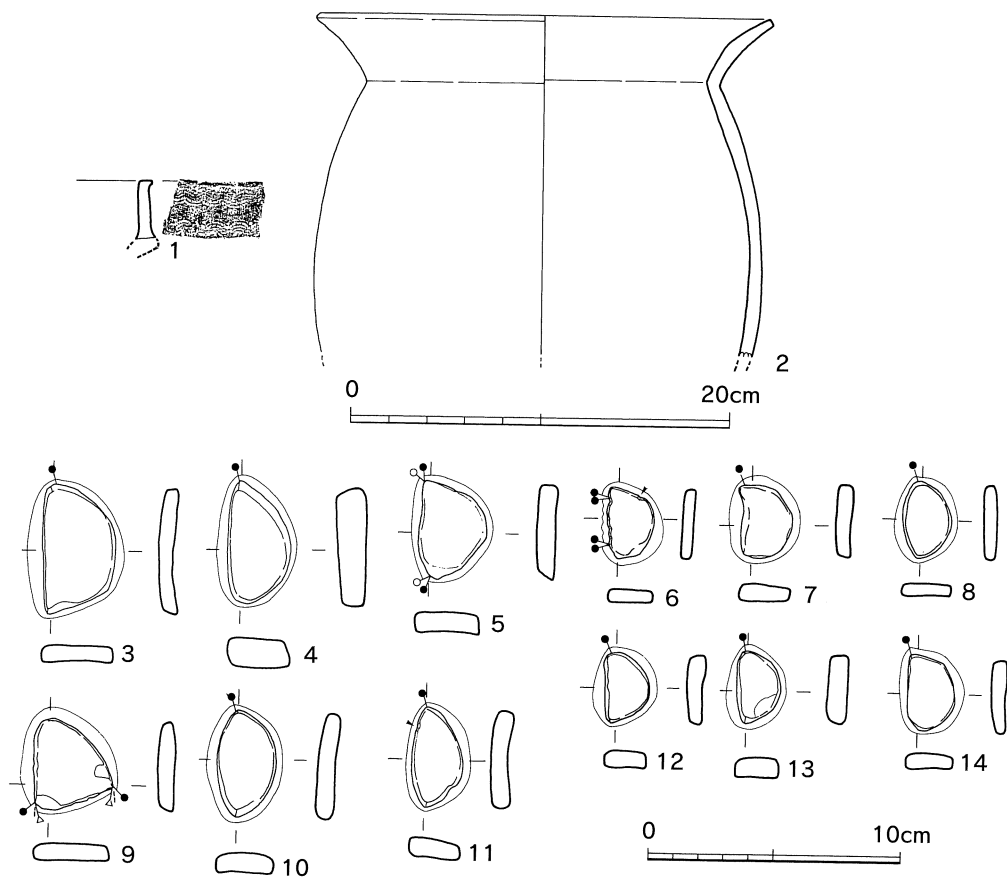
第140図 高添遺跡土木園地区1次調査区4号竪穴実測図 (1/80)



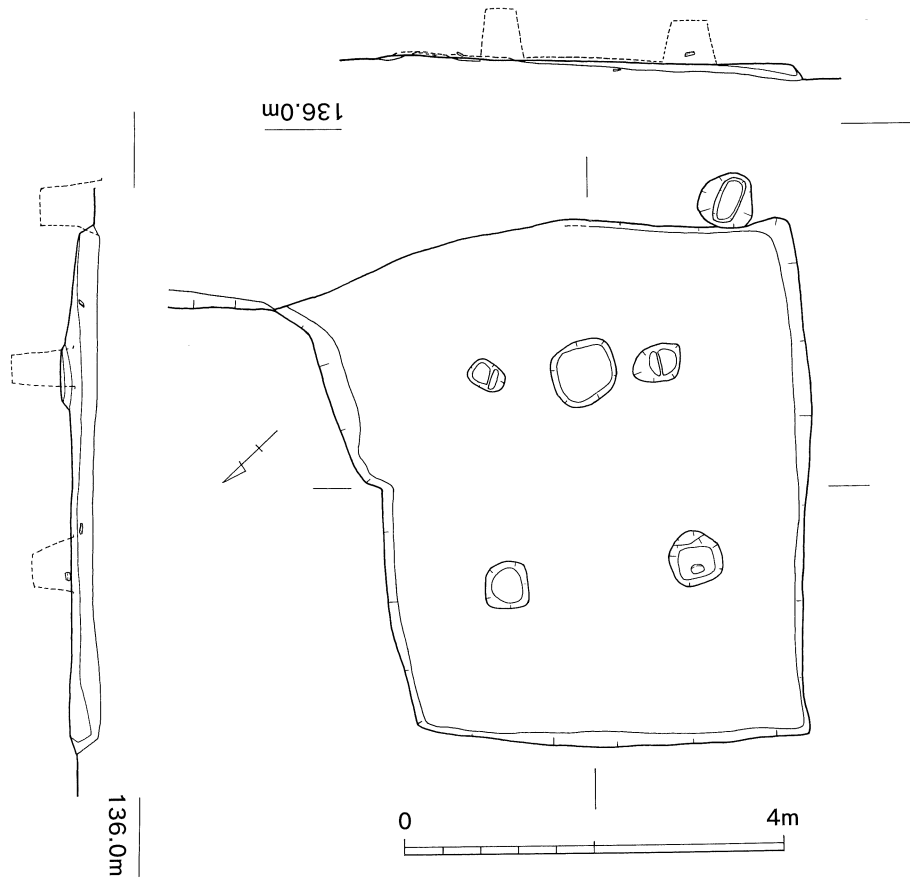
第141図 高添遺跡土木園地区1次調査区4号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)



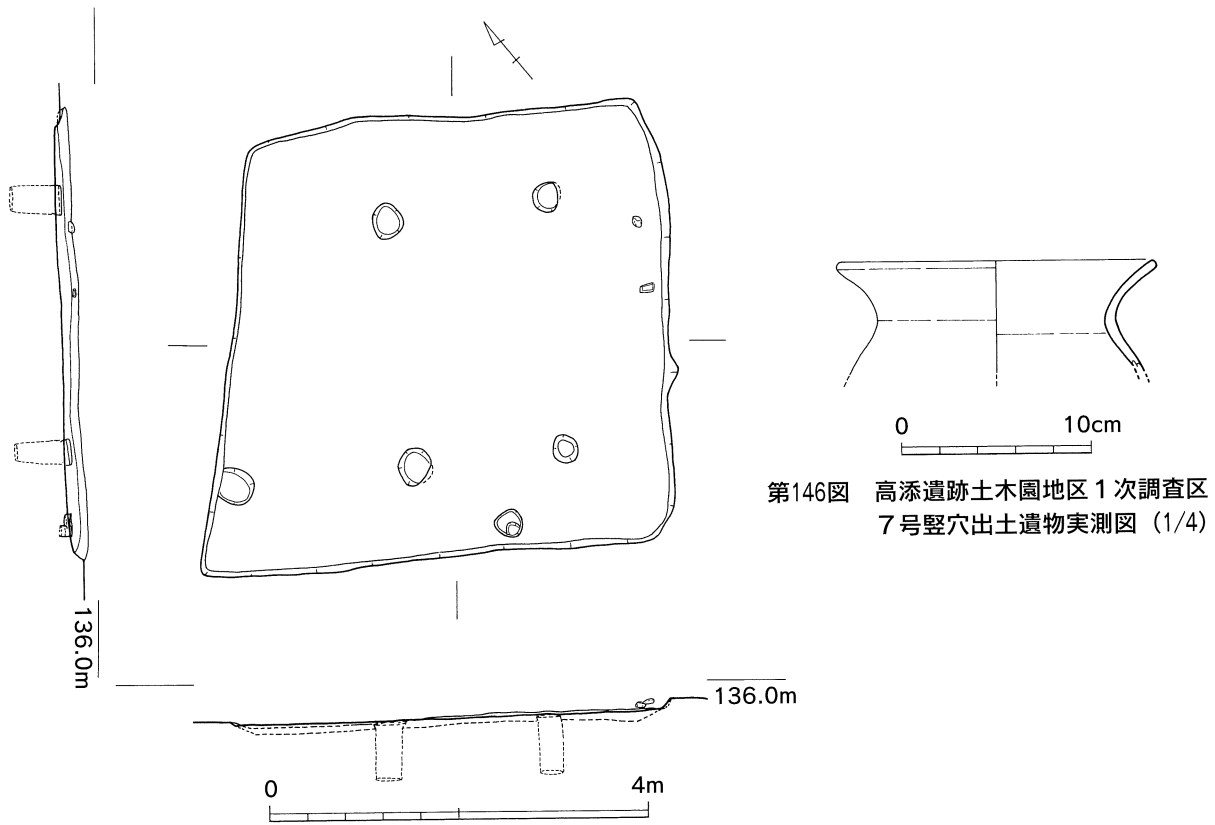
第142図 高添遺跡土木園地区1次調査区5号竪穴実測図 (1/80)



第143図 高添遺跡土木園地区1次調査区5号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

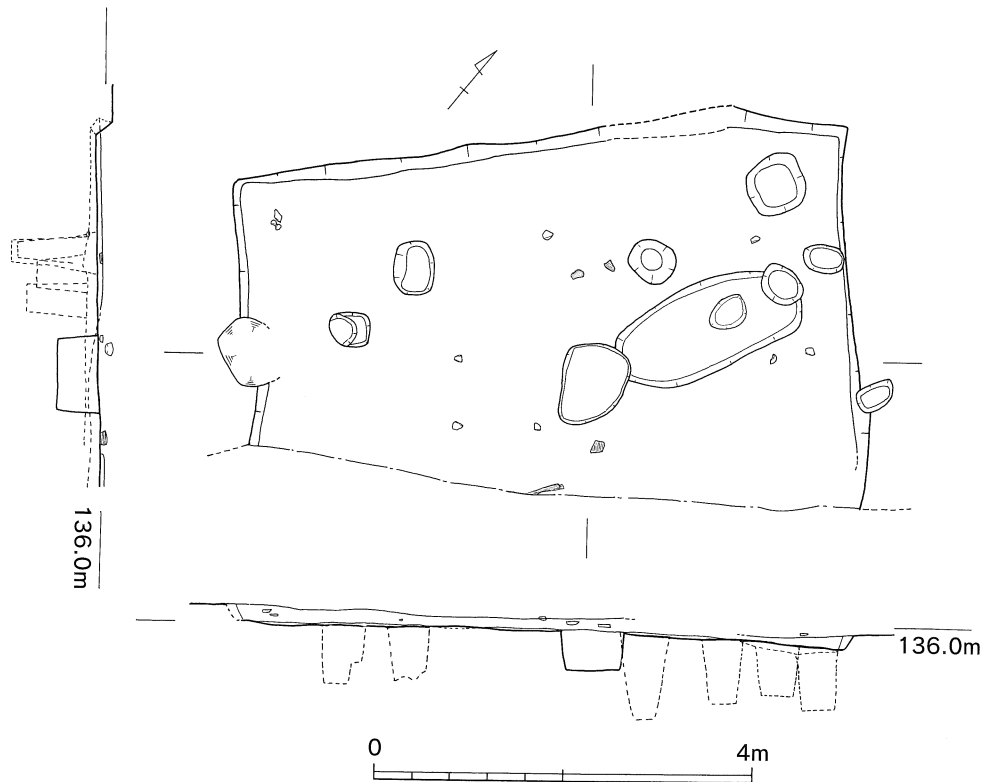


第144图 高添遺跡土木園地区1次調査区6号竖穴実測図 (1/80)



第146图 高添遺跡土木園地区1次調査区7号竖穴出土遺物実測図 (1/4)

第145图 高添遺跡土木園地区1次調査区7号竖穴実測図 (1/80)

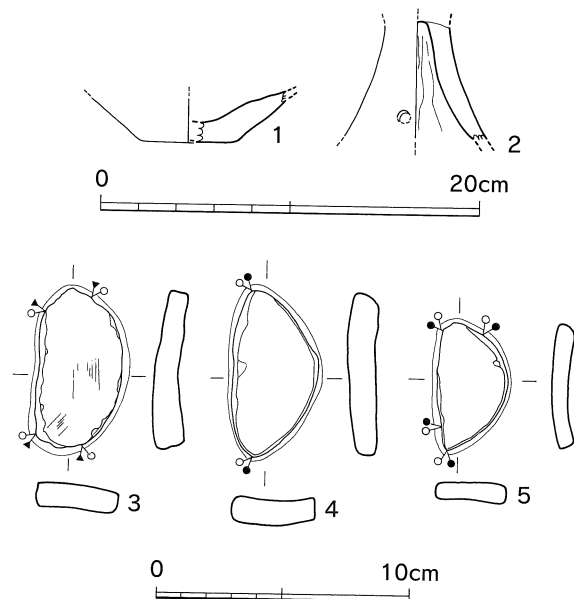


第147図 高添遺跡土木園地区1次調査区8号竪穴実測図 (1/80)

8号竪穴 (第147図)

調査区の南端において確認された方形竪穴住居である。主柱穴は2本1単位で4ヶ所に配するものと思われる、これらの柱穴外にも数基のピットが確認できている。竪穴中央部には長軸0.8m、短軸0.7m、深さ40cm程度の楕円形土坑が確認できた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。この竪穴の調査区外から炭化物・焼土が床面に近い位置で検出されており、その中には炭化木もみられるため、焼失家屋である可能性も残る。

出土遺物は148図に示した。1は平底の壺底部片であるが、混入品であろうか。2は高坏の脚部片である。3～5は半月形の土器片加工品である。



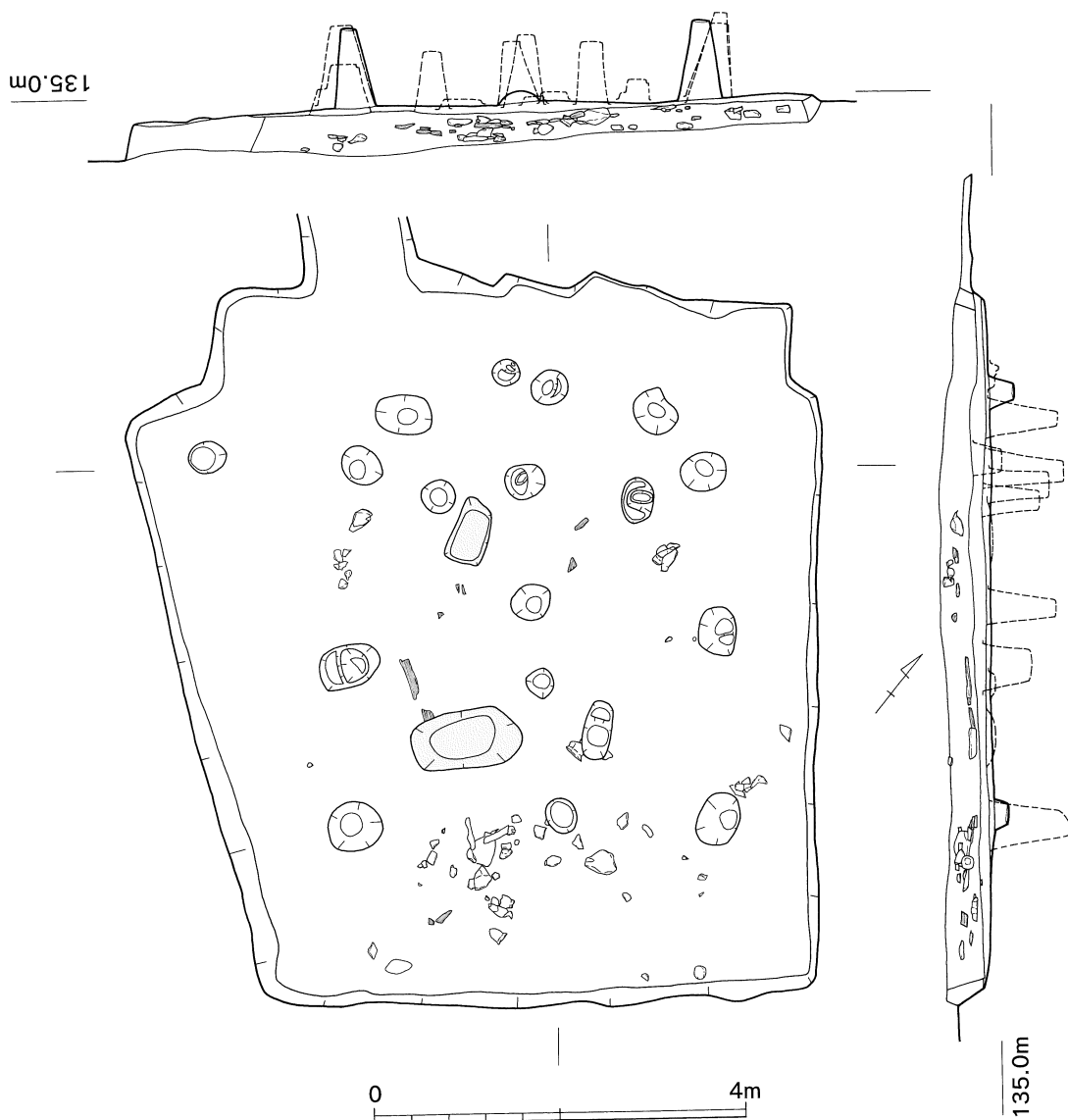
第148図 高添遺跡土木園地区1次調査区8号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

9号竪穴 (第149図)

調査区の南東側において確認された方形竪穴住居である。7.6×6.8mの台形に近い平面形を呈するものである。主柱穴は6本柱であろうか。ただし北コーナーと西コーナーの柱穴は3本1単位となっており、この

ほかにも竪穴北西側中心ラインに2本の柱穴がみられるため複雑な構造を呈するものと考えられる。竪穴中央付近に2基の楕円形土坑がみられ、これらの土坑埋土には炭・焼土が含まれている。床面には南東側を中心に炭化木や炭・焼土が多くみられ、竪穴使用後に焼かれ、その直後に土器類が一括廃棄された可能性が高いと思われる。

出土遺物は第150～153図に示した。第150図は壺甕類であるが、5・7のようにレンズ底を呈するものや、4のようにわずかな平底を呈するもの以外は尖底状を呈する。1・5に関しては最大径が胴部中央付近に位置し、2・3・4は胴部上方に位置する。5には頸部に断面三角形の突帯をめぐらし、結節点ではネクタイ状に2条斜



第149図 高添遺跡土木園地区1次調査区9号竪穴実測図(1/80)

めに垂らしている。4の肩部には櫛描波状文が施されている。

第151図2・3は甕である。最大径が胴部上方に位置し、小さい平底を呈する。1は高坏である。丸く膨らむ坏部から屈曲して外反して口縁に延びる形態をもつ。4は小型壺である。丸底で球形の胴部に上方にやや開く口縁部がつく。胴部外面および口縁内外面には丁寧なミガキが施されている。5は高坏脚部であり、円形孔が穿たれている。

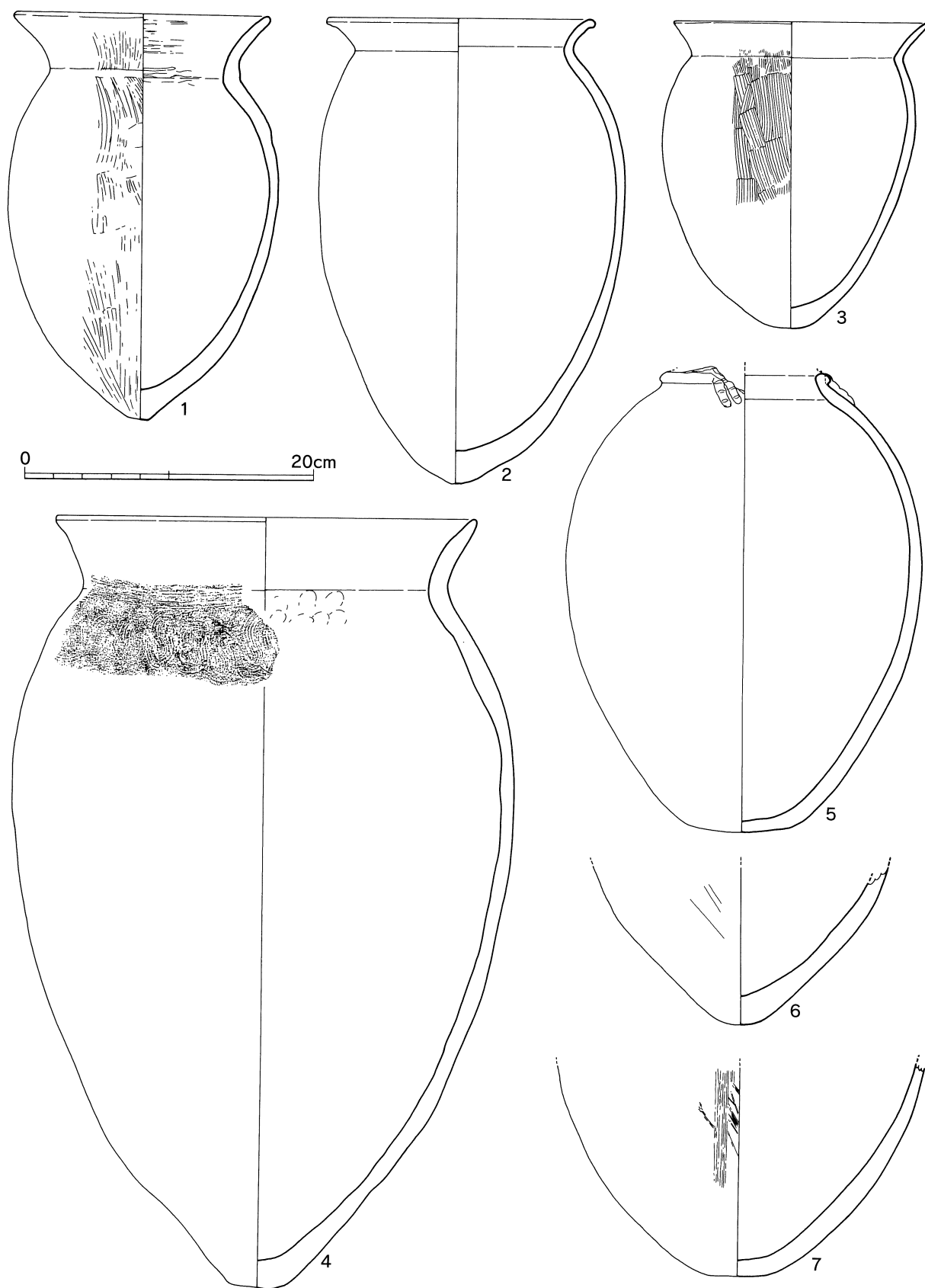
第152図は半月形の土器片加工品である。1・5・7のように弦部にキザミを入れるものや、5・8・12・18のように弧部にノッチを1ヶ所入れるものや、8・12・13・19のように弦部にノッチを1～3ヶ所入れるものもみられる。

第153図は径5mm、高さ3mmを測るガラス小玉であり、緑青色を呈する。

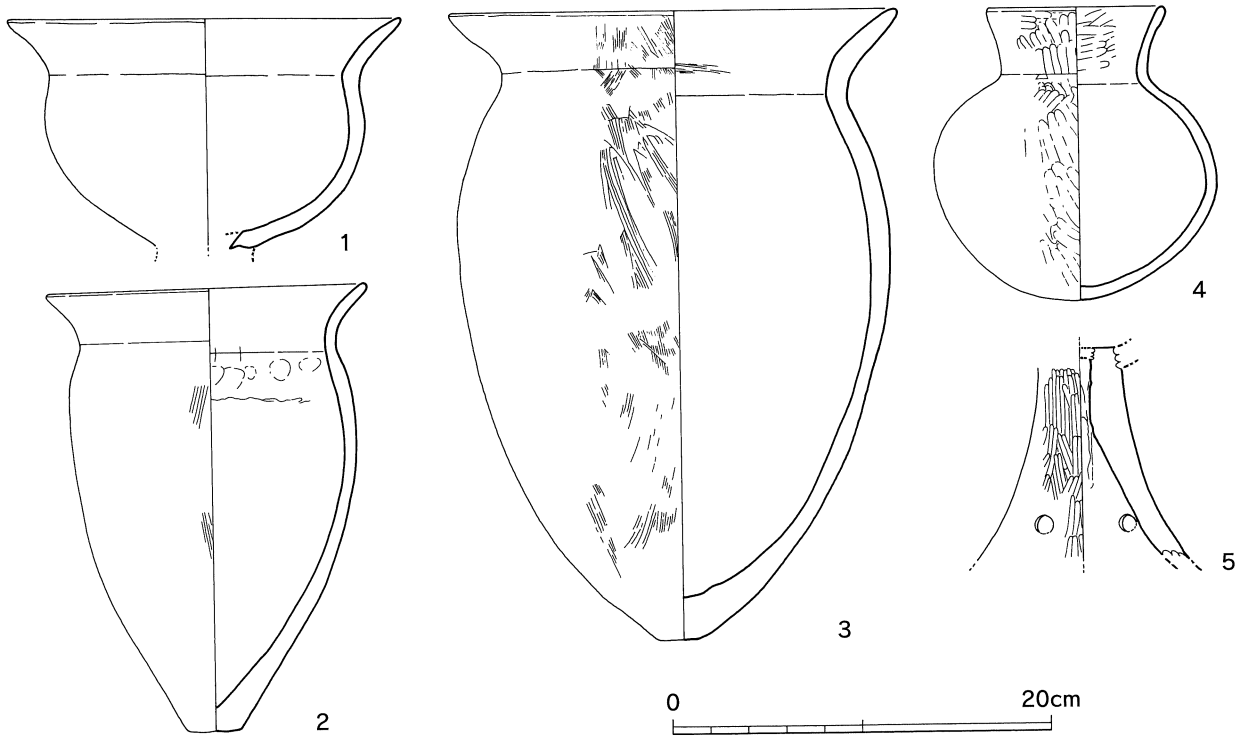
10号竪穴(第154図)

調査区中央よりやや南側において確認された方形竪穴住居である。5.6×5.2mのほぼ正方形に近い平面形を呈するものである。支柱穴は4本であり、このほかにも数基のピットが確認できる。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。焼土が確認されているが、床面より浮いた位置で検出されており、炉跡の相当する施設は確認できなかった。

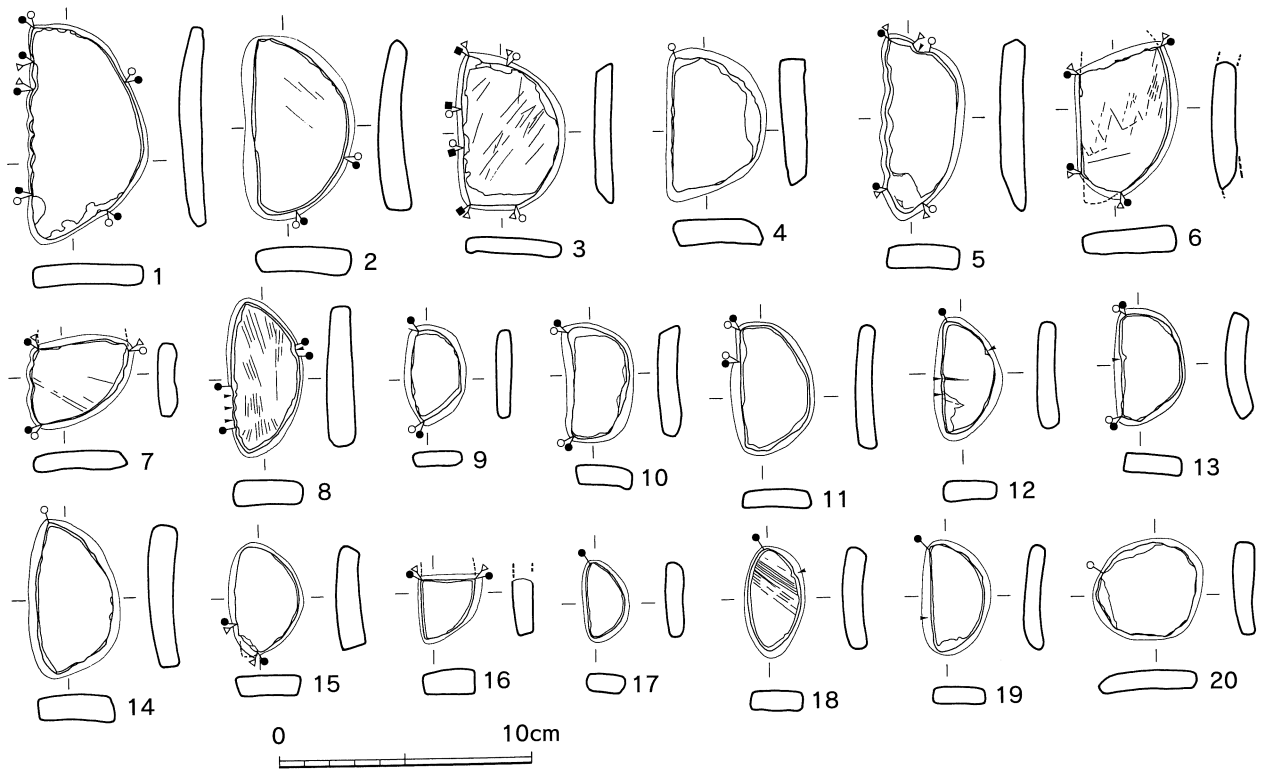
出土遺物は第155～157図に示した。第155図1は複合口縁壺であり、短くやや内傾する口縁の上面に刺突具に



第150图 高添遺跡土木園地区1次調査区9号竪穴出土遺物実測図① (1/4)



第151図 高添遺跡土木園地区1次調査区9号竪穴出土遺物実測図② (1/4)



第152図 高添遺跡土木園地区1次調査区9号竪穴出土遺物実測図③ (1/3)

よる列点文が施されている。また、外面上端にも刺突具による列点文が、下半には櫛描波状文がそれぞれ施されている。2は外面口縁付近に刻み目をもつ断面三角形の突帯文がつく甕である。3は高坏の脚部である。4・5・8・10は甕である。6は小型壺であろうか。丸い器形ににボタン状の平底がつく。7は鉢であろうか。小さな平

底をもつ。9は鉢である。口縁を内外に肥厚させ上面を平たくする形態をもつ。

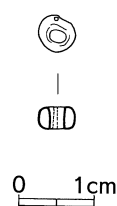
第156図は半月形の土器片加工品であり、側辺を全面粗く研磨している。

第157図は磨製石鏃である。

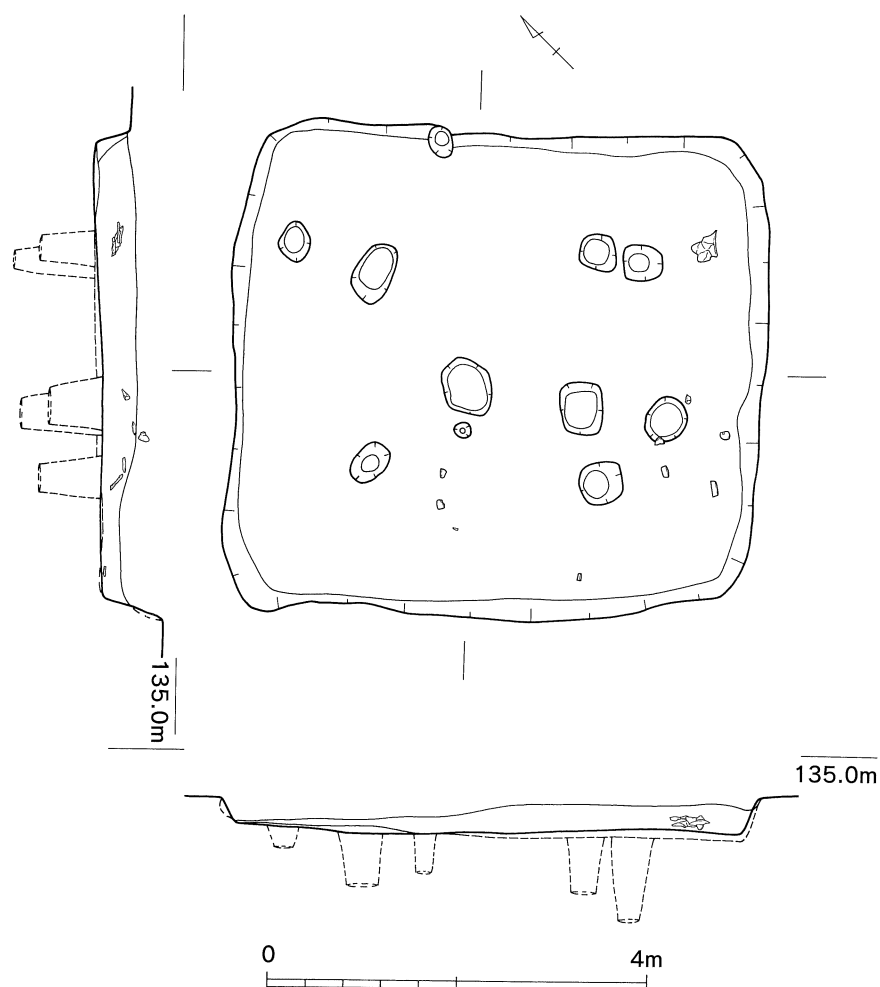
11号竪穴 (第158図)

調査区中央において確認された方形竪穴住居である。削平が著しく、北東側部分は残されていない。残存する部分は一辺7.8mを測り、方形を呈するものと考えられる。柱穴は2本1単位で4ヶ所に配するものであるが、このほかにもピットが数基確認されている。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。埋土中には浮いた状態で焼土がまばらにみられる。

出土遺物は第159・160図に示した。1は甕である。2は小型壺であろうか。丸い器形にボタン状の平底がつく。3は平底の甕であろう。4は平底の壺であろう。



第153図 高添遺跡土木園地区1次調査区9号竪穴出土遺物実測図④ (1/1)

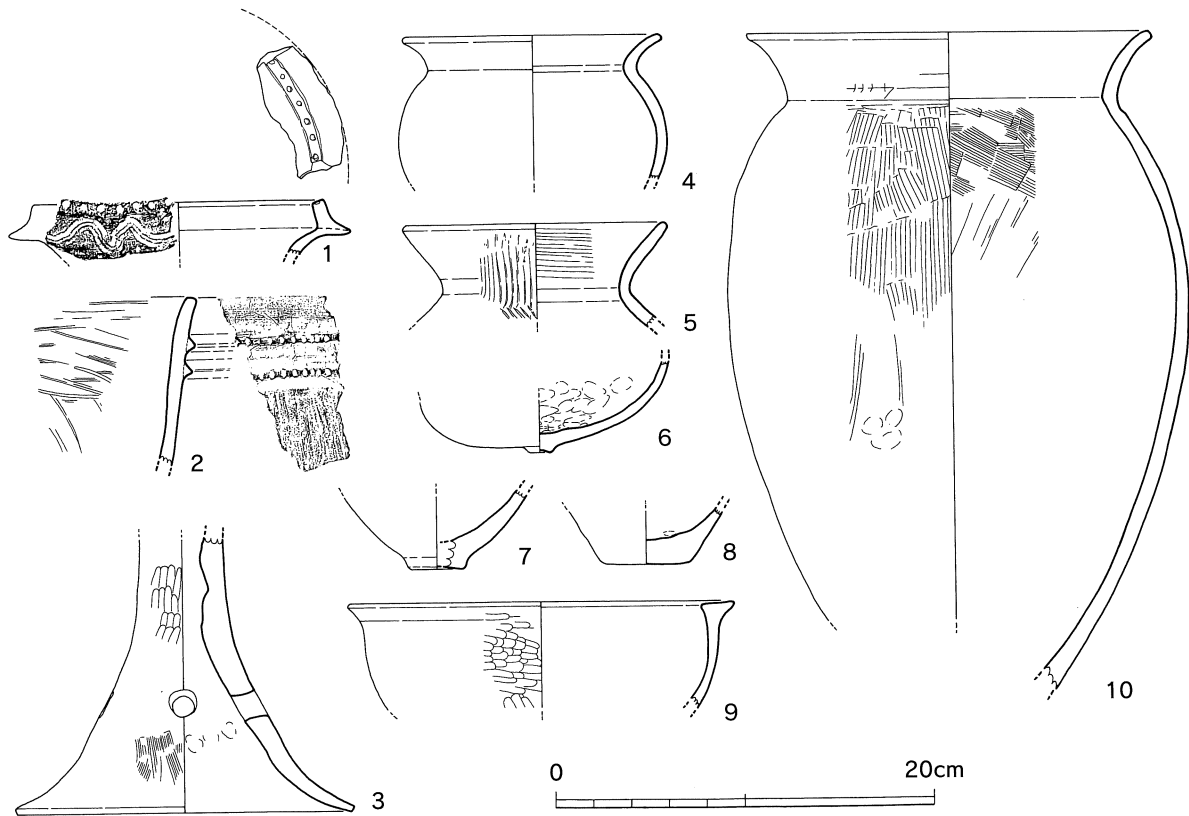


第154図 高添遺跡土木園地区1次調査区10号竪穴実測図 (1/80)

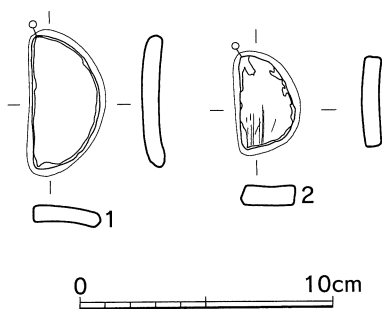
第160図は半月形の土器片加工品である。9のように弦部にキザミを入れるものや、4・10のように弧部にノッチを1ヶ所入れるものもみられる。

12号竪穴 (第161図)

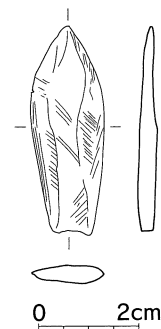
調査区中央より北東側において確認された方形竪穴住居である。13号竪穴・24号竪穴により切られており、得られる情報は少ないが、7.2×6.4mのほぼ正方形に近い平面形を呈するものである。柱穴は確認困難であったが、竪穴内の東コーナー付近において柱穴が1基確認できたのみである。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。埋土中には焼土・炭があまり含まれていなかった。



第155図 高添遺跡土木園地区1次調査区10号竪穴出土遺物実測図① (1/4)



第156図 高添遺跡土木園地区1次調査区
10号竪穴出土遺物実測図② (1/3)



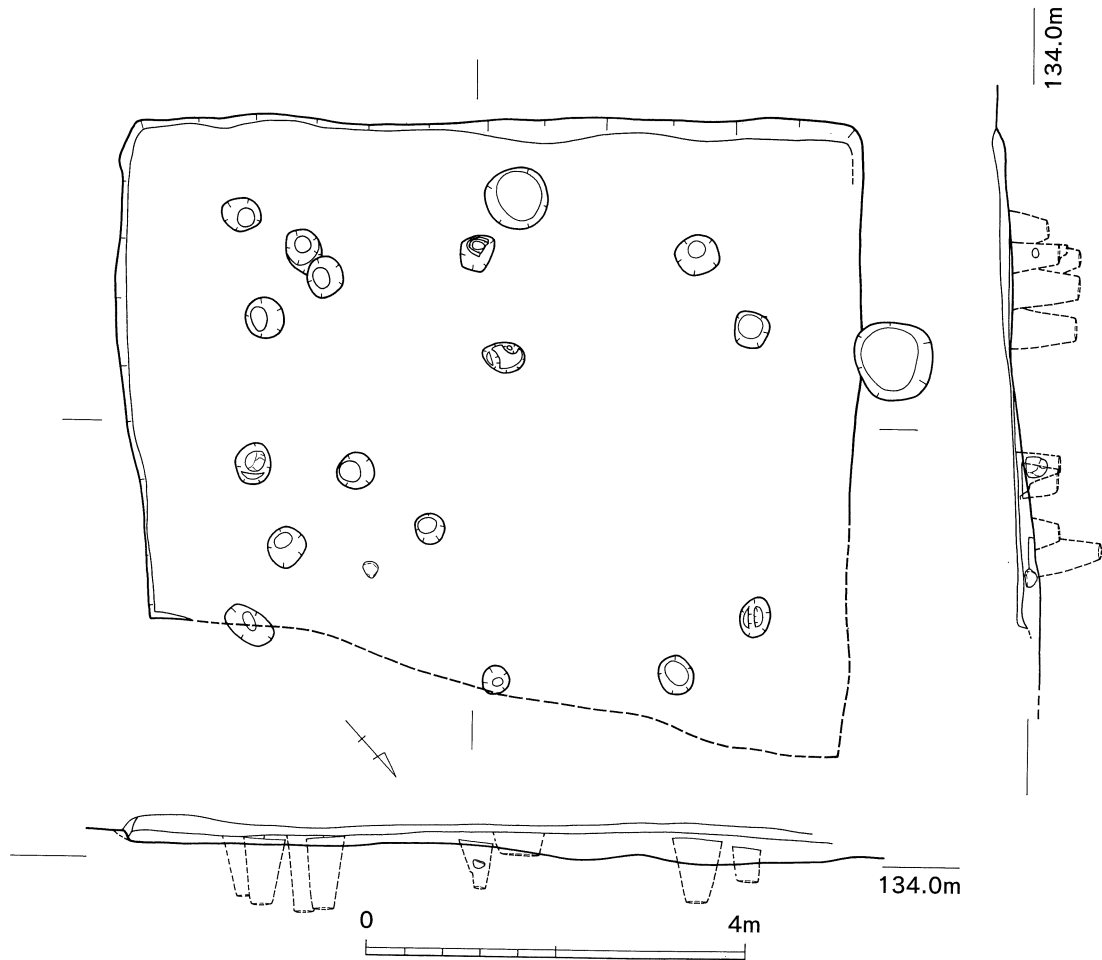
第157図 高添遺跡土木園地区1次調査区
10号竪穴出土遺物実測図③ (2/3)

出土遺物は162図に示した。1は複合口縁壺であり、やや内傾して直立する口縁の外面上半に櫛描直線文、下半に櫛描波状文がそれぞれ施されている。2は筒状に延びる高坏の脚部である。3は高坏である。丸い坏部から屈曲して大きく外反する口縁をもち、また、大きく「ハ」の字状に開く脚部をもつ。内外面とも丁寧なハケが施されている。4・5は甕であり、胴部最大径を中央にもつ。6は径5mm、高さ3mmを測るガラス小玉であり、緑青色を呈する。7は砥石であり、方柱状の4面を砥面として利用している。

13号竪穴 (第163図)

調査区中央より北東側において確認された方形竪穴住居である。4.2×4.2mの台形に近い平面形を呈するものである。中央部に長軸1.7m、短軸1.0m、深さ5cm程度の楕円形を呈する浅い土坑が確認でき、炭化物の埋土が確認できた。支柱穴は2本であり、このほかにも2基のピットが確認できる。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

出土遺物は164図に示したが、いずれも半月形の土器片加工品である。



第158図 高添遺跡土木園地区1次調査区11号竪穴実測図 (1/80)

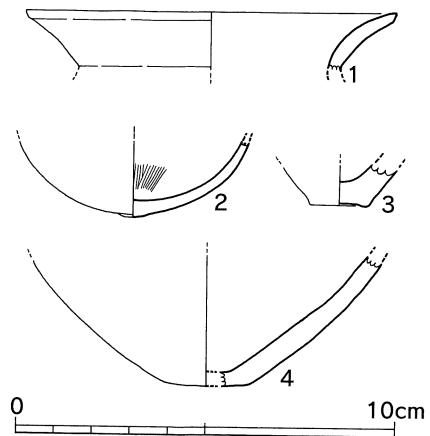
14号竪穴 (第165図)

調査区中央より南東側において確認された方形竪穴住居である。南東側は調査区外に延びており、確認できなかったが、残存する辺は7.0mを測る方形の平面形を呈するものである。支柱穴は6本であろうか。しかし北コーナーおよび西コーナーの支柱穴は2本1単位であると考えられるため、各コーナーの支柱穴が2本1単位である可能性が高い。また、北側と西側の支柱穴を繋ぐ中間にもう1ヶ所柱穴が確認でき、さらに、この柱穴の1.5m内側にも柱穴がみられた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦であるが、北西側壁面に沿って浅い落ち込みが確認できた。埋土中からは焼土が竪穴の南西壁付近において床面から浮いた状態で確認できた。

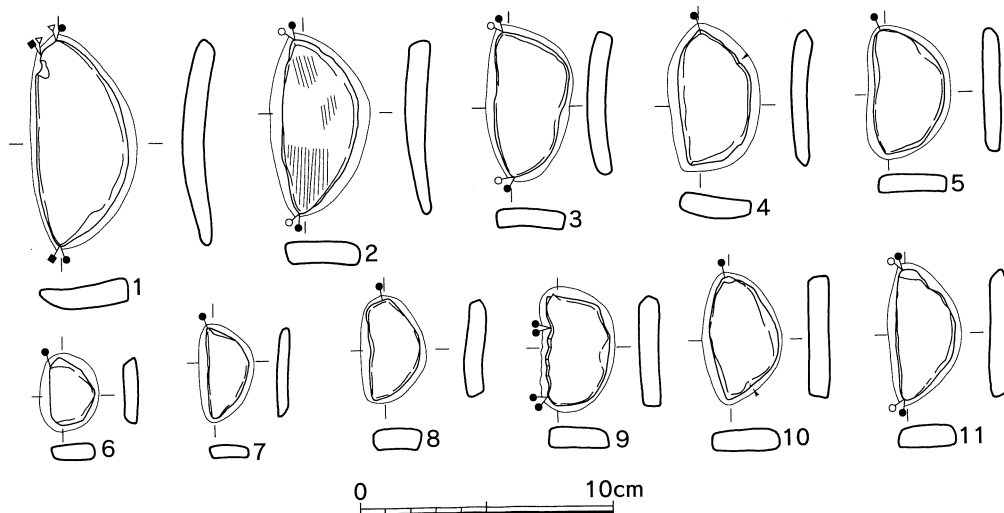
出土遺物は第166～168図に示した。第166図1は複合口縁壺であり、口縁の立ち上がりは低く内傾し、外面に櫛描波状文が施されている。2も複合口縁壺であるが、やや小振りであり、頸部に断面三角形の突帯がつく。3・4は甕であり、外面口縁付近に刻み目をもつ断面三角形の突帯が3には2条、4には1条つく。5は壺であり、頸部に断面三角形の突帯がつく。6～9・11は壺甕類の底部であるが、平底から尖底のものまで確認できる。10は鉢である。

第167図は半月形の土器片加工品である。

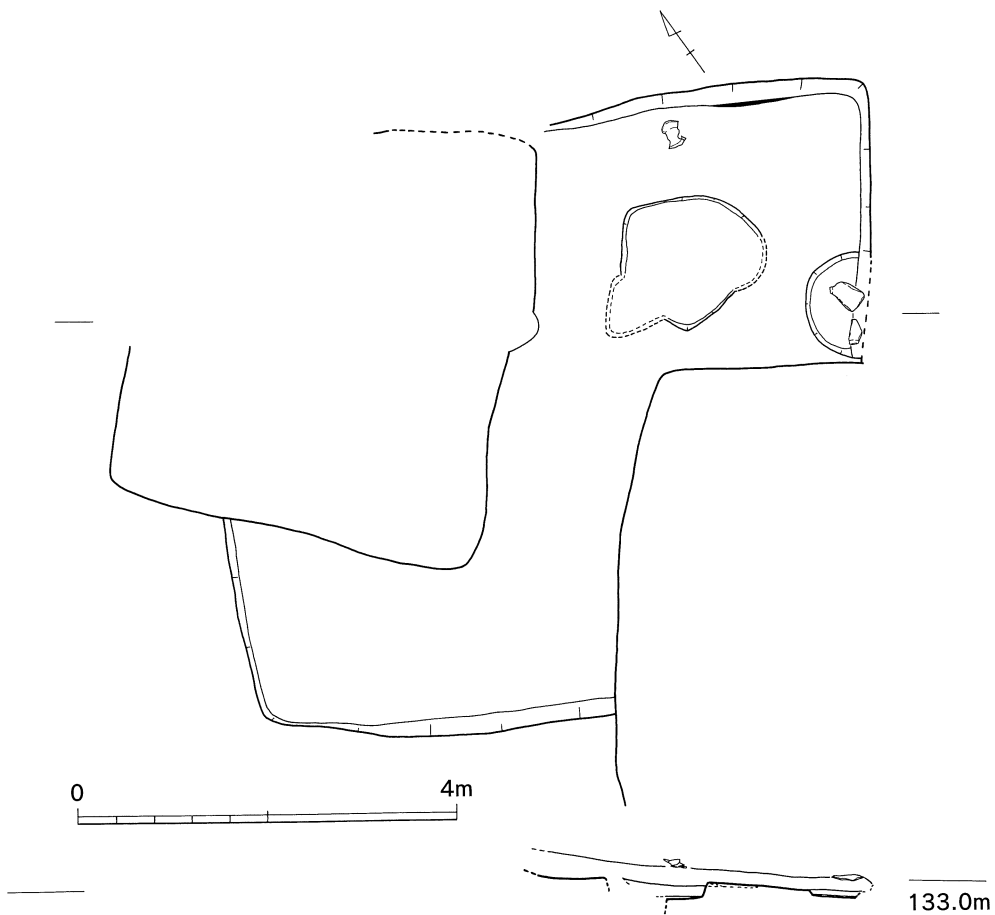
第168図1は金山産サヌカイトの磨製石鏃未製品である。2は磨製石鏃である。



第159図 高添遺跡土木園地区1次調査区11号竪穴出土遺物実測図① (1/4)



第160図 高添遺跡土木園地区1次調査区11号竪穴出土遺物実測図② (1/3)

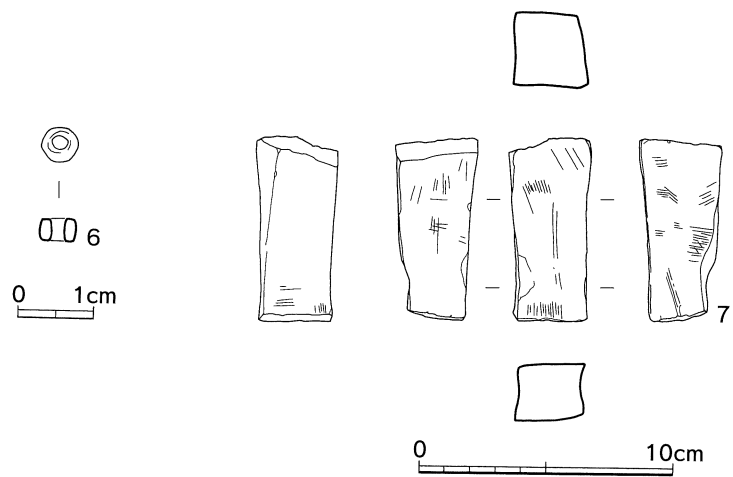
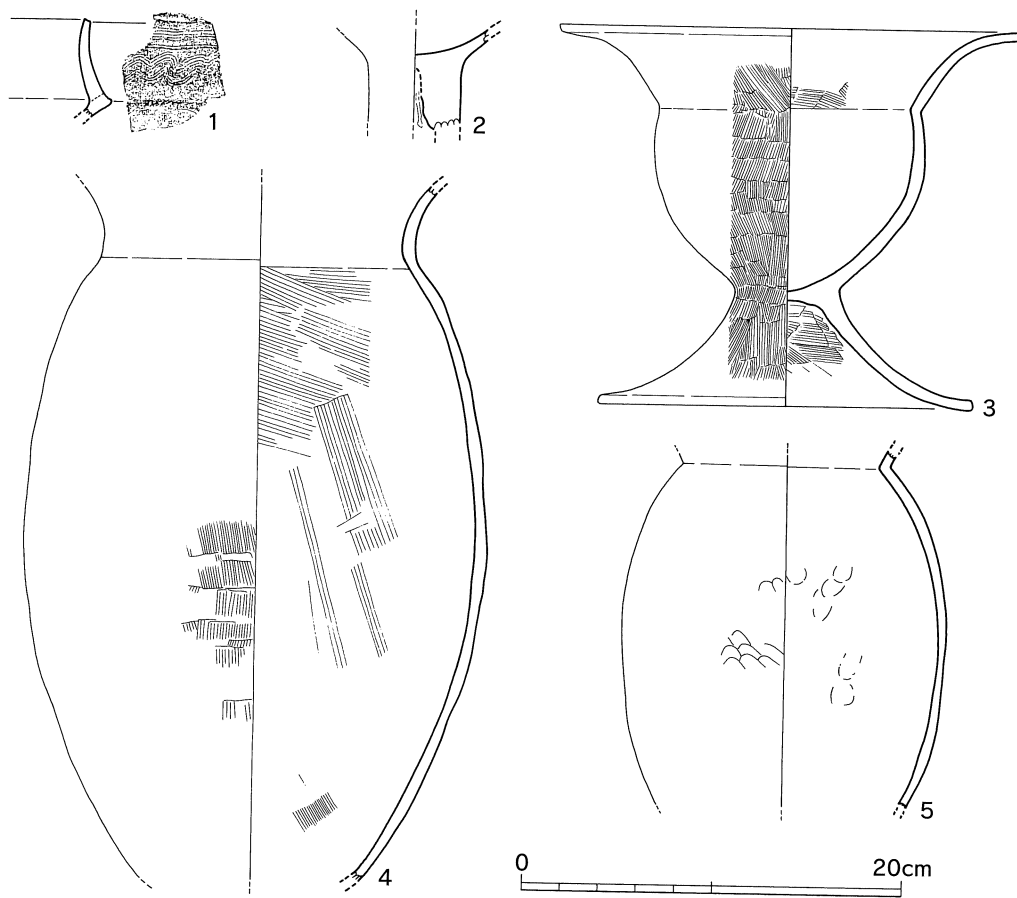


第161図 高添遺跡土木園地区1次調査区12号竪穴実測図 (1/80)

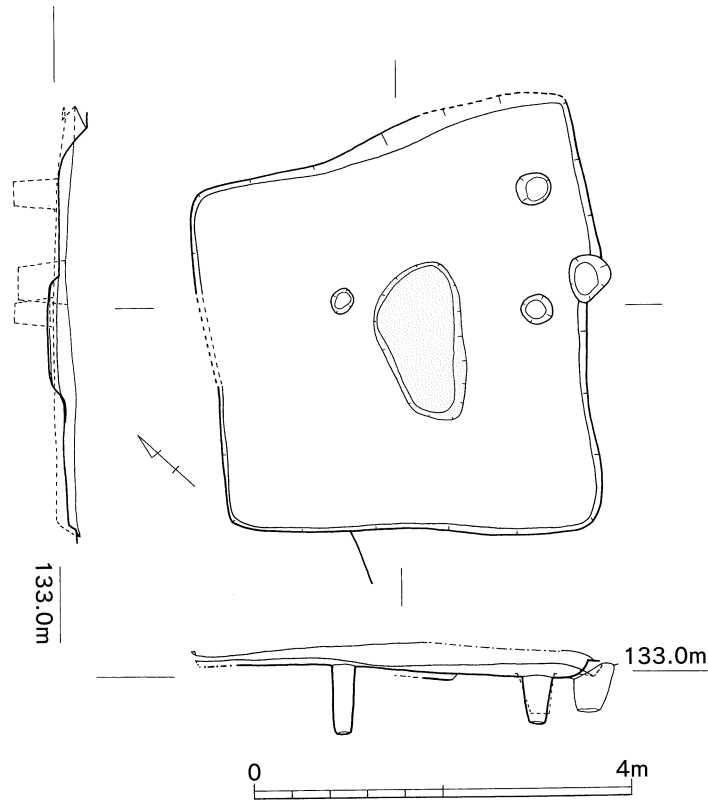
15号竪穴 (第169図)

調査区西端において確認された方形竪穴住居である。6.0×5.4mの長方形に近い平面形を呈するものである。主柱穴は4本である。竪穴の南東辺に接して1.6×1.2m、深さ20cmの土坑がみられ、この土坑の内側部分に炭化物が集中してみられた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

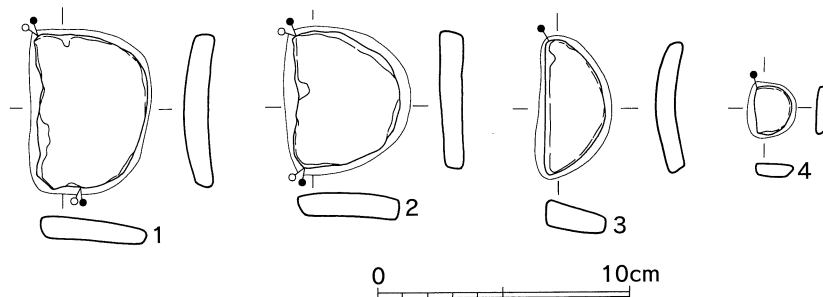
出土遺物は第170・171図に示した。第170図1は高坏であり、坏部中央で屈曲し、逆「ハ」の字状に外側に開く形態をもつ。2は複合口縁壺であり、内傾した口縁の外面に櫛描波状文が施されている。3は高坏であり、円柱状の脚がつく。4は甕であり、胴部中央付近に最大径をもつ。第171図1・2はいずれも鉄鏃である。



第162图 高添遺跡土木園地区1次調査区12号竖穴出土遺物実測図 (1/4・1/1・1/3)



第163図 高添遺跡土木園地区1次調査区13号竪穴実測図 (1/80)



第164図 高添遺跡土木園地区1次調査区13号竪穴出土遺物実測図 (1/3)

16号竪穴 (第172図)

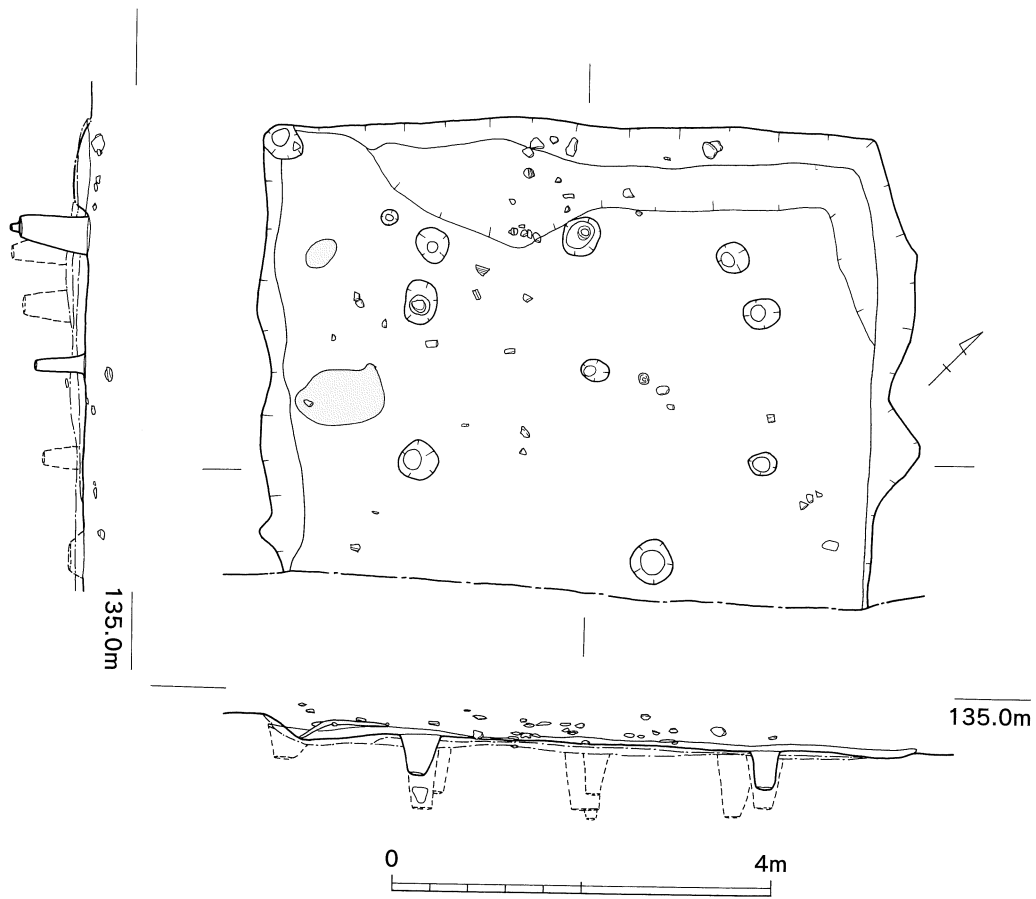
調査区中央より南西側において確認された方形竪穴住居である。5.6×5.8mの正方形に近い平面形を呈するものである。支柱穴は4本であると考えられるが、北西側2本のみ確認でき、南東側部分については現代の葡萄の木により攪乱を受け、検出できなかった調査区中央よりやや北西側の床面の浅いくぼみに焼土が集積されていた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

出土遺物は第173図に示した。1・3は壺である。3の頸部には斜格子の刻み目の入った突帯が巡らされている。

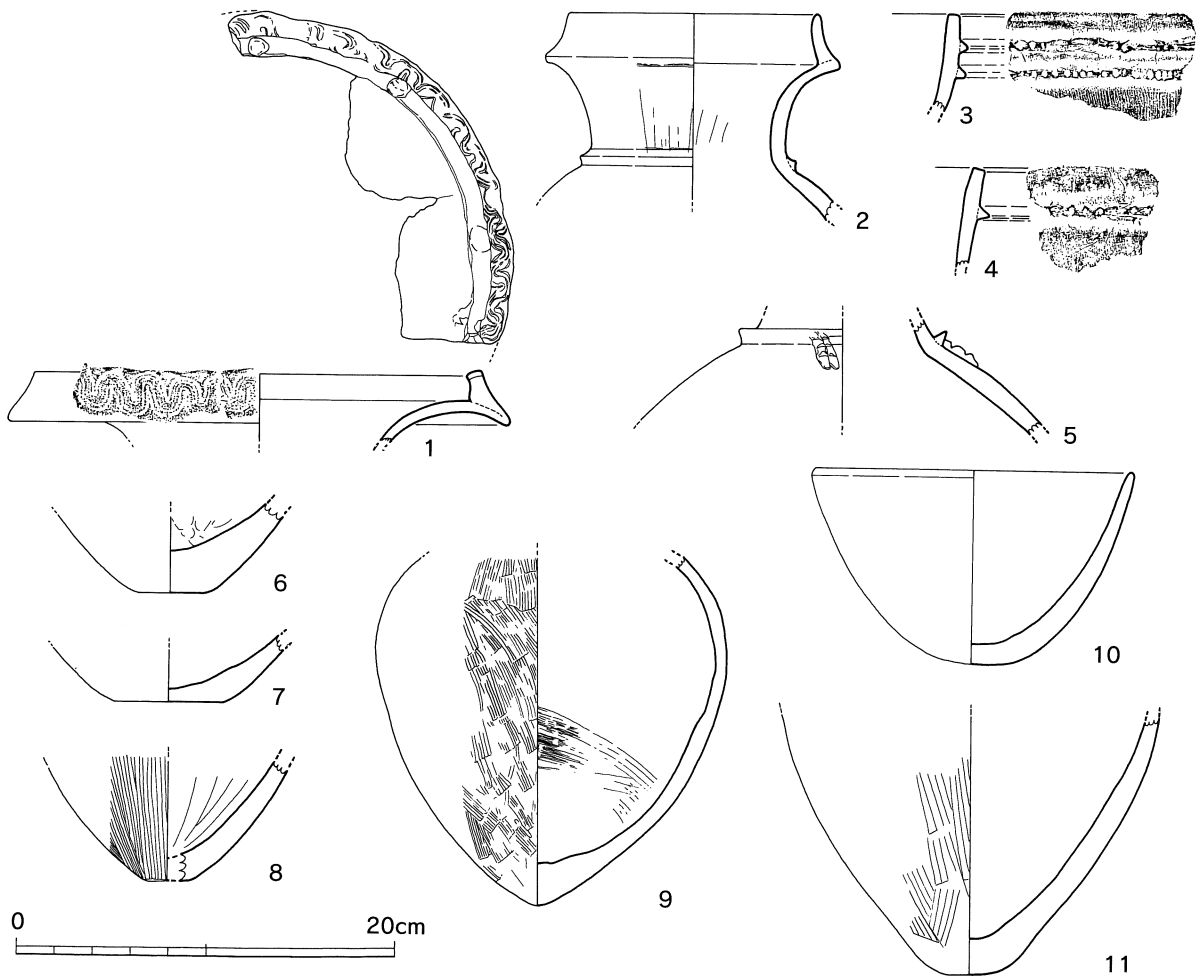
17号竪穴 (第174図)

調査区中央付近において確認された方形竪穴住居である。7.2×7.0mの正方形に近い平面形を呈するものである。支柱穴は8本であると考えられる。竪穴の南東辺に接して2.4×0.8m、深さ10cmの土坑がみられた。竪穴の中央には、径30cm、深さ40cmの土坑がみられ、炉跡である可能性をもつ。この中央土坑周辺には炭化物が集積されていた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。遺物の出土は少なかった。

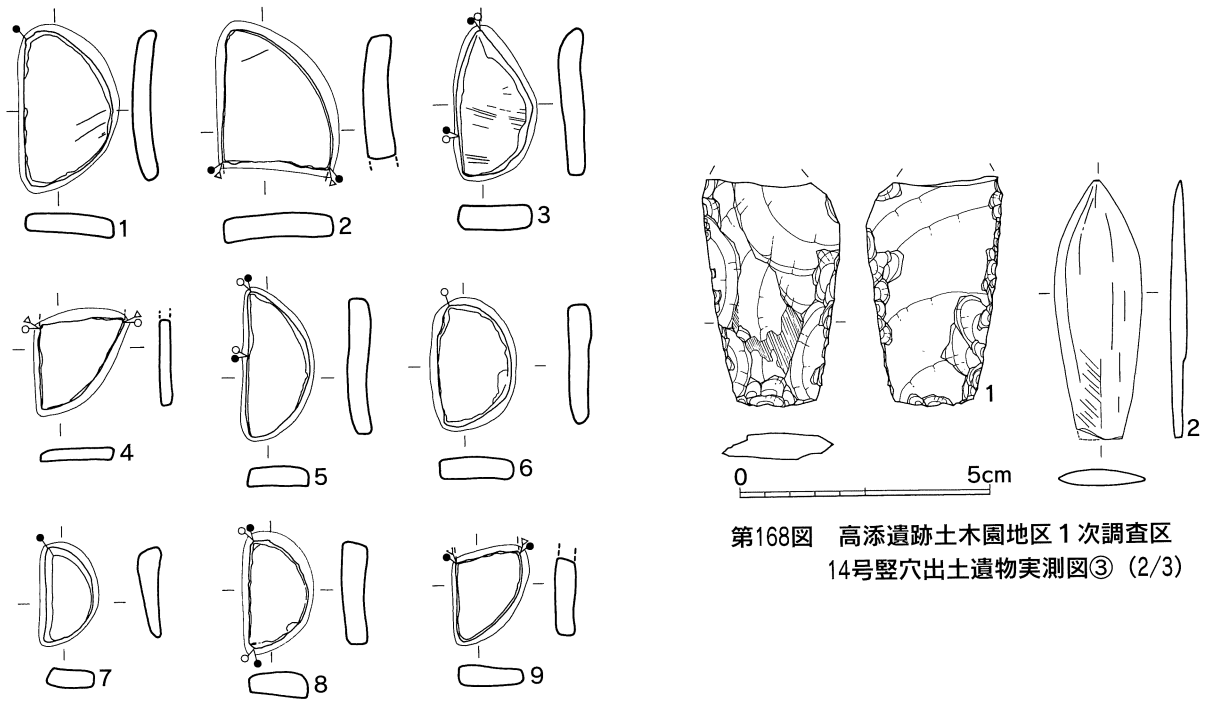
出土遺物は第175・176図に示した。第175図1は鉢であり、器壁は薄く半球状の浅い形態をもつ。2は壺の胴



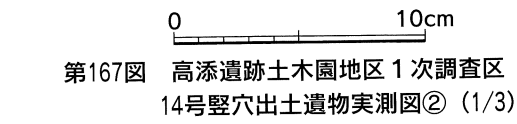
第165图 高添遺跡土木園地区1次調査区14号竪穴実測図 (1/80)



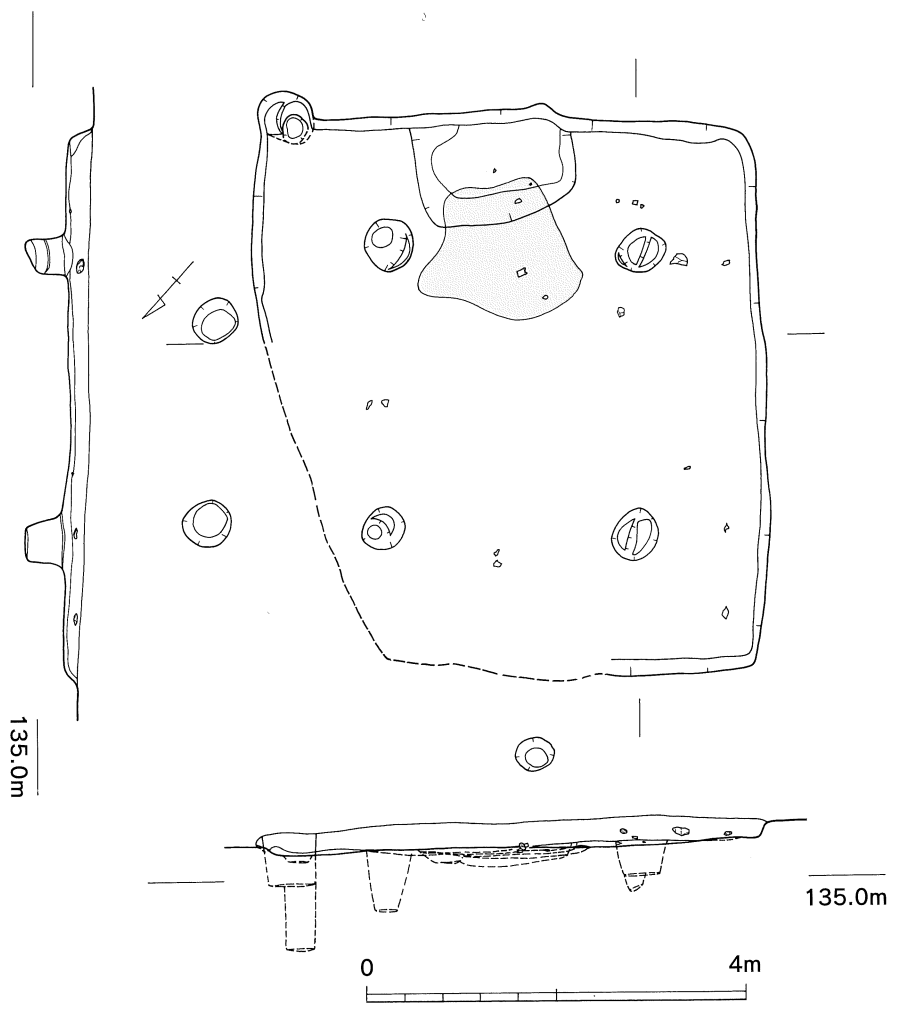
第166图 高添遺跡土木園地区1次調査区14号竪穴出土遺物実測図① (1/4)



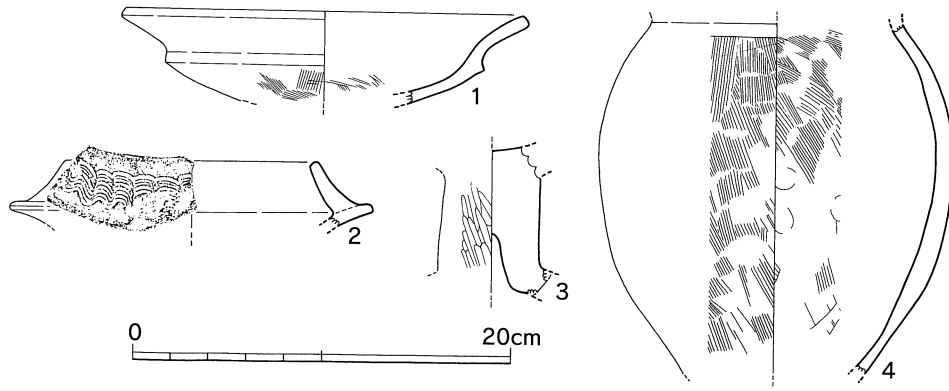
第168図 高添遺跡土木園地区1次調査区
14号竪穴出土遺物実測図③ (2/3)



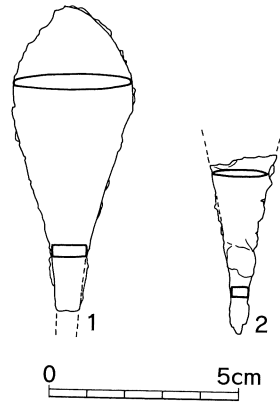
第167図 高添遺跡土木園地区1次調査区
14号竪穴出土遺物実測図② (1/3)



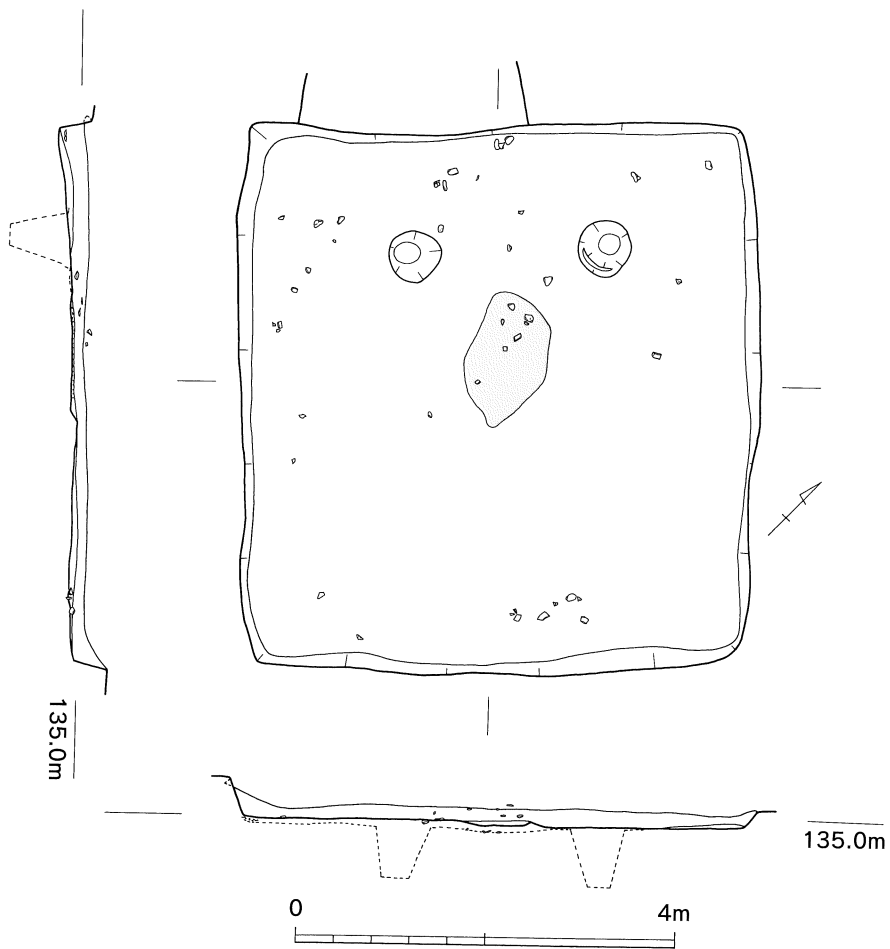
第169図 高添遺跡土木園地区1次調査区15号竪穴実測図 (1/80)



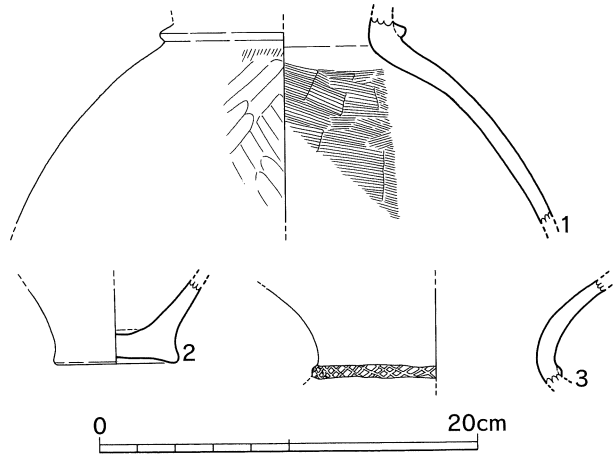
第170図 高添遺跡土木園地区 1次調査区15号竪穴出土遺物実測図① (1/4)



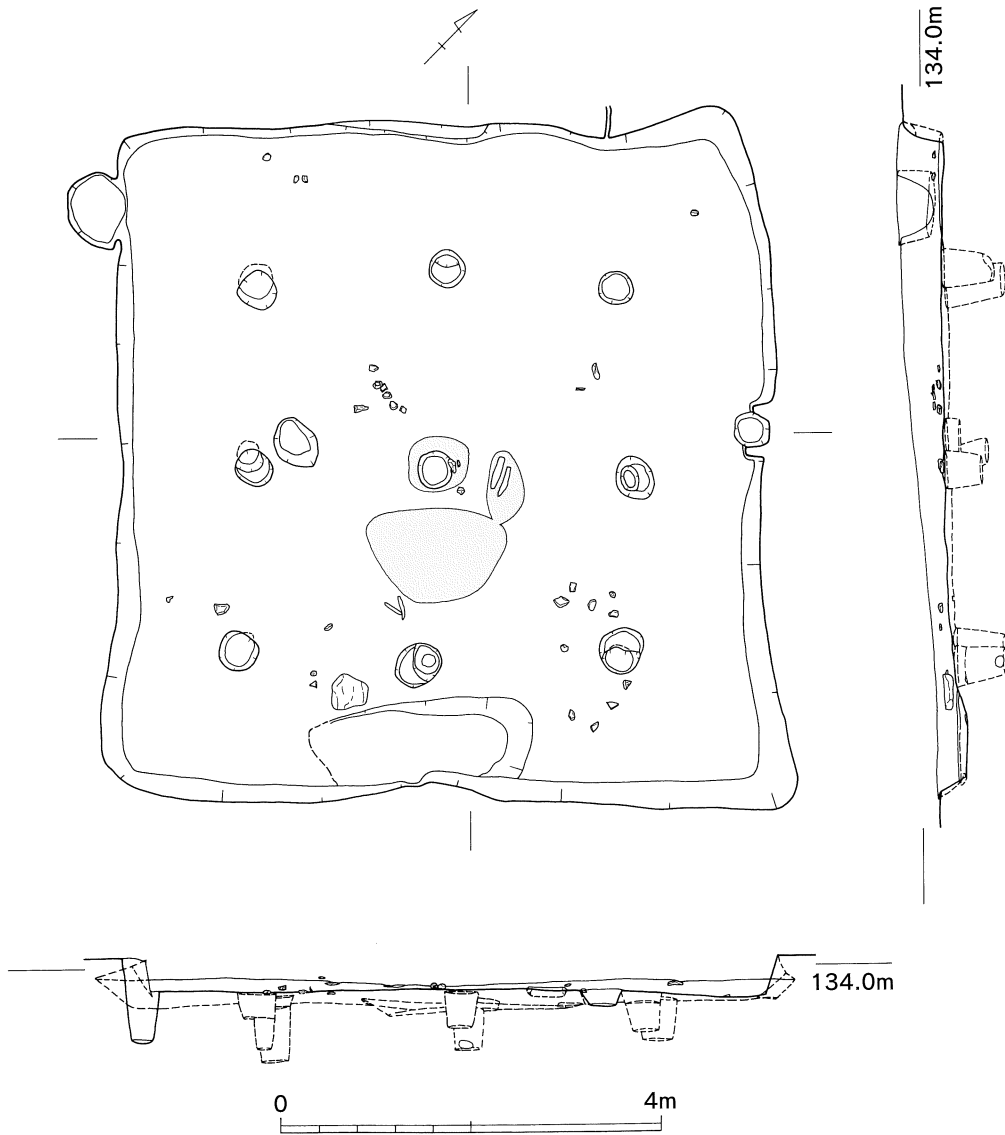
第171図 高添遺跡土木園地区 1次調査区
15号竪穴出土遺物実測図② (1/2)



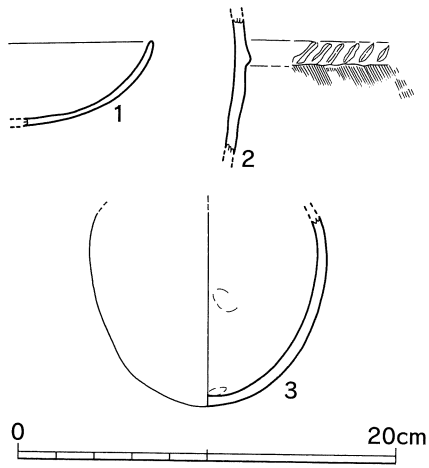
第172図 高添遺跡土木園地区 1次調査区16号竪穴実測図 (1/80)



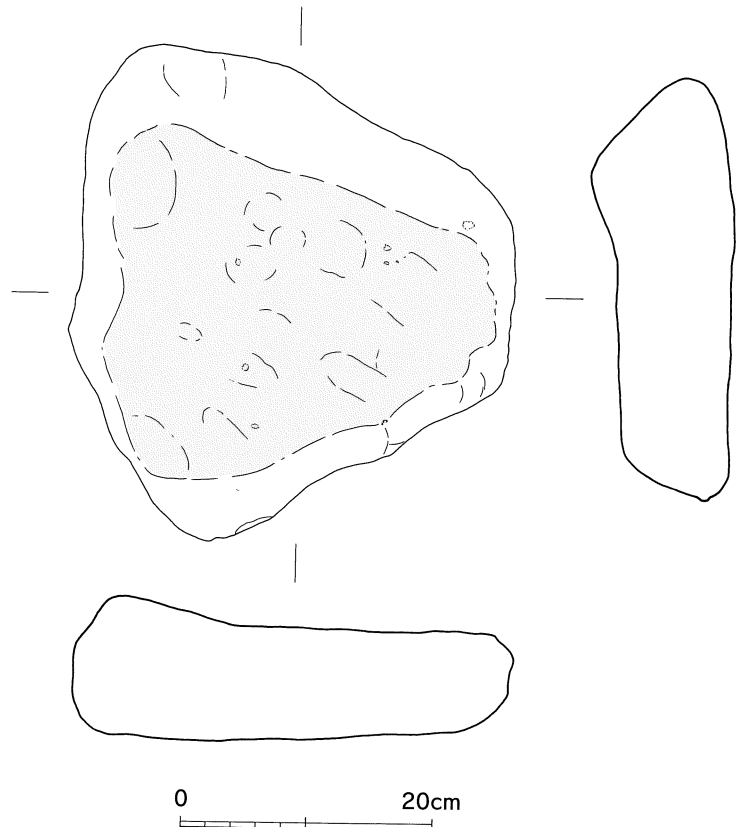
第173図 高添遺跡土木園地区1次調査区16号竪穴出土遺物実測図 (1/4)



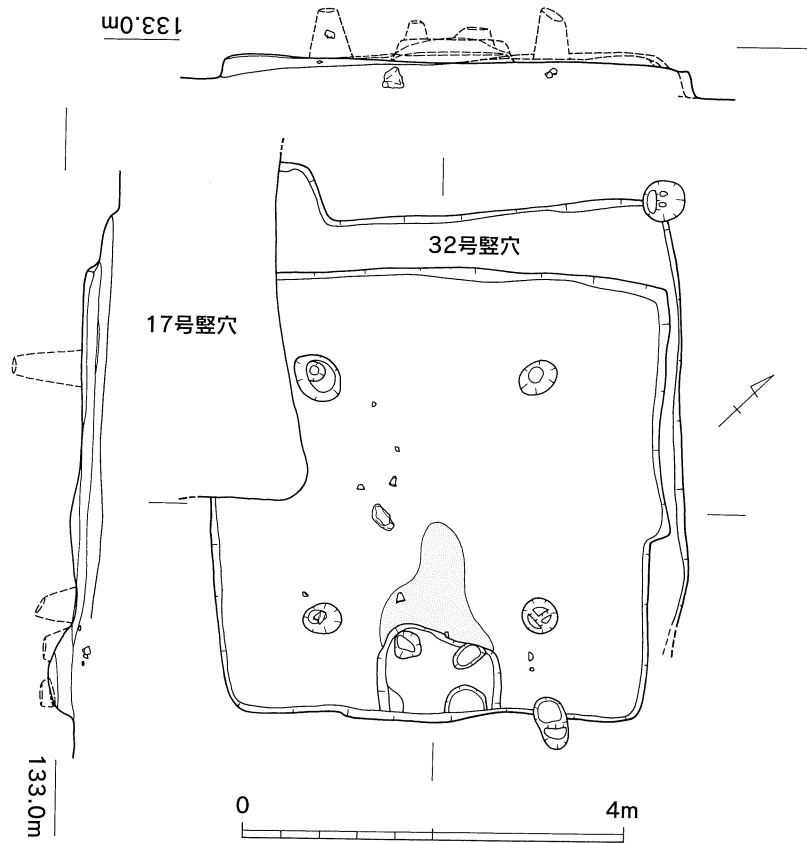
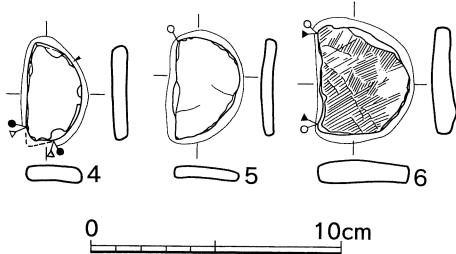
第174図 高添遺跡土木園地区1次調査区17号竪穴実測図 (1/80)



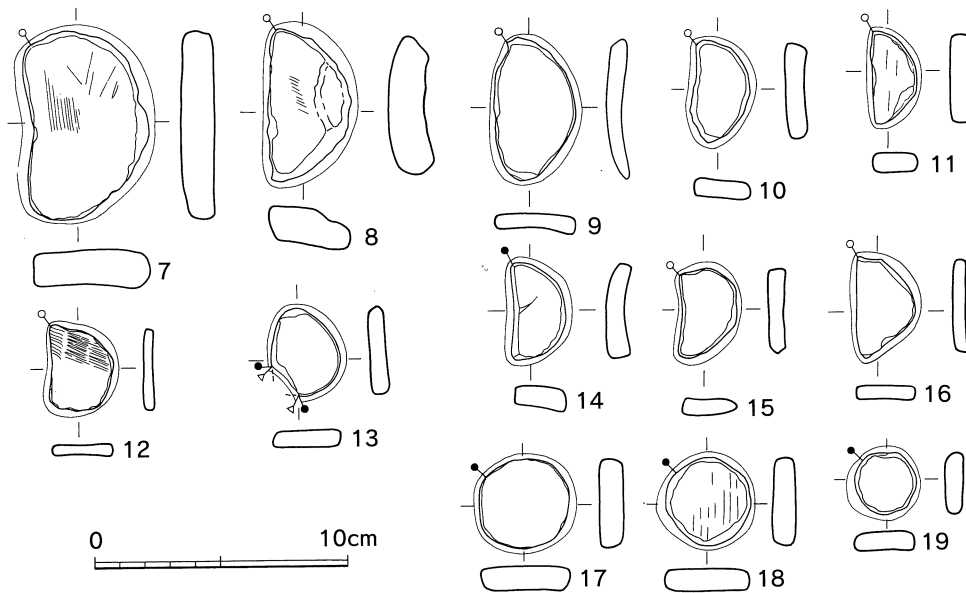
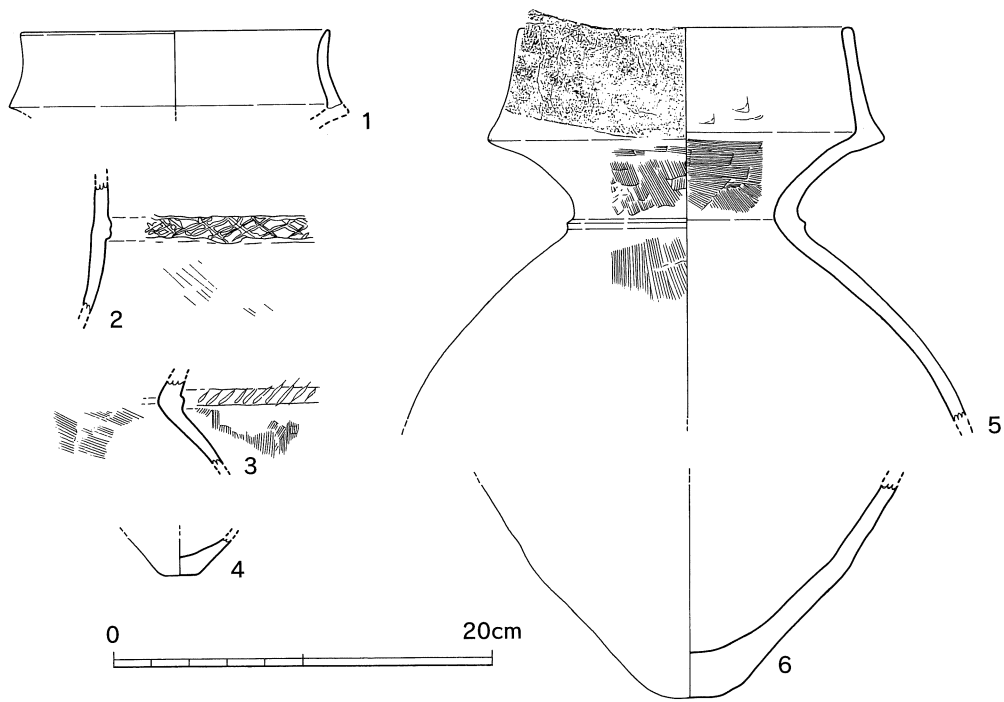
第175图 高添遺跡土木園地区1次調査区
17号竖穴出土遺物実測図① (1/4·1/3)



第176图 高添遺跡土木園地区1次調査区
17号竖穴出土遺物実測図② (1/6)



第177图 高添遺跡土木園地区1次調査区18号竖穴実測図 (1/80)

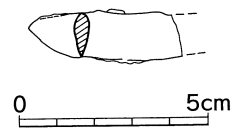


第178図 高添遺跡土木園地区1次調査区18号竖穴出土遺物実測図① (1/4・1/3)

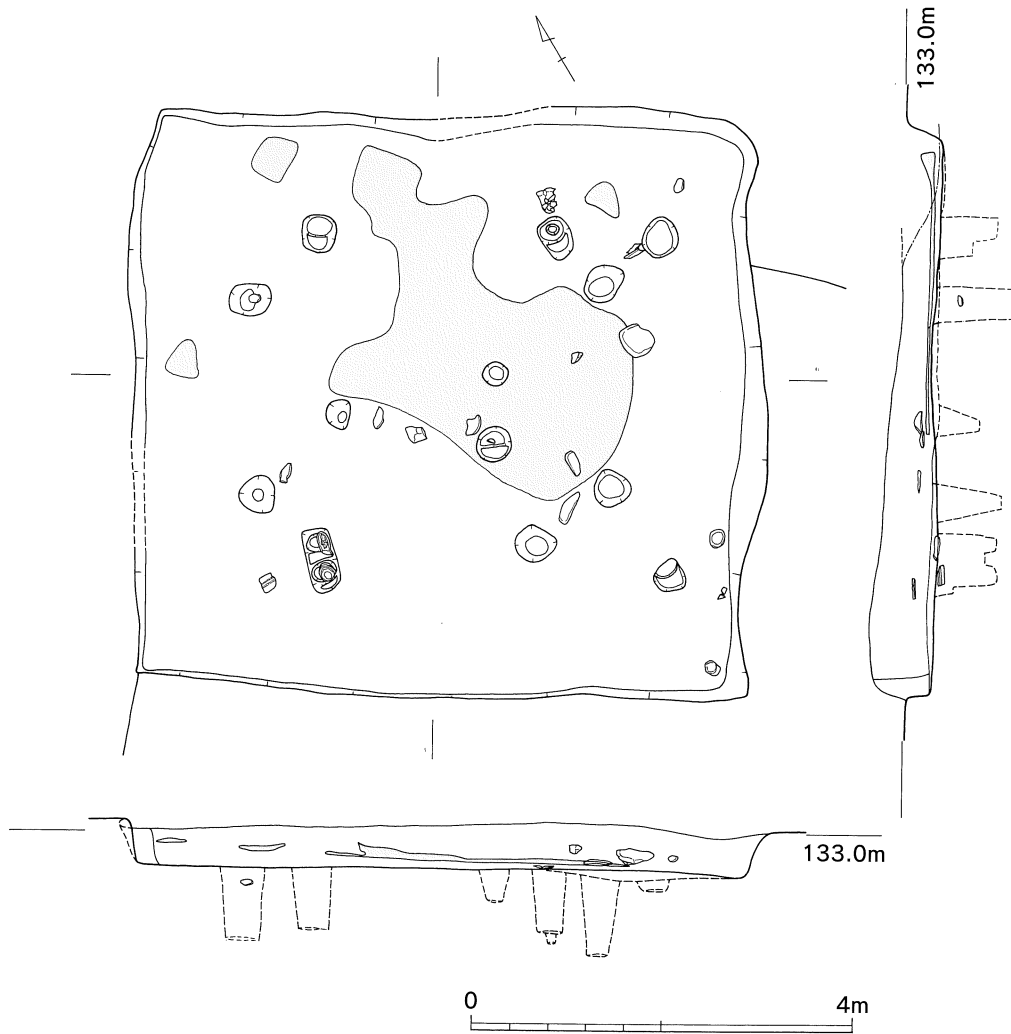
部片である。器壁は薄く幅広いベルト状の突帯にはナナメ方向の刻み目がつく。3は壺の破片である。胴長の球形をもち、器壁は薄い。4～6は半月形の土器片加工品である。第176図は竖穴南東辺に接した土坑付近から出土した石皿である。扁平な川原石を利用し、凹面を砥面として利用していた。

18号竖穴 (第177図)

調査区中央よりやや北側付近において確認された方形竖穴住居である。32号竖穴を切り、また、17号竖穴により切られている。4.6×4.8mの正方形に近い平面形を呈し、支柱穴は4本である。竖穴の南東辺に接して1.3×0.9m、深さ40cmの土坑がみられた。この土坑に接し、竖穴中央寄りに炭化物が床面に確認でき、また、土



第179図 高添遺跡土木園地区1次調査区18号竖穴出土遺物実測図②(1/2)



第180図 高添遺跡土木園地区1次調査区19号竪穴実測図 (1/80)

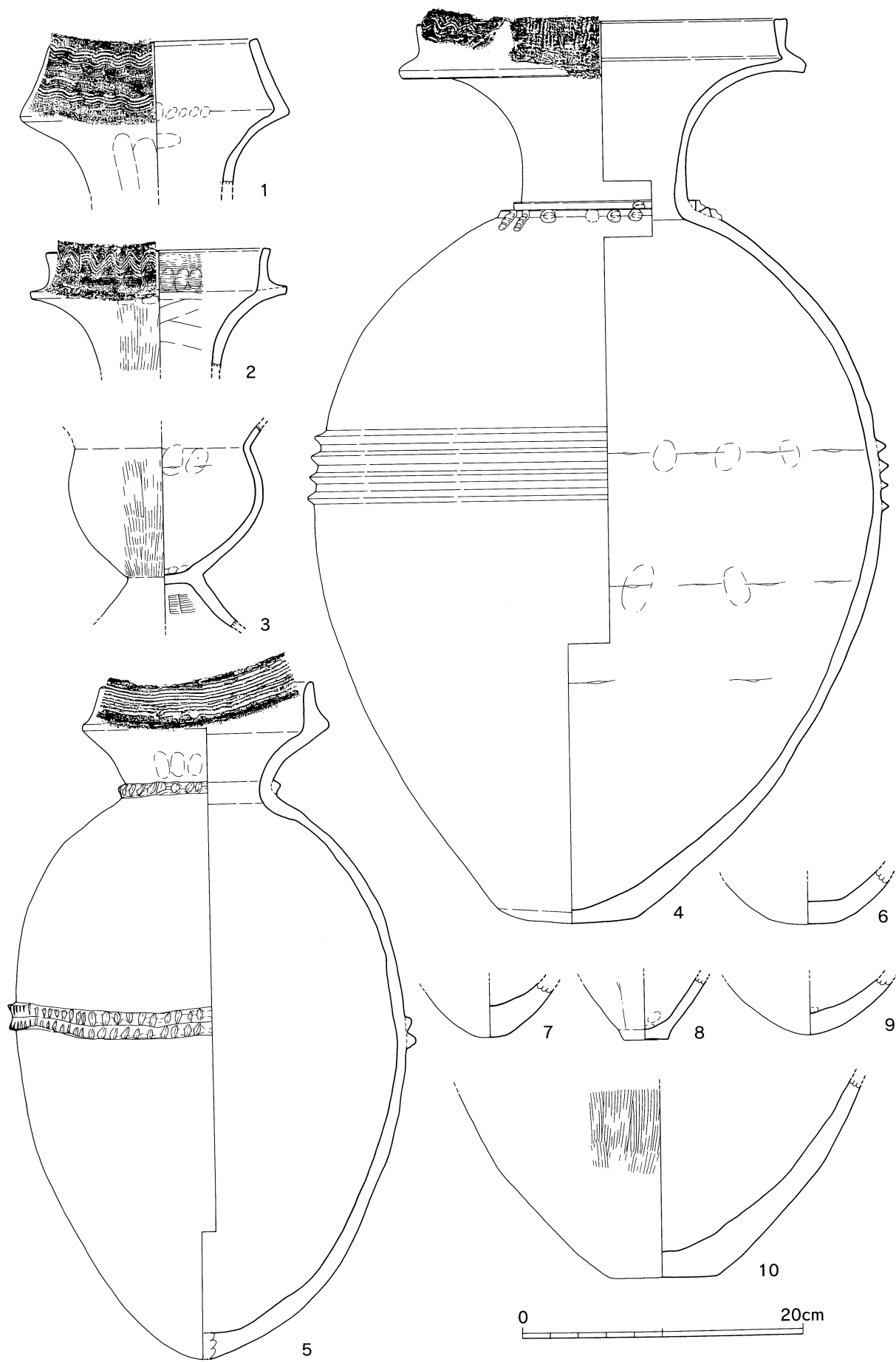
坑内にも炭化物が含まれていた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

出土遺物は第178・179図に示した。第178図1・2・3・5は複合口縁壺である。1・5はやや内傾して直立する口縁をもち、5の口縁外面には櫛描波状文が施されている。3・5には胴部と頸部の境に三角突帯が巡らされ、3にはナナメのキザミ目が施されている。2の薄く幅広いベルト状の突帯には格子目のキザミ目がつく。7～19は土器片加工品である。7～16は半月形を呈し、17～19は円形を呈する。第179図は鉄製品である。刀子であろうか。

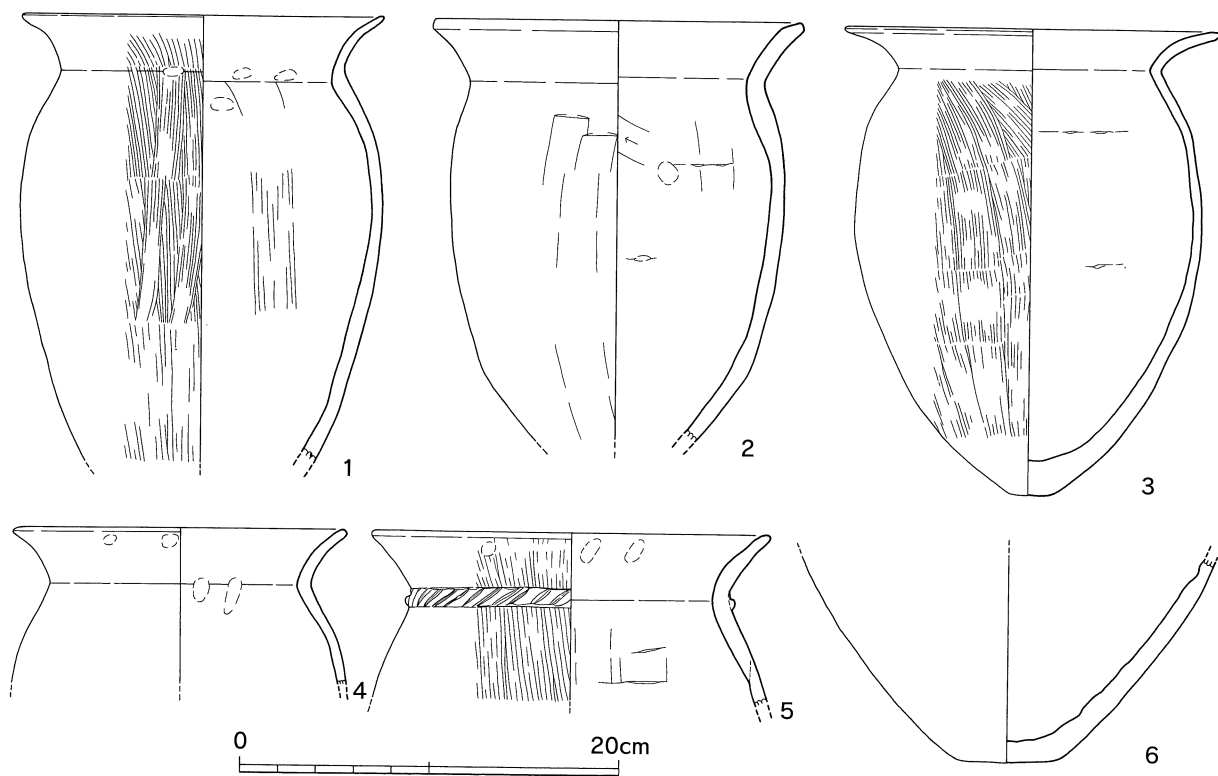
19号竪穴 (第180図)

調査区中央よりやや北東側において確認された方形竪穴住居であり、28号竪穴を切っている。6.8×6.0mの正方形に近い平面形を呈する。柱穴は2本1単位で4ヶ所に配するものであり、竪穴中央より南東側に2本1対の柱穴が別にみられ、このほかにも複数基のピットが確認できる。床面よりやや浮いた位置に焼土や炭化物が竪穴中央から北東側にかけて広範に確認でき、これらの焼土や炭化物に混じり遺物が出土している。このことから住居が廃棄され、一定程度埋まって後、火がかけられたものと考えられる。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

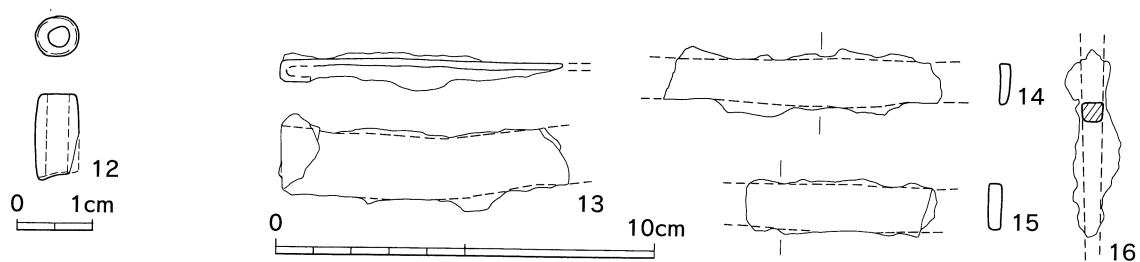
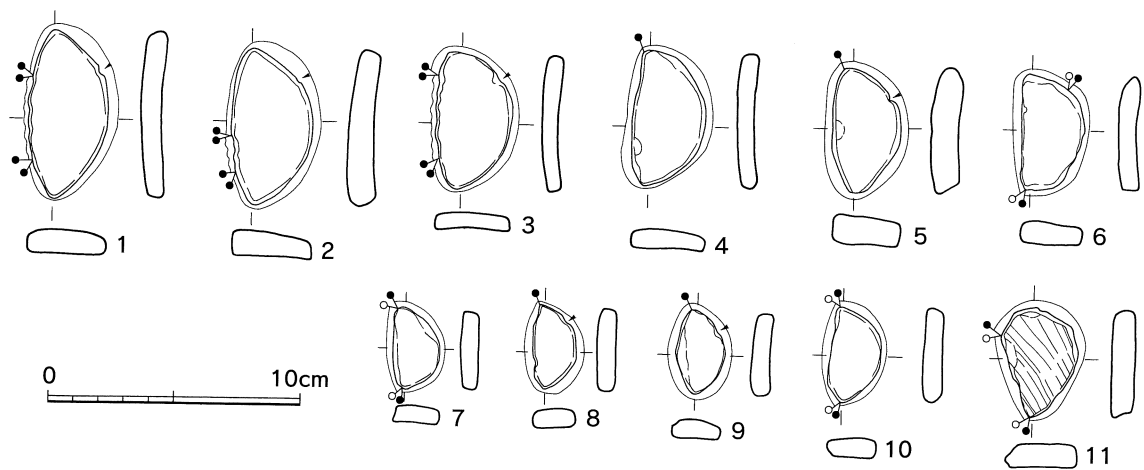
出土遺物は第181・182・183図に示した。第181図1・2・4・5は複合口縁壺である。1はやや内傾して長く延びる口縁をもち、上下2条の櫛描波状文が施されている。2は短く直立する口縁に櫛描波状文が施されている。4は短く直立する口縁に櫛描波状文と櫛状工具により列点文が施されている。また、頸部には2条の断面三角形の突帯に、円形浮文とキザミ目のついた長楕円形の浮文が貼り付けられている。胴部最大径付近には断面三角形



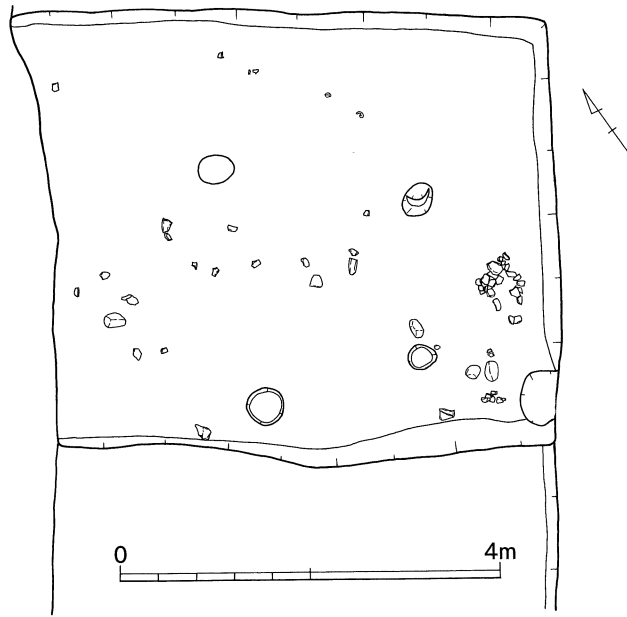
第181图 高添遺跡土木園地区1次調査区19号竪穴出土遺物実測図① (1/4)



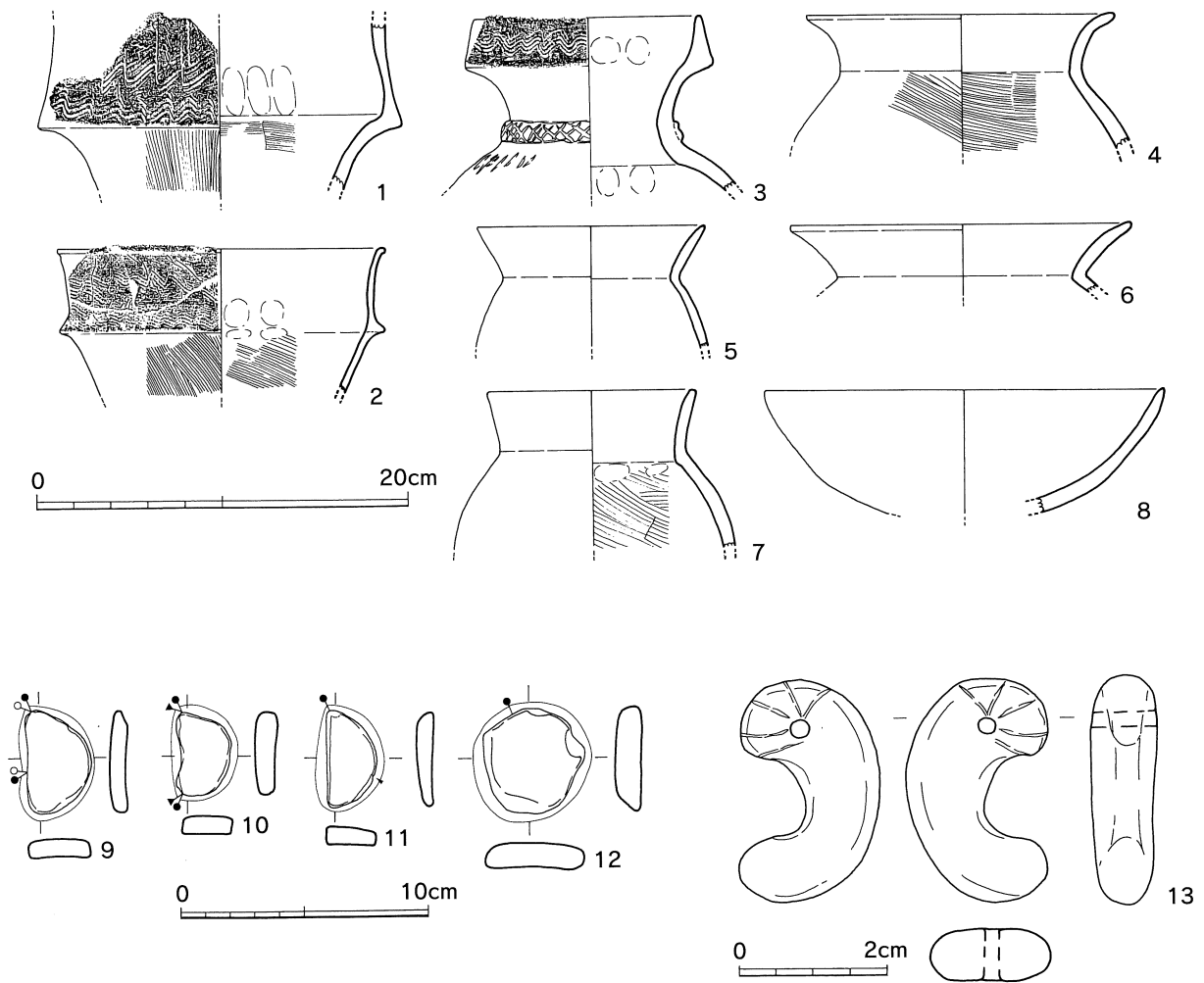
第182図 高添遺跡土木園地区1次調査区19号竪穴出土遺物実測図② (1/4)



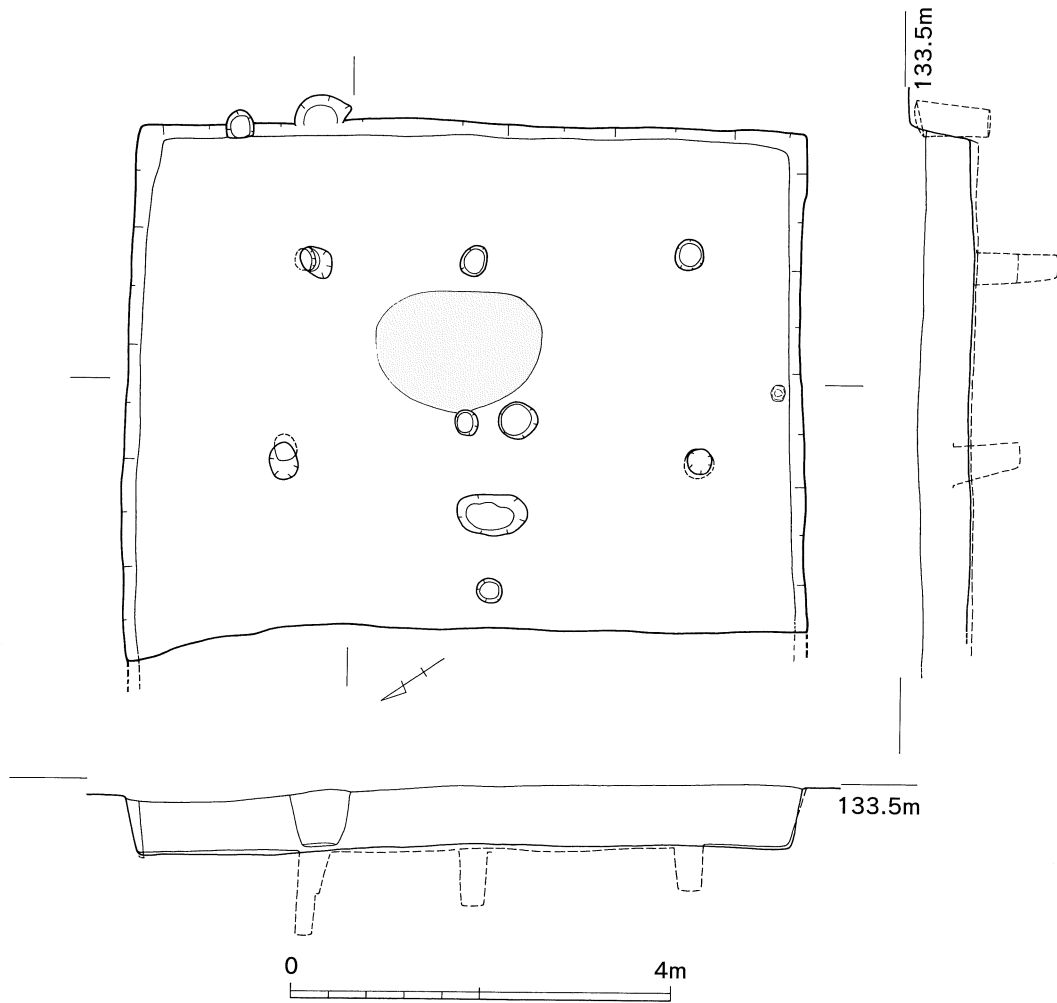
第183図 高添遺跡土木園地区1次調査区19号竪穴出土遺物実測図③ (1/3・1/1・1/2)



第184図 高添遺跡土木園地区1次調査区20号竪穴実測図 (1/80)



第185図 高添遺跡土木園地区1次調査区20号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/1)



第186図 高添遺跡土木園地区1次調査区21号竪穴実測図 (1/80)

の突帯が4条巡らされており、底部はレンズ底状を呈する。5は短く直立する口縁に櫛描直線文が施されている。頸部にはキザミ目をもつ断面三角形の突帯を巡らし、また、胴部最大径付近にはキザミ目をもつ断面M字形の突帯が巡らされている。第182図は甕であり、いずれも胴部最大径が上方にある。3・6は底部が残存しており、いずれも平底を呈する。5はナナメ方向のキザミ目をもつ断面三角形の突帯を頸部に巡らしている。第183図1～11は半月形の土器片加工品である。1～3のように弦部にキザミを入れるものや、3・5・8・9のように弧部にノッチを1ヶ所入れるものもみられる。12は径12mm、高さ22mm、孔径6mmを測る管玉であり、緑色を呈する。緑色凝灰岩であろうか。13～16は鉄器である。13は手鎌である。14・15は断面長方形の鉄器であるが、ヤリガンナの基部であろうか。16は断面方形の破片であるが、用途は明らかでない。

20号竪穴 (第184図)

調査区中央よりやや北西側において確認された方形竪穴住居である。21号竪穴を切っており、北西側は調査区の外側に延びている。短辺4.8m、長辺5.6m以上の長方形に近い平面形を呈する。支柱穴は4本である。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

出土遺物は第185図に示した。1・2・3は複合口縁壺である。1はやや長く直立する口縁をもち、上下2条の櫛描波状文が施されている。2はやや長く外反しながら直立する口縁をもち、上下2条の櫛描波状文が施されている。3は口縁部の立ち上がりが低く、屈曲部の器壁が厚く、口唇が尖っており、1条の櫛描波状文が施されている。5・7は小型壺であろうか。4・6は甕、8は鉢である。9～12は土器片加工品である。9～11は半月

形を呈し、12は円形を呈する。13は濃緑色の勾玉である。

21号竪穴 (第186図)

調査区中央よりやや北西側において確認された方形竪穴住居である。20号竪穴に切られており、北西側は調査区の外側に延びている。一辺7.2m、もう一辺は5.6m以上の方形を呈する。支柱穴は8本であろうか。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。遺物は20号竪穴と21号竪穴を一気に掘り下げてしまったため、遺物が混在してしまったが、確実に21号竪穴から出土した遺物は第187図に示した。

第187図1・2は複合口縁壺である。やや内径しながら延びる口縁形態をもち、2には3条の櫛描波状文が施されている。3・4は土器片加工品であり、半月形を呈する。

22号竪穴 (第188図)

調査区中央より北側において確認された方形竪穴住居である。5.4×5.8mの正方形に近い平面形を呈し、支柱穴は4本である。竪穴の北東辺に接して1.8×0.8m、深さ15cmの土坑がみられた。この土坑に接し、竪穴中央寄りに炭化物が床面に確認でき、その中には焼土も含まれていた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

出土遺物は第189図に示した。1・2は複合口縁壺である。やや内径しながら長く上方に延びる口縁形態をもち、櫛描波状文が施されている。3・4小型丸底壺であり、4の内外面には横方向のミガキが施されている。5・6は甕であり、7～9は鉢である。10は壺であり、外面にミガキと内面にヘラケズリが認められる。11～15は土器片加工品であり、半月形を呈する。16・17は川原石を利用した磨石である。18は緑色の石材を利用した勾玉である。19は鉄鎌である。

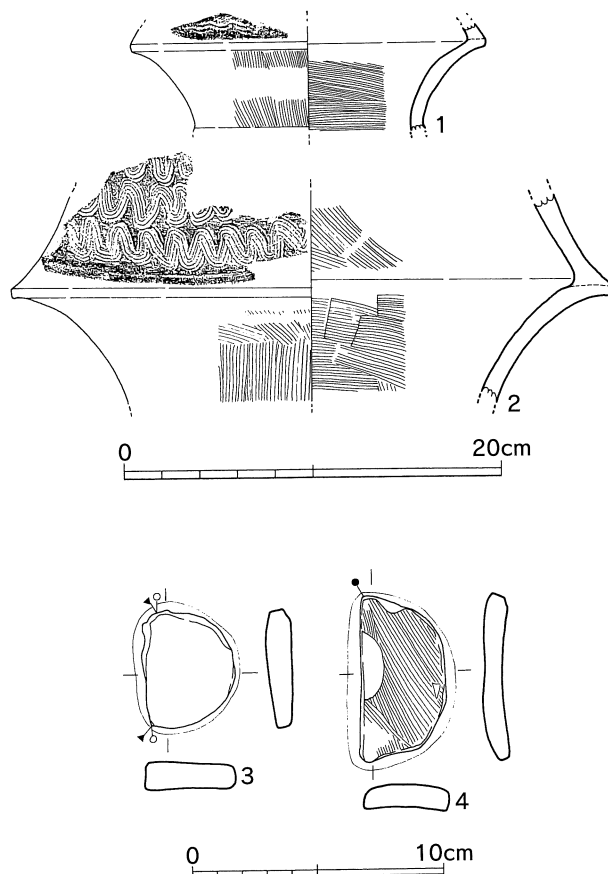
23号竪穴 (第190図)

調査区中央より北東側において確認された方形竪穴住居であり、30号竪穴に切られている。一辺5.3mと4.6m以上の方形を呈し、支柱穴はピットが多く検出できたが、支柱穴を確認するには至らなかった。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

出土遺物は第191図に示した。1は長径壺であり、内外面にミガキが施されている。頸部と胴部の境に格子状のキザミ目をもつ突帯が、胴部最大径にはM字状の突帯がそれぞれ巡らされている。また、内外面には赤色顔料が塗布されている。2は器高の高い鉢である。3・4は複合口縁壺である。3の頸部と胴部の境には上下から連続して指押さえした断面三角形の突帯がめぐらされている。4はやや長く直立する口縁をもち、上下2条の櫛描波状文が施されている。頸部と胴部の境には上下から連続して指押さえした断面三角形の突帯がめぐらされており、胴部には丁寧な縦方向のハケが施されており、底部はレンズ底を呈する。5は扁平な板状の砥石であり、4面とも砥面として利用されている。6は土器片加工品であり、半月形を呈する。

24号竪穴 (第192図)

調査区中央より北東側において確認された方形竪穴住居である。12号竪穴を切り、また、30号竪穴を切ってい



第187図 高添遺跡土木園地区1次調査区
21号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

る。5.2×5.2mの正方形を呈し、支柱穴は4本である。竪穴の中央付近に2.0×1.6m、深さ10cmの浅いくぼみがみられ、この中に炭化物が確認できた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

出土遺物は第193図に示した。1・2・3は複合口縁壺である。1は口縁端部に低い粘土帯を貼り付け上方に拡張したもので、外縁には連続山形文、上面に円形浮文を貼り付けている。2・3にはやや内径しながら延びる口縁形態をもち、2には1条の櫛描波状文が、3には2条の櫛描波状文がそれぞれ施されている。4・5は甕であり、5は器壁も薄く、口唇部を内側に肥厚させている。6は球状の器形をもつ鉢である。7～13は土器片加工品であり、半月形を呈する。14は安山岩製の砥石であり、側縁部4面とも砥面として利用している。

25号竪穴 (第194図)

調査区北東端において確認された方形竪穴住居である。中央部は南北に大きな攪乱を受けているが、一辺8.0mを測ることが確認できているが、柱穴も明確ではない。

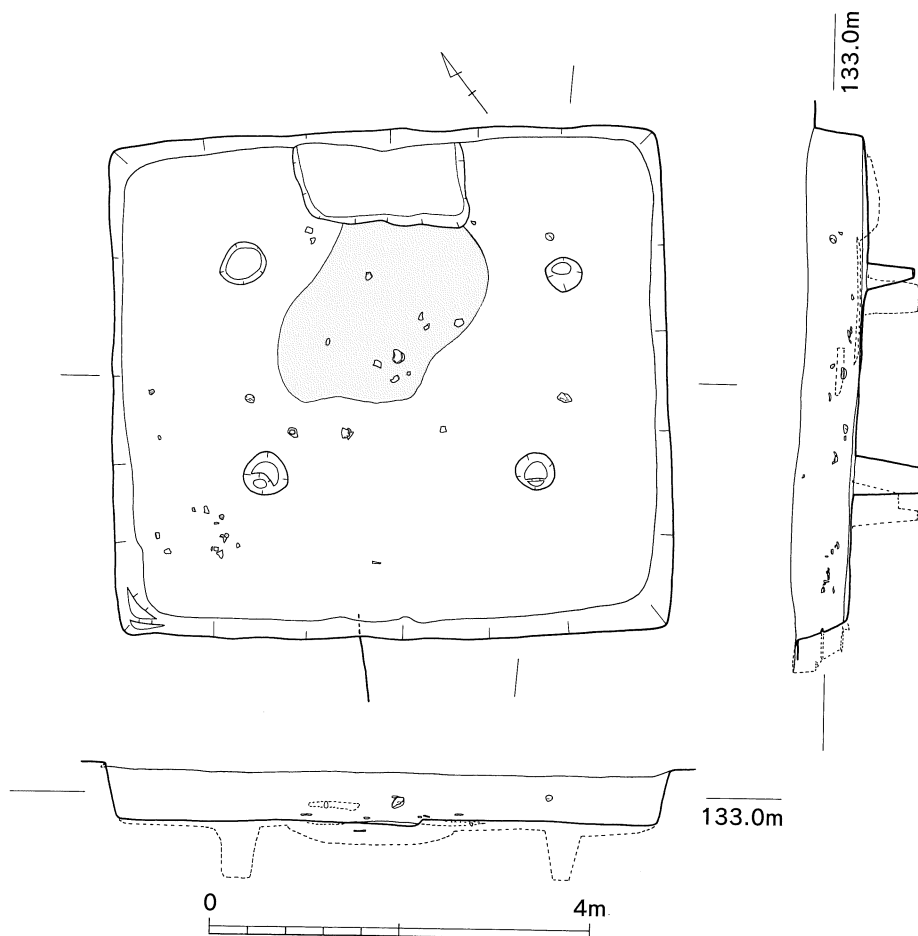
出土遺物は第195図に示したが、土器片加工品であり、半月形を呈する。

26号竪穴 (第196図)

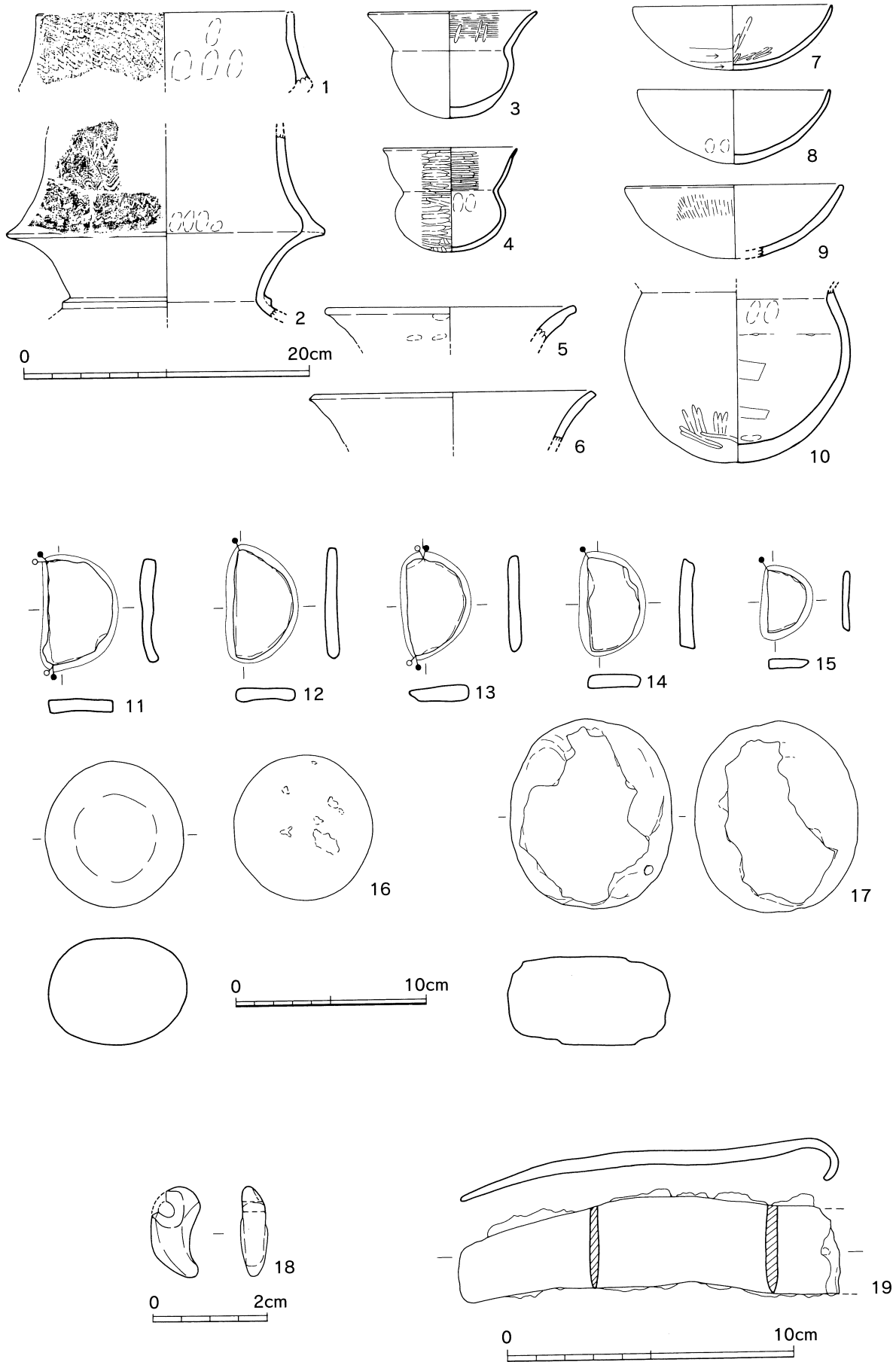
調査区西北側において確認された方形竪穴住居で、北西側は調査区の外側に延びている。一辺5.4m、もう一辺は3.2m以上の方形を呈する。削平が著しくほとんど床面近くまで失われている。竪穴内からピットがみられるものの、明確な支柱穴は確認できなかった。南端のピット内には焼土が含まれていた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。床面近くまで削平されていたためか、ほとんど遺物はみられなかった。

27号竪穴 (第197図)

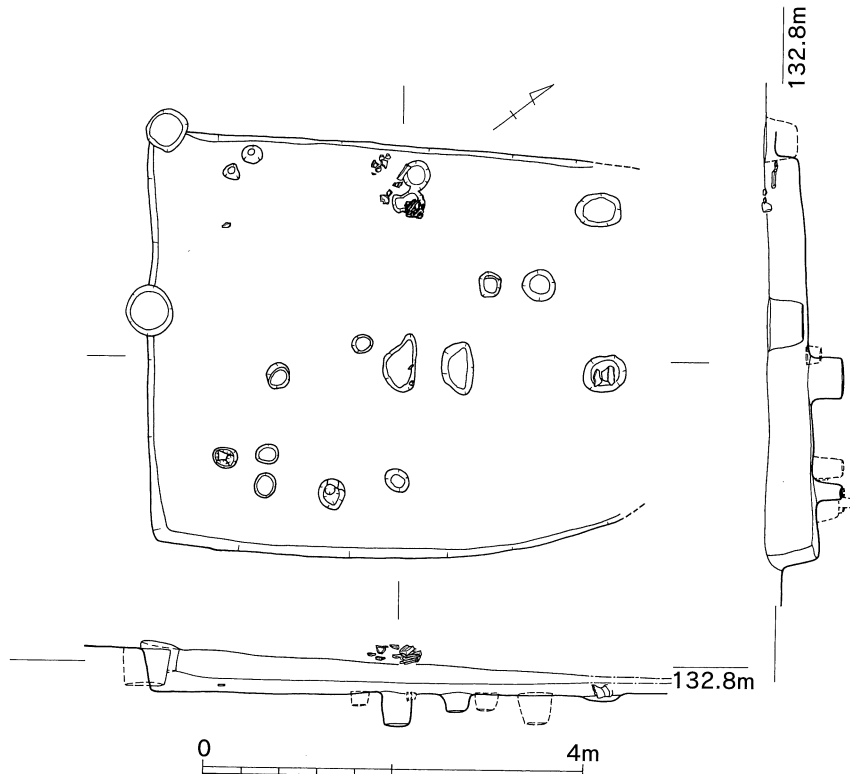
調査区中央よりやや南東側において確認された方形竪穴住居である。ほとんど床面まで削平されており、南側



第188図 高添遺跡土木園地区1次調査区22号竪穴実測図 (1/80)



第189图 高添遺跡土木園地区1次調査区22号竖穴出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/1・1/2)



第190図 高添遺跡土木園地区1次調査区23号竪穴実測図 (1/80)

の方形プランが確認できたのみである。支柱穴は7本であろう。竪穴南東辺から1.5m入った地点に1.8×0.8mの範囲で炭化物が認められた。

出土遺物は第198～201図に示した。第198図1・2は複合口縁壺である。1はやや内径しながら延びる口縁形態をもち、1条の櫛描波状文がみられる。頸部および胴部に格子状のキザミ目が施されている扁平なベルト状突帯が巡らされている。第198図3～6および第199図は甕である。第200図は中央から折損した扁平な板状の砥石であり、4面とも砥面として利用されている。第201図は扁平な川原石を利用した台石であり、表裏面および側面が摩耗している。

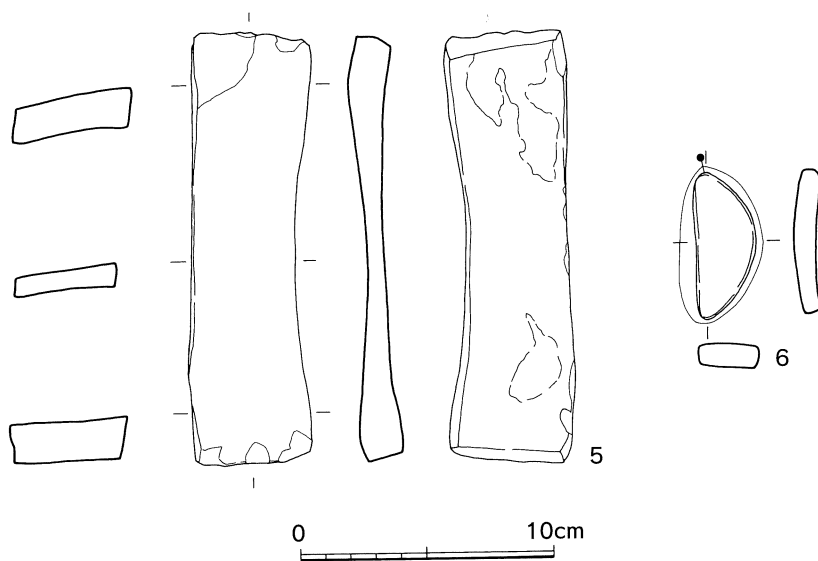
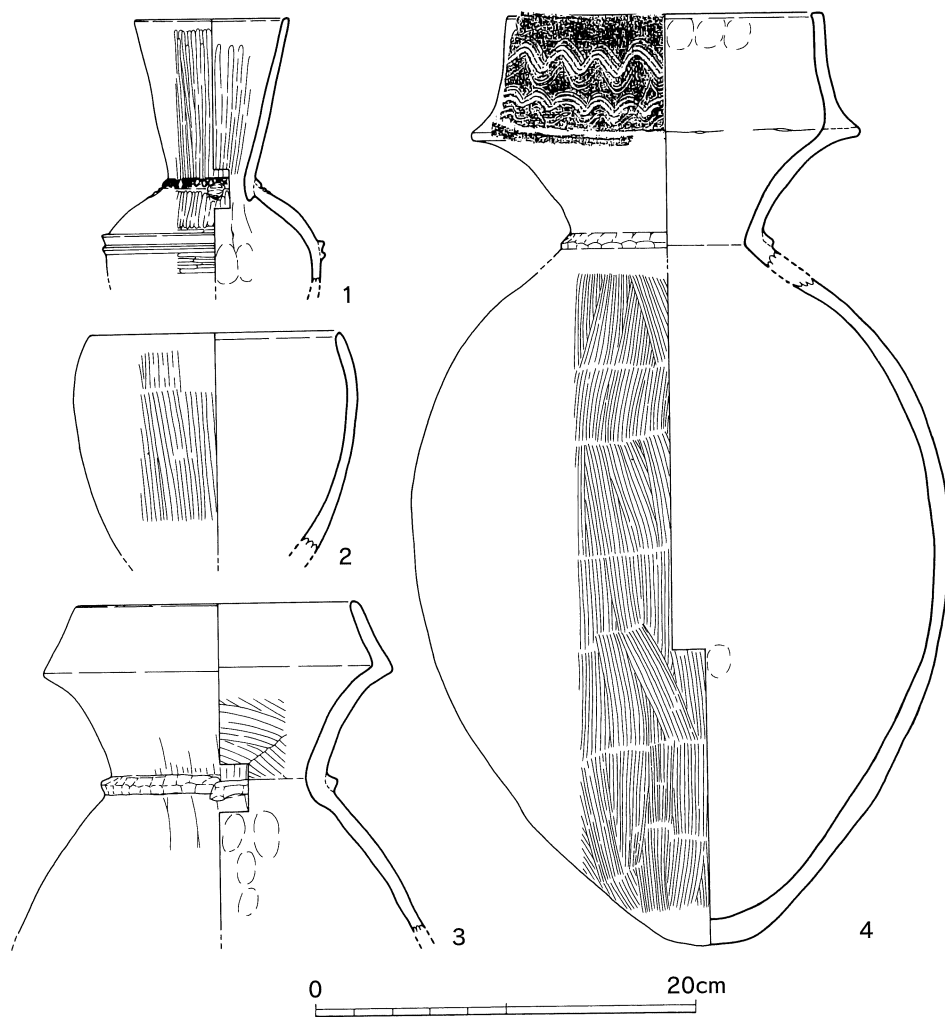
28号竪穴 (第202図)

調査区中央よりやや北東側において確認された方形竪穴住居であり、北側部分が19号竪穴から切られている。8.2×7.2mの長方形に近い平面形を呈し、支柱穴は4本と考えられる。埋土中からは、ほぼ全面に焼土・炭化物がみられた。床は貼り床がみられ、ほぼ平坦である。

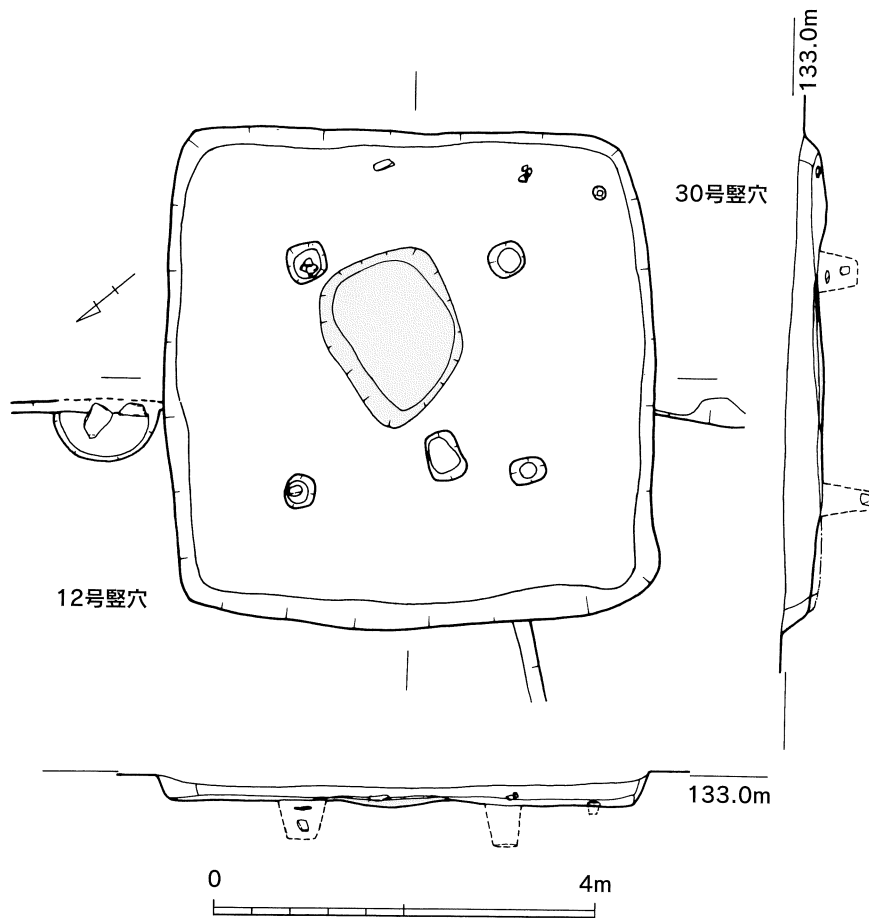
出土遺物は第203～206図に示した。第203図1・2・4・6は複合口縁壺である。口縁部の立ち上がりが低いもの(1・4・6)と、口縁部の立ち上がりが高いもの(2)がみられる。1・4には口縁に1条の櫛描波状文が施されており、2の口縁にはヘラ状工具によるタテ方向のナデが施されている。6の頸部には断面三角形の突帯が巡らされており、突帯下にはナナメ方向のキザミ目が施されている。3は単口縁の壺であり、頸部に断面三角形の突帯が巡らされており、突帯下には浮文が貼り付けられている。5・8は長頸壺である。8は外面が丁寧に磨かれ、頸部に1条、胴部に3条の三角突帯が巡らされている。7は注口部の破片である。9は高坏である。第204図は甕である。第205図は川原石を利用した台石であり、一面に磨面が確認できる。第206図は結晶片岩を利用した磨製石鏃の未製品である。

29号竪穴 (第207図)

調査区中央よりやや北東側において確認された方形竪穴住居である。30号竪穴を切っており、南端は19号竪穴から切られている。6.0×4.4mの長方形を呈し、支柱穴は4本である。南東側支柱穴間に0.6×0.8m、深さ25cm



第191図 高添遺跡土木園地区1次調査区23号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)



第192図 高添遺跡土木園地区 1次調査区24号竖穴実測図 (1/80)

の土坑がみられた。この土坑に接し、竖穴内には炭化物が広く確認できた。

出土遺物は第208図に示した。1は甕であろうか。頸部に格子状のキザミ目が施されている扁平なベルト状突起帯が巡らされている。2～6は半月形の土器片加工品である。なかには2のように弦部にキザミを入れるものもみられる。

30号竖穴 (第209図)

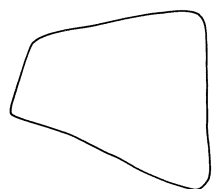
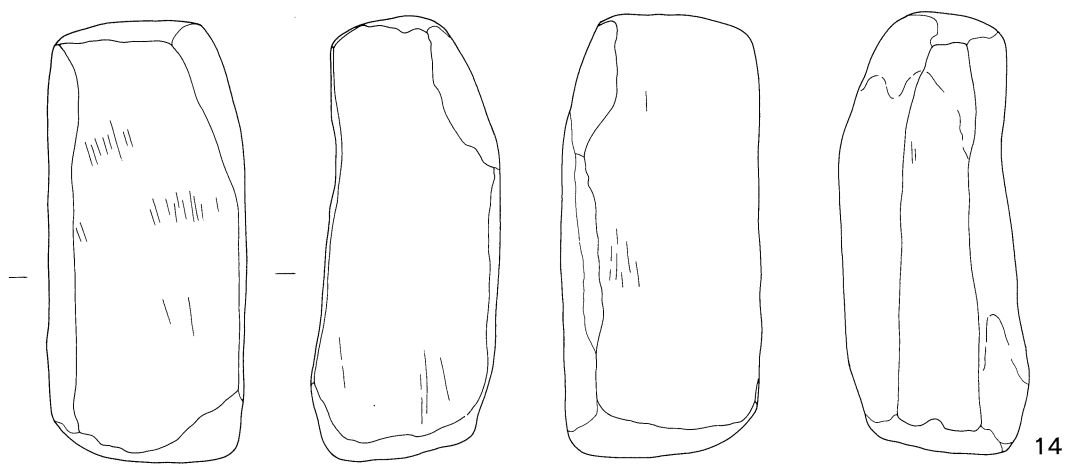
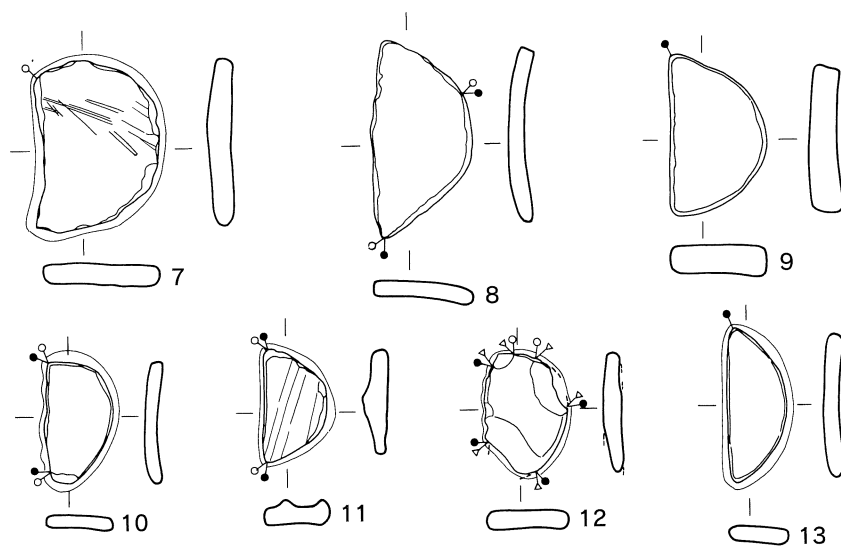
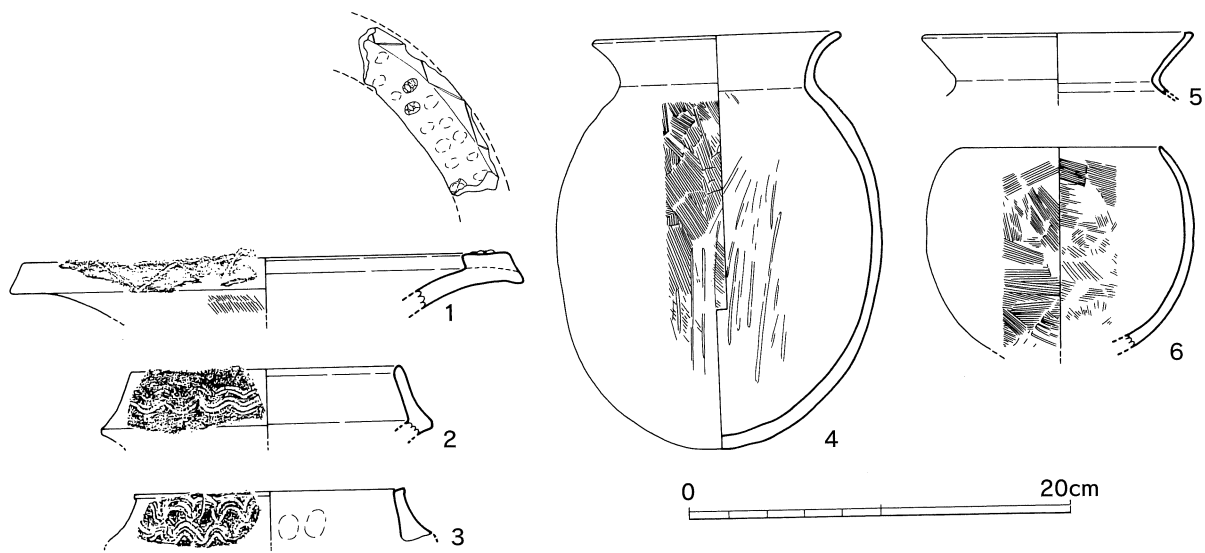
調査区中央よりやや北東側において確認された方形竖穴住居である。24・29号竖穴から切られている。削平が著しく、北側のプランは確認できなかったが、短辺は6.2mを測る。主柱穴は明確でないが、数基のピットが確認できている。

出土遺物は第210～212図に示した。第210図1は甕である。尖底で最大径は胴部中位にあり、頸部に格子状のキザミ目が施されている扁平なベルト状突起帯が巡らされている。2～5は半月形の土器片加工品である。なかには2のように弦部にキザミを入れるものもみられる。第211・212図は砥石である。第212図は安山岩の側縁に使用に伴う数条の溝が確認できる。

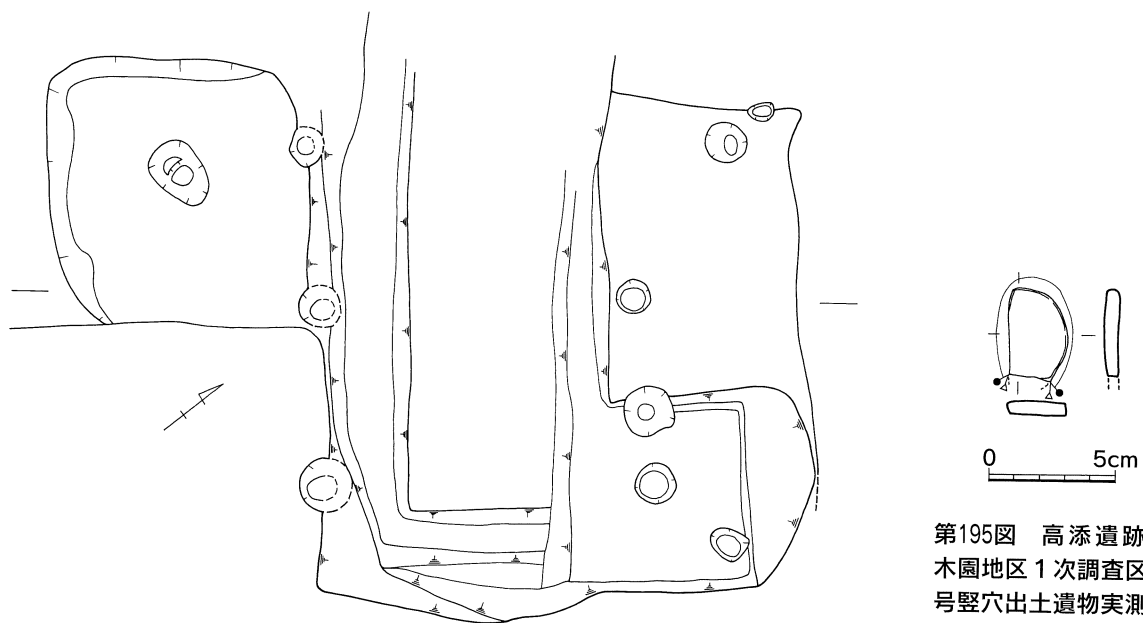
31号竖穴 (第213図)

調査区中央において確認された方形竖穴住居であるが、削平が著しく南側プランのコーナーのみ検出できた。35号竖穴および2号土坑から切られている。主柱穴は確認しえなかった。東南辺付近の床面において1.7×0.6mの範囲で炭化物が認められた。

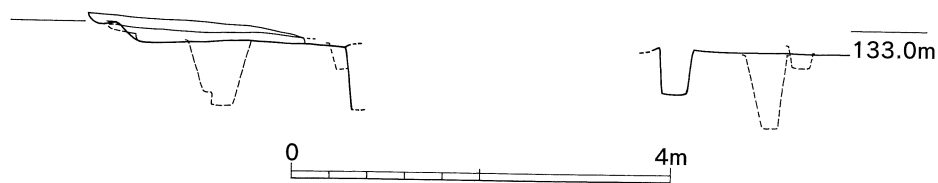
出土遺物は第214図に示した。壺の頸部付近の破片であろう。頸部にはキザミ目をもつ突起帯がめぐらされ、結節点ではネクタイ状に垂下させている。



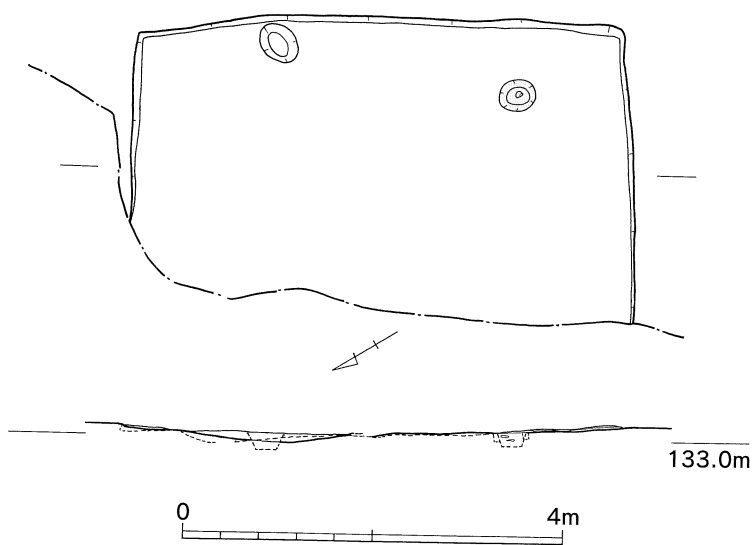
第193图 高添遺跡土木園地区1次調査区24号竖穴出土遺物実測図 (1/4·1/3)



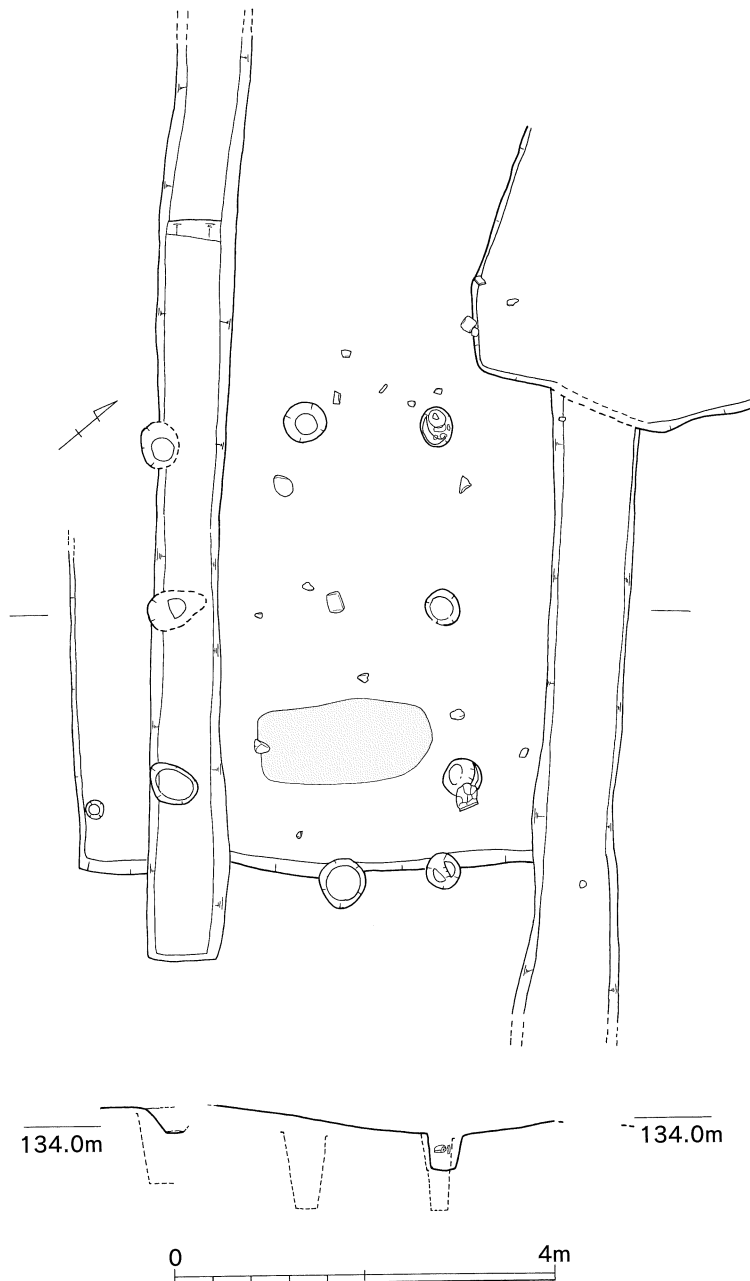
第195図 高添遺跡土木園地区1次調査区25号竪穴出土遺物実測図 (1/3)



第194図 高添遺跡土木園地区1次調査区25号竪穴実測図 (1/80)



第196図 高添遺跡土木園地区1次調査区26号竪穴実測図 (1/80)



第197図 高添遺跡土木園地区1次調査区27号竪穴実測図 (1/80)

32号竪穴 (第215図)

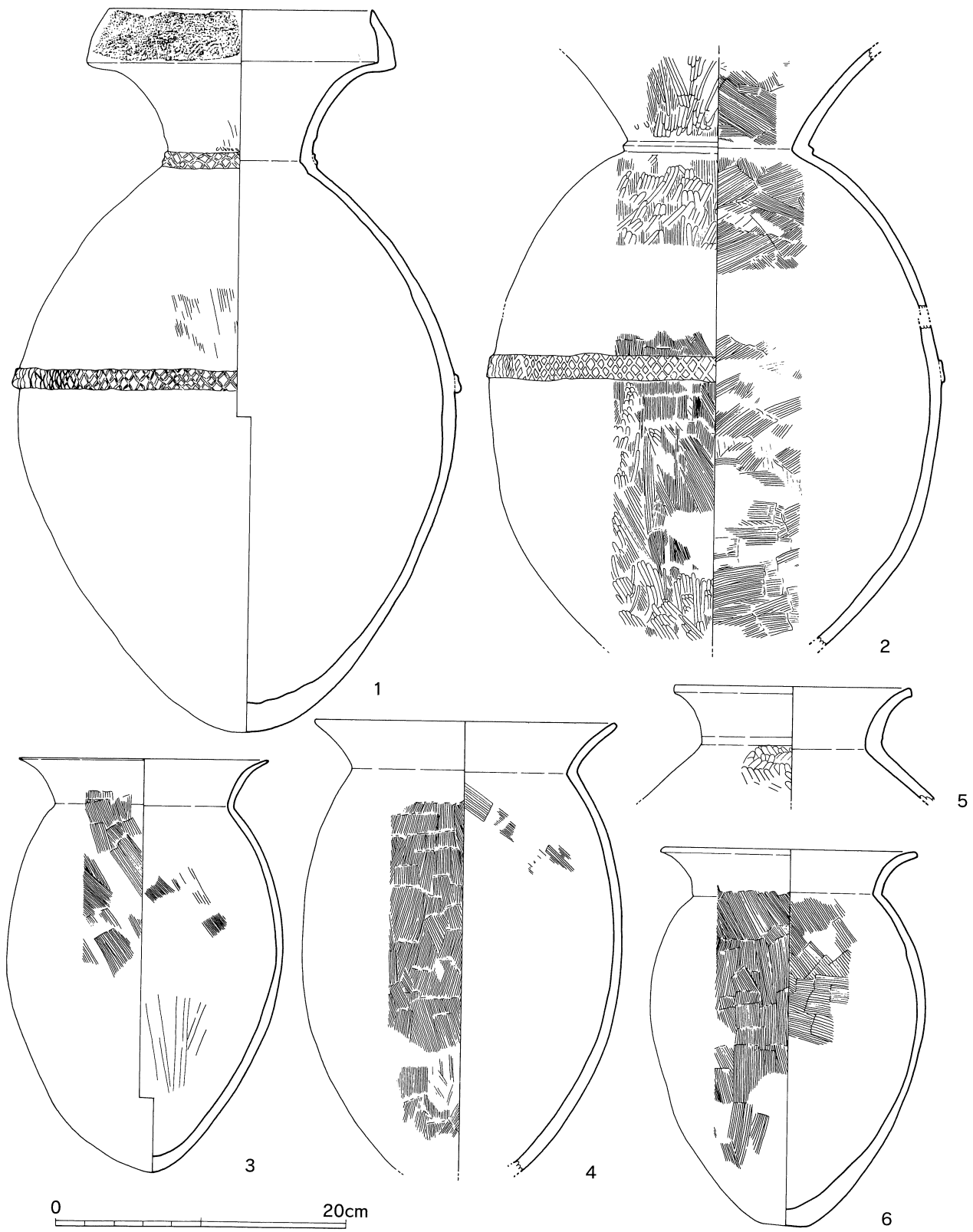
調査区中央よりやや北側において確認された方形竪穴住居である。18号竪穴から切られており、削平も著しかった。主柱穴は明確でないが、数基のピットが確認できている。床面近くまで削平されていたためか、ほとんど遺物はみられなかった。

33号竪穴 (第216図)

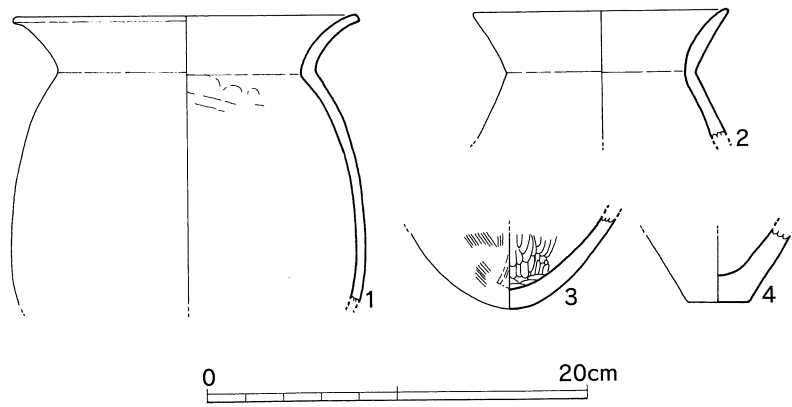
調査区中央より南西側において確認された方形竪穴住居である。主柱穴は6本であろう。床面近くまで削平されていたためか、ほとんど遺物はみられなかった。

35号竪穴 (第217図)

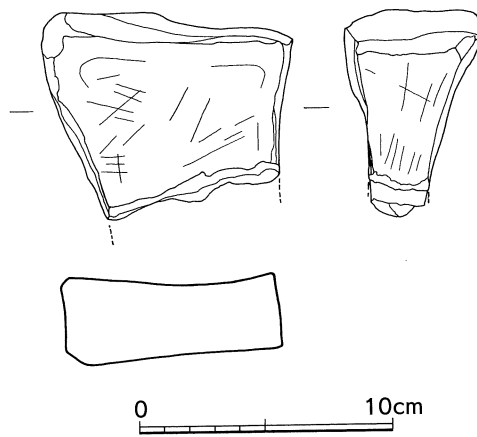
調査区中央において確認された方形竪穴住居である。17・18号竪穴から切られており、削平も著しかった。主柱穴は明確でないが、ピットが1基確認できている。床面近くまで削平されていたためか、ほとんど遺物はみられなかった。



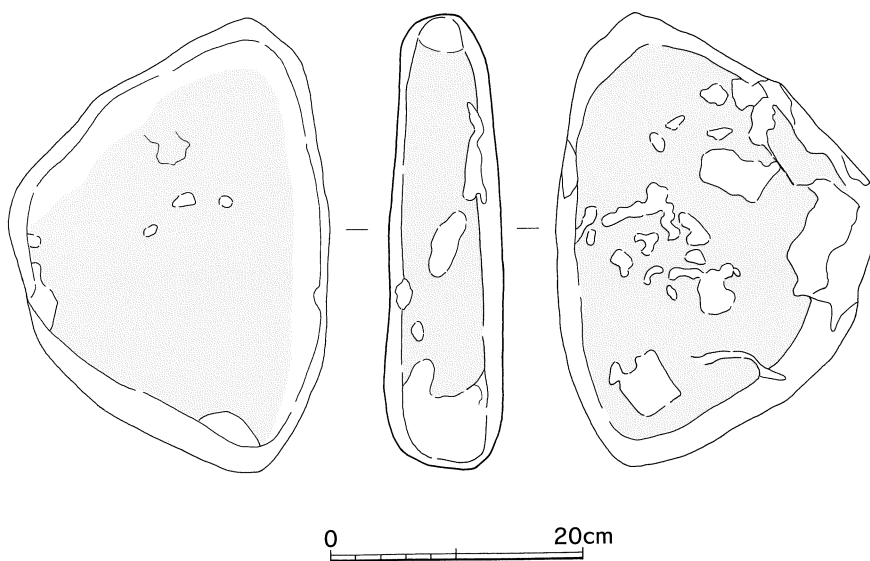
第198图 高添遺跡土木園地区1次調査区27号竖穴出土遺物実測図① (1/4)



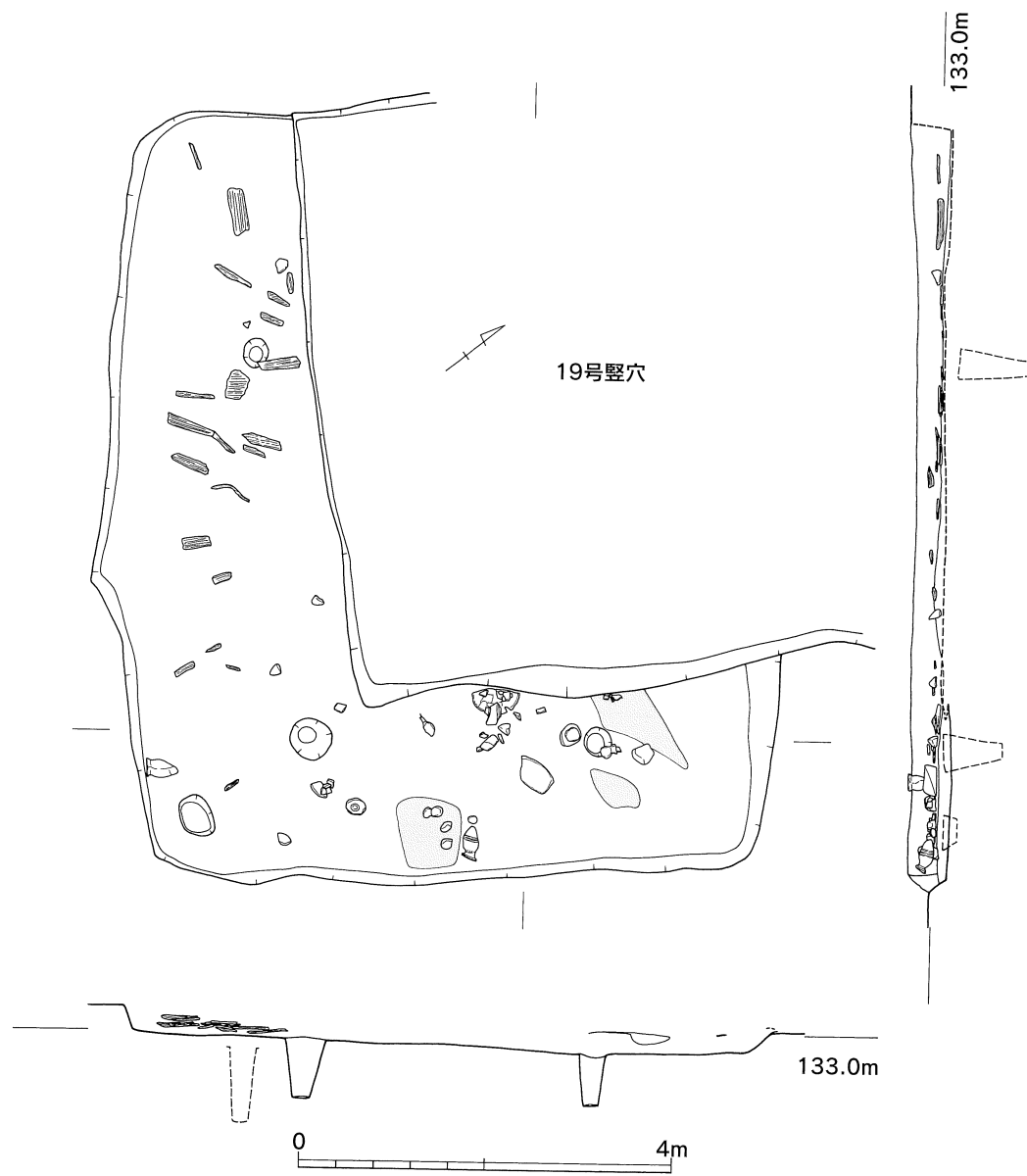
第199図 高添遺跡土木園地区1次調査区27号竪穴出土遺物実測図② (1/4)



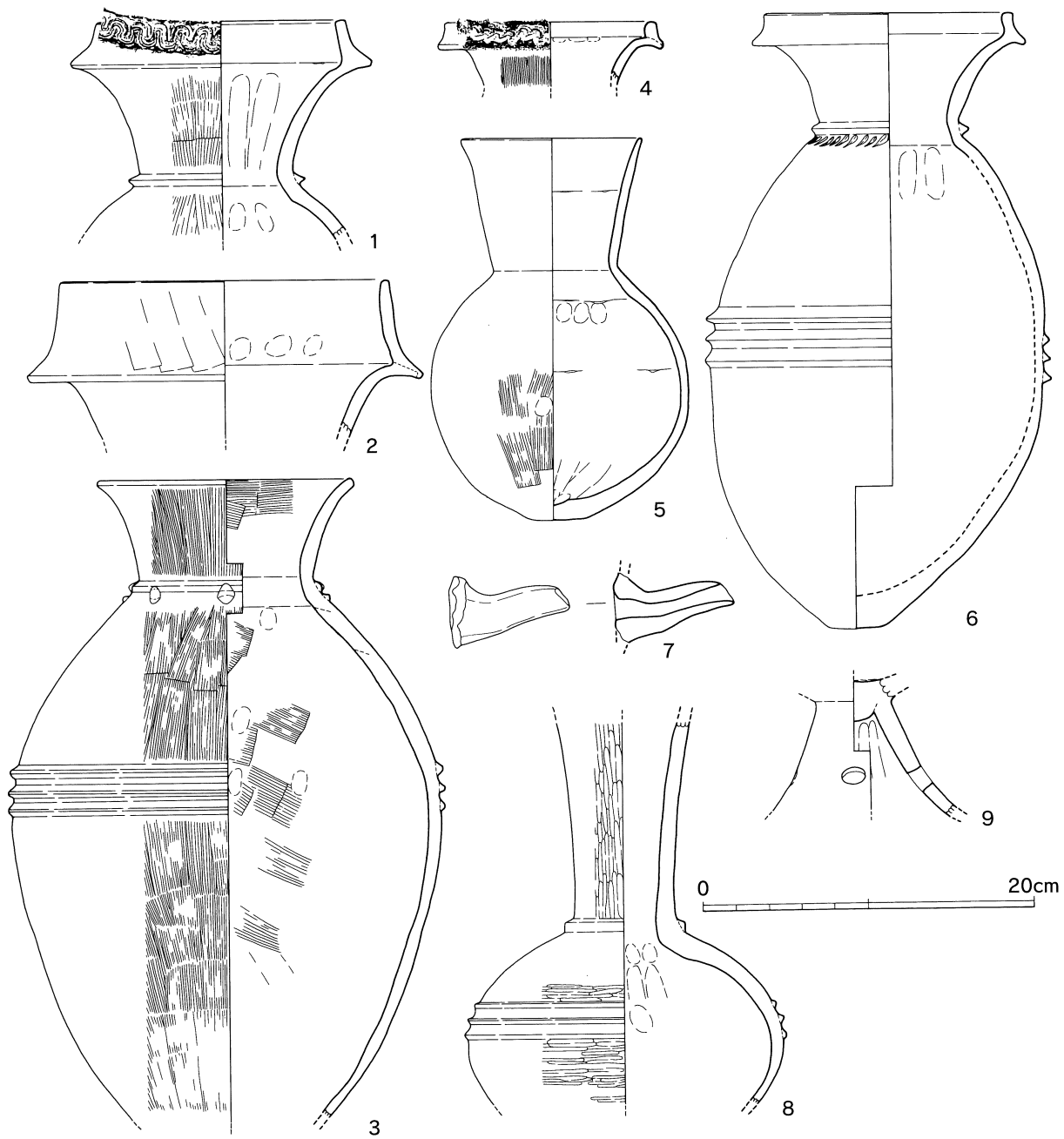
第200図 高添遺跡土木園地区1次調査区27号竪穴出土遺物実測図③ (1/3)



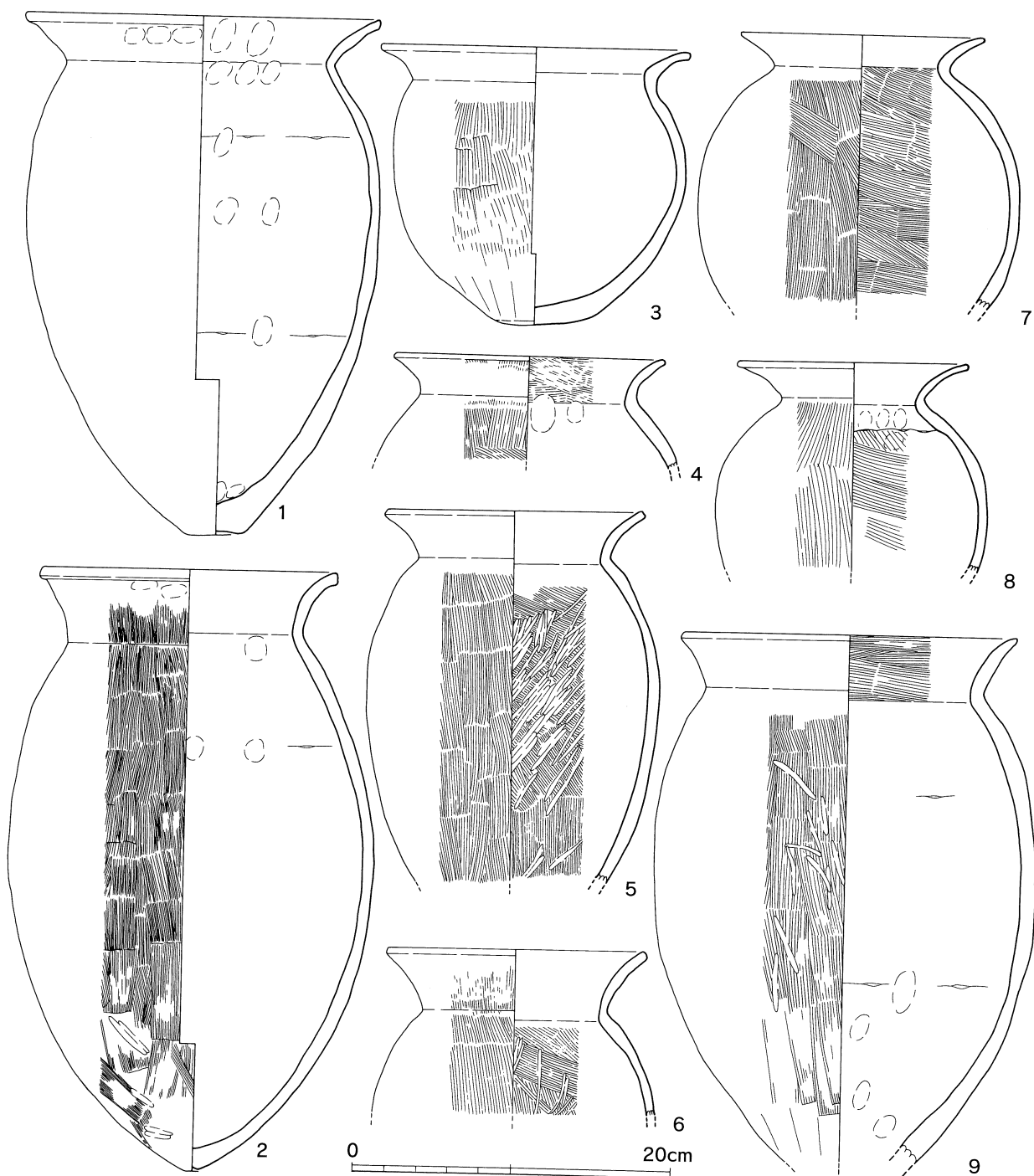
第201図 高添遺跡土木園地区1次調査区27号竪穴出土遺物実測図④ (1/6)



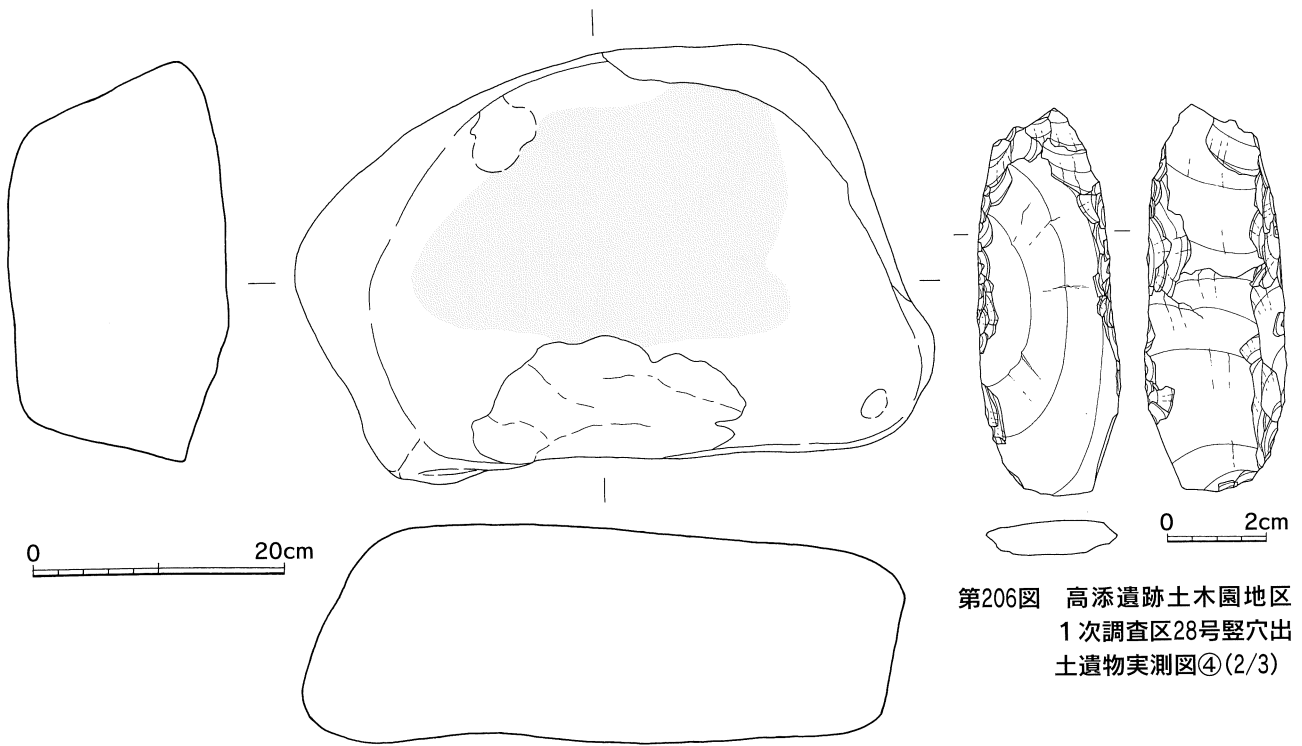
第202図 高添遺跡土木園地区1次調査区28号竖穴実測図 (1/80)



第203図 高添遺跡土木園地区1次調査区28号竪穴出土遺物実測図① (1/4)

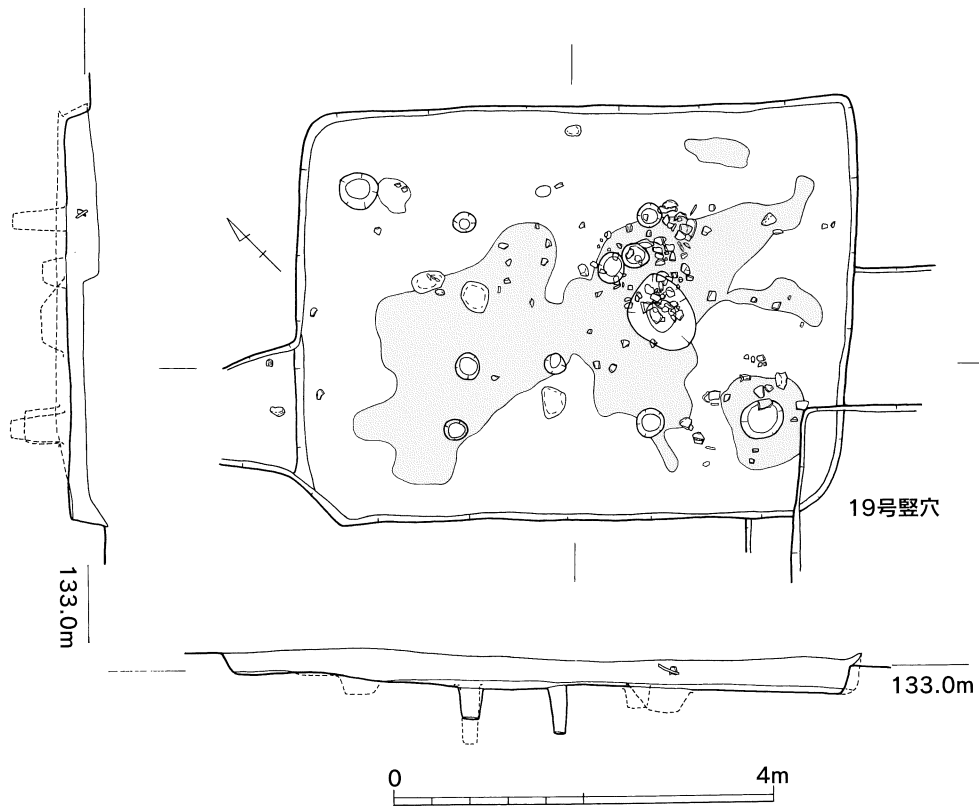


第204図 高添遺跡土木園地区1次調査区28号竪穴出土遺物実測図② (1/4)

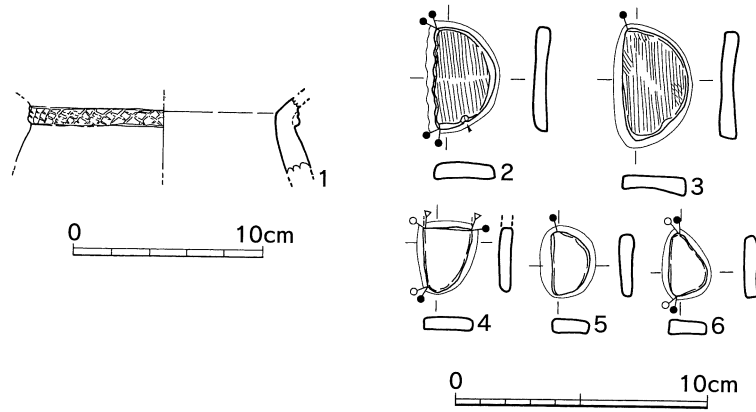


第206図 高添遺跡土木園地区
1次調査区28号竪穴出
土遺物実測図④(2/3)

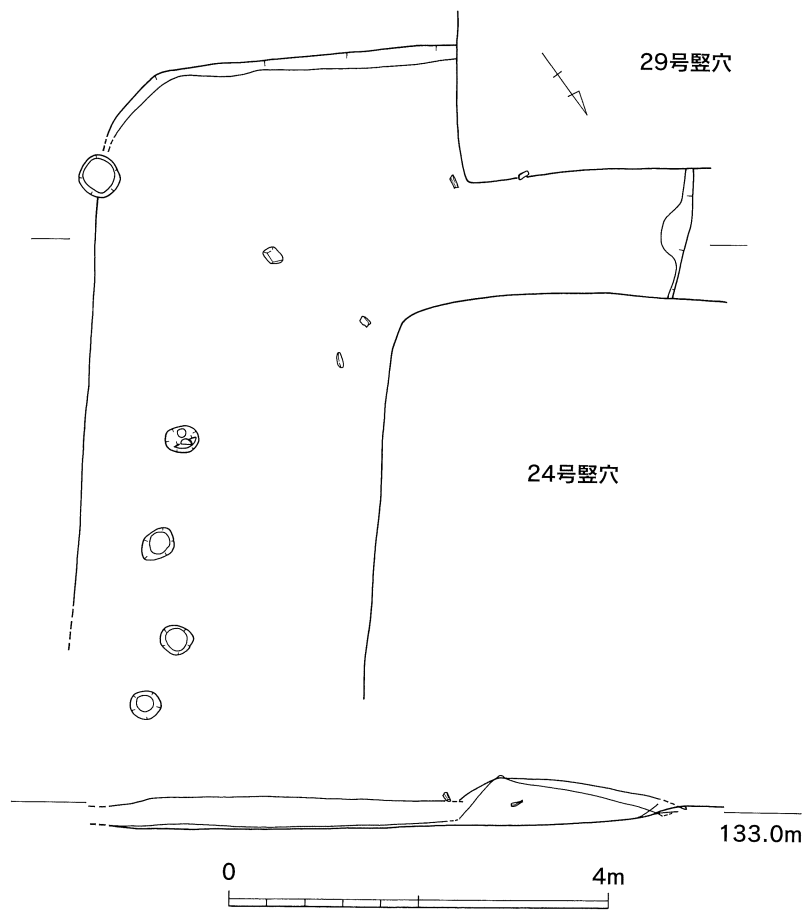
第205図 高添遺跡土木園地区 1次調査区28号竪穴出土遺物実測図③(1/6)



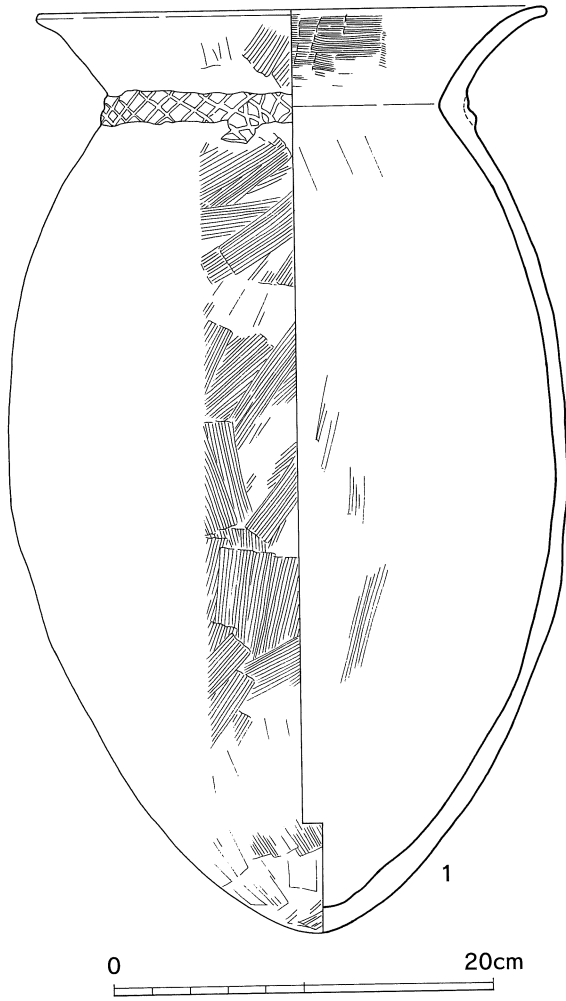
第207図 高添遺跡土木園地区 1次調査区29号竪穴実測図 (1/80)



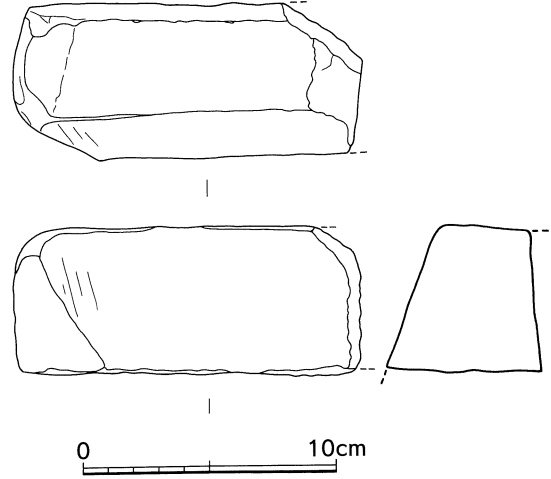
第208图 高添遺跡土木園地区1次調査区29号竖穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)



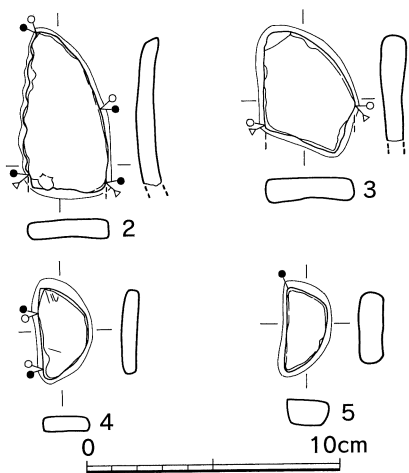
第209图 高添遺跡土木園地区1次調査区30号竖穴実測図 (1/80)



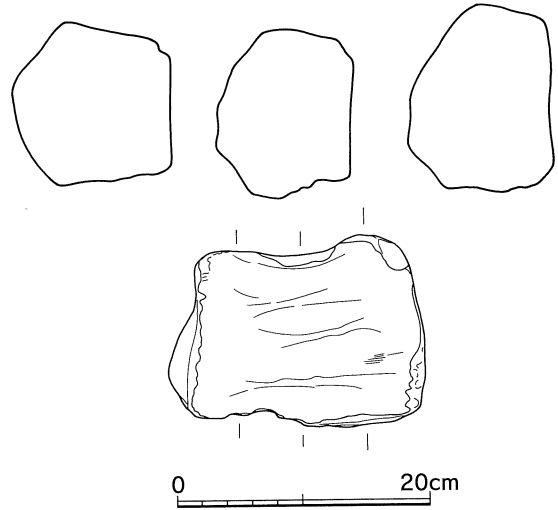
第210图 高添遺跡土木園地区1次調査区30号
 竪穴出土遺物実測図① (1/4・1/3)

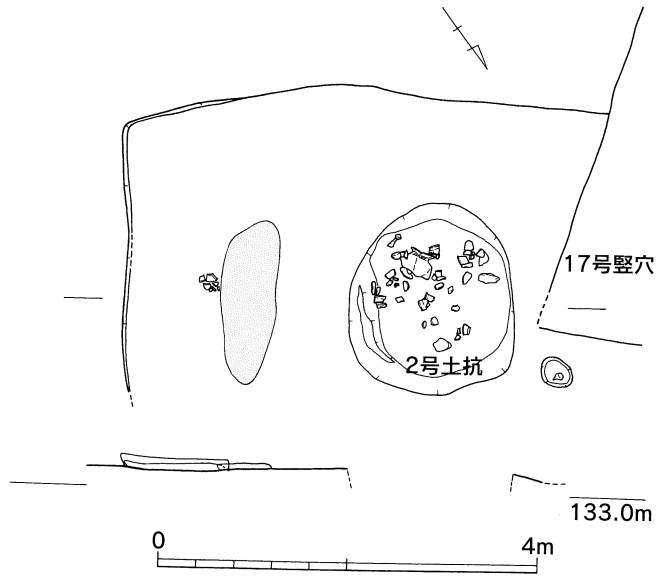


第211图 高添遺跡土木園地区1次調査区
 30号竪穴出土遺物実測図② (1/3)

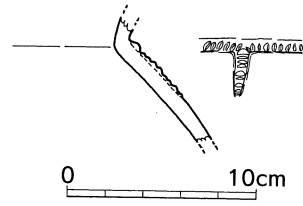


第212图 高添遺跡土木園地区1次調査区
 30号竪穴出土遺物実測図③ (1/6)

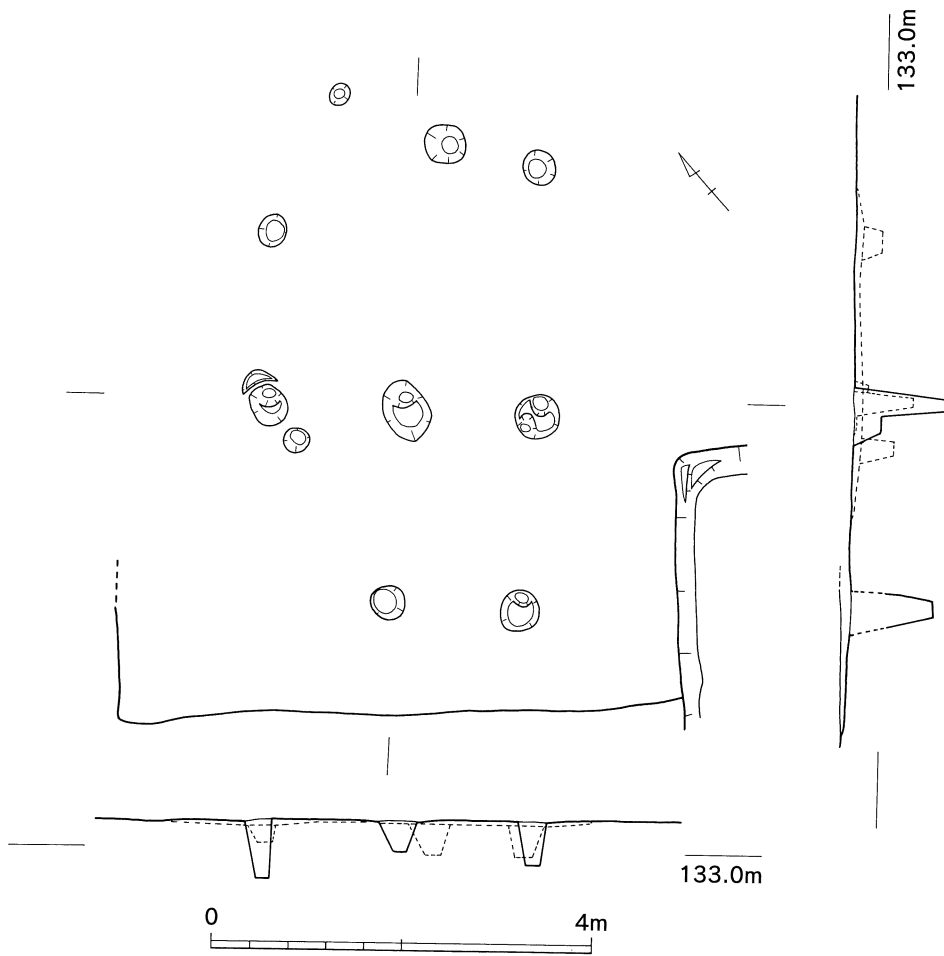




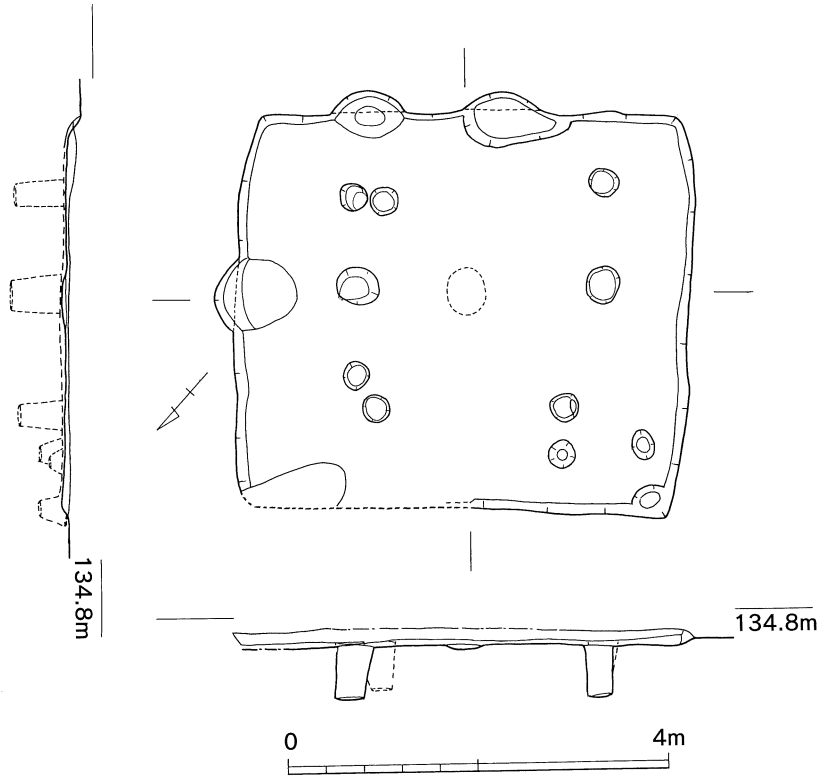
第213图 高添遺跡土木園地区1次調査区31号竖穴実測図 (1/80)



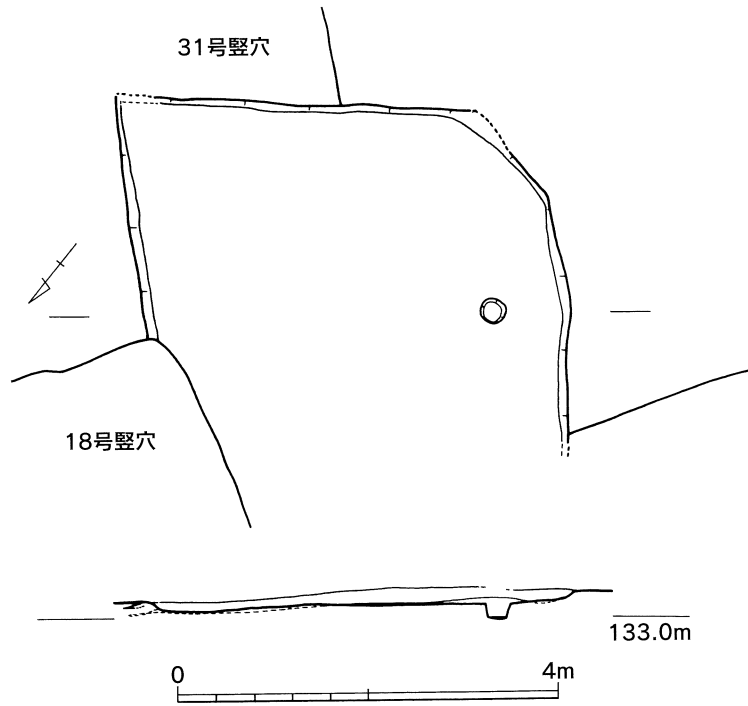
第214图 高添遺跡土木園地区1次調査区31号竖穴出土遺物実測図 (1/4)



第215图 高添遺跡土木園地区1次調査区32号竖穴実測図 (1/80)



第216图 高添遺跡土木園地区1次調査区33号竖穴実測図 (1/80)



第217图 高添遺跡土木園地区1次調査区35号竖穴実測図 (1/80)

1号土坑 (第218図)

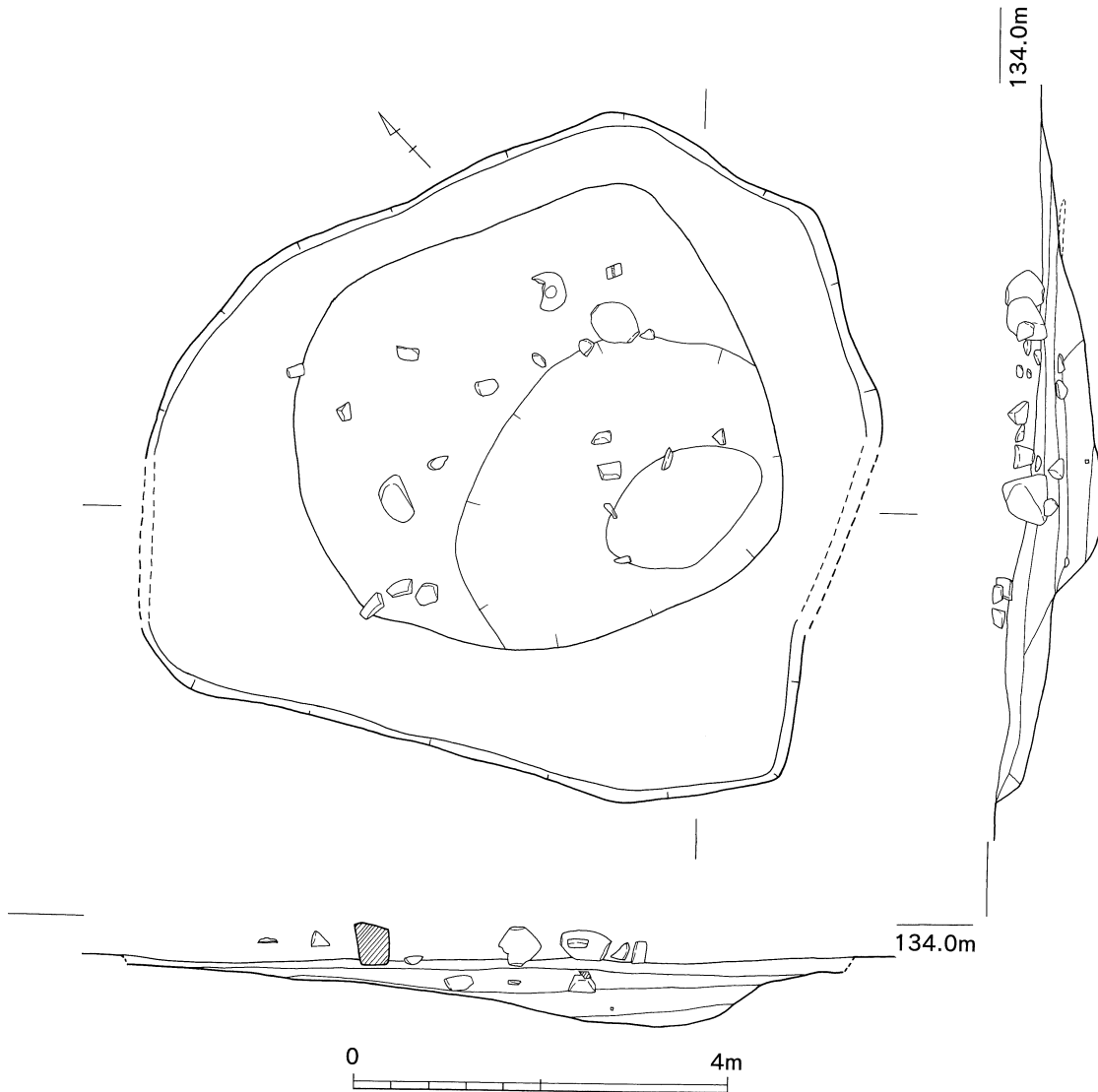
調査区中央東側において確認された土坑である。8.0×7.4m、深さ70cmを測る浅い挿鉢状の形態をもつ不整形土坑であり、埋土中には炭化物が少量混じる。

出土遺物は第219図に示した。1・2は壺である。胴部最大径を中央にもち頸部で屈曲して外反する口縁をもつ。平底の底部は中央がややくぼんでいる。3は径6mm、高さ7mm、孔径4mmを測る管玉である。

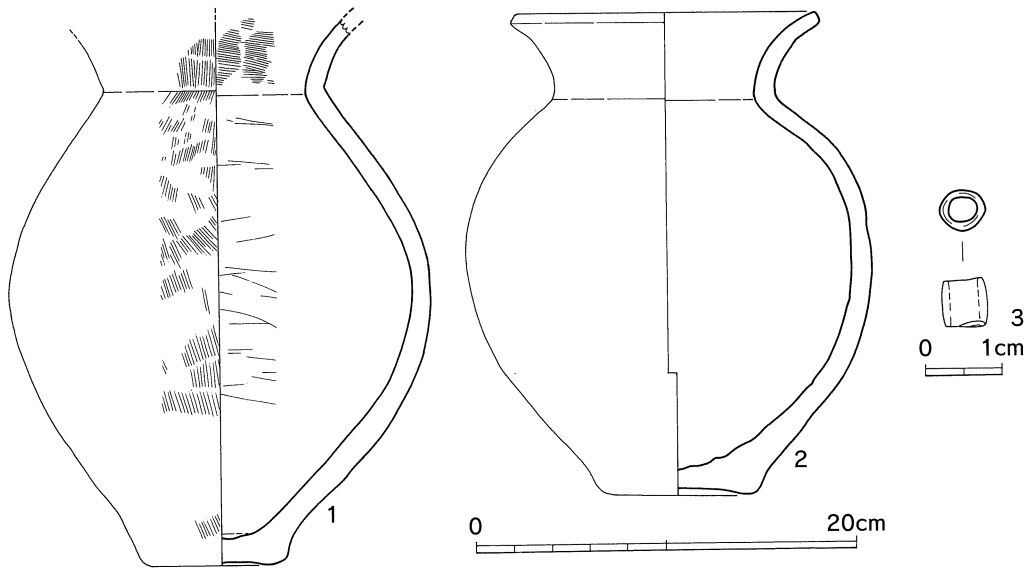
2号土坑 (第220図)

調査区中央において確認された土坑であり、31号竖穴を切っている。5.0×4.6m、深さ2.4mを測る円形土坑であり、壁は垂直に近く立ち上がり、底は平坦に近かった。出土遺物は中下層に集中してみられ、炭化物は下層に少量混じる。

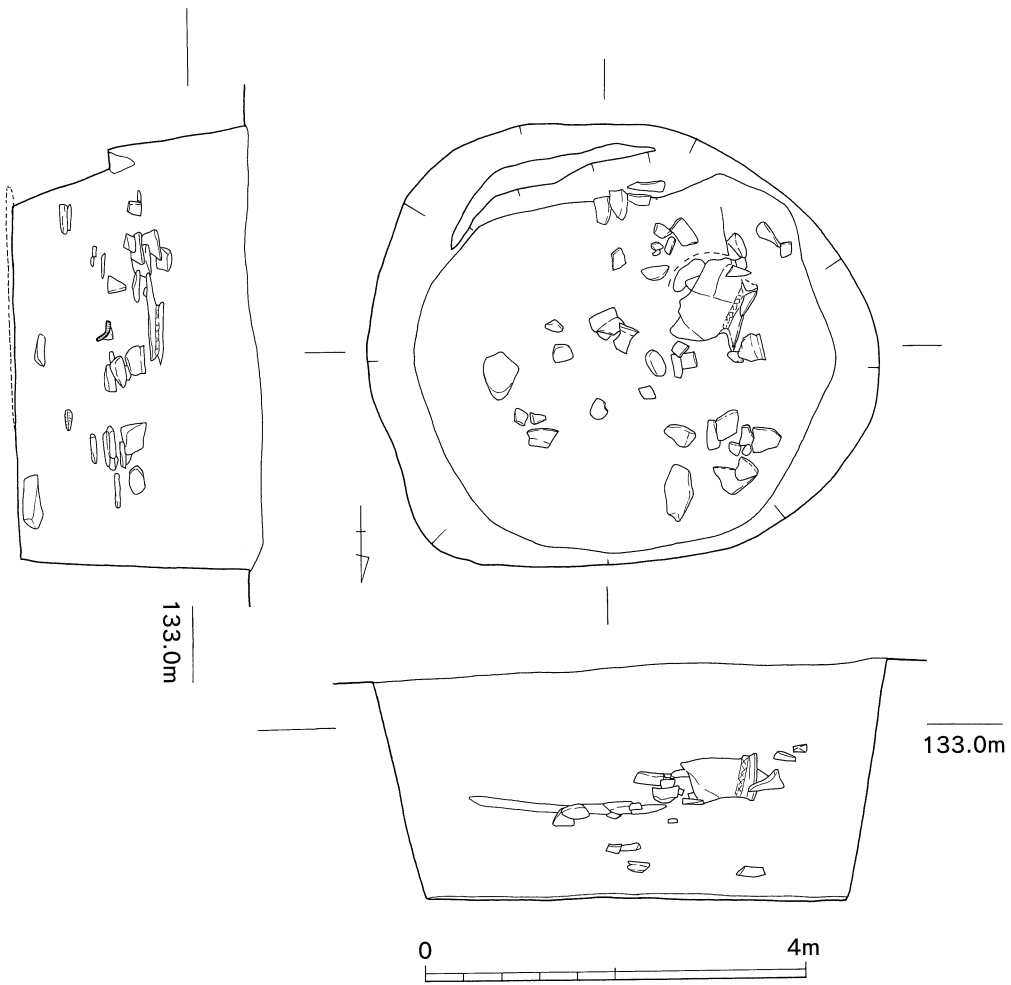
出土遺物は第221図に示した。1～3は複合口縁壺である。口縁部の立ち上がりが高く、やや内傾している。いずれも口縁には2条の櫛描波状文が施されている。4・5は高坏である。坏部中央で大きく屈曲し、口縁は逆「ハ」の字状に長く延びる。6～12は甕である。



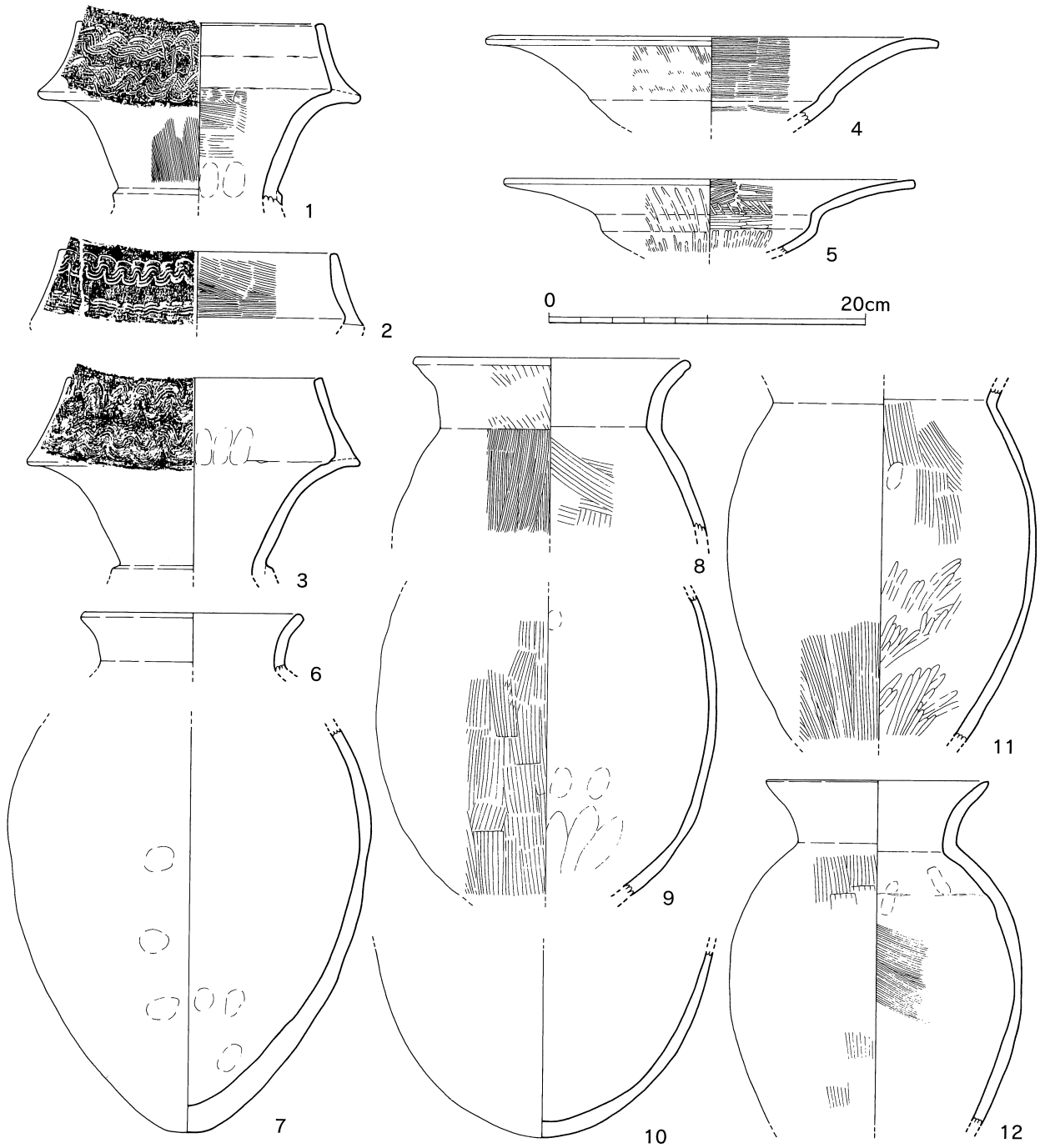
第218図 高添遺跡土木園地区1次調査区1号土坑実測図 (1/80)



第219図 高添遺跡土木園地区1次調査区1号土坑出土遺物実測図 (1/4・1/1)

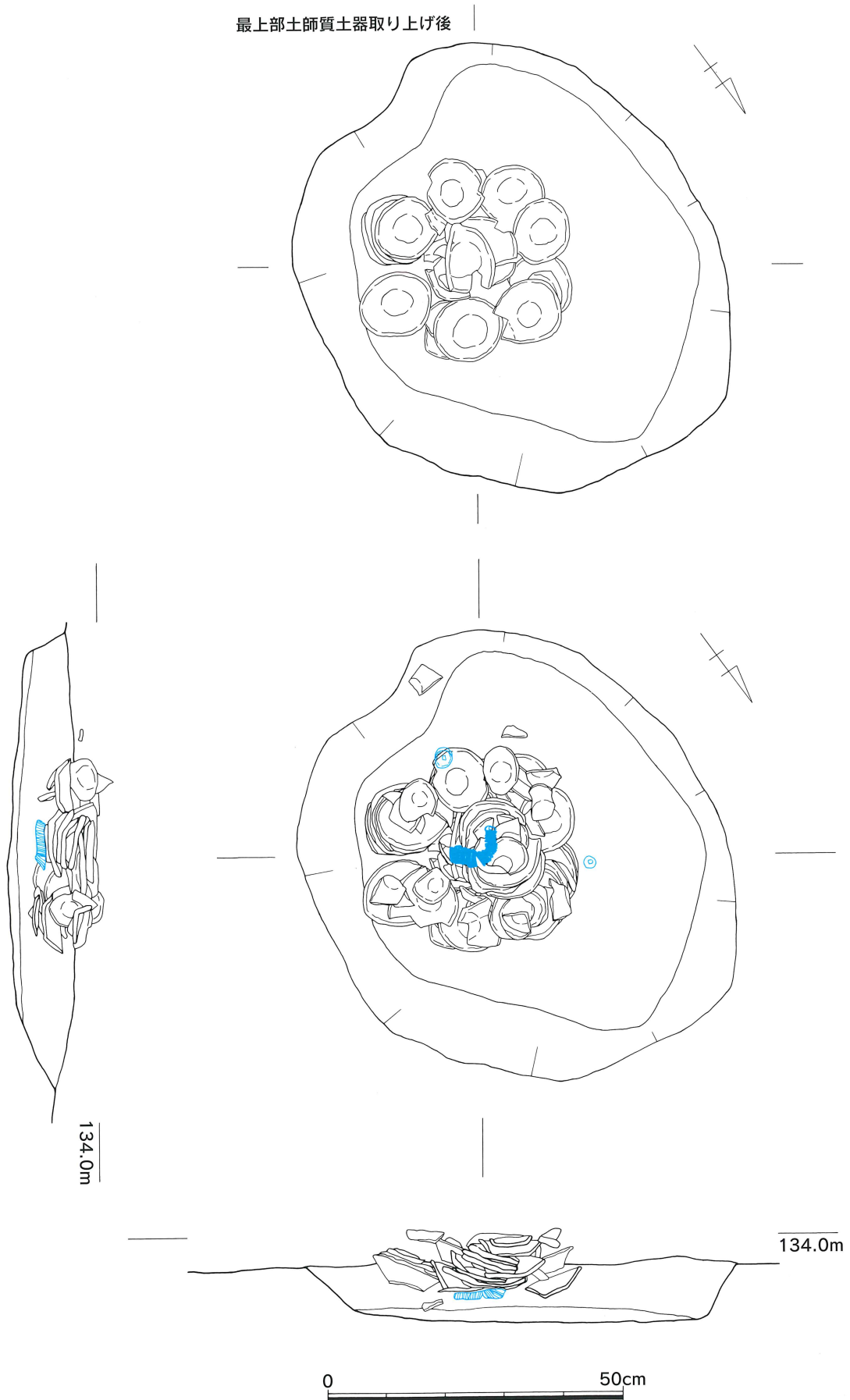


第220図 高添遺跡土木園地区1次調査区2号土坑実測図 (1/80)



第221图 高添遺跡土木園地区1次調査区2号土坑出土遺物実測図(1/4)

最上部土師質土器取り上げ後



第222図 高添遺跡土木園地区1次調査区3号土坑実測図(1/10)

3号土坑（第222図）

3号土坑は17号住居の南西側に位置する。平面は円形状を呈し、径約80cm、深さ約10cmを測る。検出面にて土坑の南東部分を中心に土師質土器小皿・坏が重なりいくつかのまとまりが確認できた。

土坑埋土は暗黒褐色土の単一層である。土器は総数56点出土しており、概ね口縁部を上にして正位置をとっており、伏せたものは少ない。土器のまとまりは、中心部に破片の坏を、その周りを完形の坏で整然と配置し（第222図の最上部土師質土器取り上げ後参照）、各々その上に小皿・坏を重ねている。なお土器埋置の始めの段階と比べると、検出面に上がるほど土器は整然と配置したものではなく、坏との間に小皿を差し込むものがみられる。

最上部土師質土器取り上げ後の、中心部に位置する坏の下面に緡銭が出土している（第222図、第226図）。緡銭は地山からは約5cm上にて出土している。緡銭は南方向に曲げられており、銭貨とともに有機質の紐が良好に遺存している。緡銭枚数は約87枚であり、銭貨の径は約2.1cmを測り、孔は四角形を呈する。緡銭の表に位置する銭貨の観察および、他の銭貨の径が同一であることから、銭種は無文銭とみられる。土層観察等から木質・炭化物は確認できなかったが、多量の土器、緡銭の意図的な埋置から地鎮め遺構と考えられる。

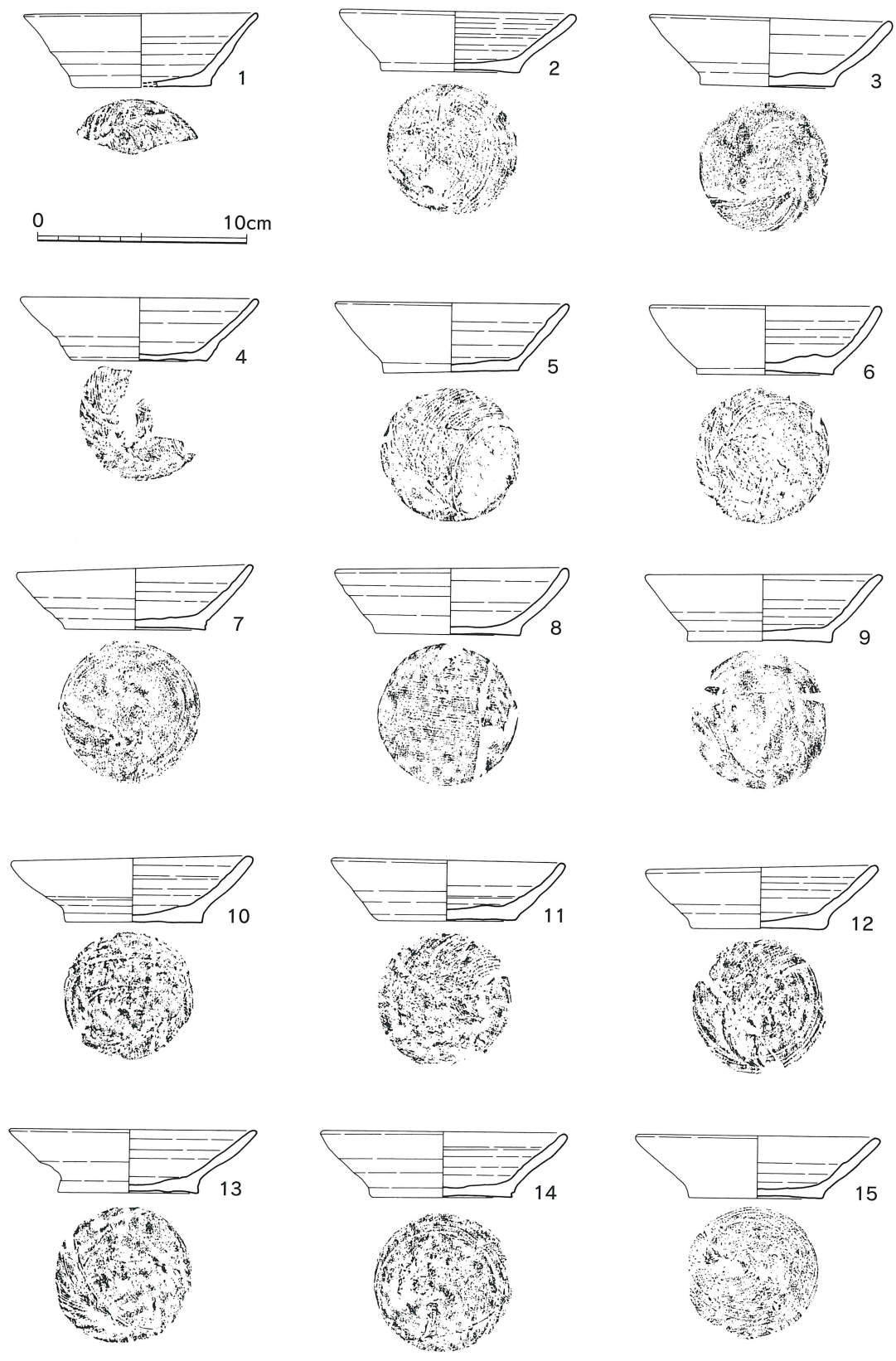
第223・224図は出土土器である。第223・224図は土師質土器坏で24点出土している。口径は10.7～11.5cmであり、平均口径11.1cmを測る。概ね橙褐色の色調を有し、ロクロ成形である。底部切り離しは糸切りで明瞭に残る。内面体部、外面体部下半はユビによる調整と考えられるロクロ成形痕が残る。また内底部には粘土紐の単位が渦巻き状に残るものもある。第223図8・11～15、第224図1・2・4～6・9は完形品である。

第225図は土師質土器小皿で32点出土している。口径は6.6～7.7cmであり、平均口径7.1cmを測る。概ね橙褐色の色調を有し、ロクロ成形である。底部切り離しは糸切りで明瞭に残る。内面体部はユビによる調整と考えられるロクロ成形痕が残る。内底部には粘土紐の単位が渦巻き状に残る。なお第225図4・15・18～20・28・29・

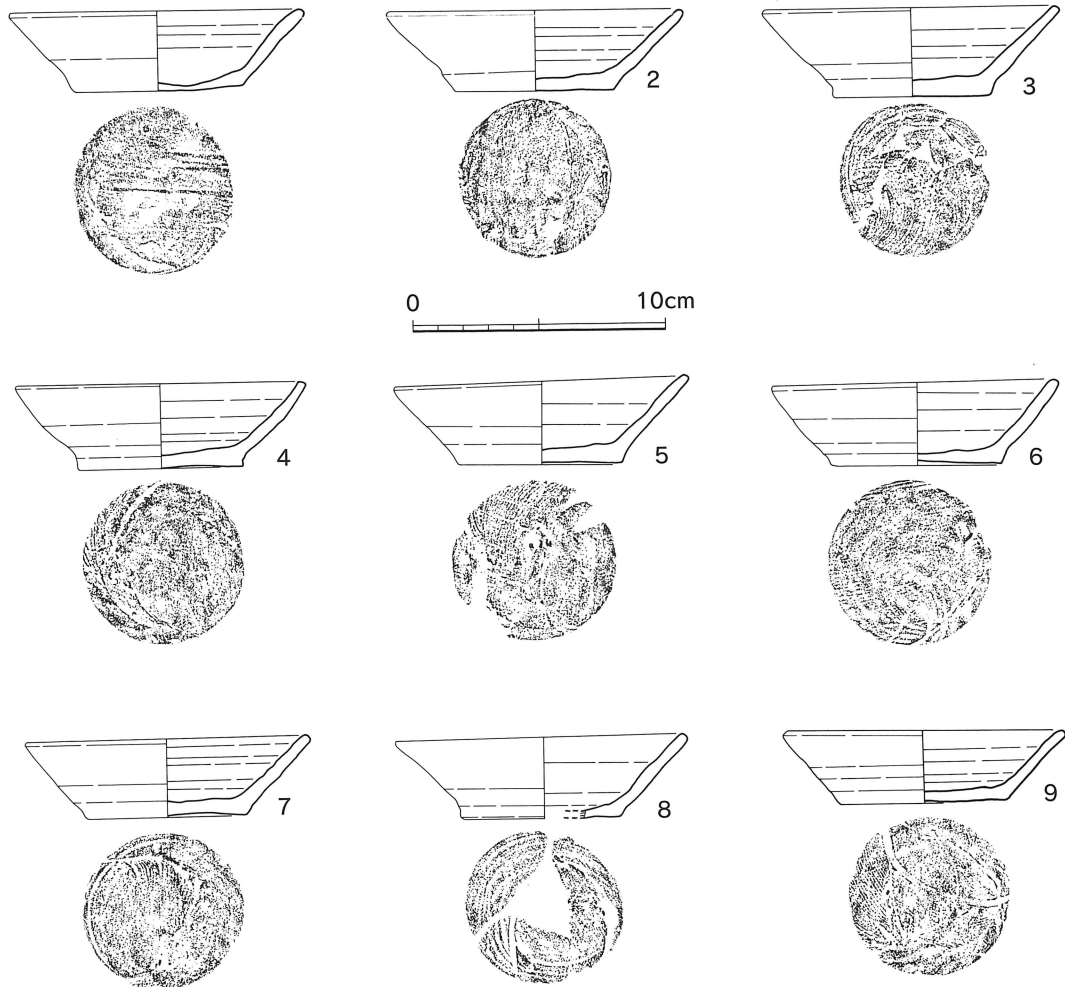
第4表 高添遺跡土木園地区1次調査区3号土坑出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	調整	胎土	色調	土器分類	備考
223図1	土師質土器坏	(11.0)	3.5	(6.6)	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・石英・赤色粒微量	にぶい黄橙褐色	坏2a類	板状圧痕残る
223図2	土師質土器坏	11.0	2.9	6.5	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・赤色粒微量	橙色～明黄褐色	坏2b類	
223図3	土師質土器坏	11.4	3.3	6.3	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・白色粒微量	明黄褐色～橙色	坏2b類	板状圧痕残る
223図4	土師質土器坏	(11.3)	3.0	6.4	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	石英・角閃石微量	橙色	坏1類	
223図5	土師質土器坏	(11.0)	3.3	6.4	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・角閃石微量	橙色	坏2b類	
223図6	土師質土器坏	(10.8)	3.4	(6.4)	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色～明黄褐色	坏2a類	板状圧痕残る
223図7	土師質土器坏	(11.2)	3.2	6.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	にぶい黄橙褐色	坏2a類	板状圧痕残る
223図8	土師質土器坏	10.8	3.3	6.8	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・角閃石微量	黄橙色～橙色	坏2b類	完形品、板状圧痕残る
223図9	土師質土器坏	11.1	3.2	6.8	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色	坏2a類	板状圧痕残る
223図10	土師質土器坏	11.2	3.2	6.5	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・角閃石微量	橙色	坏2b類	板状圧痕残る
223図11	土師質土器坏	10.8	3.0	6.5	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・赤色粒少量	淡黄橙色～橙色	坏1類	完形品、板状圧痕残る
223図12	土師質土器坏	10.8	3.1	6.3	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・赤色粒微量	橙色	坏2b類	完形品
223図13	土師質土器坏	11.5	3.05	6.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	坏2a類	完形品
223図14	土師質土器坏	11.5	3.2	6.6	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・赤色粒微量	橙色	坏2b類	完形品
223図15	土師質土器坏	11.4	3.0	6.3	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・角閃石微量	橙色	坏2b類	完形品
224図1	土師質土器坏	11.4	3.2	6.6	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	石英・角閃石微量、赤色粒少量	橙色	坏2b類	完形品、板状圧痕残る
224図2	土師質土器坏	11.5	3.2	6.2	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色～明黄褐色	坏2a類	完形品
224図3	土師質土器坏	11.4	3.55	6.2	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色～明黄褐色	坏2a類	

挿図番号	器種	口径	器高	底径	調整	胎土	色調	土器分類	備考
224図4	土師質土器杯	10.9	3.4	6.4	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・角閃石微量、赤色粒少量	橙色	坏2b類	完形品
224図5	土師質土器杯	11.3	3.5	6.3	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・赤色粒微量	橙色～にぶい黄 橙色	坏2b類	完形品
224図6	土師質土器杯	10.9	3.4	6.6	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色～にぶい黄 橙色	坏2a類	完形品
224図7	土師質土器杯	10.9	3.1	6.3	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	坏1類	
224図8	土師質土器杯	11.1	3.3	(6.1)	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・角閃石微量	橙色～にぶい黄 橙色	坏2b類	
224図9	土師質土器杯	10.7	2.95	6.6	ロクロ成形、内外面ヨコナデ、内底部ナデ	長石・角閃石・石英微量	橙色～明黄褐色	坏1類	完形品
225図1	土師質土器小皿	7.2	1.55	5.0	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・石英微量、赤色粒少量	橙色	小皿1類	板状圧痕残る
225図2	土師質土器小皿	7.1	1.55	4.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・石英・赤色粒微量	橙色	小皿2類	板状圧痕残る
225図3	土師質土器小皿	7.0	1.5	5.0	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石・赤色粒微量	橙色	小皿3類	
225図4	土師質土器小皿	7.1	1.45	5.0	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・石英・角閃石微量	橙色	小皿2類	完形品
225図5	土師質土器小皿	(6.4)	1.6	(4.6)	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色	小皿3類	
225図6	土師質土器小皿	(7.3)	1.75	(5.1)	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色	小皿3類	
225図7	土師質土器小皿	7.5	1.7	4.9	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	小皿1類	
225図8	土師質土器小皿	(7.2)	1.6	4.6	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	石英・角閃石微量	橙色	小皿3類	
225図9	土師質土器小皿	7.0	1.5	4.6	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	小皿2類	
225図10	土師質土器小皿	7.7	1.5	5.1	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	石英・赤色粒微量	橙色	小皿1類	
225図11	土師質土器小皿	7.6	1.6	4.9	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	石英・赤色粒微量	橙色	小皿3類	
225図12	土師質土器小皿	(6.8)	1.5	4.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色	小皿2類	
225図13	土師質土器小皿	7.0	1.9	5.0	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色	小皿2類	
225図14	土師質土器小皿	7.5	1.7	4.9	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	小皿2類	
225図15	土師質土器小皿	6.8	1.7	4.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	小皿3類	完形品
225図16	土師質土器小皿	7.0	1.8	4.9	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	小皿3類	
225図17	土師質土器小皿	7.3	1.7	5.0	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色～にぶい黄 橙色	小皿3類	
225図18	土師質土器小皿	7.1	1.5	5.0	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	小皿3類	完形品
225図19	土師質土器小皿	7.1	1.7	4.6	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・石英・角閃石微量	橙色～明黄褐色	小皿3類	完形品
225図20	土師質土器小皿	7.2	1.7	4.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	小皿2類	完形品
225図21	土師質土器小皿	6.9	1.8	4.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色～明黄褐色	小皿3類	板状圧痕残る
225図22	土師質土器小皿	7.3	1.6	4.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色	小皿2類	
225図23	土師質土器小皿	7.0	1.7	4.8	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石・赤色粒微量	橙色～にぶい黄 橙色	小皿3類	
225図24	土師質土器小皿	7.0	1.3	5.3	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石微量	橙色～にぶい赤 褐色	小皿1類	
225図25	土師質土器小皿	6.7	1.6	4.5	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色	小皿2類	
225図26	土師質土器小皿	6.9	1.45	5.4	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石微量・赤色粒少量	橙色	小皿1類	
225図27	土師質土器小皿	7.4	1.6	4.9	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石・赤色粒微量	橙色	小皿2類	
225図28	土師質土器小皿	6.6	1.6	4.6	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色	小皿3類	完形品
225図29	土師質土器小皿	7.1	1.6	4.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・石英微量	橙色	小皿2類	完形品
225図30	土師質土器小皿	6.8	1.6	4.8	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色～明黄褐色	小皿2類	
225図31	土師質土器小皿	7.1	1.5	4.8	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・赤色粒微量	橙色	小皿1類	
225図32	土師質土器小皿	6.9	1.7	4.7	ロクロ成形、内外面ヨコナデ	長石・角閃石・赤色粒微量	橙色	小皿3類	完形品



第223图 高添遺跡土木園地区1次調査区3号土坑出土遺物実測図① (1/3)



第224図 高添遺跡土木園地区1次調査区3号土坑出土遺物実測図② (1/3)

32は完形品である。3号土坑の詳細は観察表・まとめを参照されたい。

(山本哲也)

調査区一括出土遺物 (第227~238図)

高添遺跡土木園地区1次調査区から出土した遺物は第227~238図に示した。

第227~238図は調査区の表土や遺構検出中、あるいは遺構中から出土しているものの、明らかに遺構の帰属時期とは異なるものをまとめたものである。

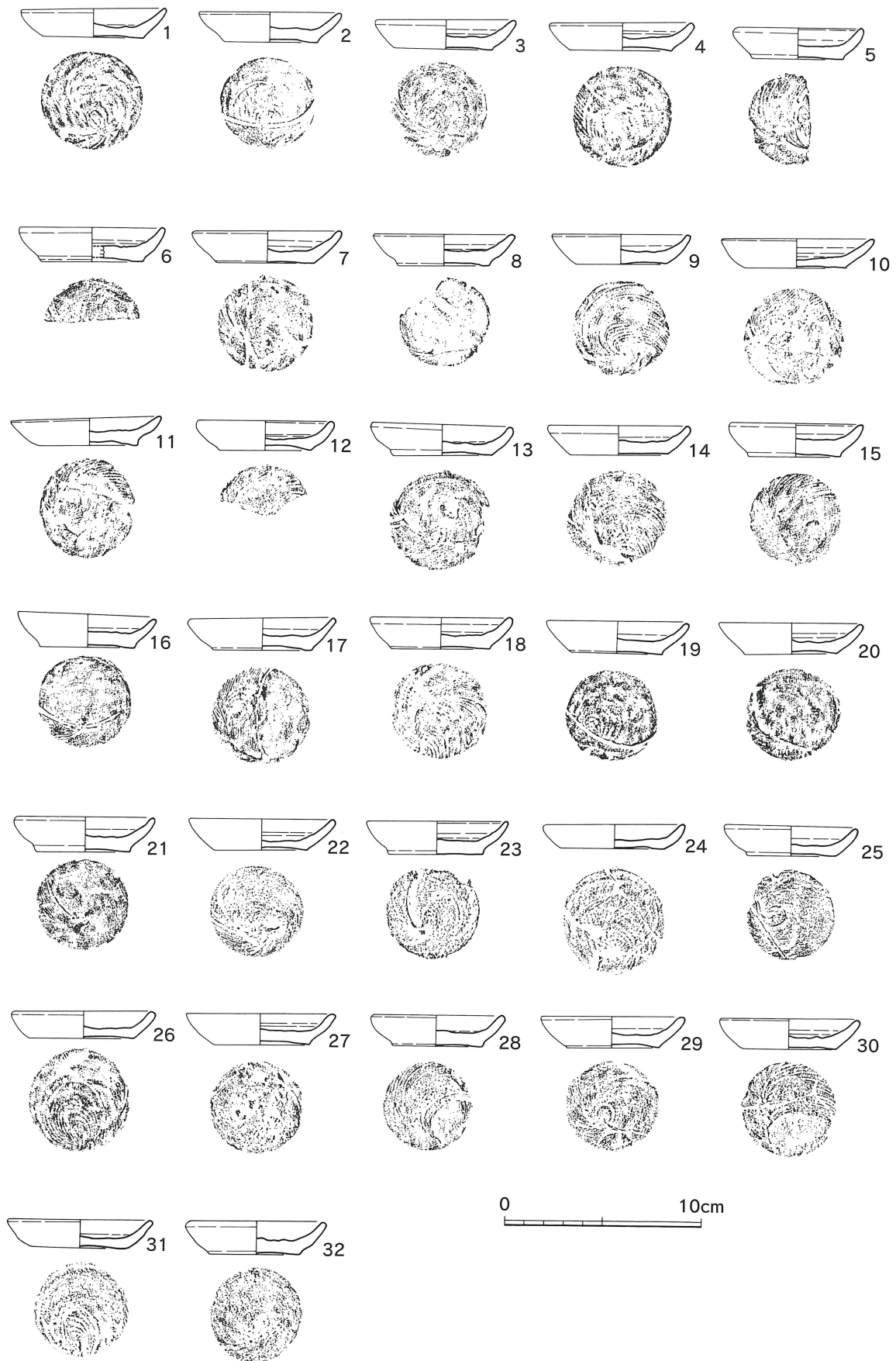
第227図は縄文土器である。1~3は無文土器の口縁部片である。4は「く」の字状に折れる口縁をもち、口唇部にキザミ目を入れ、口縁にナナメのヘラ描き沈線を入れる。塞ノ神式土器であろうか。5~9は深鉢であり、口縁外面付近に突帯が巡らされているが、7にのみ突帯にキザミ目がみられる。10には外傾する口縁端部が内傾して肥厚し、その外面を沈線と磨消縄文による文様帯としている。11は外傾する口縁端部を内傾して、その外面を平行沈線と磨消縄文による文様帯としている。12・13は底部片である。

第228・229図は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。第228図は甕である。第229図1~5は複合口縁壺である。7・8は高坏である。6は長頸壺、9は壺、11は小型壺である。10は小型鉢であろう。

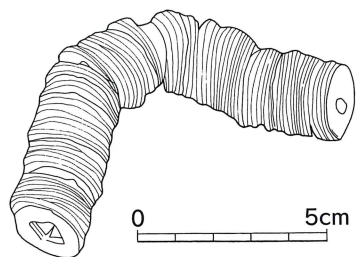
第230図はいずれも流紋岩の剥片である。

第231図1はチャート製の縦長剥片であり、2次加工が施されている。第231図2は流紋岩製のナイフ形石器である。第231図3は流紋岩の細石核である。

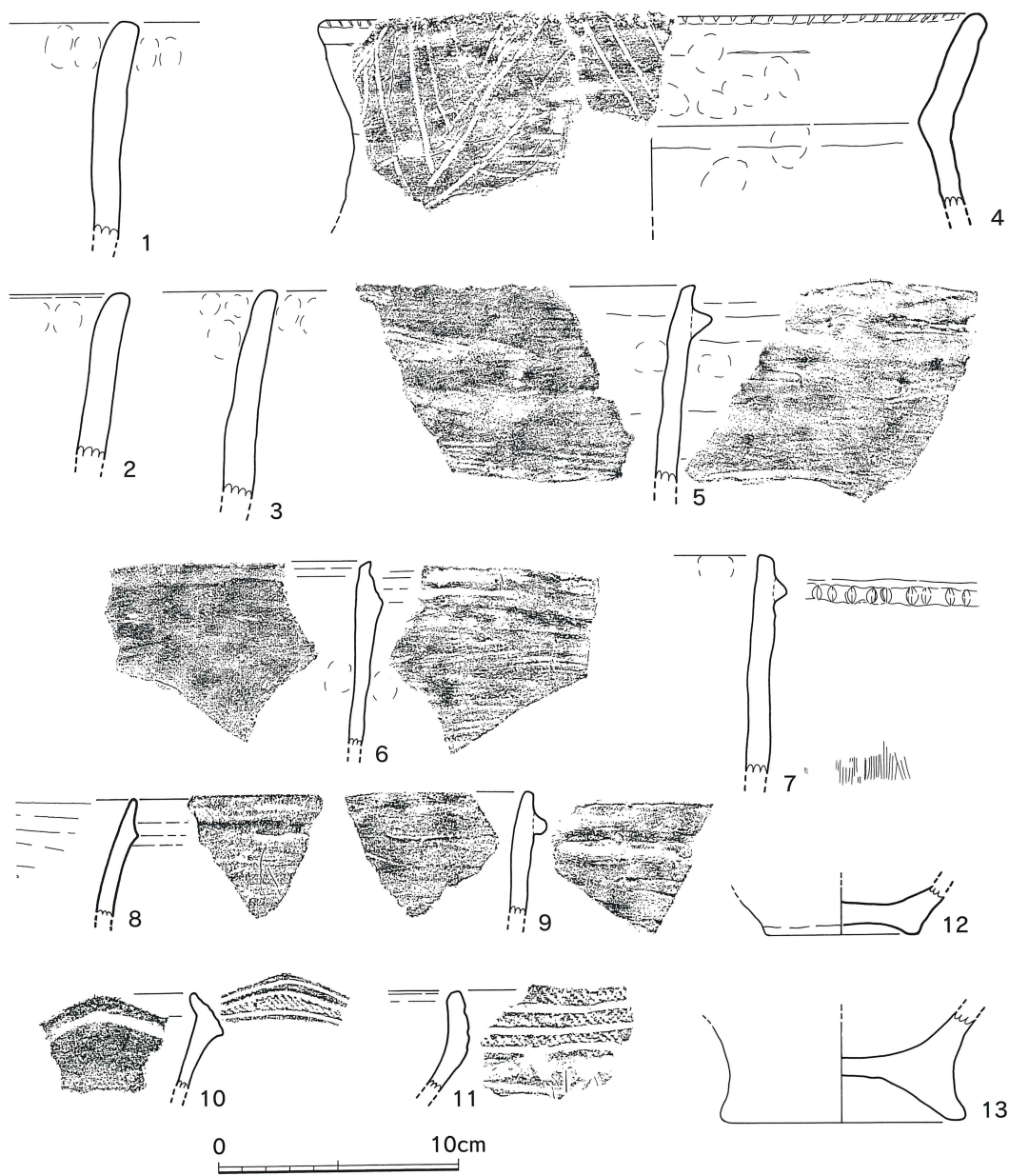
第232図は石鏃である。1・2・8・12・13・15・16・17・19・21は姫島産黒曜石製、3・4・5・10・11・20はチャート製、6・7・9・14・22・23は金山産サヌカイト製、18はサヌカイト製、24は角閃安山岩、25は腰



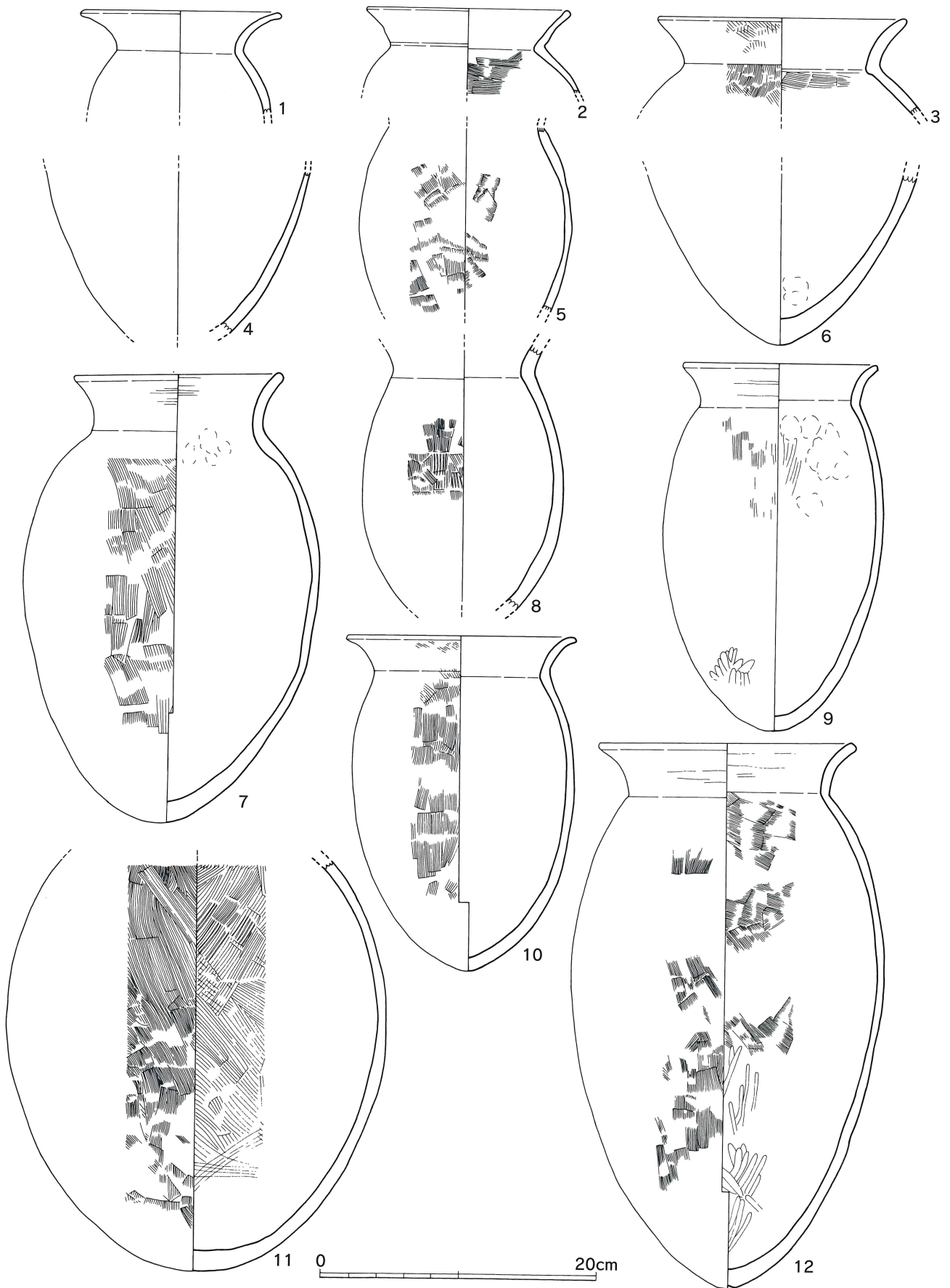
第225图 高添遺跡土木園地区1次調査区3号土坑出土遺物実測図③ (1/3)



第226图 高添遺跡土木園地区1次調査区3号土坑出土遺物実測図④ (1/2)



第227图 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図① (1/3)



第228图 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図② (1/4)

岳産黒曜石製である。17～19、21～23のように基部が平坦や挟りが浅いものもみられる。また、側縁が直線的にのびるものが多いが、3・9・14のようにやや膨らませるものもみられる。8のように側縁が直線的に延びながら基部付近で幅広に屈曲させる形態もみられる。

第233図1・6は姫島産黒曜石の、4は金山産サヌカイトの削器である。第233図2はチャートである。用途は明らかでないが、2次加工が施されている。第233図3は姫島産黒曜石の石核である。第233図5は珪質頁岩の剥片である。第233図7は頁岩製のドリルであるが、両側が欠損している。第233図8・9は姫島産黒曜石の、11は金山産サヌカイトの石匙である。第233図10は姫島産黒曜石の削器である。

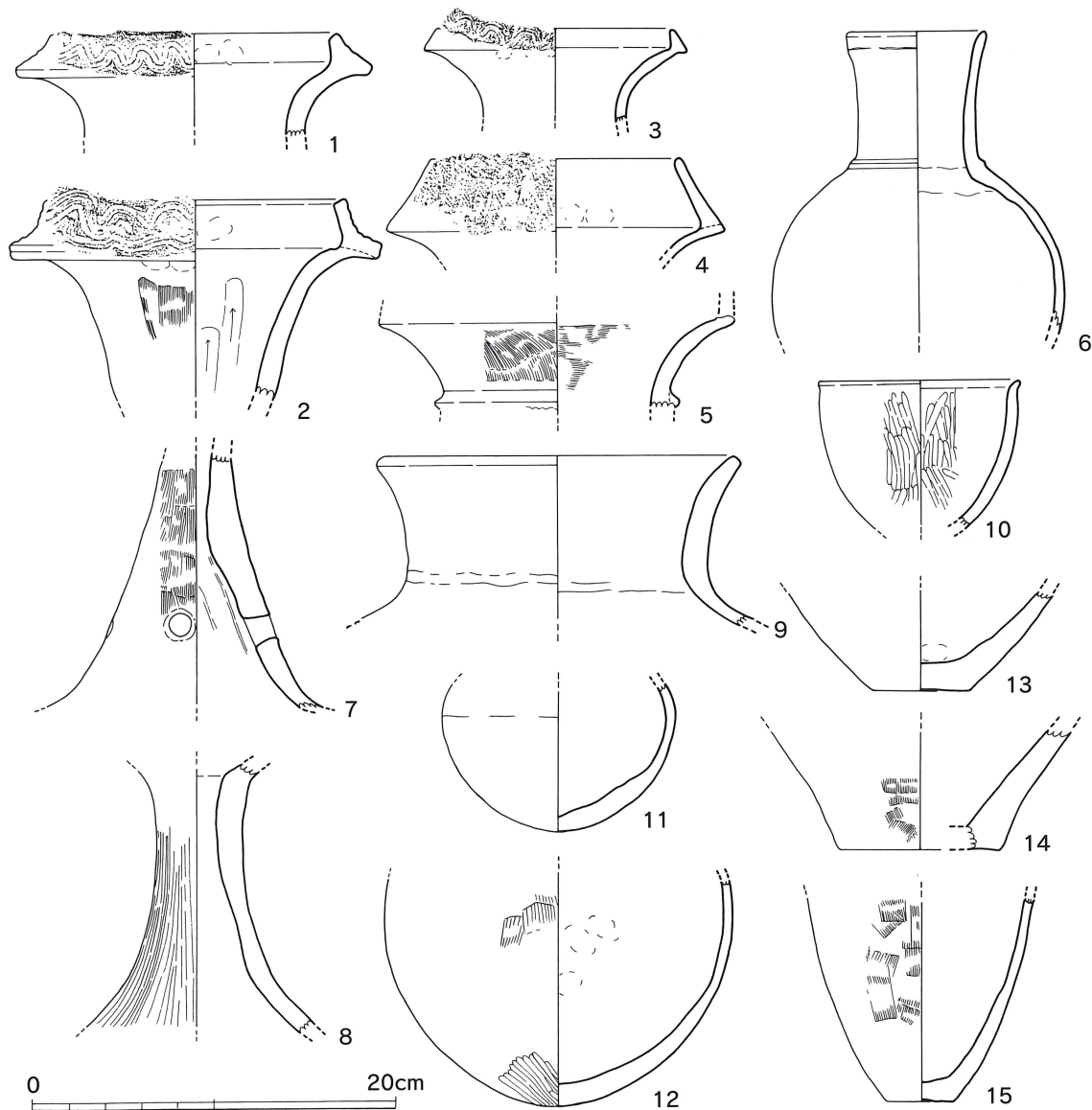
第234図1～4は長楕円形の川原石を利用した切目石錘であり、5・6は扁平な川原石を利用して両端を打ち欠いた石錘である。7は敲石である。8～11は扁平打製石斧である。12は砥石である。

第235図は扁平な川原石を利用し、表裏面および側縁の一面を砥面とした石皿である。

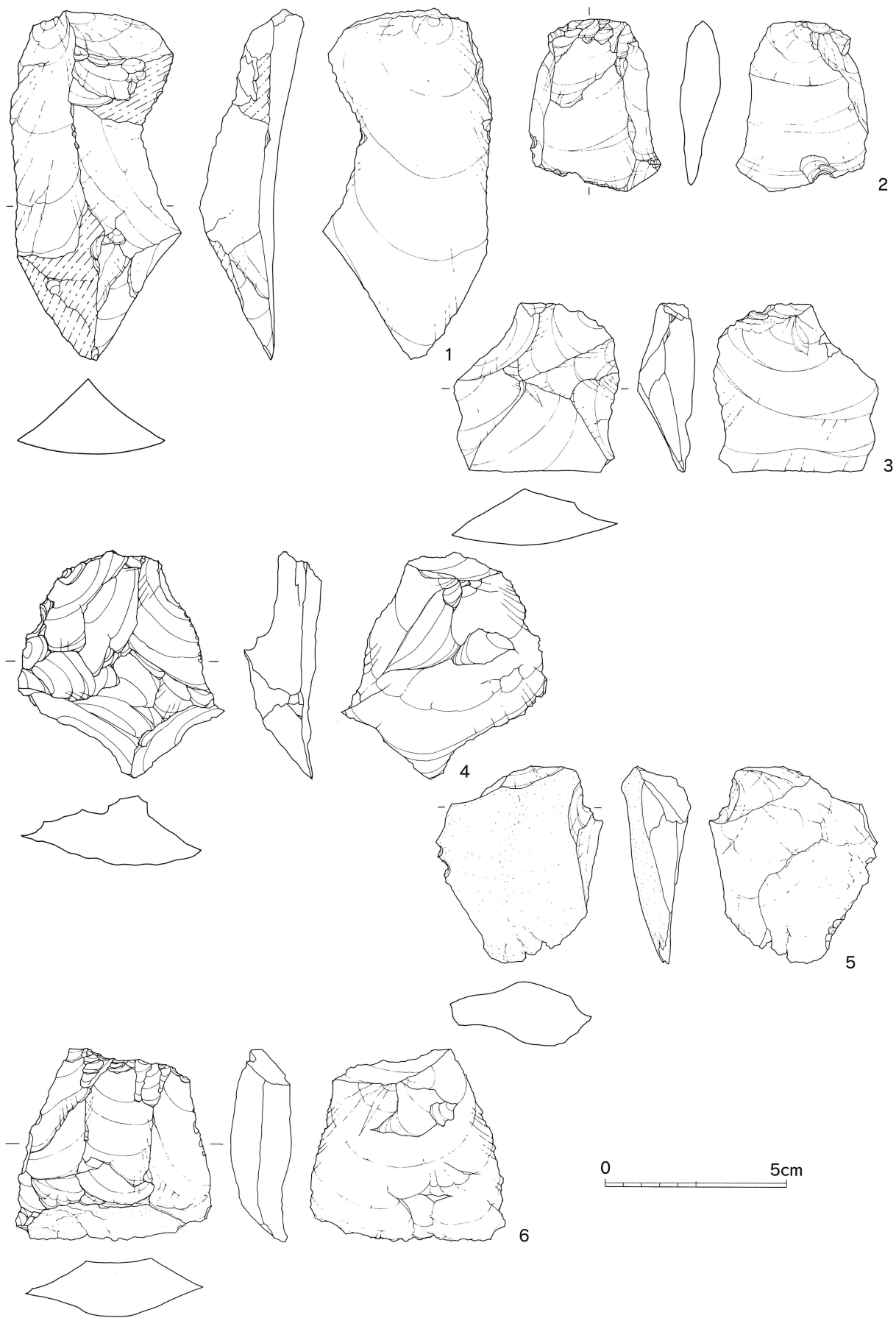
第236図は磨製石鏃である。

第237図は縦4.2cm、横2.3cm、厚さ1.5cmを測る翡翠製の獣形勾玉である。

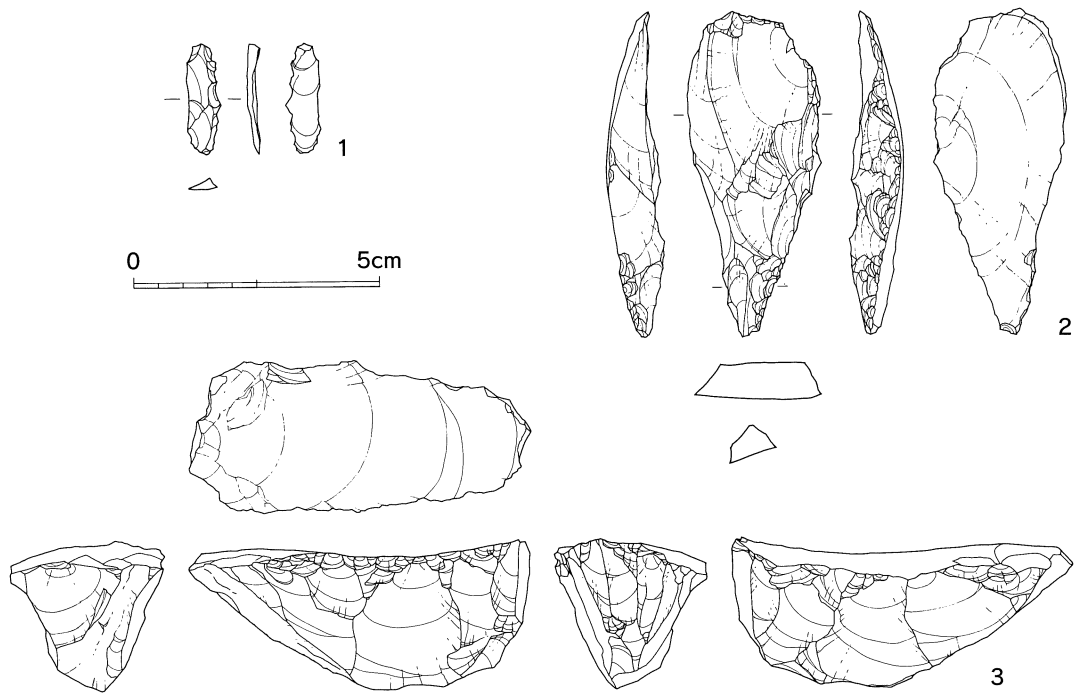
第238図は長さ27cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmを測る鉄製短刀である。



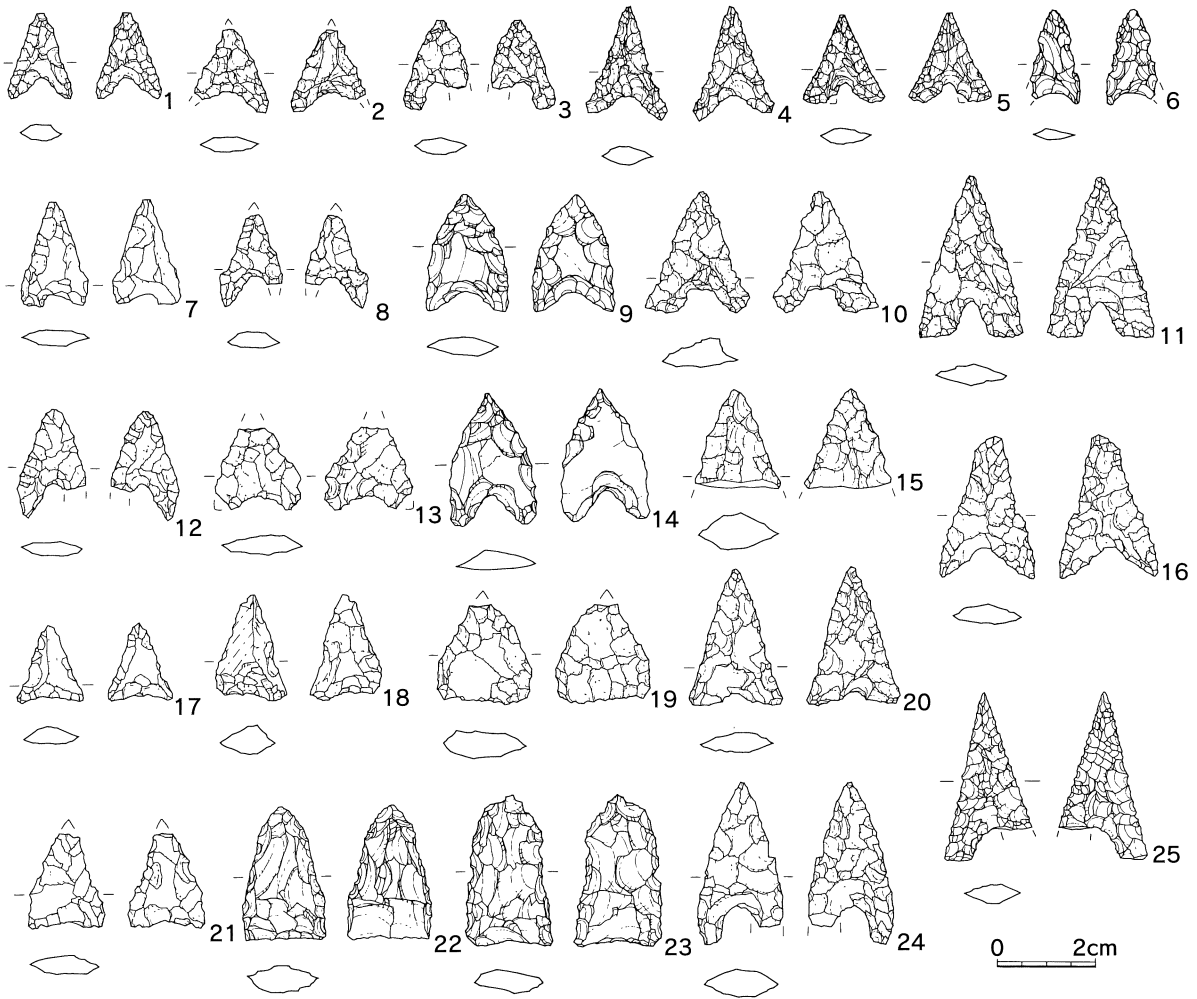
第229図 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図③ (1/4)



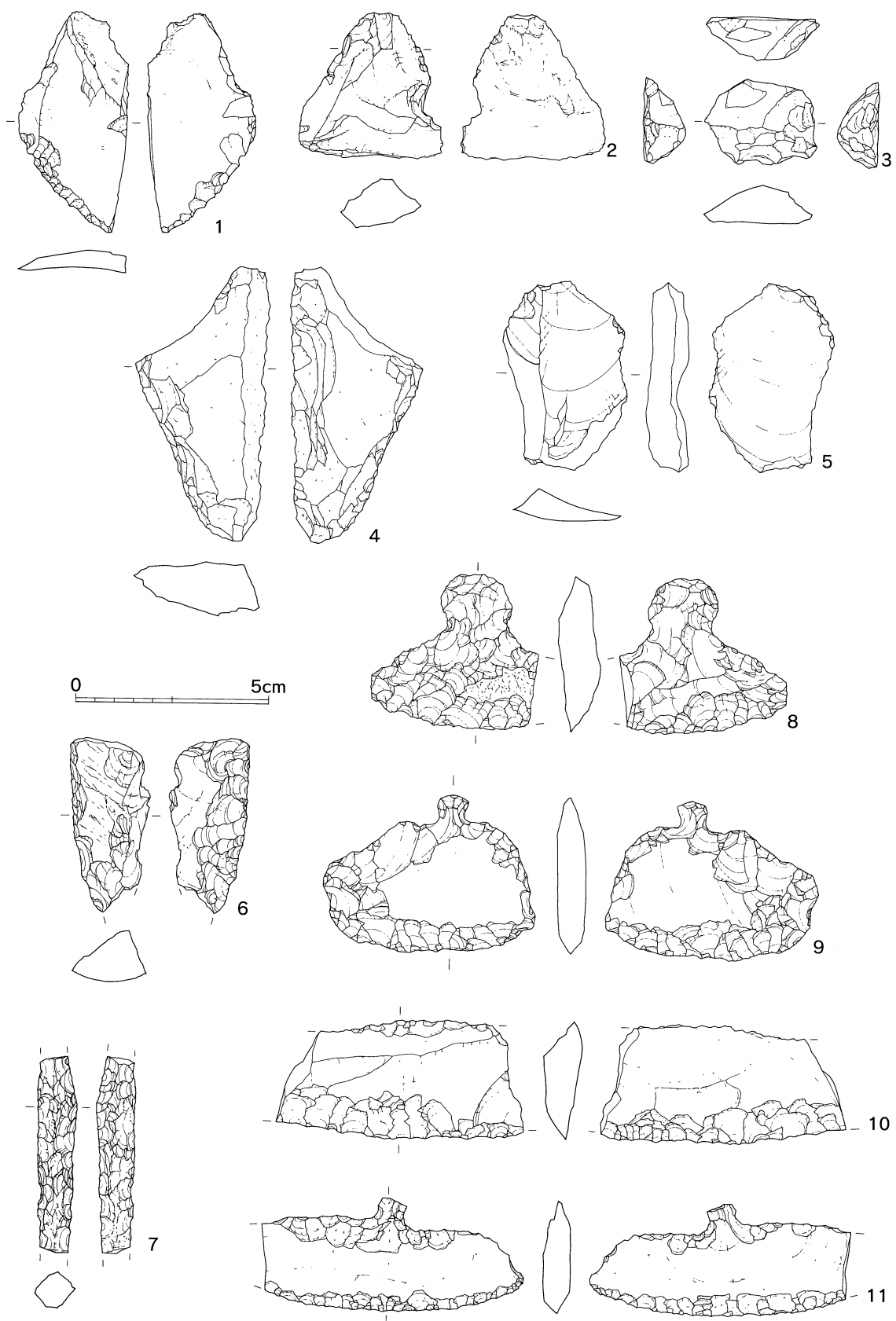
第230図 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図④ (2/3)



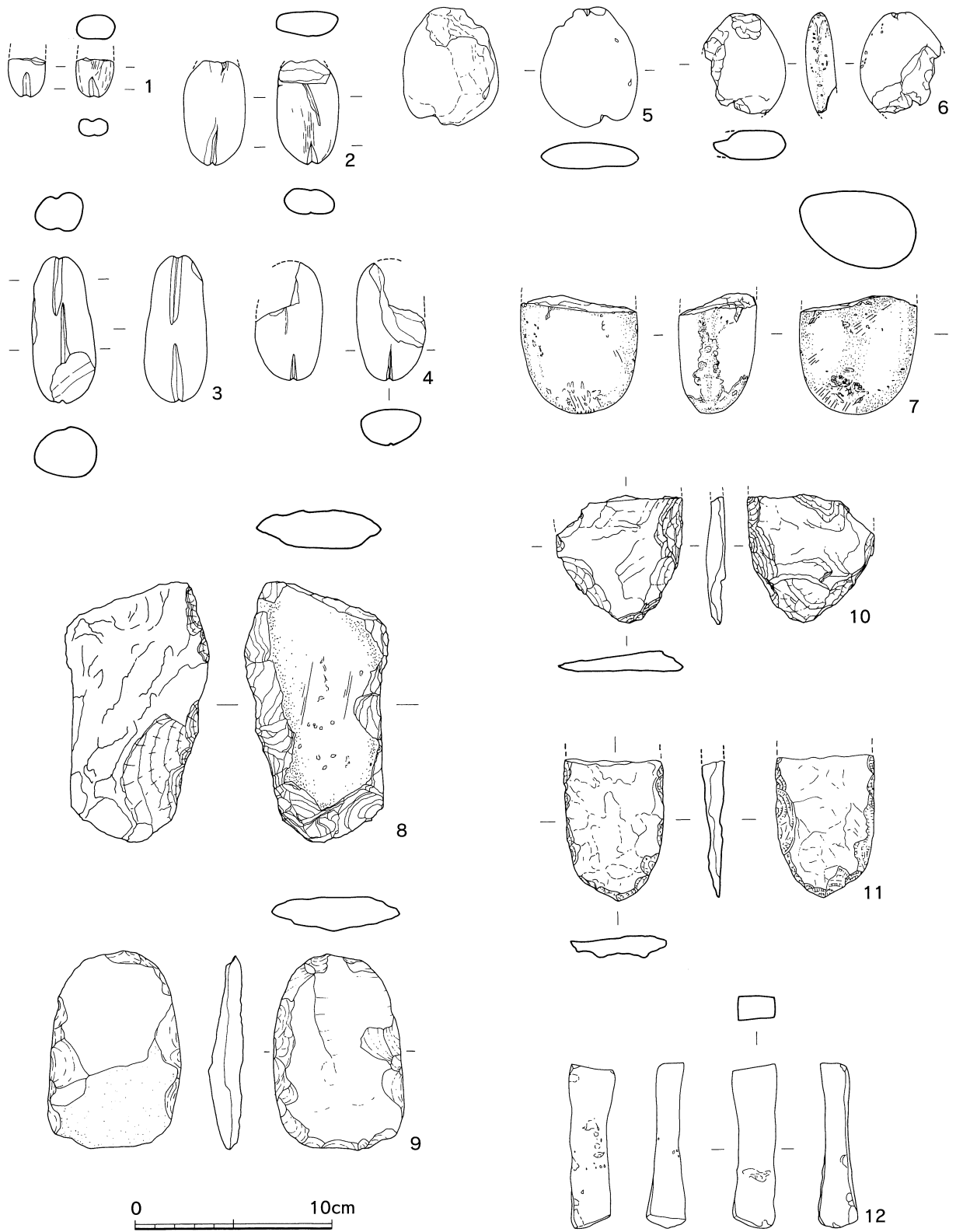
第231图 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図⑤ (2/3)



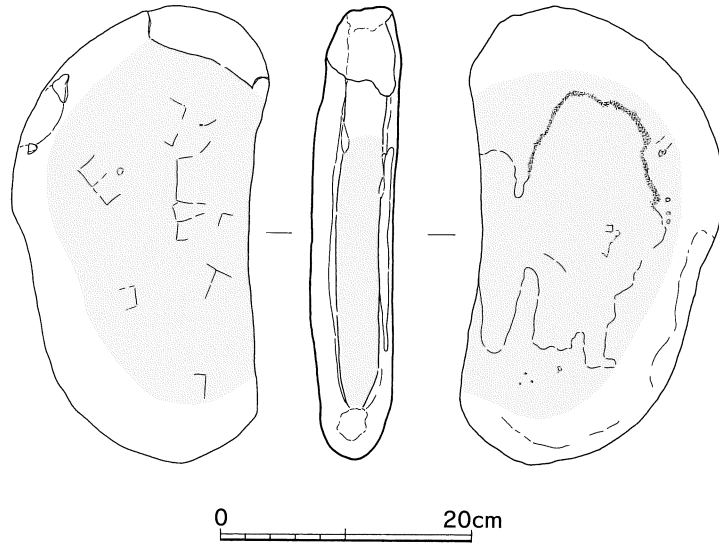
第232图 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図⑥ (2/3)



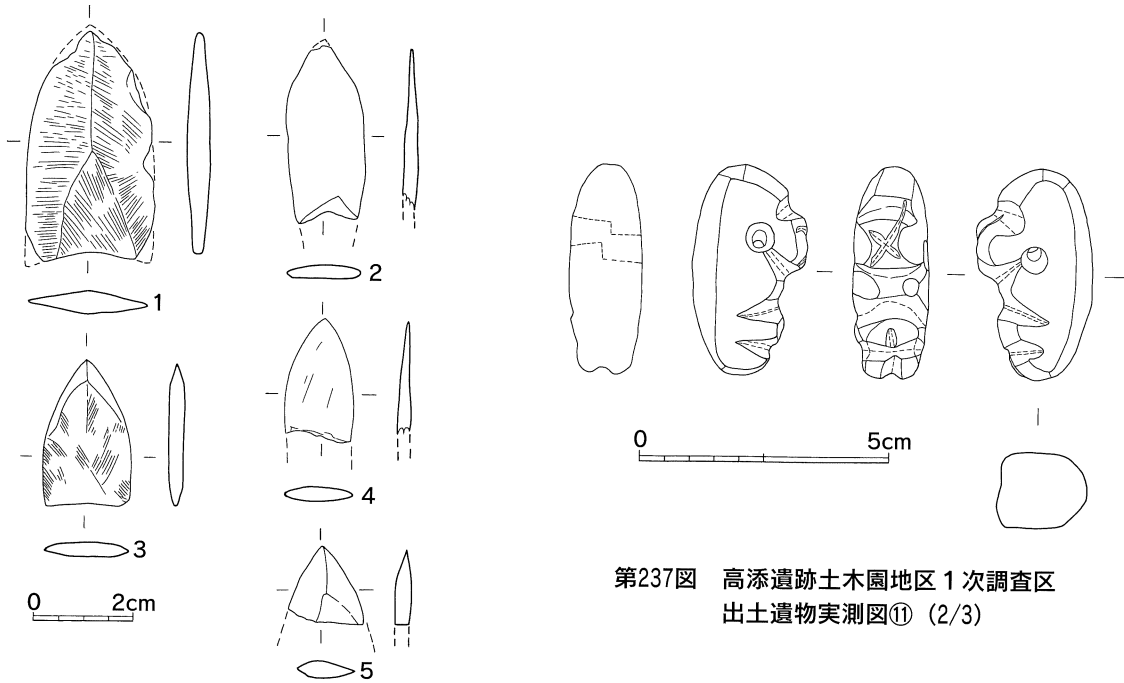
第233図 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図⑦ (2/3)



第234図 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図⑧ (1/3)

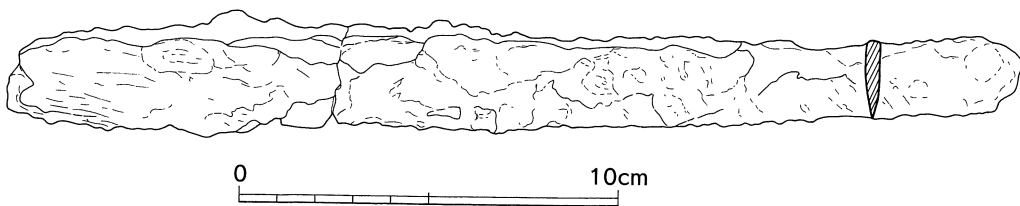


第235图 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図⑨ (1/6)



第237图 高添遺跡土木園地区1次調査区
出土遺物実測図⑪ (2/3)

第236图 高添遺跡土木園地区1次調査区
出土遺物実測図⑩ (2/3)



第238图 高添遺跡土木園地区1次調査区出土遺物実測図⑫ (1/2)



第239図 高添遺跡土木園地区2次調査区遺構配置図 (1/200)

第239図 高家遺跡土木園地区2次調査区遺構配置図 (1/200)



第4節 土木園地区2次調査区

1 調査の概要

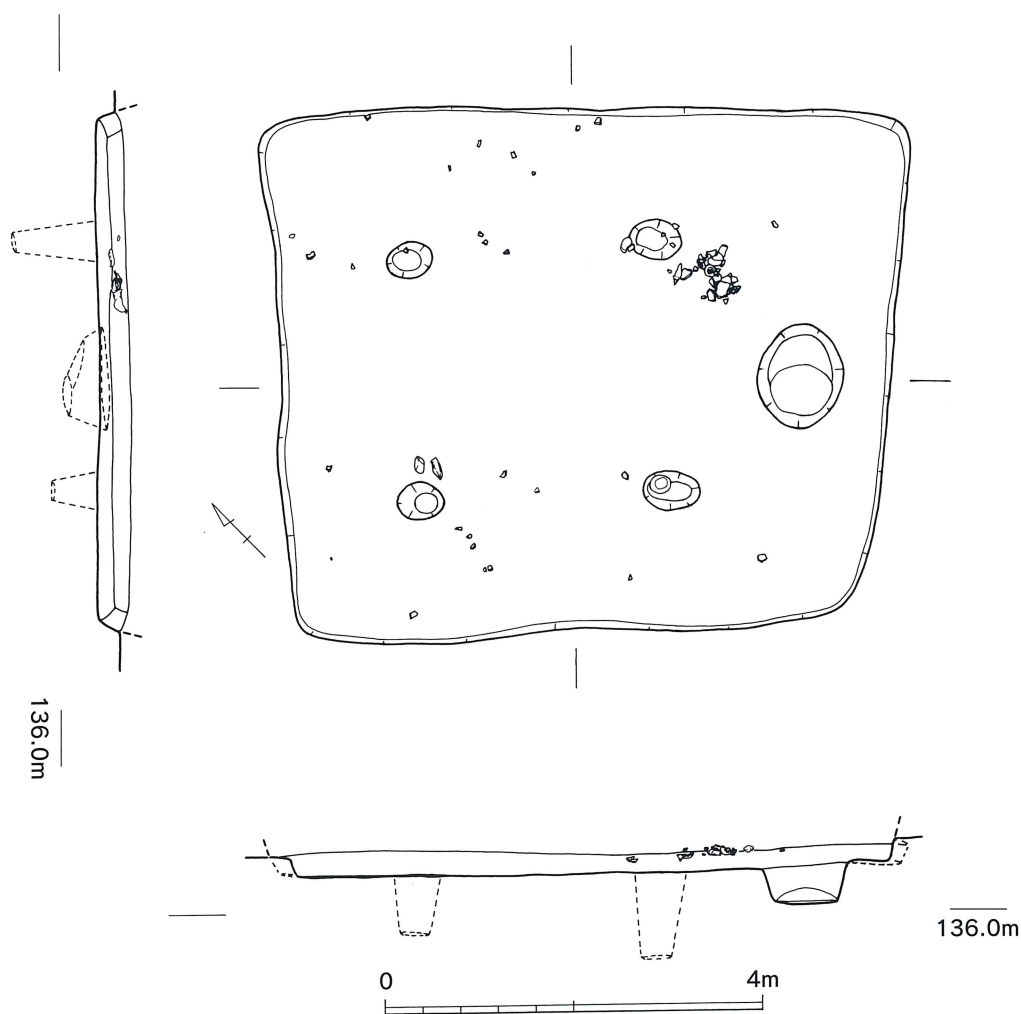
土木園地区2次調査区は大分県豊後大野市千歳町長峰字土木園（旧大野郡千歳村大字長峰字土木園）に所在し、高添台地上に位置する高添遺跡の南西端にあたる。遺跡の内容として、弥生時代後期～古墳時代前期や中世の遺構群が主体であり、このほかにも旧石器時代・縄文時代の遺物も確認できる。これまでの調査では昭和61年に大野川中央地区畑地帯総合改良事業に伴う試掘調査で、今回の発掘調査区の北東側の位置において弥生時代終末の竪穴住居跡を検出しており、遺構群の存在はかねてより確認されていた。今回の発掘調査における成果として、弥生時代後期～古墳時代前期の方形竪穴住居跡をはじめ、中世の掘立柱建物群・土坑・地下式墳などの遺構群が検出されている。

発掘調査は、平成15年4月から平成15年8月まで5ヶ月間、実施した。

2 遺構と遺物

1号竪穴（第240図）

調査区の東端において確認された方形竪穴住居である。ほぼ完存しており、6.4×5.6mの正方形に近い平面形を呈するものである。柱穴は4本柱であり、南東側の2本の柱穴の外側に長軸1.1m、短軸0.9m、深さ40cm程度の楕円形を呈する浅い土坑が確認できた。



第240図 高添遺跡土木園地区1次調査区1号竪穴実測図（1/80）

第5表 高添遺跡土木園地区2次調査区遺構一覧表

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の時期	特記事項	掲載頁
1号竪穴	1号住居	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代初頭		185
2号竪穴	2号住居	竪穴住居	古墳時代前葉		187
3号竪穴	3号住居	竪穴住居	古墳時代前葉		187
4号竪穴	4号住居	竪穴住居	古墳時代前葉		187
1号土坑	S1	土坑	16世紀中葉		191
2号土坑	土器埋納遺構	土坑	15世紀前葉		191
1号掘立柱建物	S002	掘立柱建物	近世		196
2号掘立柱建物	S003	掘立柱建物	近世		196
3号掘立柱建物	S004	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		200
4号掘立柱建物	S005	掘立柱建物	15世紀前葉～近世	庇付きか?	201
5号掘立柱建物	S006	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		202
6号掘立柱建物	S007	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		202
7号掘立柱建物	S008	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		202
8号掘立柱建物	S009	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		203
9号掘立柱建物	S010	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		204
10号掘立柱建物	S011	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		204
11号掘立柱建物	S012	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		204
12号掘立柱建物	S013	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		204
13号掘立柱建物	S014	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		205
14号掘立柱建物	S015	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		205
15号掘立柱建物	S016	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		205
16号掘立柱建物	S017	掘立柱建物	近世	寛永通寶出土	205
17号掘立柱建物	S018	掘立柱建物	近世		206
18号掘立柱建物	S019	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		206
19号掘立柱建物	S020	掘立柱建物	近世		206
20号掘立柱建物	S021	掘立柱建物	近世		206
21号掘立柱建物	S022	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		206
22号掘立柱建物	S023	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		207
23号掘立柱建物	S024	掘立柱建物	近世		207
24号掘立柱建物	S025	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		207
25号掘立柱建物	S026	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		207
26号掘立柱建物	S027	掘立柱建物	近世		208
27号掘立柱建物	S028	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		208
28号掘立柱建物	S029	掘立柱建物	近世		210
29号掘立柱建物	S031	掘立柱建物	近世		210
30号掘立柱建物	S032	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		210
31号掘立柱建物	S033	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		210
32号掘立柱建物	S034	掘立柱建物	15世紀前葉～近世		210
1号柵列	S030	柵列	15世紀前葉～近世		218
1号地下式墳	SX01	地下式墳	15世紀末～16世紀初		220
2号地下式墳	SX02	地下式墳	16世紀前葉		220
3号地下式墳	SX03	地下式墳	15世紀末～16世紀前葉		220
4号地下式墳	SX04	地下式墳	15世紀末～16世紀初		224
5号地下式墳	SX05	地下式墳	16世紀中葉		225
6号地下式墳	SX06	地下式墳	16世紀中葉		230
1号溝	SD01	溝	近世		235
2号溝	SD03	溝	近世		235
3号溝	SD04	溝	近世		237
1号ピット	P-91	ピット	弥生時代後期後葉～古墳時代前葉		238
2号ピット	P-82	ピット	弥生時代後期後葉～古墳時代前葉		238
3号ピット	P-81	ピット	弥生時代後期後葉～古墳時代前葉		238
4号ピット	P-4	ピット	16世紀中葉～近世		238
5号ピット	P-60	ピット	近世		238

出土遺物は241図に示した。1・2は甕であり、いずれも小さな平底を呈する。3・4は複合口縁壺の破片であり、いずれも口縁が内傾して立ち上がり、外面に櫛描波状文が施されている。3の頸部には斜格子刻目文が施文されたベルト状の突帯がめぐらされている。5は鉄製刀子片であろうか。6は半月形の土器片加工品であり、側辺を全面研磨している。

2号竪穴 (第242図)

調査区中央において確認された方形竪穴住居である。残りが非常の悪く、北西側のプランは確認できておらず、一辺5.6mの南東側部分のみ残存している。柱穴は4本柱であり、竪穴の南東辺に接して中央部に長軸1.9m、短軸1.6m、深さ30cm程度の円形を呈する浅い土坑が確認できた。この土坑内には深さ25cm程度の2本の対になる小ピットが検出されている。

出土遺物は第243図に示した。1は複合口縁壺の破片であり、長く上方に延びる口縁をもち、外面に櫛描波状文が施されている。2・3は甕である。4・5は高坏であり、4は外反して延びる坏部の中央で屈曲し、さらに大きく外反する口縁をもち、外面にタテハケ、内面に横方向のミガキが施されている。5は丸く延びる坏部の中央付近で屈曲し、さらに丸く内湾しながら口縁に至る。脚部は中央付近で屈曲し、内湾しながら端部に至る。この屈曲部には円形透かしがみられる。調整は内外面とも丁寧なキガキが施されている。6～10は半月形の土器片加工品であり、弧部を全面研磨している。

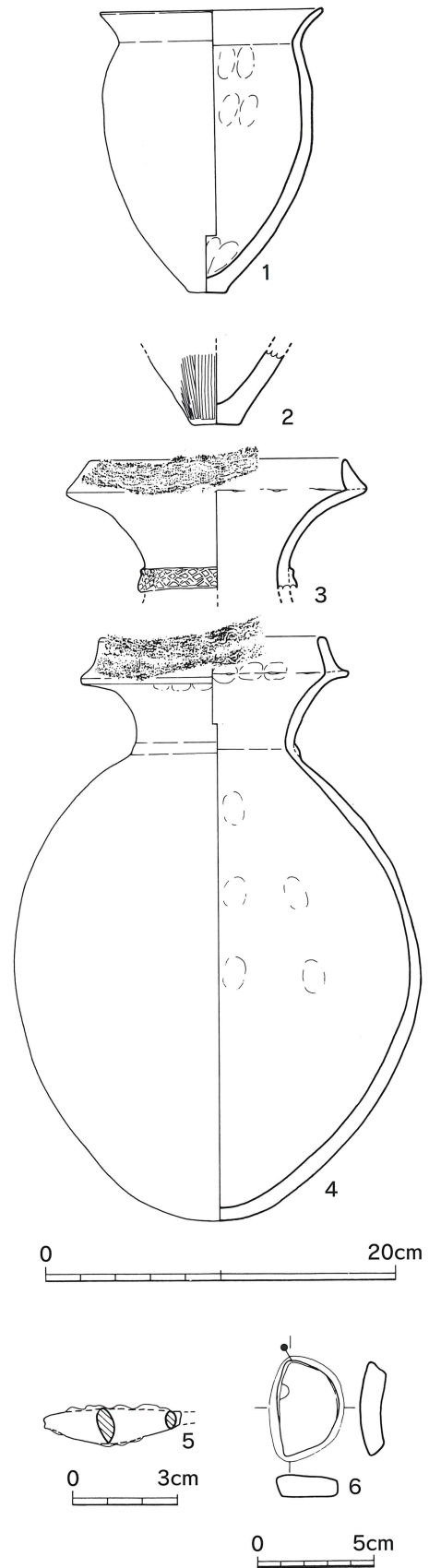
3号竪穴 (第244図)

調査区の東端において確認された方形竪穴住居である。残りは良好でなく、北東側のプランは確認できていない。6.6×6.0mの正方形に近い平面形を呈するものである。柱穴は4本柱であり、南東側の2本の柱穴の間に径1.0m、深さ15cm程度の円形を呈する浅い土坑が確認できた。

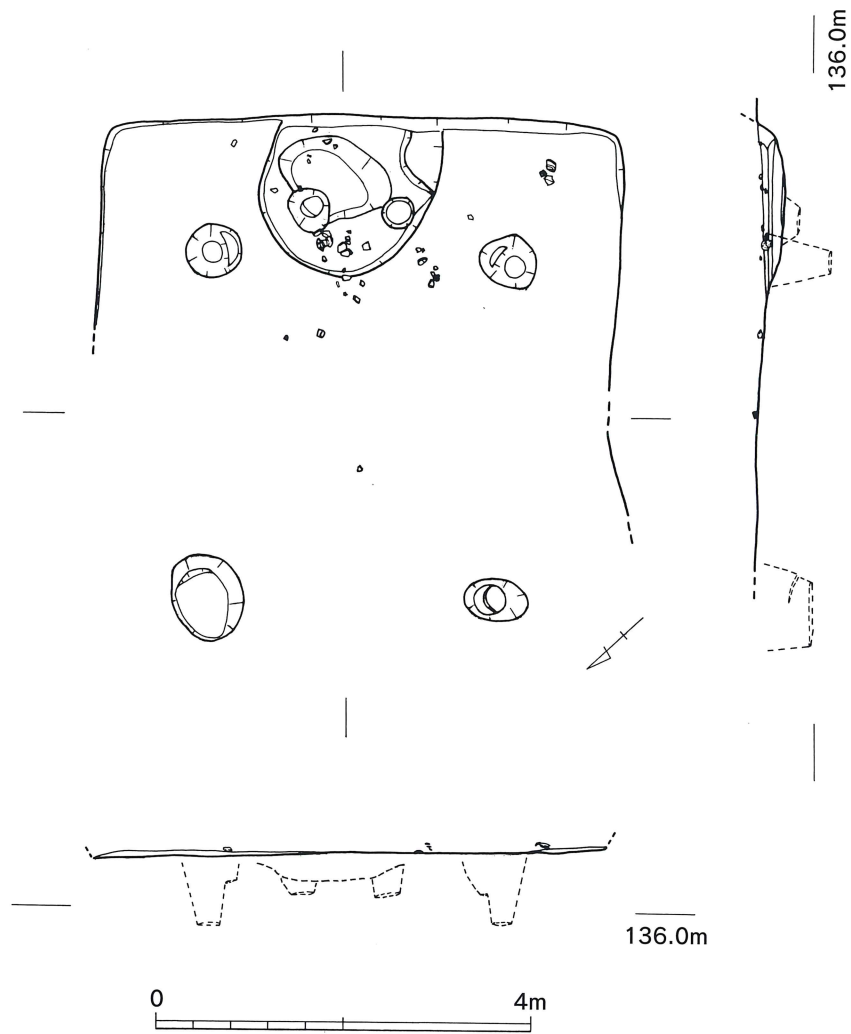
出土遺物は245・246図に示した。245図1・2は高坏であり、1は丸く延びる坏部の中央付近で屈曲し、外反しながら口縁に至る。内外面には丁寧なミガキが施されている。2の脚部中央付近に円形の透かしがみられる。3は甕、4は鉢であろうか。5～8は壺である。5は壺の胴部片であり、斜格子刻目文が施文されたベルト状の突帯がめぐらされている。7・8は複合口縁壺であり、7には長く上方に延びる口縁をもち、外面に櫛描波状文が施されている。8の頸部には三角突帯に円形や勾玉形・楕円形の浮文が貼り付けられている。胴部中央には斜格子刻目文が施文されたベルト状の突帯がめぐらされている。第246図は磨製石鏃であり、基部が折損している。最大幅3.8cmを測る。

4号竪穴 (第247図)

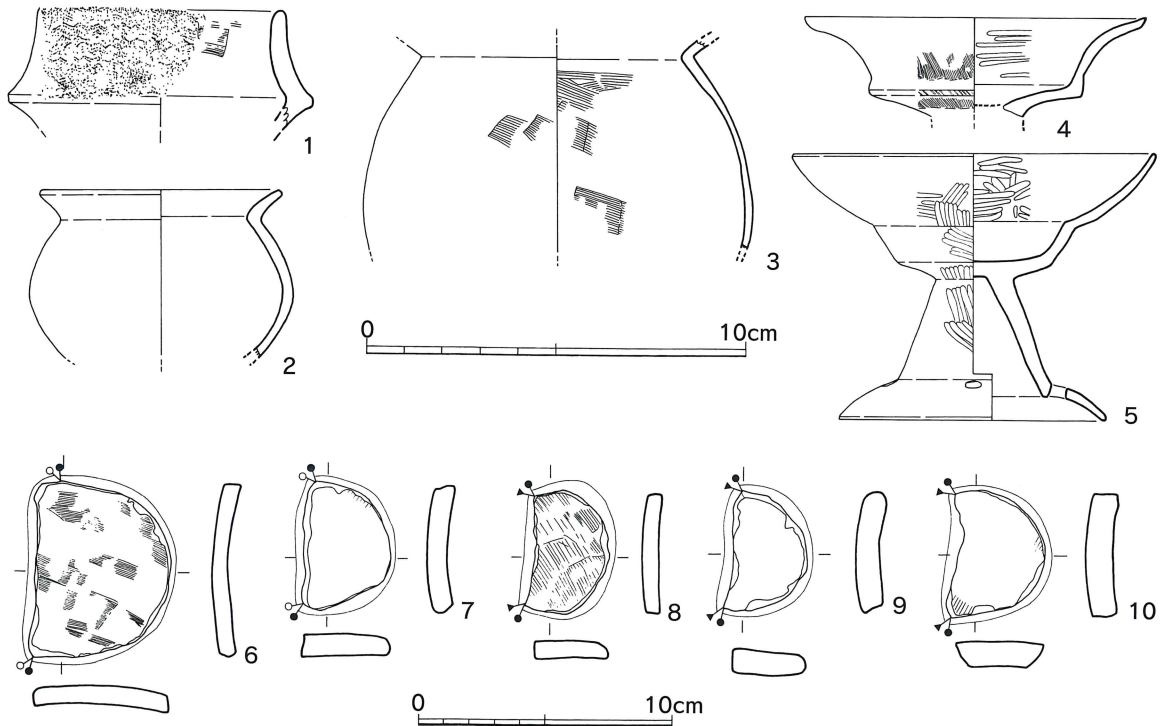
調査区の西端において確認された方形竪穴住居である。残りは良好でなく、南端のプランが確認できたのみであり、柱穴が4本確認できた。



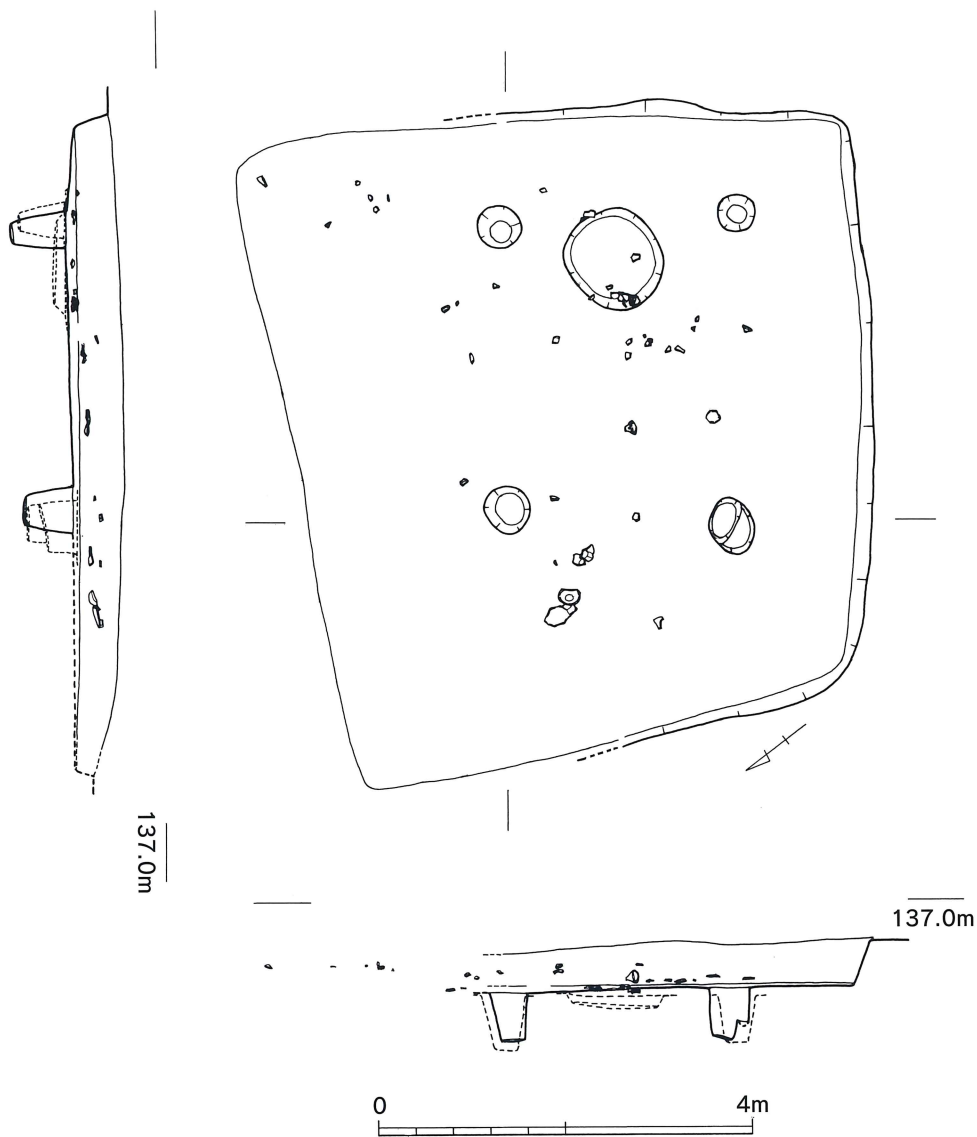
第241図 高添遺跡土木園地区1次調査区
1号竪穴出土遺物実測図
(1/4・1/2・1/3)



第242图 高添遺跡土木園地区1次調査区2号竖穴実測図 (1/80)

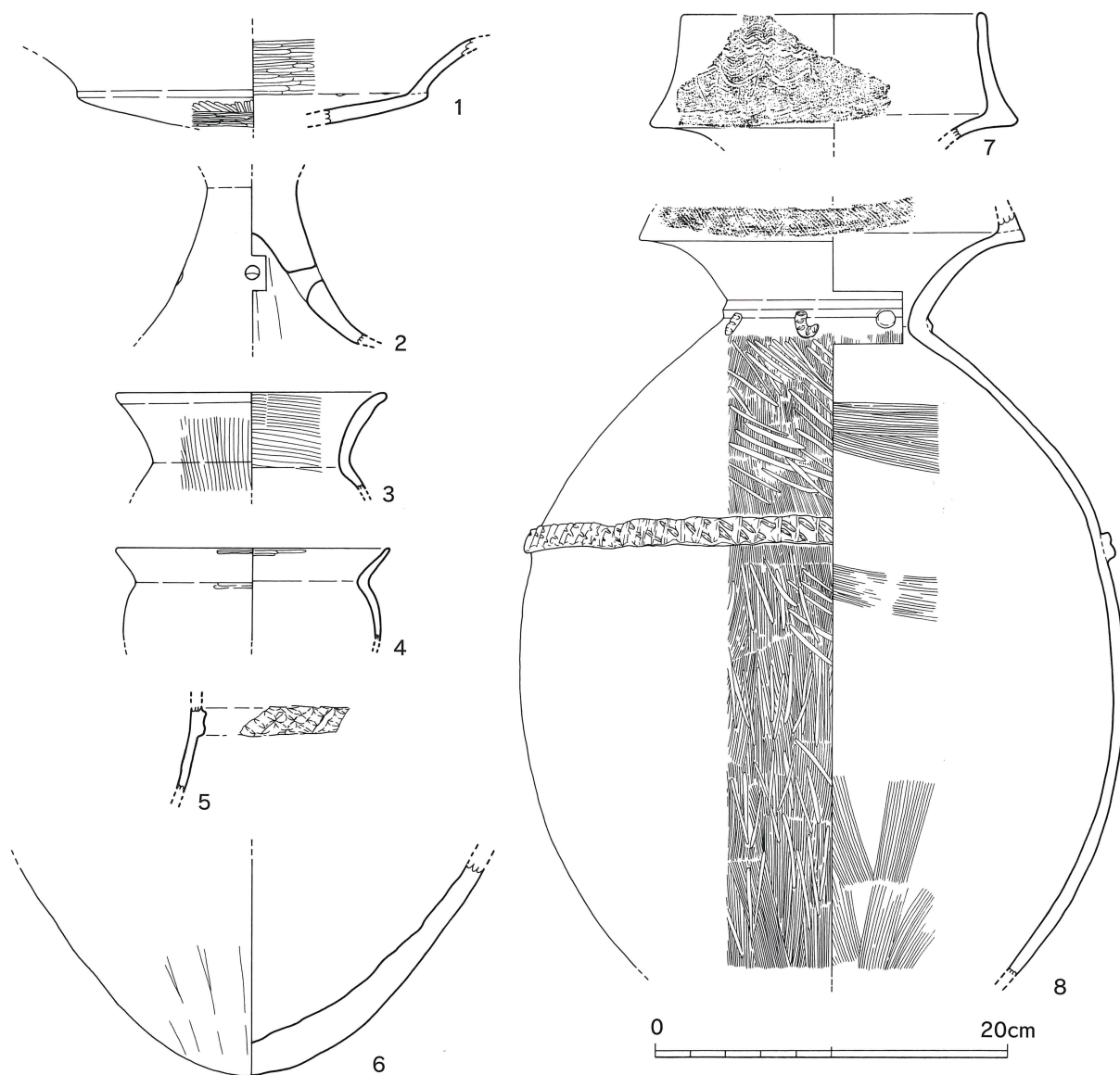


第243图 高添遺跡土木園地区1次調査区2号竖穴出土遺物実測図 (1/4·1/3)

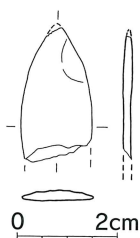


第244図 高添遺跡土木園地区1次調査区3号竪穴実測図(1/80)

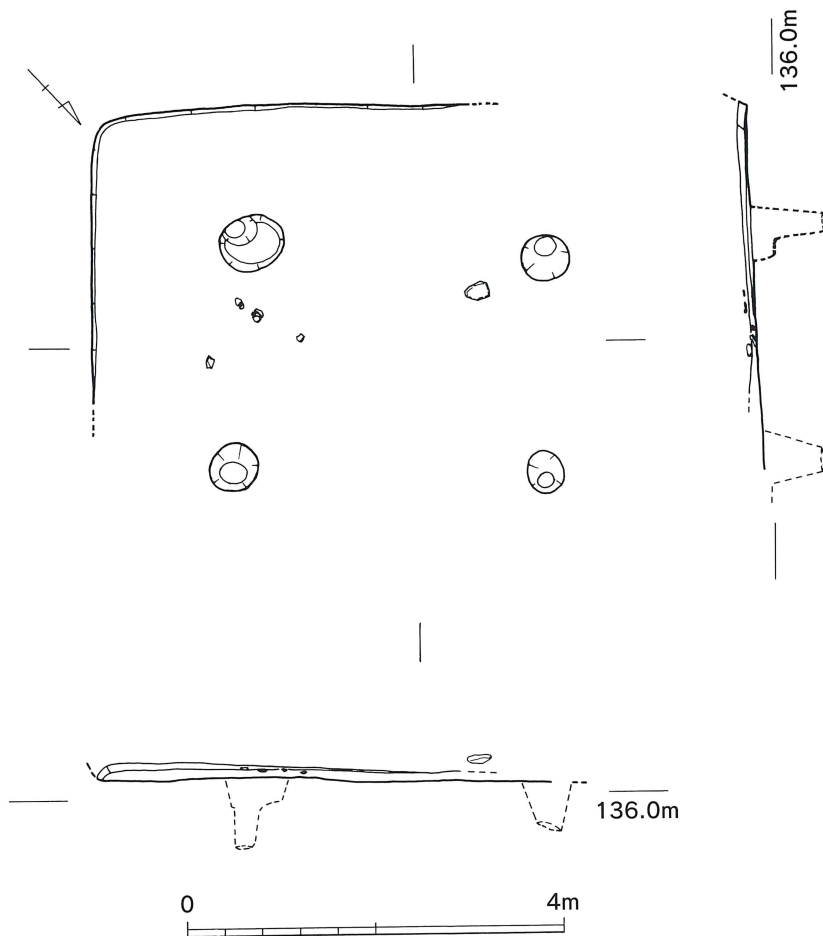
出土遺物は第248図に示した。1・2は複合口縁壺であり、内傾しながら長く上方に延びる口縁をもち、外面に櫛描波状文が施されている。3は甕である。



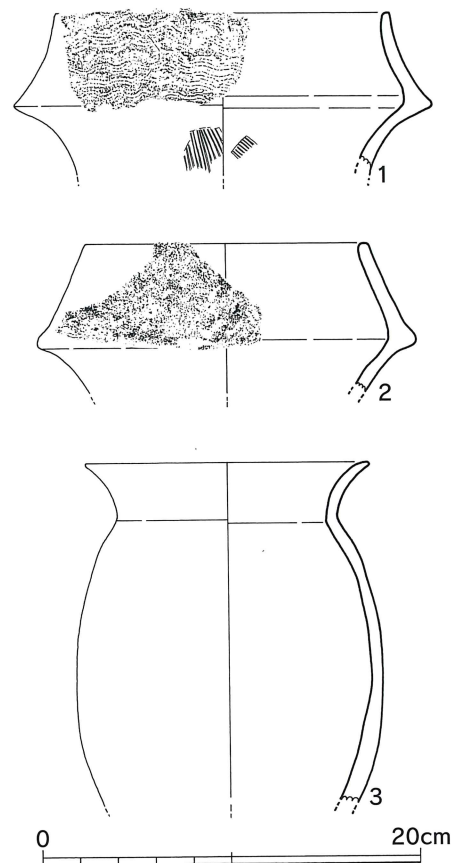
第245图 高添遺跡土木園地区1次調査区3号竖穴出土遺物実測図① (1/4)



第246图 高添遺跡土木園地区1次調査区
3号竖穴出土遺物実測図② (2/3)



第247図 高添遺跡土木園地区1次調査区4号竪穴実測図(1/80)



第248図 高添遺跡土木園地区1次調査区4号竪穴出土遺物実測図(1/4)

1号土坑(第249図)

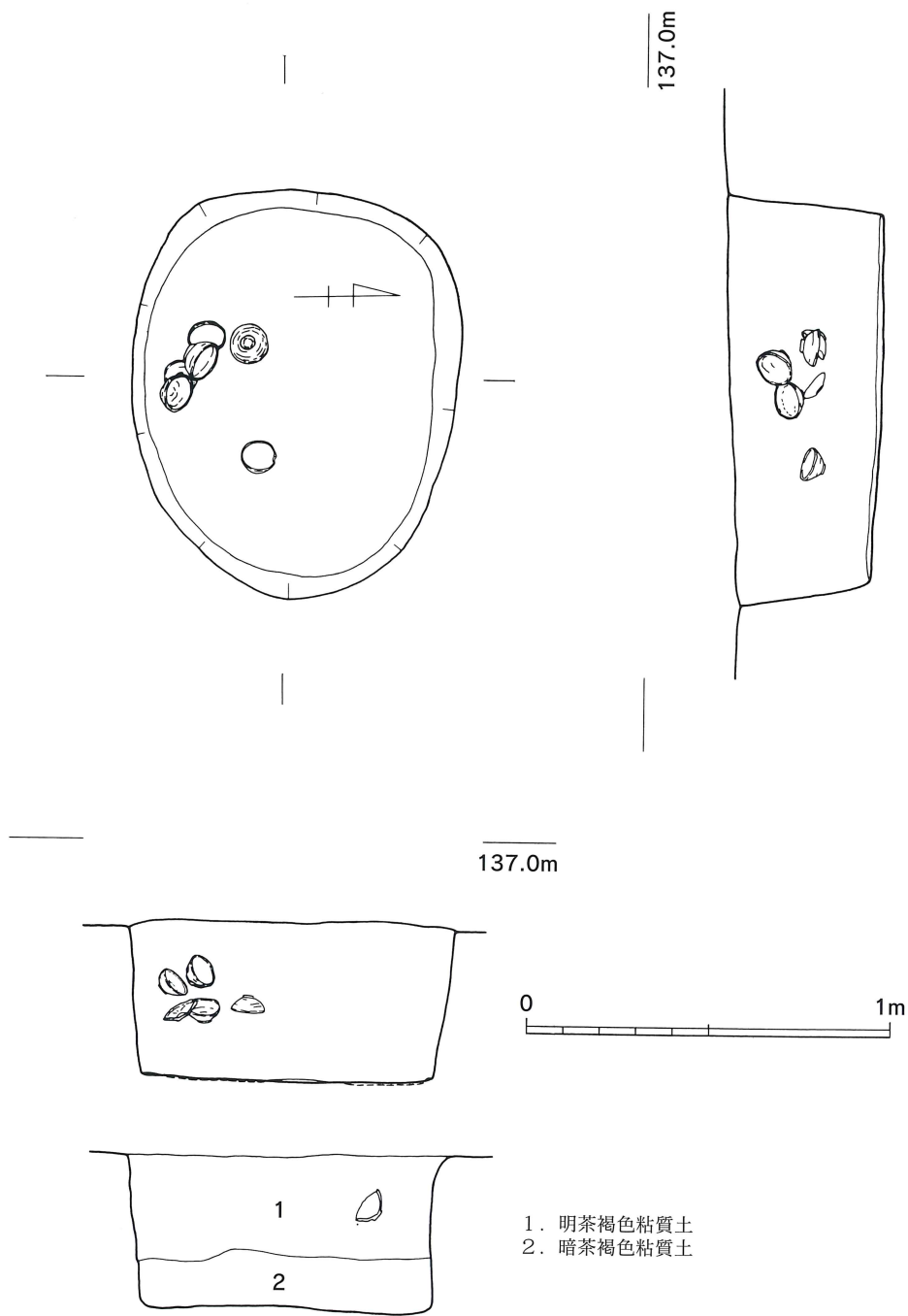
調査区中央よりやや北側において検出された長径110cm、短径90cm、深さ40cmを測る楕円形土坑である。瓦器椀5点、京都系土師器皿1点が近接してまとまり、土坑中層から出土している。いずれも完形であり、埋納されたものと考えられる。

出土遺物は第250図に示した。1は京都系土師器皿であり、口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されたものであろうか。2～6は口径が10.0～10.5cm、器高が4.4～4.8cmと、ほぼ法量を同じくする。2・4～6は外面を細かくナメ方向にケズリ降ろして調整しており、3の外面はナデにより調整している。3・4の内面にはヘラミガキが施されている。

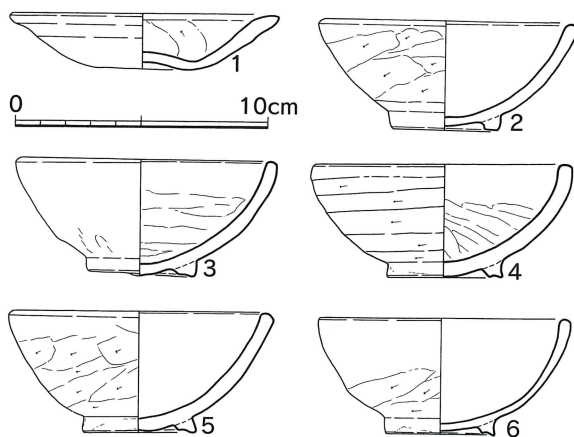
2号土坑(第251図)

長径65cm、短径50cm、深さ45cmを測る楕円形土坑に土師質土器坏6個体前後および、銭貨52点が散在する状態で埋納されていた。土器は最上層から1が伏せた状態、4・6が合わせた状態のほぼ完形で出土し、その下層に銭貨の出土が認められる。

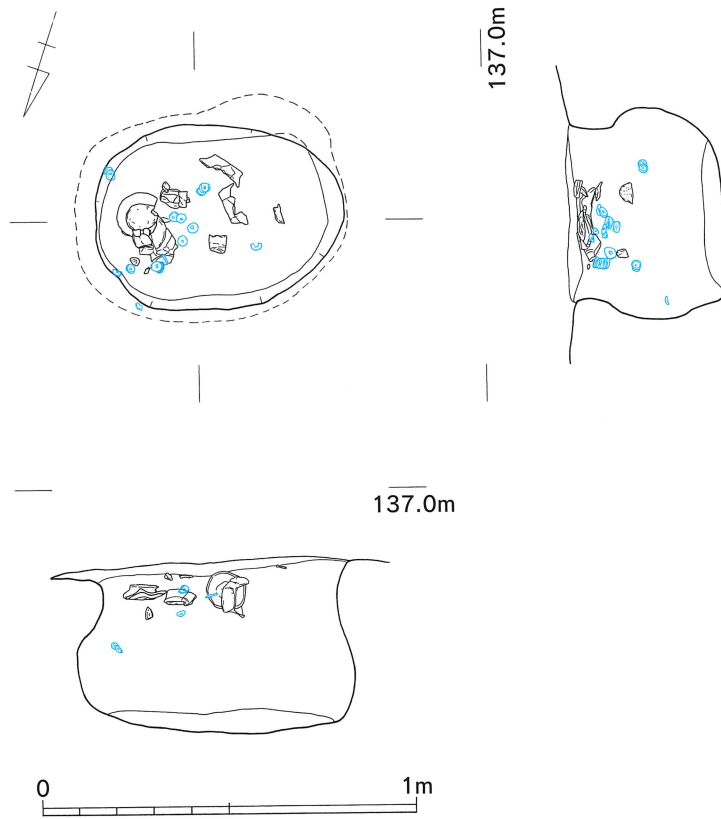
出土遺物は第252～254図に示した。第252図はいずれも土師質土器坏であり、内外面を回転ナデ、底部を回転糸切りで切り離している。第253～254図は銭貨である。銭貨は開元通寶(南唐 960年初鑄)～永樂通寶(明 1408年初鑄)が散在していたが、第253図1～3のように重ねて融着しているものも認められ、縉に通された状態であったことが推測できる。



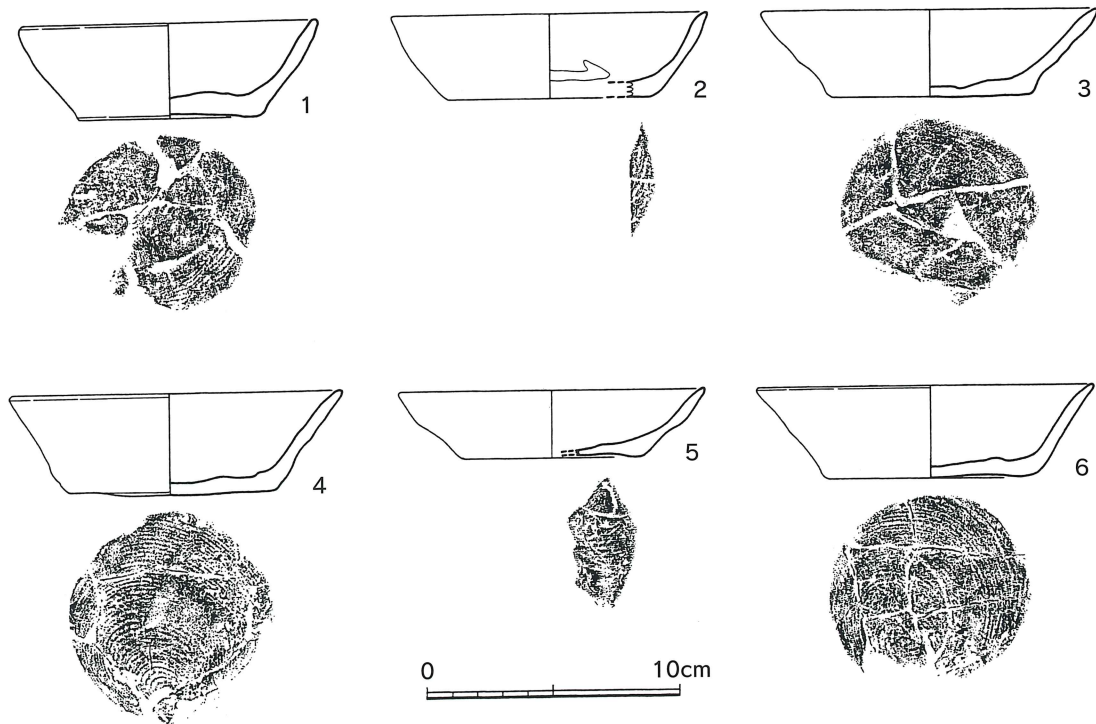
第249图 高添遺跡土木園地区2次調査区1号土坑実測図 (1/20)



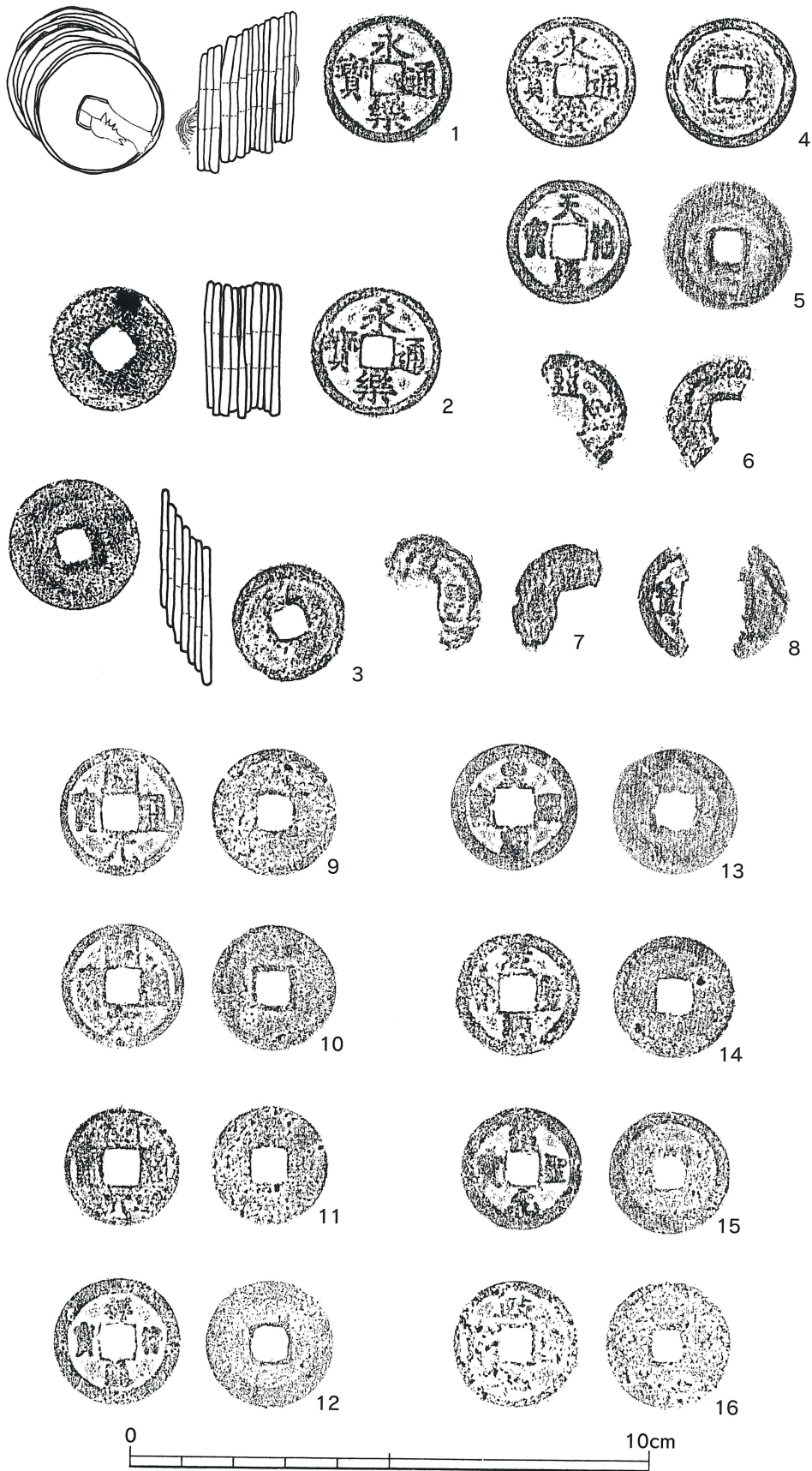
第250图 高添遺跡土木園地区2次調査区1号土坑出土遺物実測図 (1/3)



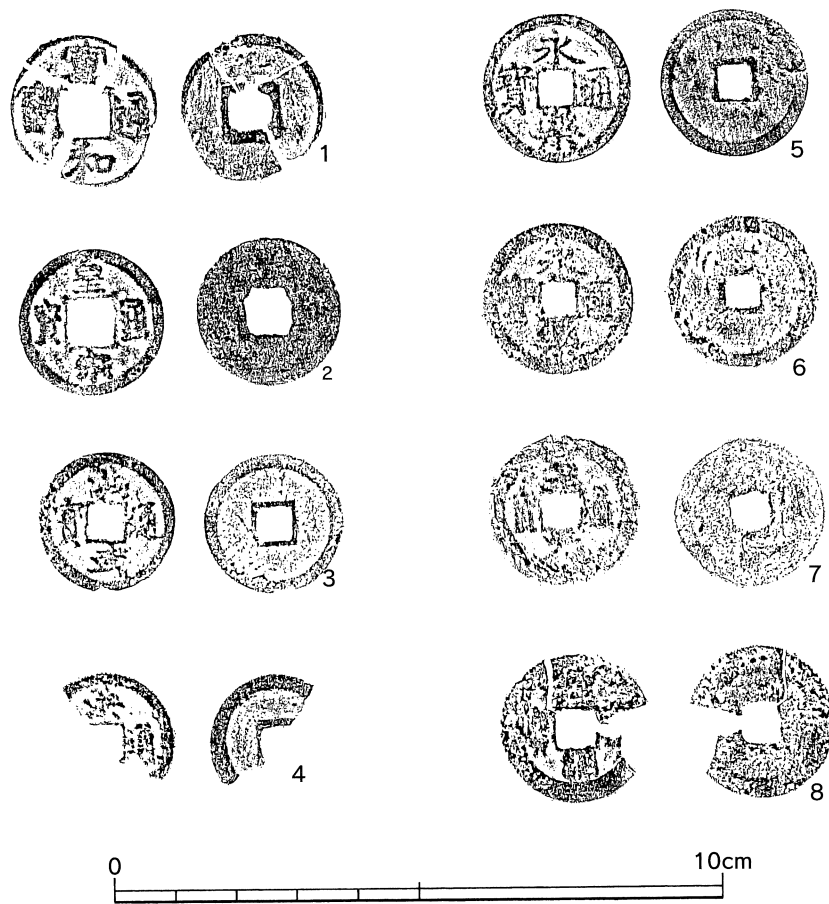
第251图 高添遺跡土木園地区2次調査区2号土坑実測図 (1/20)



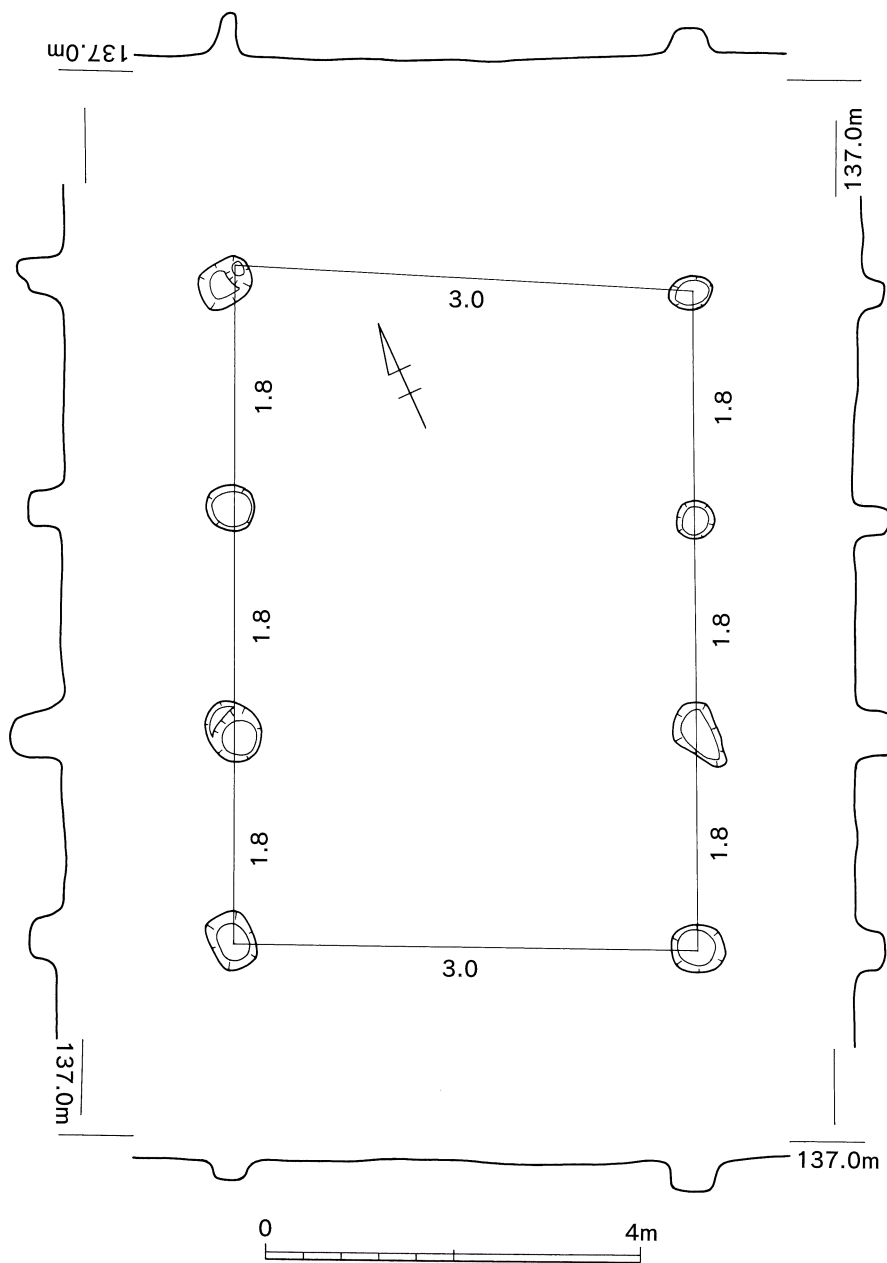
第252图 高添遺跡土木園地区2次調査区2号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第253図 高添遺跡土木園地区2次調査区2号土坑出土銭貨実測図① (4/5)



第254図 高添遺跡土木園地区2次調査区2号土坑出土銭貨実測図② (4/5)



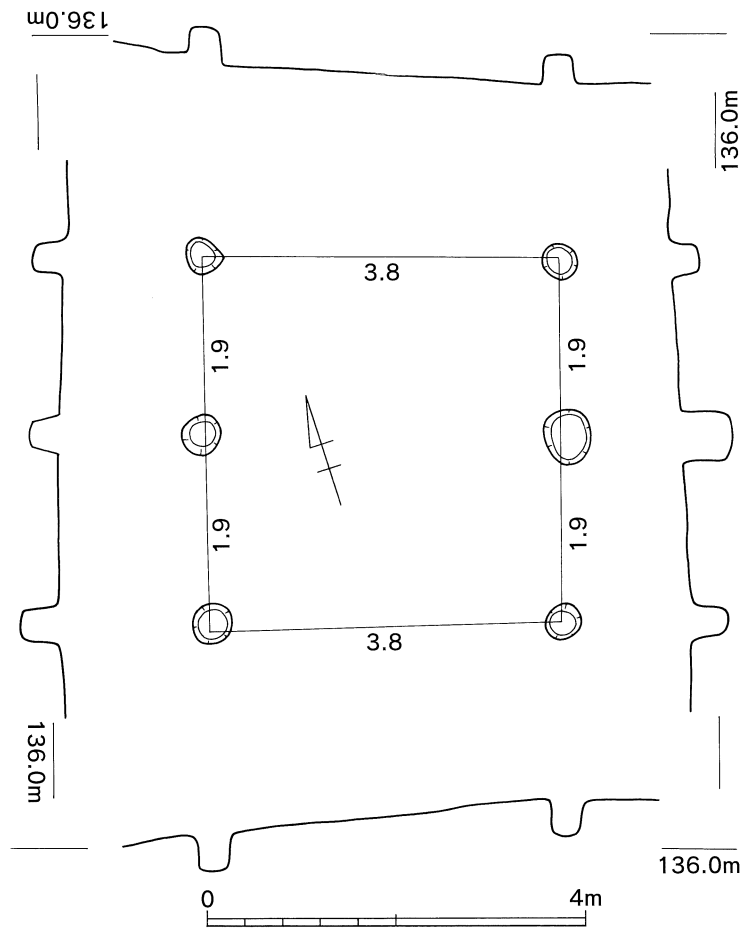
第255図 高添遺跡土木園地区2次調査区1号掘立柱建物実測図 (1/80)

1号掘立柱建物 (第255図)

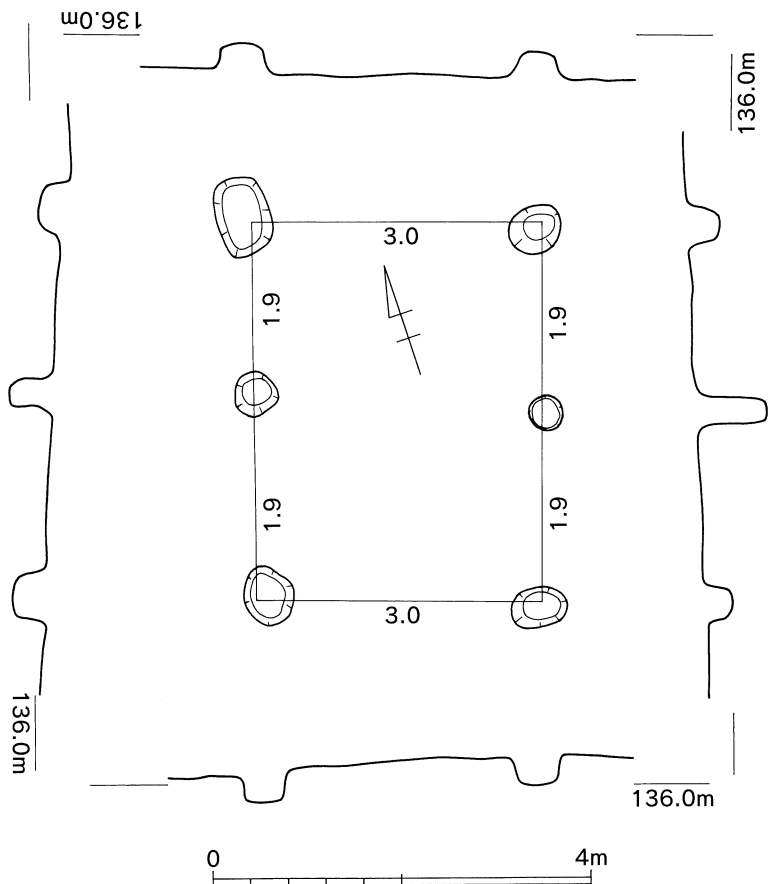
1号溝の西側に存在し、15号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-25°-Eであり、規模は梁間1間(3.0m)、桁行3間(5.4m)と、南北に長い。桁行の柱間寸法は東西とも1.8mで均等である。身舎面積は16.2m²を測る。

2号掘立柱建物 (第256図)

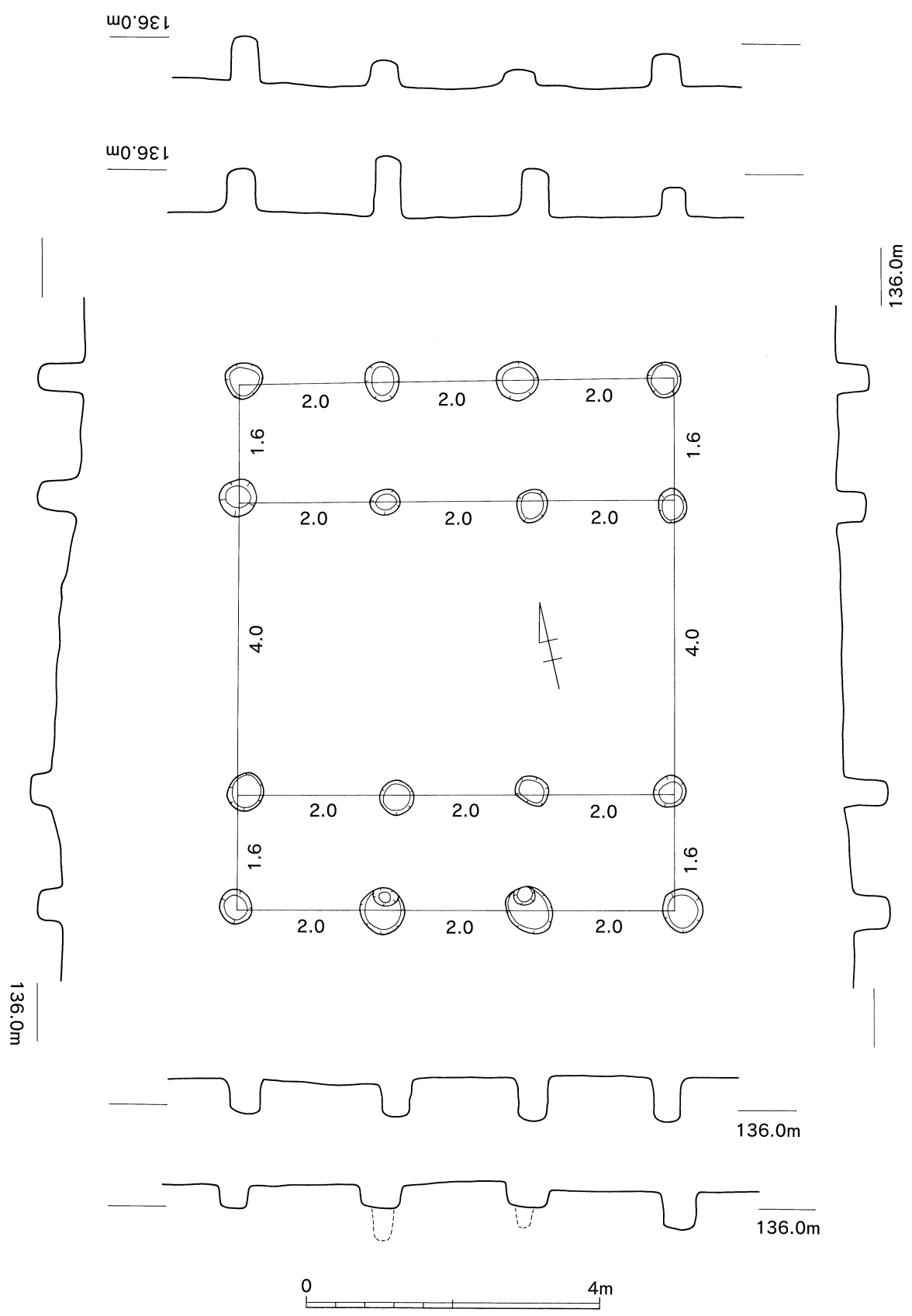
調査区の西南端に存在し、3・4・31・32号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-21°-Eであり、規模は梁間1間(3.8m)、桁行2間(3.8m)である。桁行の柱間寸法は東西とも1.9mで均等である。身舎面積は14.4m²を測る。



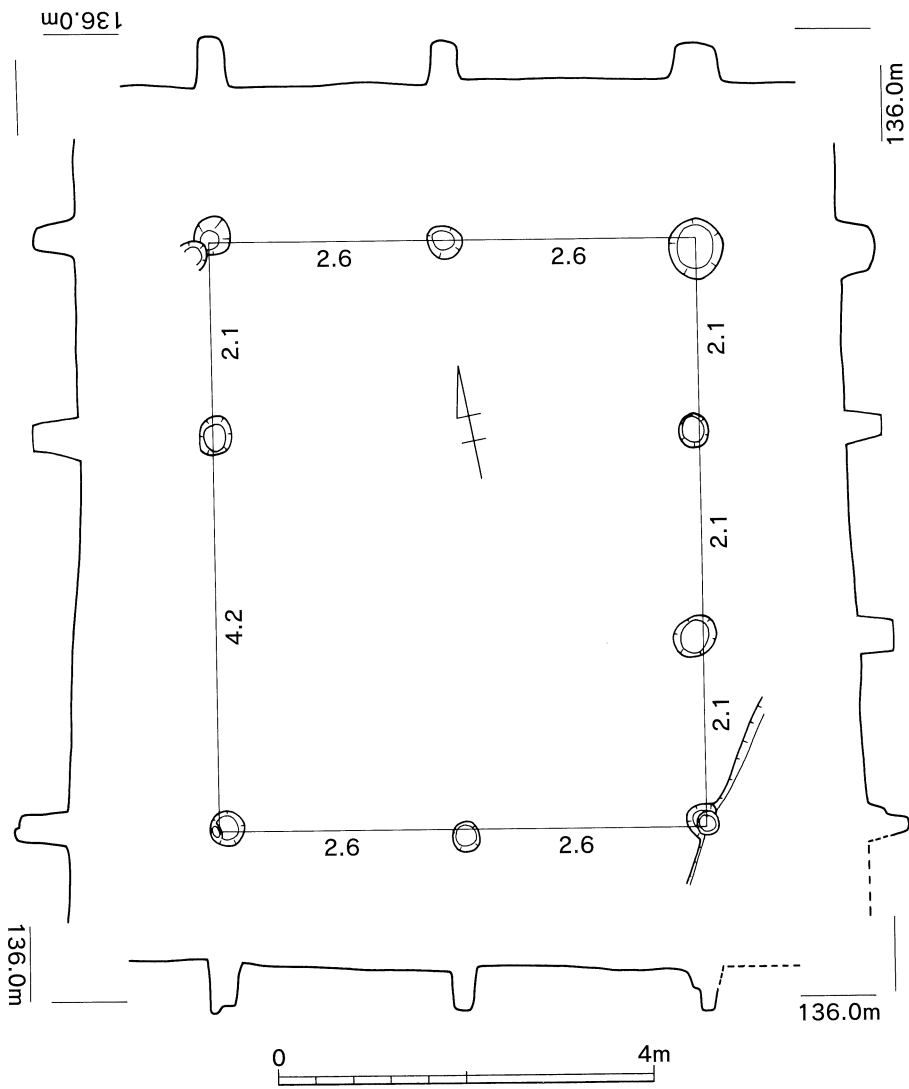
第256图 高添遺跡土木園地区2次調査区2号掘立柱建物実測図 (1/80)



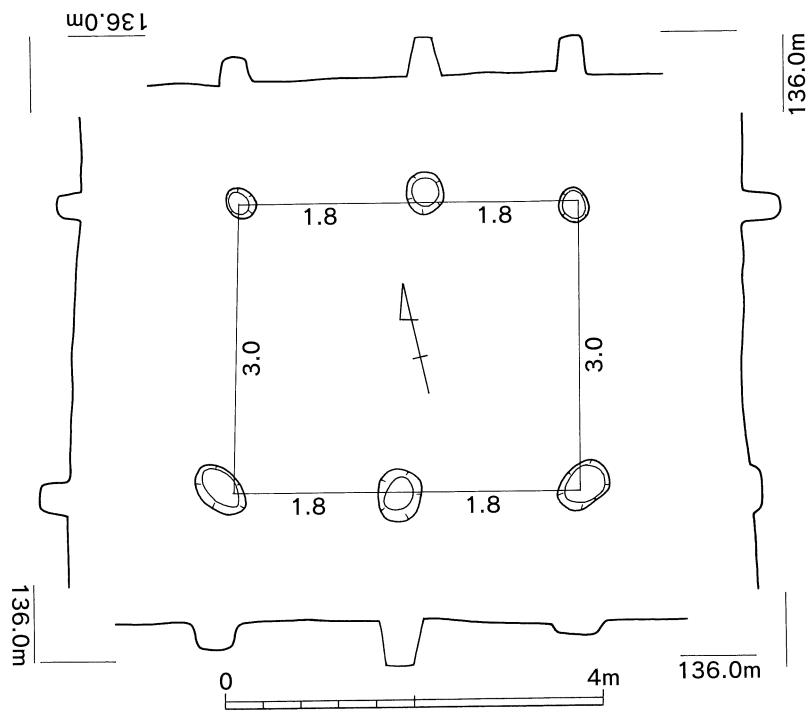
第257图 高添遺跡土木園地区2次調査区3号掘立柱建物実測図 (1/80)



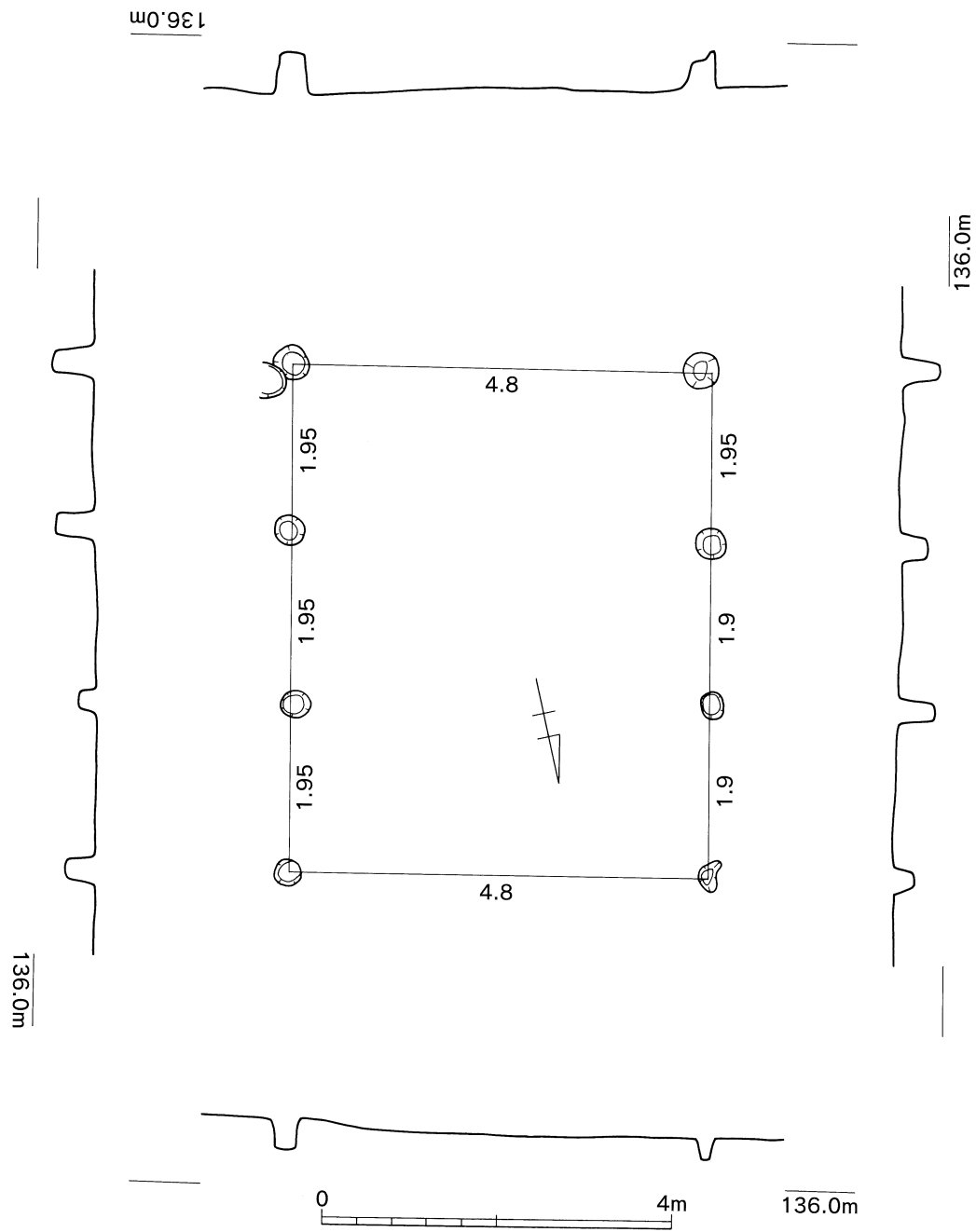
第258図 高添遺跡土木園地区2次調査区4号掘立柱建物実測図 (1/80)



第259图 高添遺跡土木園地区2次調査区5号掘立柱建物実測図 (1/80)



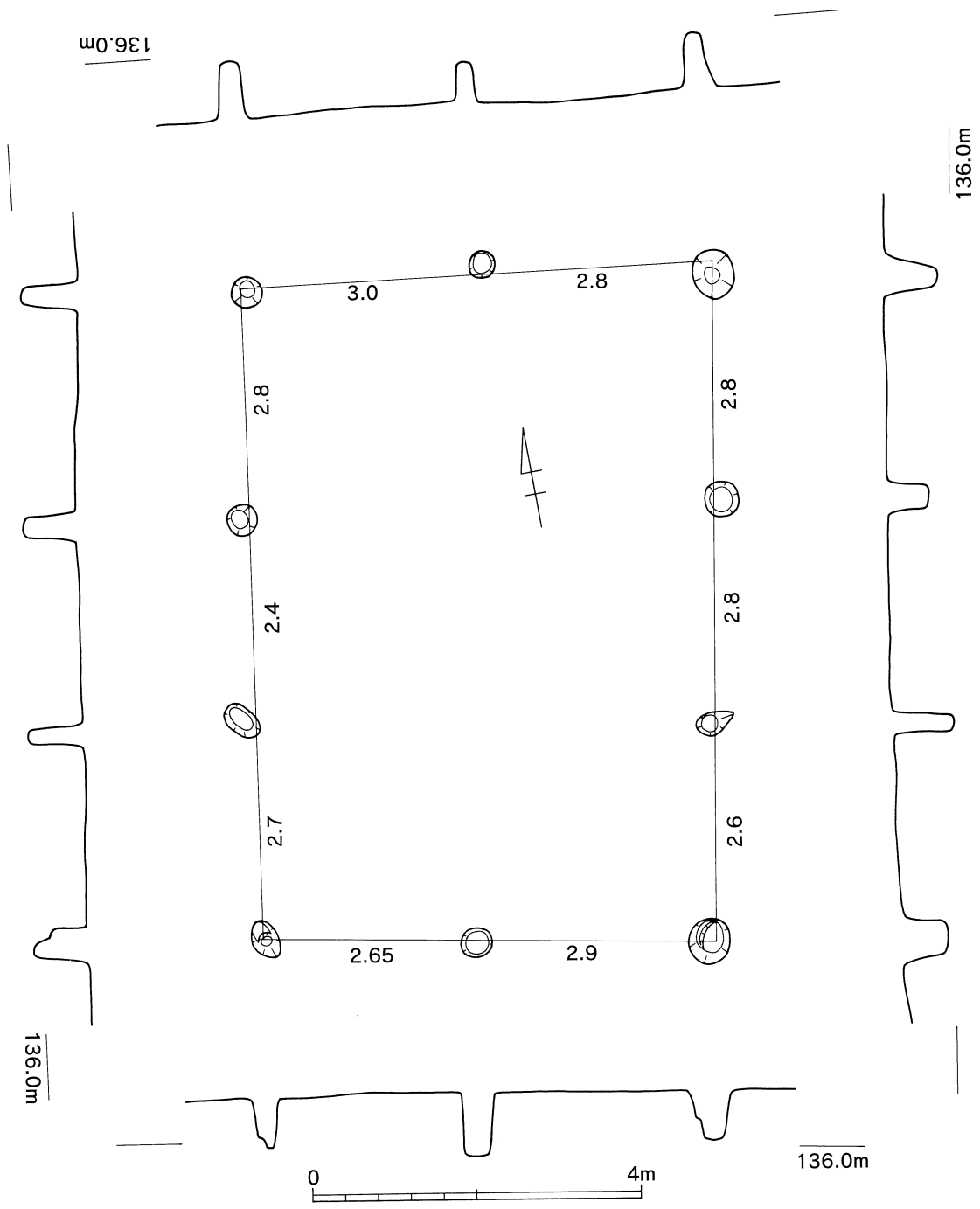
第260图 高添遺跡土木園地区2次調査区6号掘立柱建物実測図 (1/80)



第261図 高添遺跡土木園地区2次調査区7号掘立柱建物実測図 (1/80)

3号掘立柱建物 (第257図)

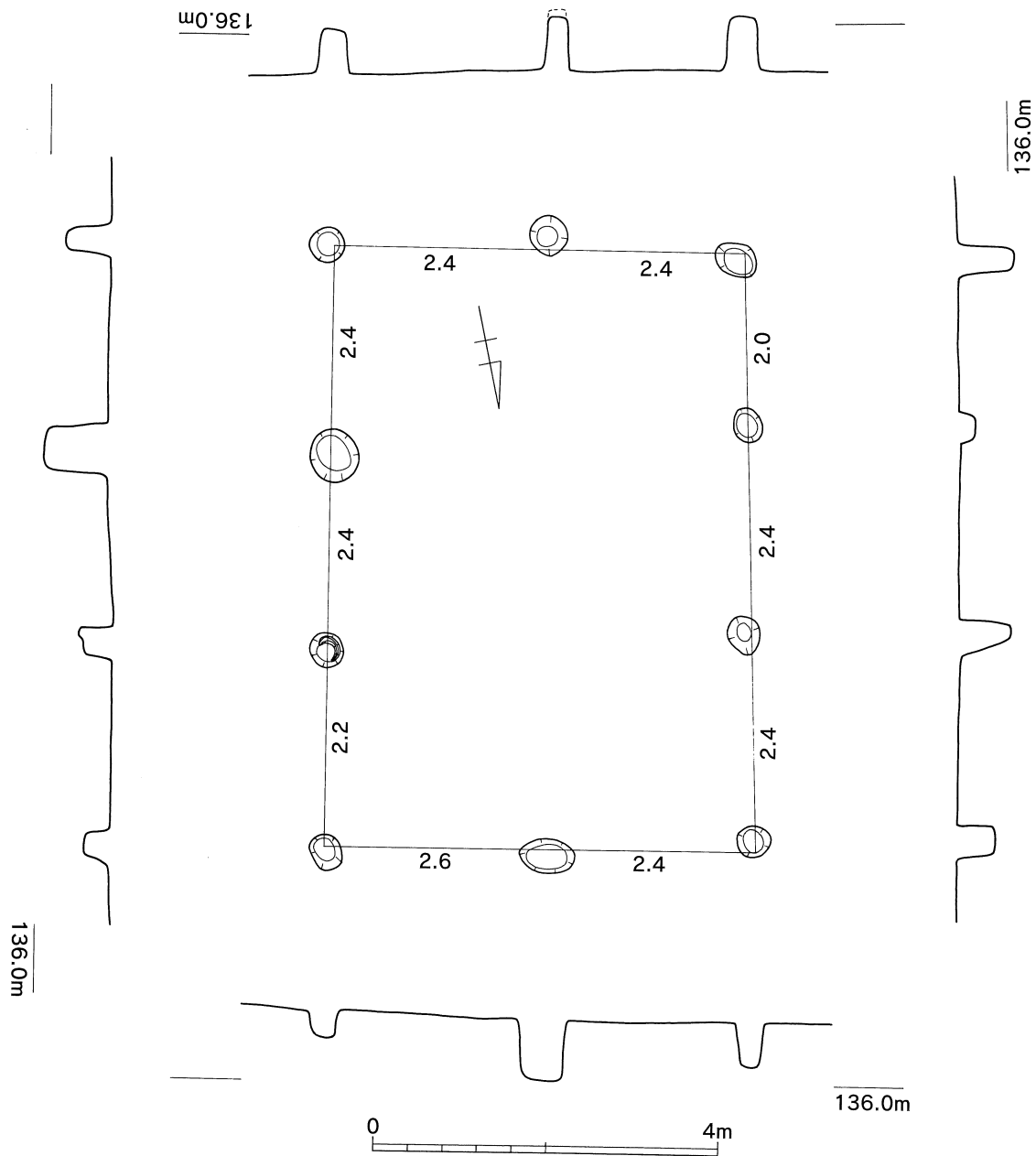
調査区の西南端に存在し、2・4・31・32号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-17° -Eであり、規模は梁間1間(3.0m)、桁行2間(3.8m)と、南北に長い。桁行の柱間寸法は東西とも1.9mで均等である。身舎面積は11.4m²を測る。



第262図 高添遺跡土木園地区2次調査区8号掘立柱建物実測図 (1/80)

4号掘立柱建物 (第258図)

調査区の西南端に存在し、2・3・29・30号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-13° -Eであり、規模は梁間1間 (4.0m)、桁行3間 (6.0m) と、東西に長い。桁行の柱間寸法は東西とも2.0mで均等である。身舎面積は24.0㎡を測る。建物の南北両側には、それぞれ1.6m離れて、桁行方向に庇がつけられていた。身舎と庇の柱穴規模に差はなく、4号掘立柱建物について、梁間1間 (5.6m)、桁行3間 (6.0m) の建物2棟が重なり合っているとみられなくはないが、ここでは庇付き建物として報告しておく。



第263図 高添遺跡土木園地区2次調査区9号掘立柱建物実測図 (1/80)

5号掘立柱建物 (第259図)

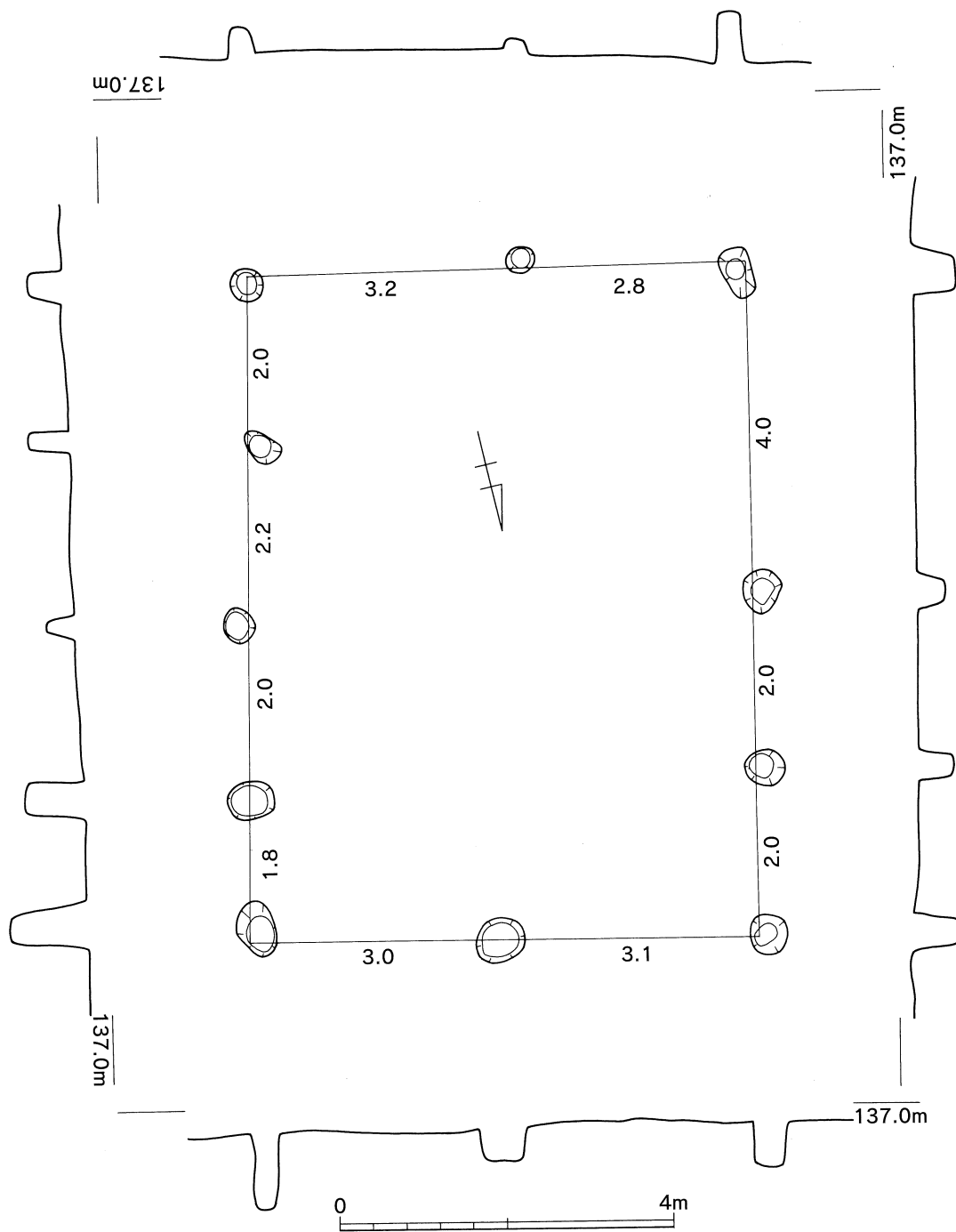
調査区の南西側に存在し、6・30号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-12^{\circ}-E$ であり、規模は梁間2間(5.2m)、桁行3間(6.3m)と、南北に長い。梁間の柱間寸法は南北とも2.6mで均等である。桁行の柱間寸法は東側が2.1mで均等であり、西側に関しては1ヶ所、柱穴を確認しえなかった。身舎面積は 32.8m^2 を測る。

6号掘立柱建物 (第260図)

調査区の南西側に存在し、5号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-14^{\circ}-E$ であり、規模は梁間1間(3.0m)、桁行2間(3.6m)と、東西に長い。桁行の柱間寸法は南北とも1.8mで均等である。身舎面積は 10.8m^2 を測る。

7号掘立柱建物 (第261図)

調査区の西側に存在し、8・9号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-13^{\circ}-E$ であり、規模は梁間1間(4.8m)、桁行3間(5.8m)と、南北に長い。桁行の柱間寸法は1.9~1.95mと、ほぼ均等である。身舎面積

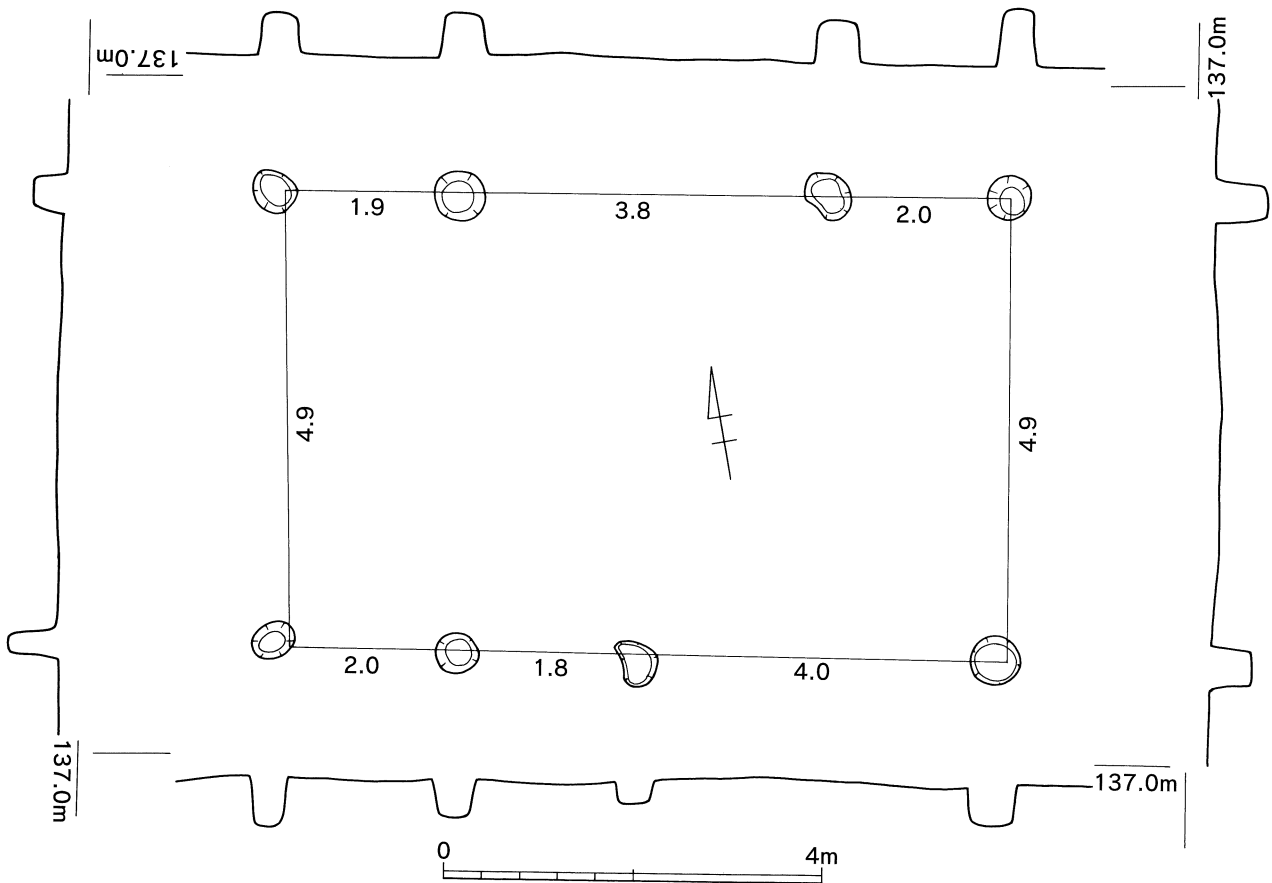


第264図 高添遺跡土木園地区2次調査区10号掘立柱建物実測図 (1/80)

は27.8m²を測る。

8号掘立柱建物 (第262図)

調査区の南西側に存在し、7・9・10・11号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-10° -Eであり、規模は梁間2間 (5.55~5.8m)、桁行3間 (7.9~8.2m) と、南北に長い。梁間の柱間寸法は北が3.0m+2.8m、南が2.65m+2.9mと、均質ではなく、桁行の柱間寸法は東側が2.6m+2.8m+2.8mであり、西側が2.7m+2.4m+2.8mである。身舎面積は45.7m²を測る。



第265図 高添遺跡土木園地区2次調査区11号掘立柱建物実測図 (1/80)

9号掘立柱建物 (第263図)

調査区の南西側に存在し、7・8・10・11号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-12° -Eであり、規模は梁間2間 (4.8~5.0m)、桁行3間 (6.8~7.0m) と、南北に長い。梁間の柱間寸法は北が2.4m+2.6m、南が2.4m+2.4mを測り、桁行の柱間寸法は東側が2.2m+2.4m+2.4mであり、西側が2.4m+2.4m+2.0mである。身舎面積は33.8㎡を測る。

10号掘立柱建物 (第264図)

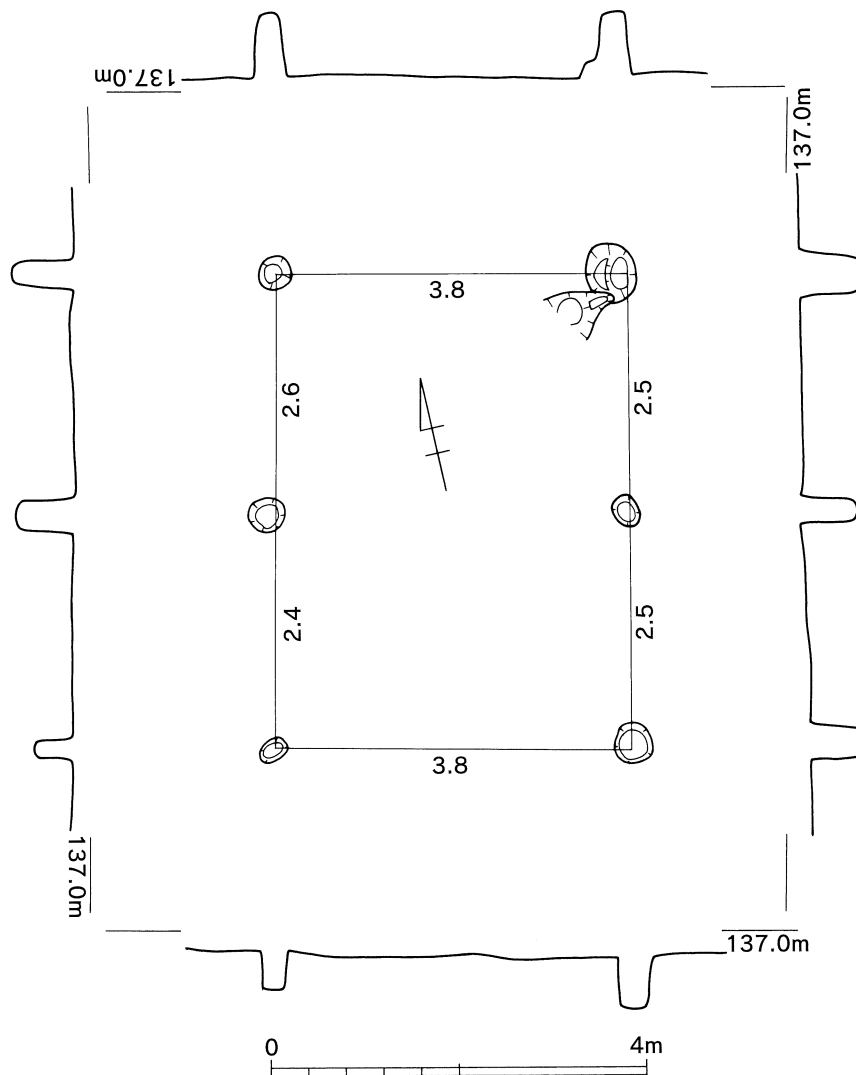
調査区の南西側に存在し、8・9号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-13° -Eであり、規模は梁間2間 (6.0~6.1m)、桁行4間 (8.0m) と、南北に長い。梁間の柱間寸法は北が3.0m+3.1m、南が3.2m+2.8mを測り、桁行の西側に関しては1ヶ所、柱穴を確認しえなかった。身舎面積は48.4㎡を測る。

11号掘立柱建物 (第265図)

調査区の中央よりやや西側に存在し、8・9・14号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-11° -Eであり、規模は梁間1間 (4.9m)、桁行4間 (7.7~7.8m) と、東西に長い。北側桁行中央の柱穴が確認できなかったのは、2号地下式塋と切り合い関係をもつためと考えられ、2号地下式塋の天井部が落ちており、柱穴が存在していたのは少なくとも2号地下式塋天井部の陥没以前であることがわかる。身舎面積は38㎡を測る。

12号掘立柱建物 (第266図)

調査区の中央よりやや西側に存在し、13号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-13° -Eであり、規模は梁間1間 (3.8m)、桁行2間 (5.0m) と、南北に長い。身舎面積は19㎡を測る。



第266図 高添遺跡土木園地区2次調査区12号掘立柱建物実測図 (1/80)

13号掘立柱建物 (第267図)

調査区の中央よりやや西側に存在し、12号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-12^{\circ}-E$ であり、規模は梁間1間(3.8m)、桁行2間(4.0m)と、南北に長い。身舎面積は 15.2m^2 を測る。

14号掘立柱建物 (第268図)

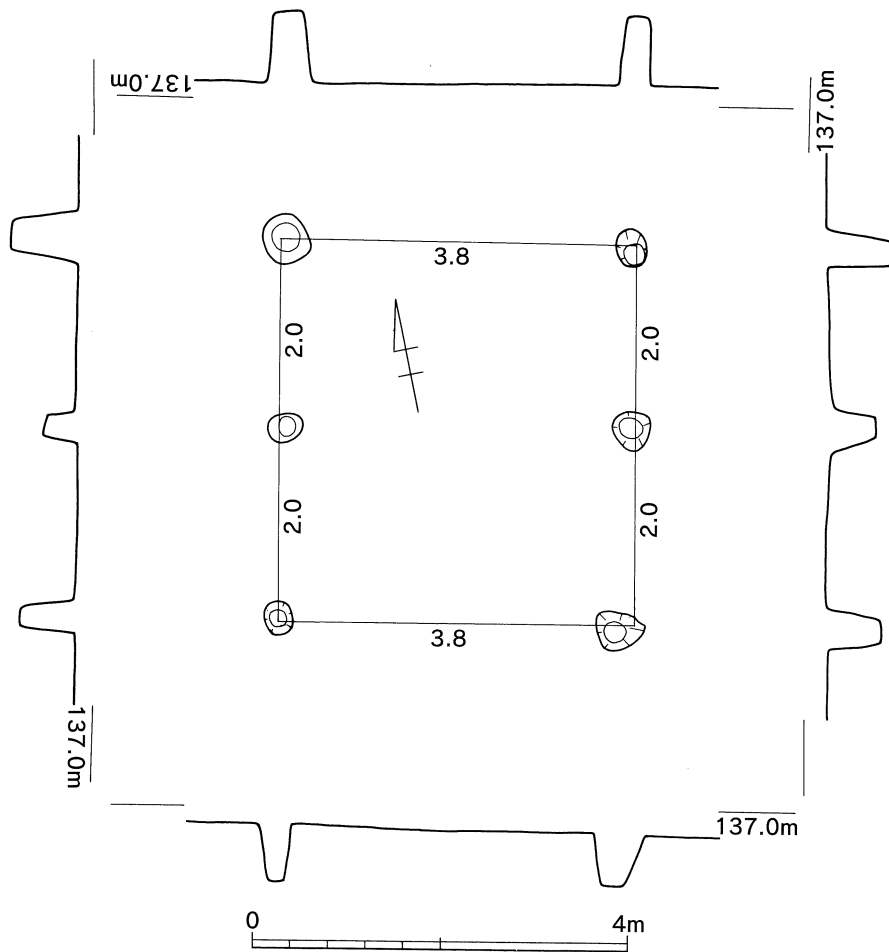
調査区の中央よりやや西側に存在し、11号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-17^{\circ}-E$ であり、規模は梁間1間(4.4m)、桁行2間(4.0m)と、南北に長い。身舎面積は 17.6m^2 を測る。

15号掘立柱建物 (第269図)

調査区の中央付近に存在し、1号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-13^{\circ}-E$ であり、規模は梁間2間(4.8m)、桁行5間(10.0m)と、南北に長い。西側桁行の柱穴が1ヶ所確認できなかったのは、3号地下式塙と切り合い関係をもつためと考えられ、3号地下式塙の天井部が落ちており、柱穴が存在していたのは少なくとも3号地下式塙天井部の陥没以前であることがわかる。身舎面積は 48m^2 を測る。

16号掘立柱建物 (第270図)

調査区南端の台地縁辺に存在する。建物方位は $N-18^{\circ}-E$ であり、南側部分が調査区外に延びるが、残存する柱穴2間四方の総柱建物であることが確認できている。南北の柱間は $2.3\text{m}+2.2\text{m}$ 、東西の柱間は $2.0\text{m}+2.0$



第267図 高添遺跡土木園地区2次調査区13号掘立柱建物実測図 (1/80)

mを測る。なお、柱穴のうち、5号ピットから寛永通寶が1点出土しており、第322図に示した。

17号掘立柱建物 (第271図)

調査区の南端の1号溝と接する内側に存在している。建物方位はN-20° -Eであり、規模は梁間1間(3.6m)、桁行3間(5.4~5.6m)と、東西に長い。身舎面積は19.8m²を測る。

18号掘立柱建物 (第272図)

調査区の中央やや南側に存在し、19号掘立柱建物および1号溝と重複する。建物方位はN-18° -Eであり、規模は梁間1間(3.4m)、桁行3間(4.4~4.5m)と、東西に長い。身舎面積は15.1m²を測る。

19号掘立柱建物 (第273図)

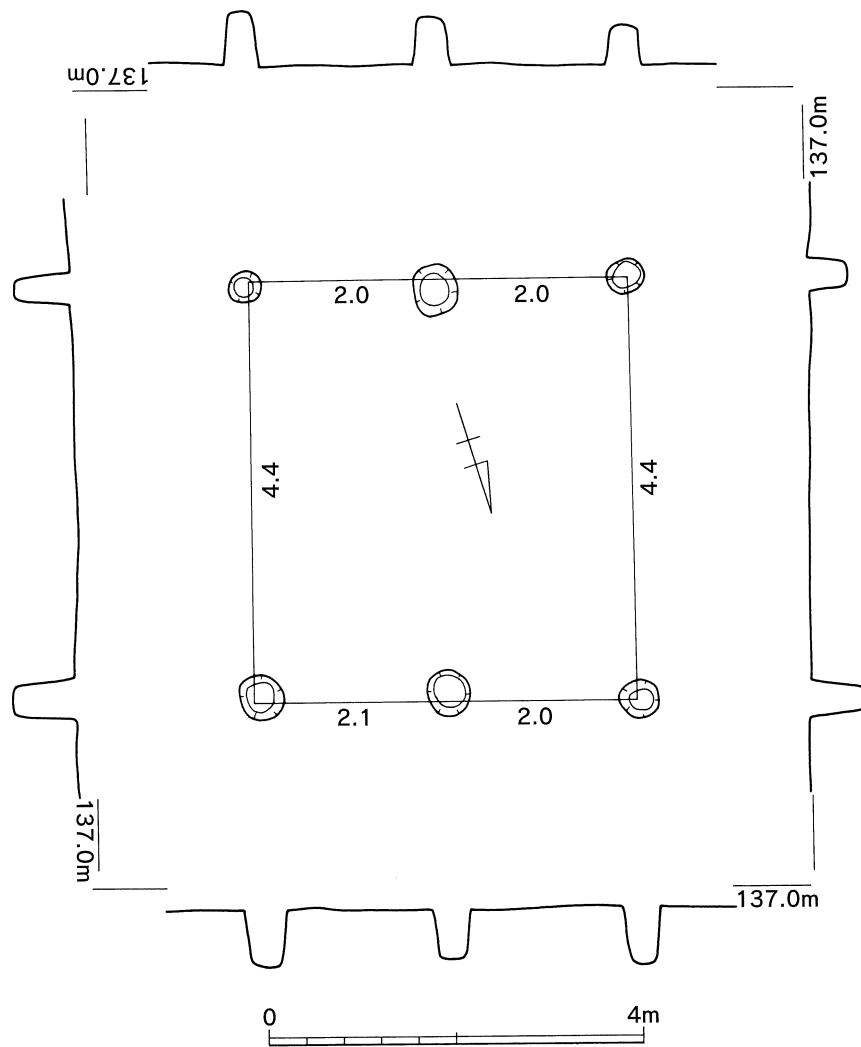
調査区の中央より南側に存在し、18・20号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-25° -Eであり、規模は梁間2間(5.0m)、桁行4間(7.6m)と、南北に長い。身舎面積は38.0m²を測る。

20号掘立柱建物 (第274図)

調査区の中央より南側に存在し、19号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-24° -Eであり、規模は梁間1間(5.0m)、桁行4間(8.0m)と、東西に長い。身舎面積は40.0m²を測る。

21号掘立柱建物 (第275図)

調査区の中央よりやや南側に存在し、22号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-13° -Eであり、規模は梁間1間(5.4~5.6m)、桁行4間(7.7~7.8m)と、東西に長い。身舎面積は42.6m²を測る。



第268図 高添遺跡土木園地区2次調査区14号掘立柱建物実測図 (1/80)

22号掘立柱建物 (第276図)

調査区の中央よりやや南側に存在し、21号掘立柱建物と重複する。東南端の柱穴が1号地下式壙と切り合いをもつが、1号地下式壙の天井部が陥没しており、22号掘立柱建物と1号地下式壙との先後関係はつかめなかった。

建物方位はN-14°-Eであり、規模は梁間1間(4.8m)、桁行3間(6.4m)と、東西に長い。身舎面積は30.7㎡を測る。

23号掘立柱建物 (第277図)

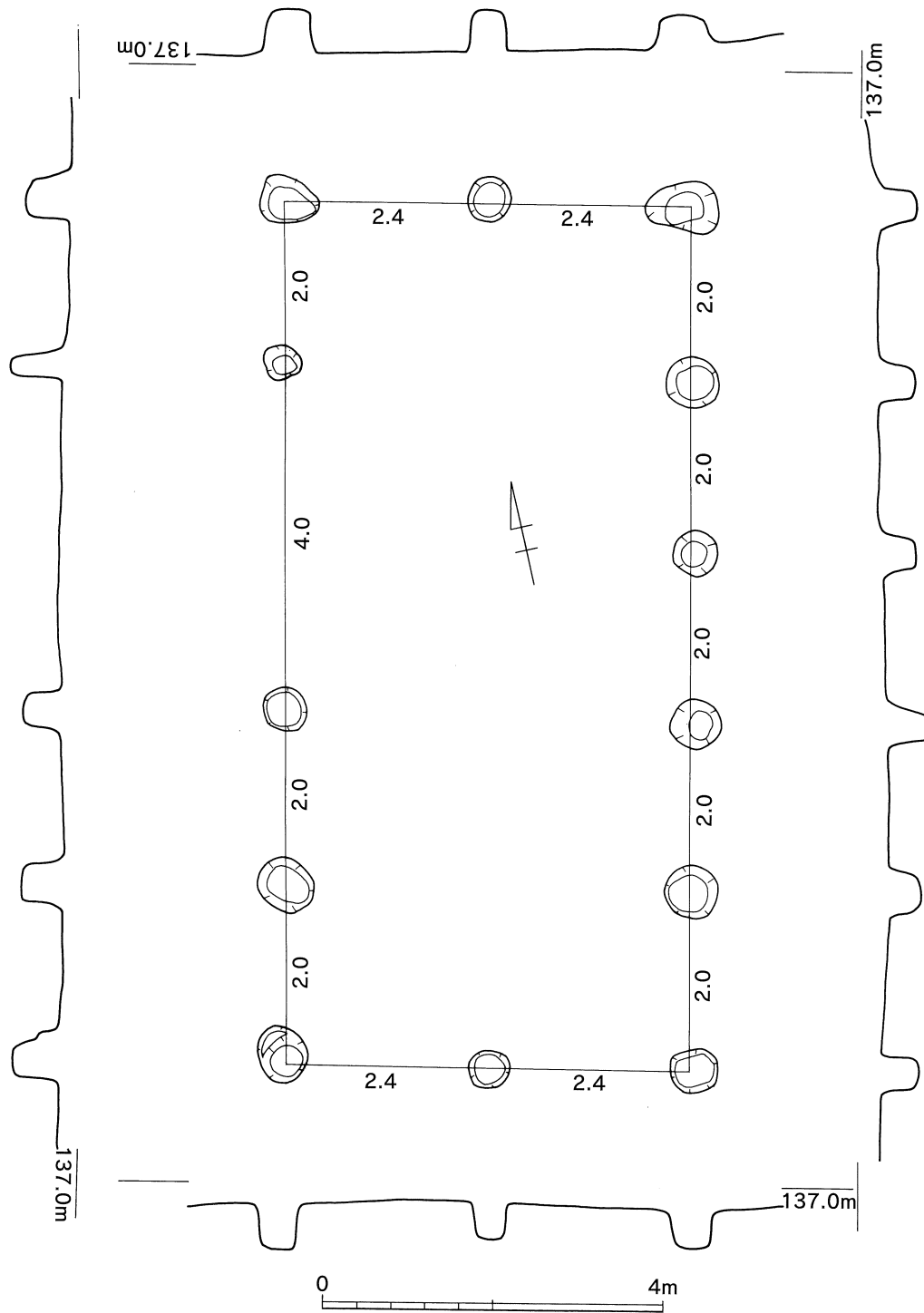
調査区の南東端に存在し、南側は調査区外に延びる。建物方位はN-21°-Eであり、規模は梁間1間(4.0m)、桁行3間(6.2m)と、南北に長い。身舎面積は24.8㎡を測る。

24号掘立柱建物 (第278図)

調査区の南西端に存在し、南側の南西端柱穴は調査区外に延びる。建物方位はN-15°-Eであり、規模は梁間1間(4.2m)、桁行3間(6.4m)と、南北に長い。身舎面積は26.9㎡を測る。

25号掘立柱建物 (第279図)

調査区の中央に存在し、27・28号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-16°-Eであり、規模は梁間1間(3.5~3.8m)、桁行2間(4.0m)と、東西に長い。身舎面積は14.6㎡を測る。



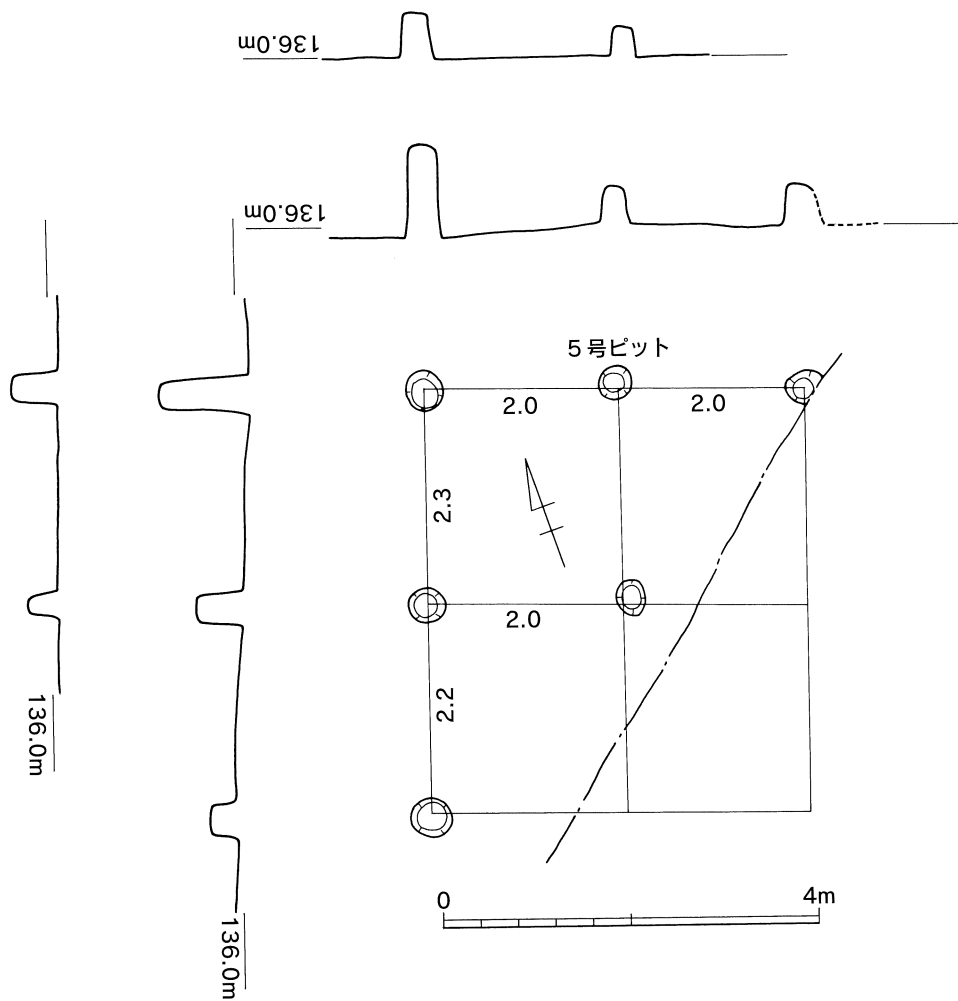
第269図 高添遺跡土木園地区2次調査区15号掘立柱建物実測図 (1/80)

26号掘立柱建物 (第280図)

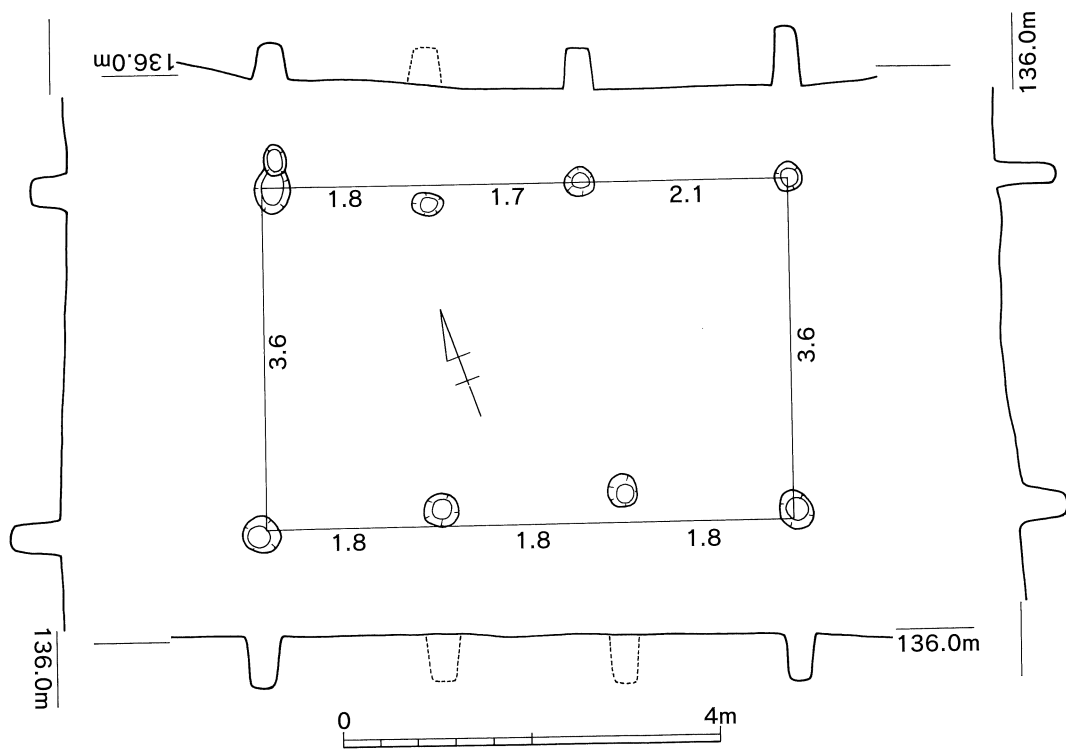
調査区の中央に存在し、28号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-21° -Eであり、規模は梁間1間 (3.6~4.0m)、桁行2間 (3.8m)、身舎面積は14.4m²を測る。

27号掘立柱建物 (第281図)

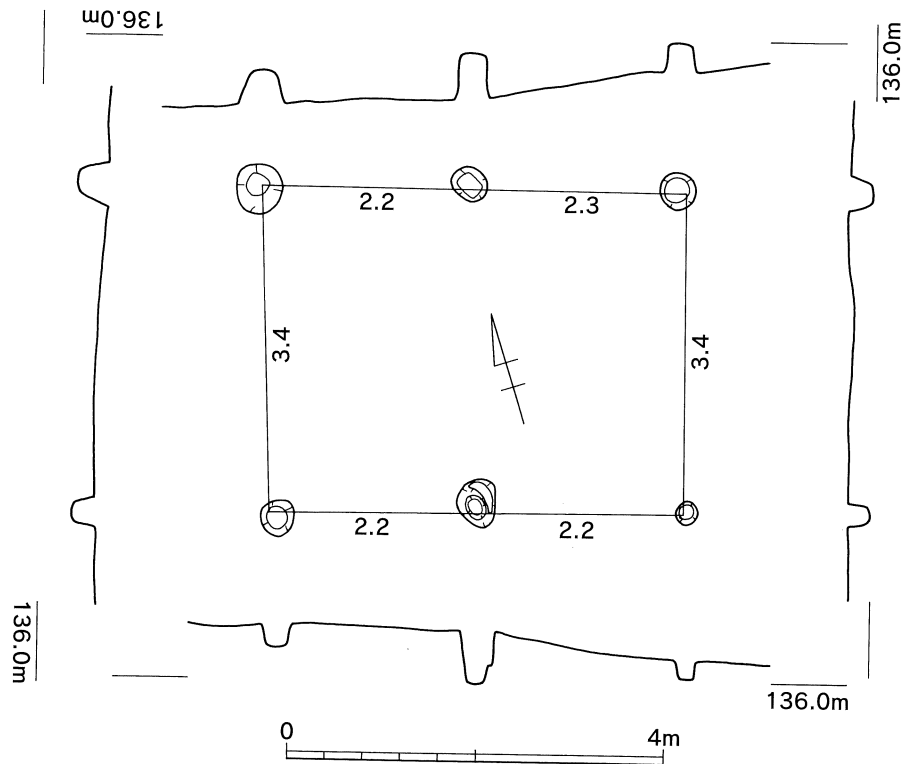
調査区の中央に存在し、25・28号掘立柱建物と重複する。建物方位はN-14° -Eであり、規模は梁間1間 (3.8m)、桁行3間 (6.3m) と、東西に長い。身舎面積は23.9m²を測る。



第270図 高添遺跡土木園地区2次調査区16号掘立柱建物実測図 (1/80)



第271図 高添遺跡土木園地区2次調査区17号掘立柱建物実測図 (1/80)



第272図 高添遺跡土木園地区2次調査区18号掘立柱建物実測図 (1/80)

28号掘立柱建物 (第282図)

調査区の中央に存在し、25・26・27号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-20^{\circ}-E$ であり、規模は梁間1間(4.6m)、桁行3間(6.2~6.3m)と、東西に長い。身舎面積は $29.0m^2$ を測る。

29号掘立柱建物 (第283図)

調査区の南西隅に存在し、南西側は調査区外に延びる。4・30号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-22^{\circ}-E$ であり、規模は梁間1間(3.0m)以上、桁行3間(5.3m)と、東西に長い。

30号掘立柱建物 (第284図)

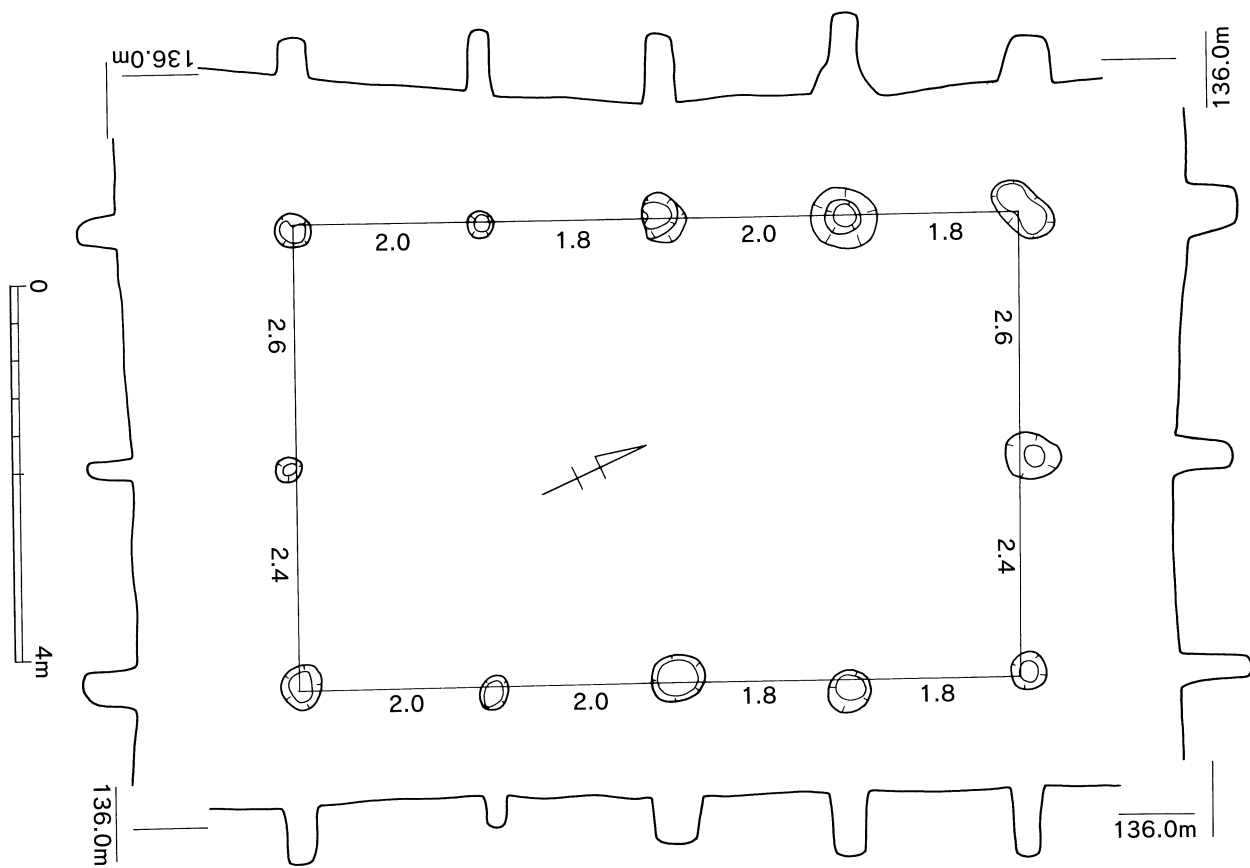
調査区の南西隅に存在し、南側は調査区外に延びる。4・5・29号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-5^{\circ}-E$ であり、規模は梁間1間(5.0m)、桁行3間(2.4~m)以上と、南北に長い。

31号掘立柱建物 (第285図)

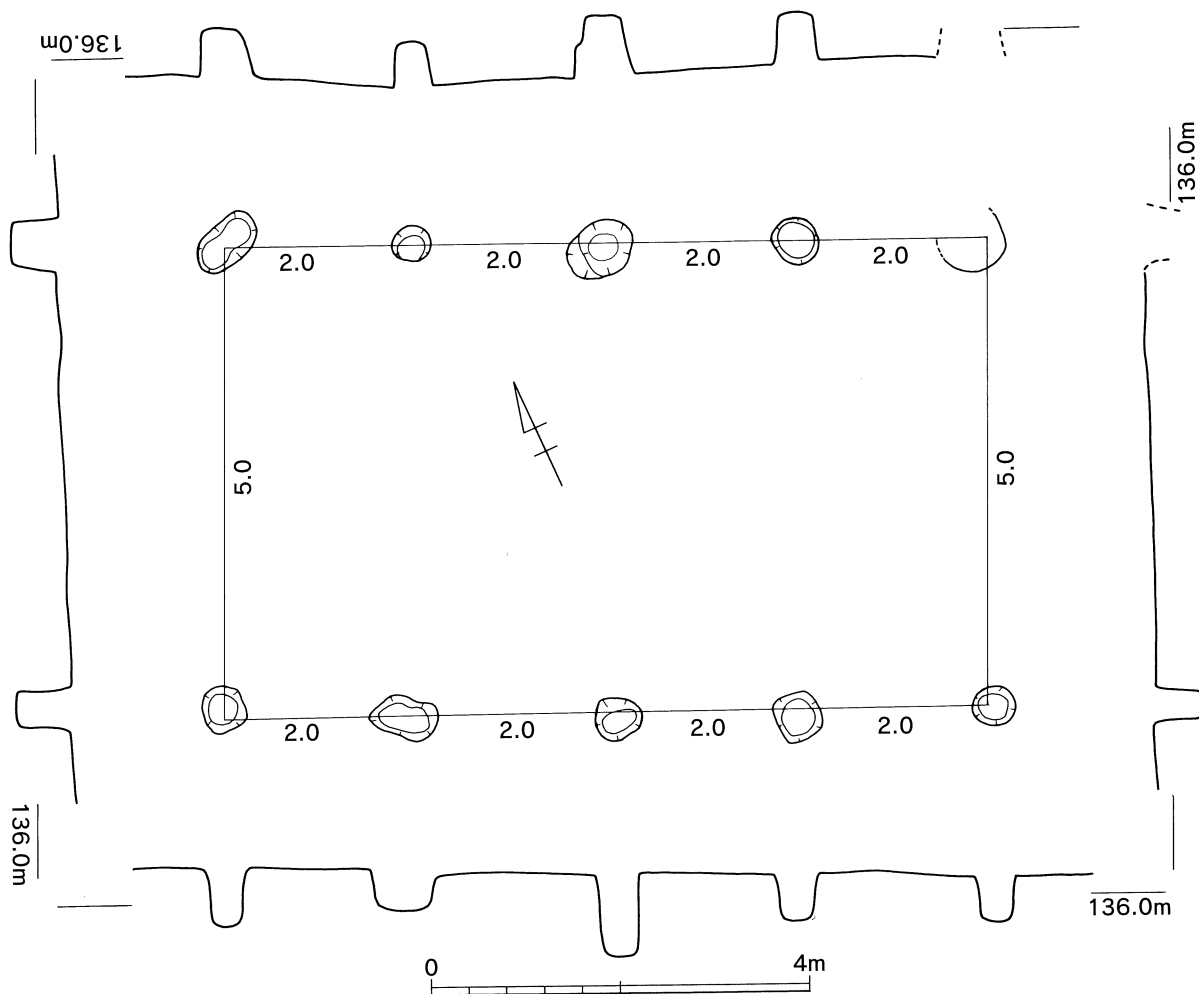
調査区の南西隅に存在し、東側は調査区外に延びる。2・3・32号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-10^{\circ}-E$ であり、規模は桁行2間(2.4~m)で梁間は調査区外に延びるため明らかでない。

32号掘立柱建物 (第286図)

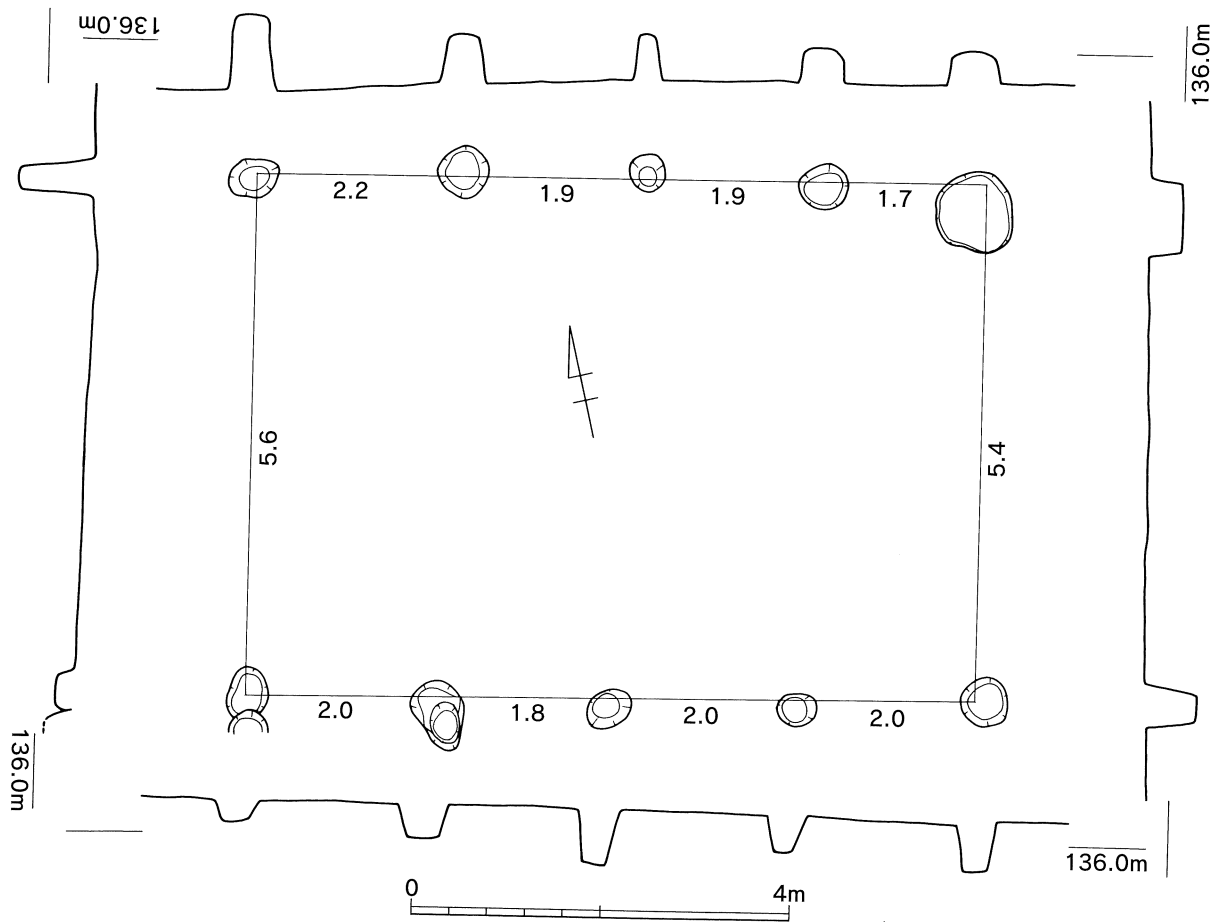
調査区の南西隅に存在し、西側は調査区外に延びる。2・3・31号掘立柱建物と重複する。建物方位は $N-10^{\circ}-E$ であり、規模は桁行2間(4.6m)で梁間は調査区外に延びるため明らかでない。



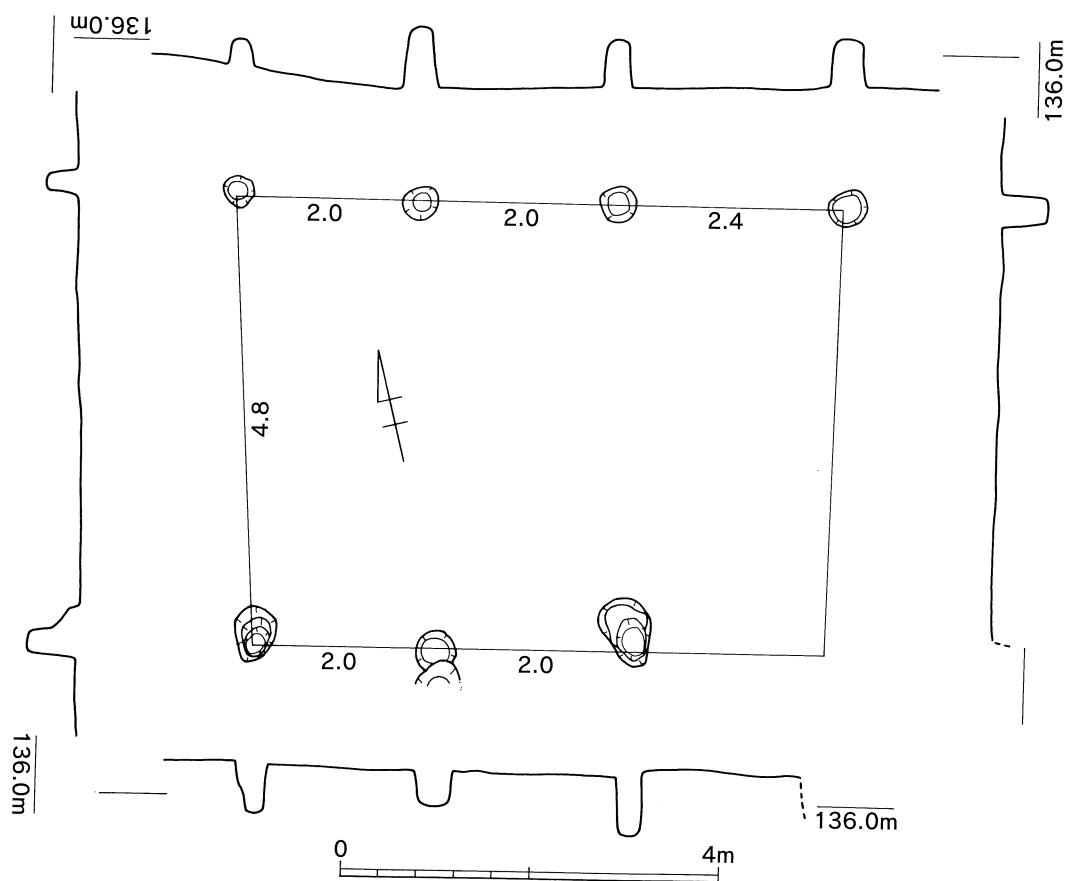
第273图 高添遺跡土木園地区2次調査区19号掘立柱建物実測図 (1/80)



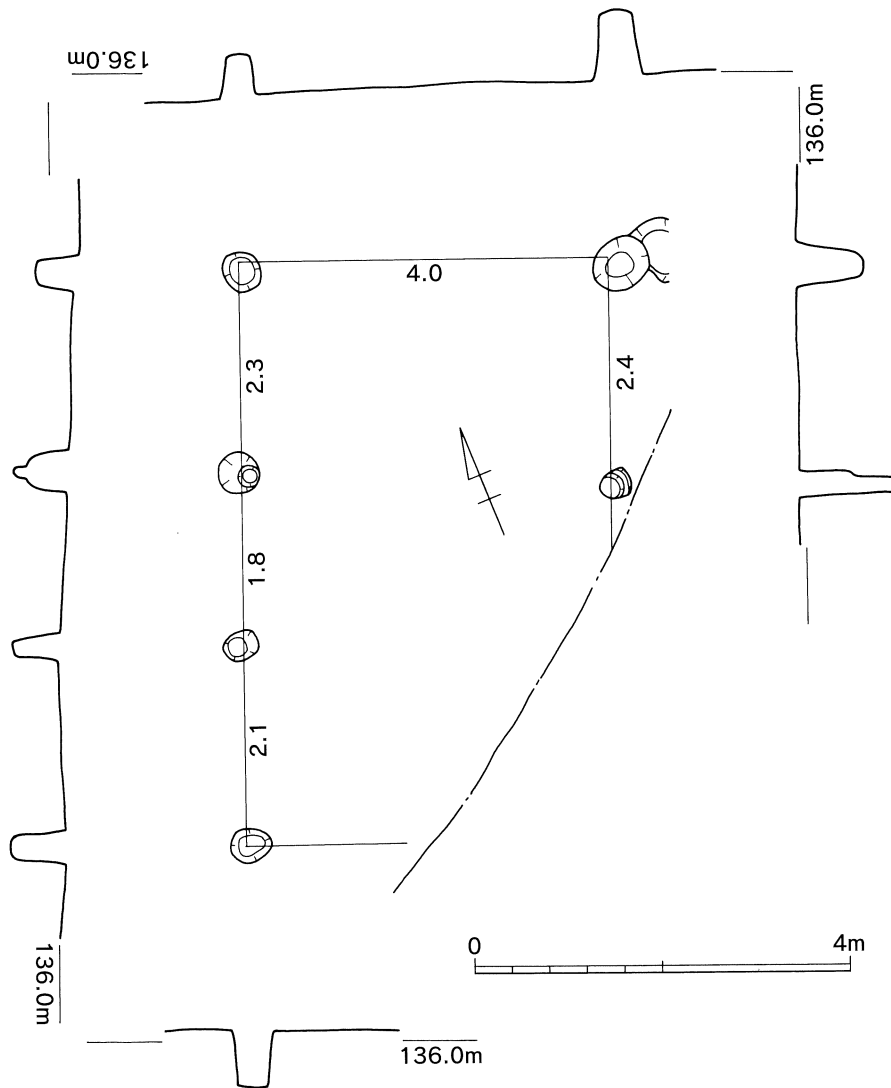
第274图 高添遺跡土木園地区2次調査区20号掘立柱建物実測図 (1/80)



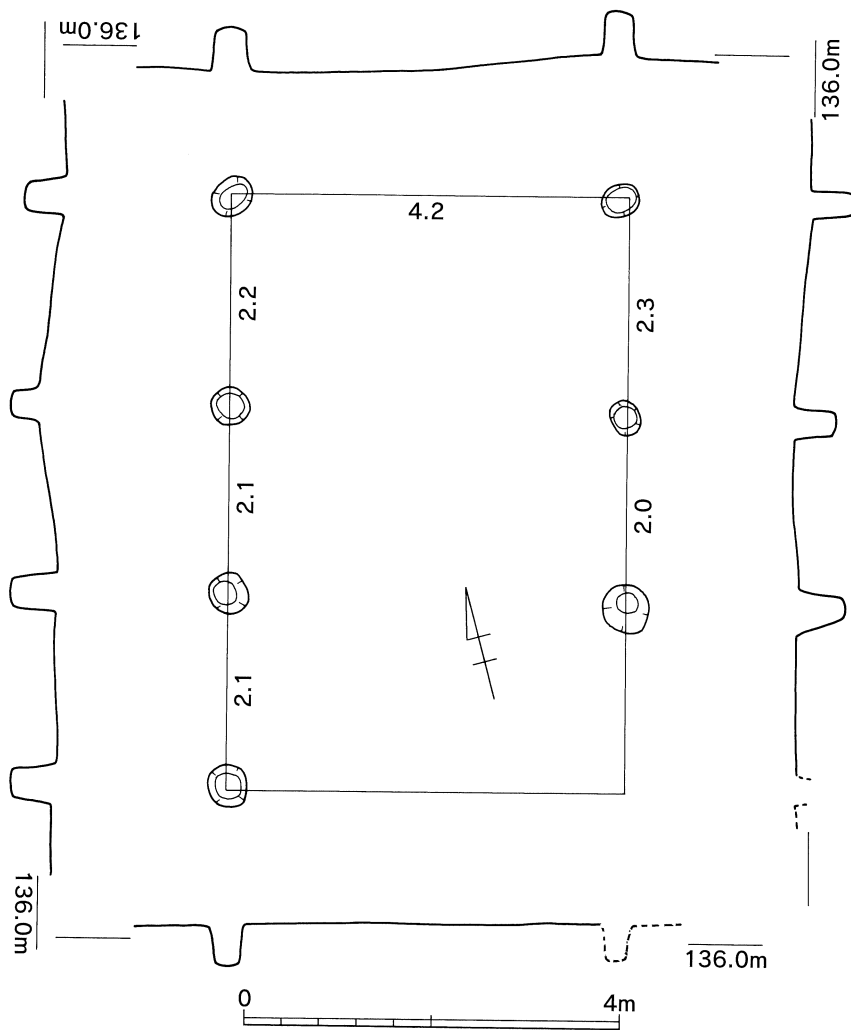
第275图 高添遺跡土木園地区2次調査区21号掘立柱建物実測図 (1/80)



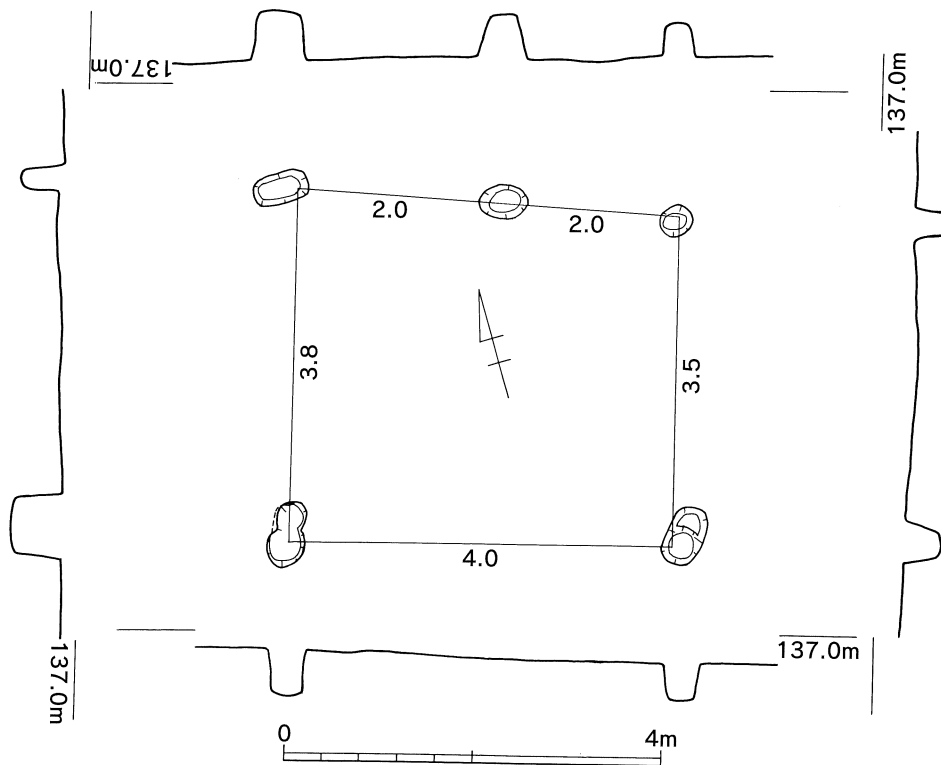
第276图 高添遺跡土木園地区2次調査区22号掘立柱建物実測図 (1/80)



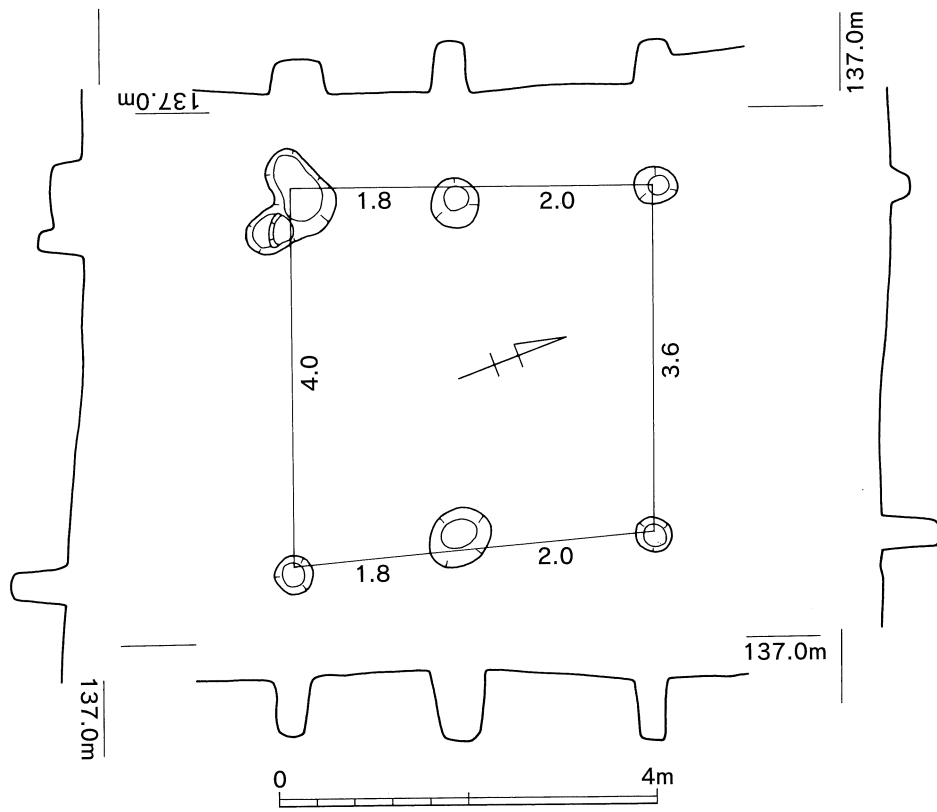
第277图 高添遺跡土木園地区2次調査区23号掘立柱建物実測図 (1/80)



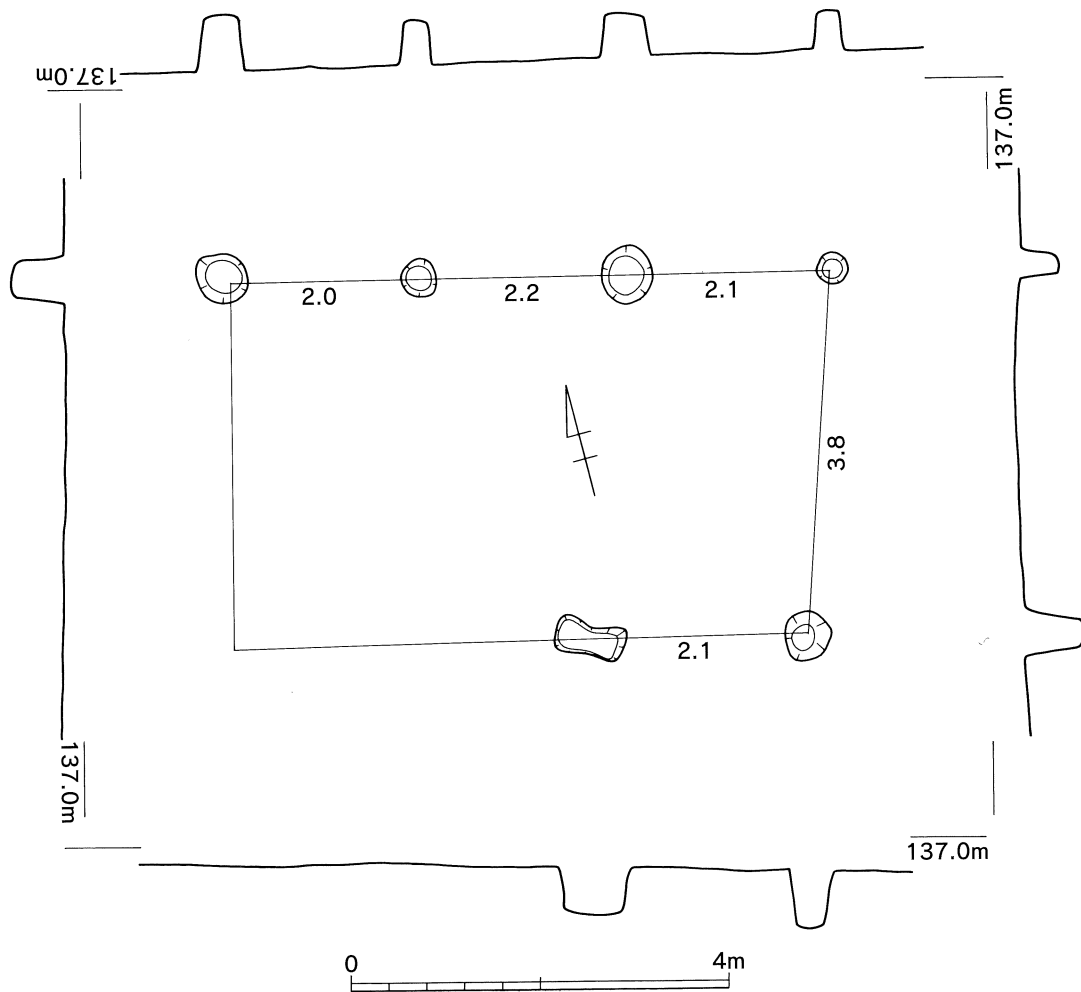
第278图 高添遺跡土木園地区2次調査区24号掘立柱建物実測図 (1/80)



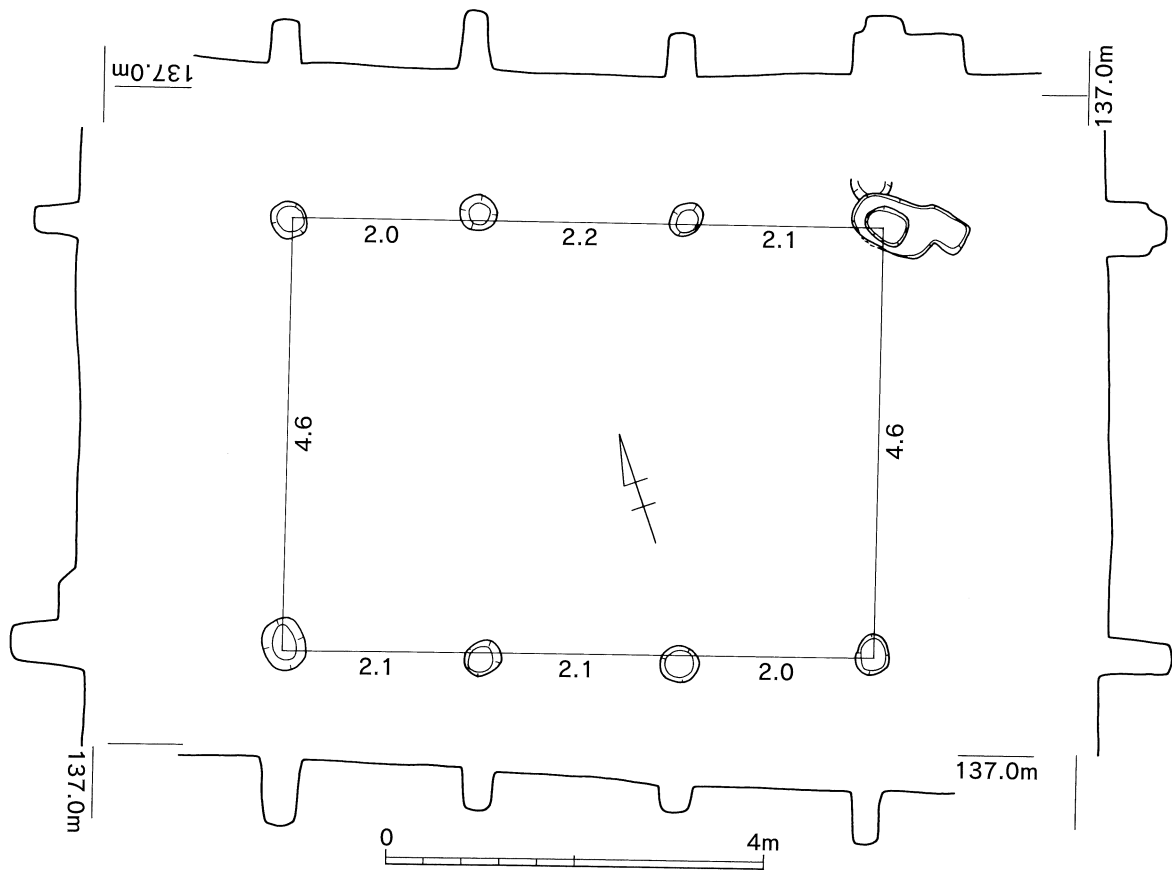
第279图 高添遺跡土木園地区2次調査区25号掘立柱建物実測図 (1/80)



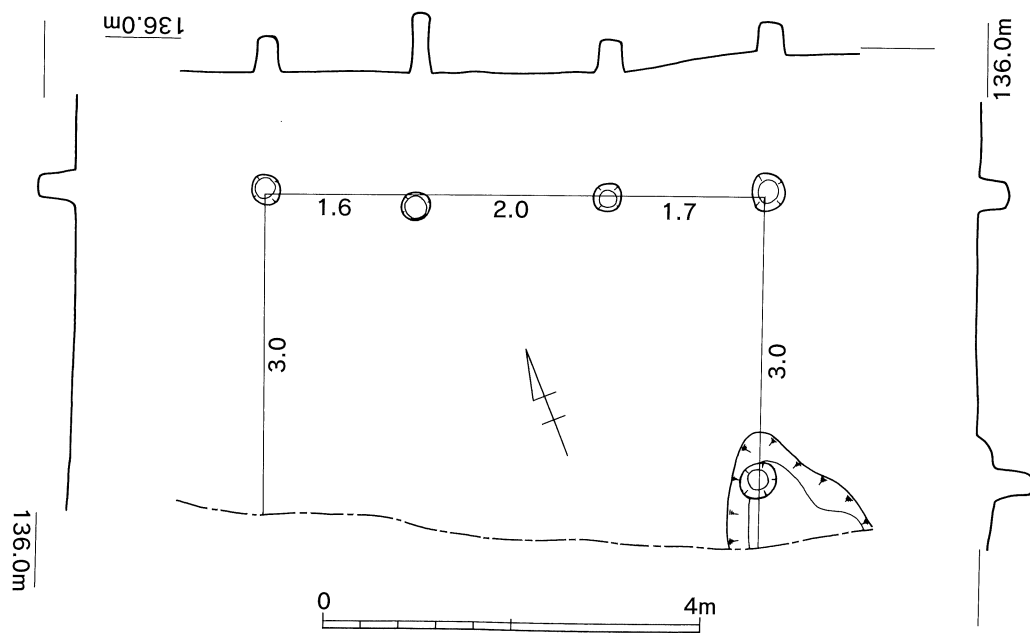
第280図 高添遺跡土木園地区2次調査区26号掘立柱建物実測図 (1/80)



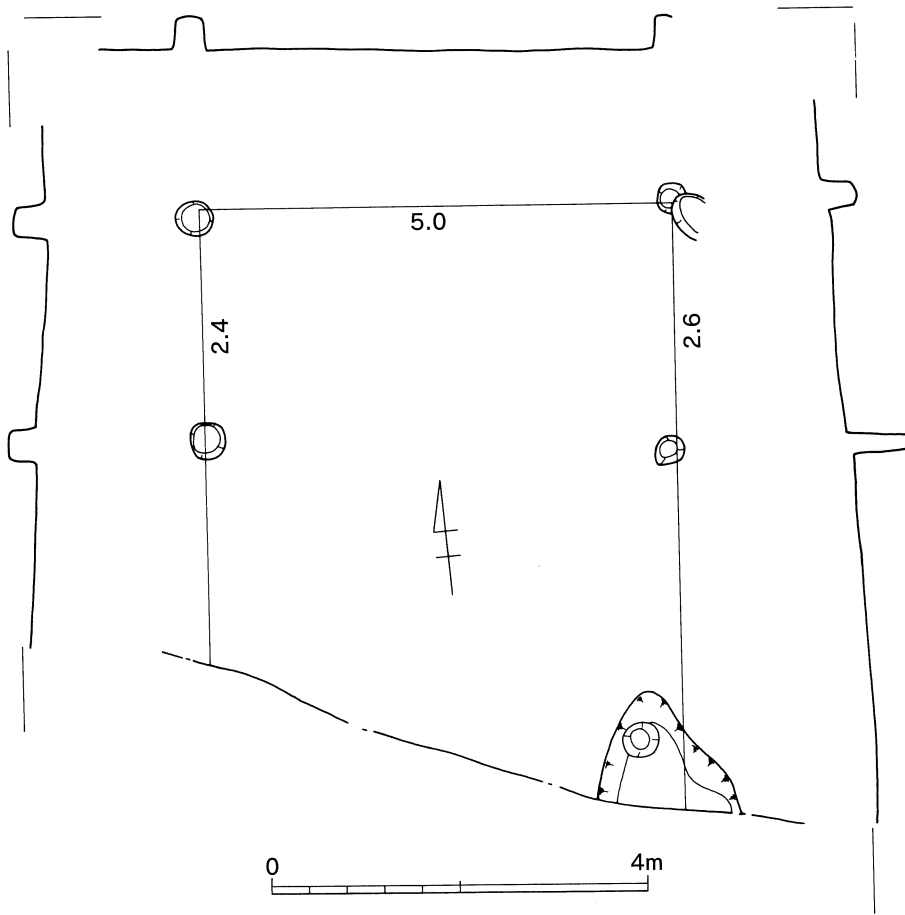
第281図 高添遺跡土木園地区2次調査区27号掘立柱建物実測図 (1/80)



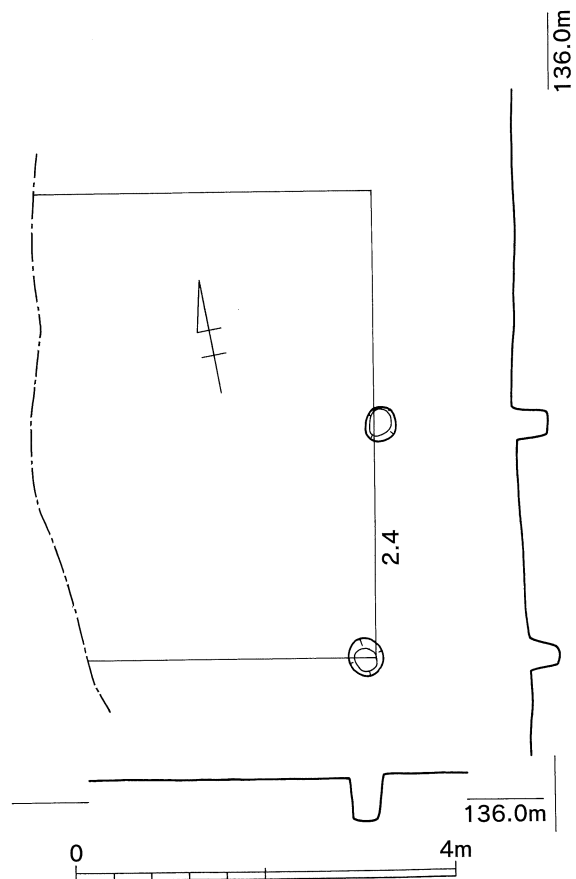
第282図 高添遺跡土木園地区2次調査区28号掘立柱建物実測図 (1/80)



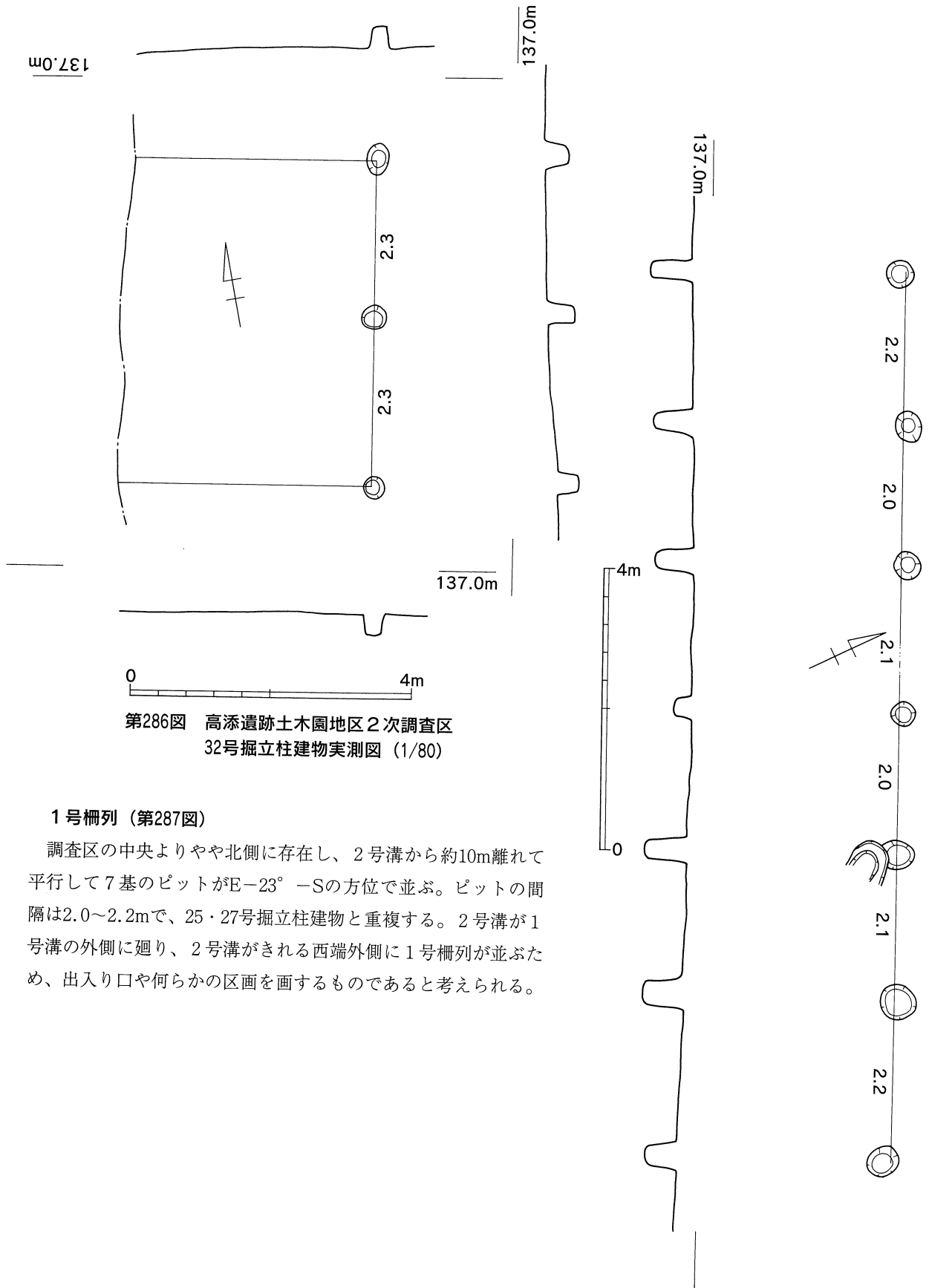
第283図 高添遺跡土木園地区2次調査区29号掘立柱建物実測図 (1/80)



第284图 高添遺跡土木園地区2次調査区30号掘立柱建物実測図 (1/80)



第285图 高添遺跡土木園地区2次調査区31号掘立柱建物実測図 (1/80)



第286図 高添遺跡土木園地区2次調査区
32号掘立柱建物実測図 (1/80)

1号柵列 (第287図)

調査区の中央よりやや北側に存在し、2号溝から約10m離れて平行して7基のピットがE-23°-Sの方位で並ぶ。ピットの間隔は2.0~2.2mで、25・27号掘立柱建物と重複する。2号溝が1号溝の外側に廻り、2号溝がきれる西端外側に1号柵列が並ぶため、出入口や何らかの区画を画するものであると考えられる。

第287図 高添遺跡土木園地区2次調査区
1号柵列実測図 (1/80)

第6表 高添遺跡土木園地区2次調査区掘立柱建物一覽表

遺構名	梁間	桁行	面積	建物方位
1号掘立柱建物	1間 (3.0m)	3間 (5.4m)	16.2m ²	N-25° -E
2号掘立柱建物	1間 (3.8m)	2間 (3.8m)	14.4m ²	N-21° -E
3号掘立柱建物	1間 (3.0m)	2間 (3.8m)	11.4m ²	N-17° -E
4号掘立柱建物	1間 (4.0m)	3間 (6.0m)	24.0m ²	N-13° -E
5号掘立柱建物	2間 (5.2m)	3間 (6.3m)	32.8m ²	N-12° -E
6号掘立柱建物	1間 (3.0m)	2間 (3.6m)	10.8m ²	N-14° -E
7号掘立柱建物	1間 (4.8m)	3間 (5.8m)	27.8m ²	N-13° -E
8号掘立柱建物	2間 (5.55~5.8m)	3間 (7.9~8.2m)	45.7m ²	N-10° -E
9号掘立柱建物	2間 (4.8~5.0m)	3間 (6.8~7.0m)	33.8m ²	N-12° -E
10号掘立柱建物	2間 (6.0~6.1m)	4間 (8.0m)	48.4m ²	N-13° -E
11号掘立柱建物	1間 (4.9m)	4間 (7.7~7.8m)	38.0m ²	N-11° -E
12号掘立柱建物	1間 (3.8m)	2間 (5.0m)	19.0m ²	N-13° -E
13号掘立柱建物	1間 (3.8m)	2間 (4.0m)	15.2m ²	N-12° -E
14号掘立柱建物	1間 (4.4m)	2間 (4.0m)	17.6m ²	N-17° -E
15号掘立柱建物	2間 (4.8m)	5間 (10.0m)	48.0m ²	N-13° -E
16号掘立柱建物	2間 (4.5m)	2間 (4.0m)	18.0m ²	N-18° -E
17号掘立柱建物	1間 (3.6m)	3間 (5.4~5.6m)	19.8m ²	N-20° -E
18号掘立柱建物	1間 (3.4m)	3間 (4.4~4.5m)	15.1m ²	N-18° -E
19号掘立柱建物	2間 (5.0m)	4間 (7.6m)	38.0m ²	N-25° -E
20号掘立柱建物	1間 (5.0m)	4間 (8.0m)	40.0m ²	N-24° -E
21号掘立柱建物	1間 (5.4~5.6m)	4間 (7.7~7.8m)	42.6m ²	N-13° -E
22号掘立柱建物	1間 (4.8m)	3間 (6.4m)	30.7m ²	N-14° -E
23号掘立柱建物	1間 (4.0m)	3間 (6.2m)	24.8m ²	N-21° -E
24号掘立柱建物	1間 (4.2m)	3間 (6.4m)	26.9m ²	N-15° -E
25号掘立柱建物	1間 (3.5~3.8m)	2間 (4.0m)	14.6m ²	N-16° -E
26号掘立柱建物	1間 (3.6~4.0m)	2間 (3.8m)	14.4m ²	N-21° -E
27号掘立柱建物	1間 (3.8m)	3間 (6.3m)	23.9m ²	N-14° -E
28号掘立柱建物	1間 (4.6m)	3間 (6.2~6.3m)	29.0m ²	N-20° -E
29号掘立柱建物	1間 (3.0m) 以上	3間 (5.3m)	—	N-22° -E
30号掘立柱建物	1間 (5.0m)	3間 (2.4m~)	—	N-5° -E
31号掘立柱建物	—	2間 (2.4m~)	—	N-10° -E
32号掘立柱建物	—	2間 (4.6m)	—	N-10° -E

1号地下式墳（第288図）

調査区南側において検出された。竪坑部は北側にみられる。天井部の陥没のため、形態が著しく壊れているが、楕円形の平面形を呈していたことが想定できる。検出面から主室の底までの深さは4.8mを測る。

出土遺物は第289図に示した。1は土師質土器坏であり、内面につよいロクロ目を残している。2は結晶片岩製の砥石であり、方柱状の4面を砥面として利用している。

2号地下式墳（第290図）

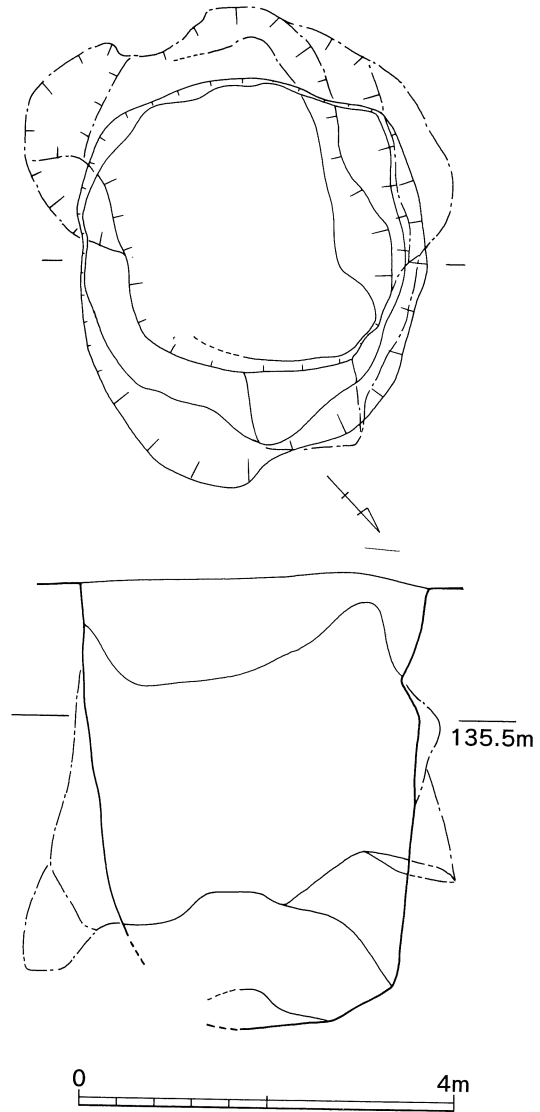
調査区西側において検出された。竪坑部は北東側にみられる。平面形が奥行2.9m、横幅3.8mの横楕円形を呈しており、南東壁下端には横20cm、高さ28cm、奥行き25cm程度の小穴が穿たれている。検出面から主室の底までの深さは2.0mを測る。天井部は陥没しているが、ドーム状を呈していたことが想定できる。

出土遺物は第291・292図に示した。第291図1・2は土師質土器皿である。1は強く逆「ハ」の字状に開き、内面に強いロクロ目を残す。3は備前系焼締陶器播鉢であり、乗岡編年中世VIa期（乗岡実「備前焼播鉢の編年案」『第3回中近世備前焼研究会資料』2000）に属するものである。4は土錘である。5は瓦質土器火鉢である。6は備前系焼締陶器甕である。

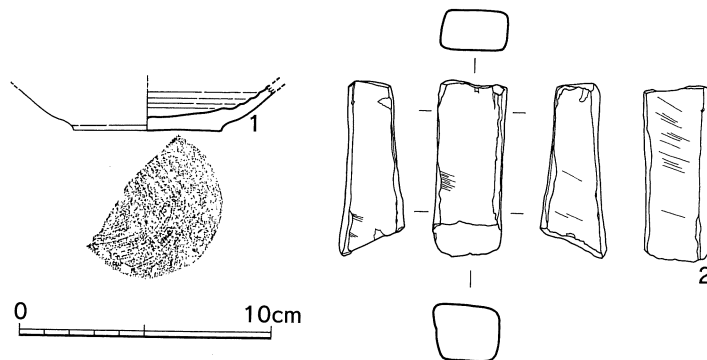
第292図は無文銭である。径2.3cmを測る。

3号地下式墳（第293図）

調査区中央において検出された。竪坑部は南側にみられる。平面形が奥行1.6～2.2m、横幅3.8mの横長方形を呈しており、さらに西側を80cm程度拡幅している。検出面から主室の底までの深さは2.6mを測る。6号地下式墳と



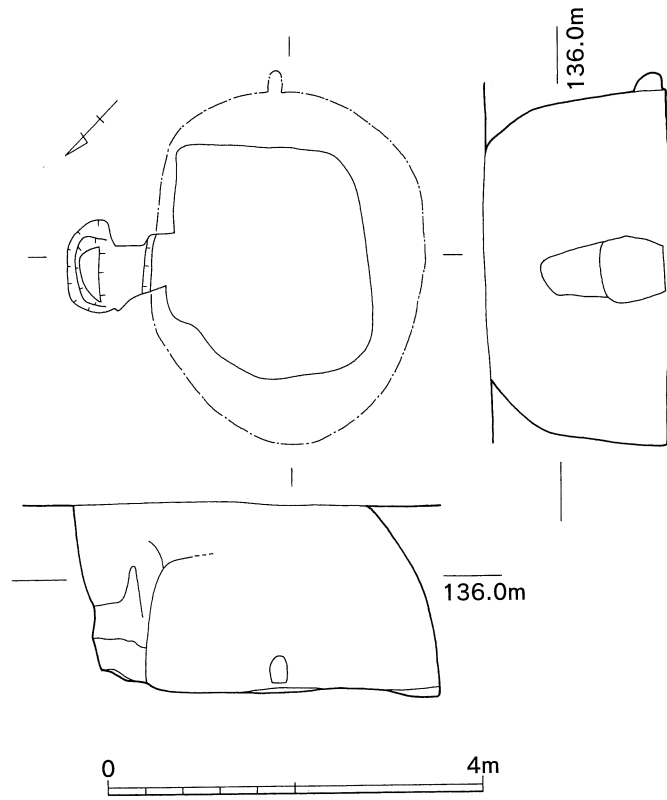
第288図 高添遺跡土木園地区2次調査区
1号地下式墳実測図（1/80）



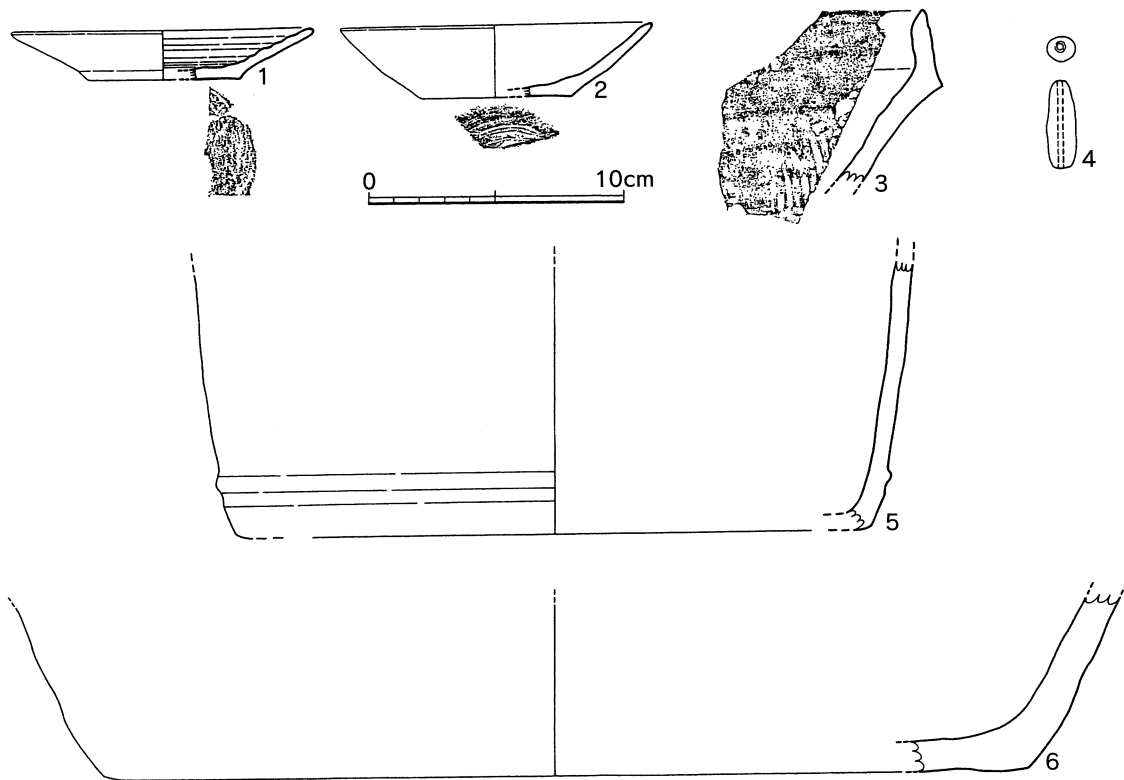
第289図 高添遺跡土木園地区2次調査区1号地下式墳出土遺物実測図（1/3）

ともにオープンカットの地下式墳であると考えられる。主室内には埋土が流れ込んでおり、この埋土中から多量の遺物が出土している。

出土遺物は第294～296図に示した。第294図は下層出土であり、本来、地下式墳内埋土中に存在していた遺物と認められる。第295・296図は主室内に流れ込んだ埋土の中層から出土したものである。

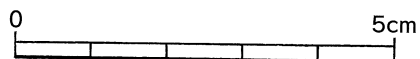
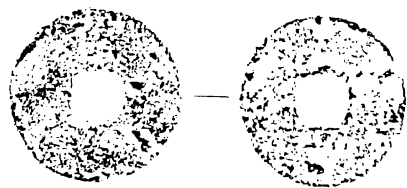


第290図 高添遺跡土木園地区2次調査区2号地下式墳実測図 (1/80)

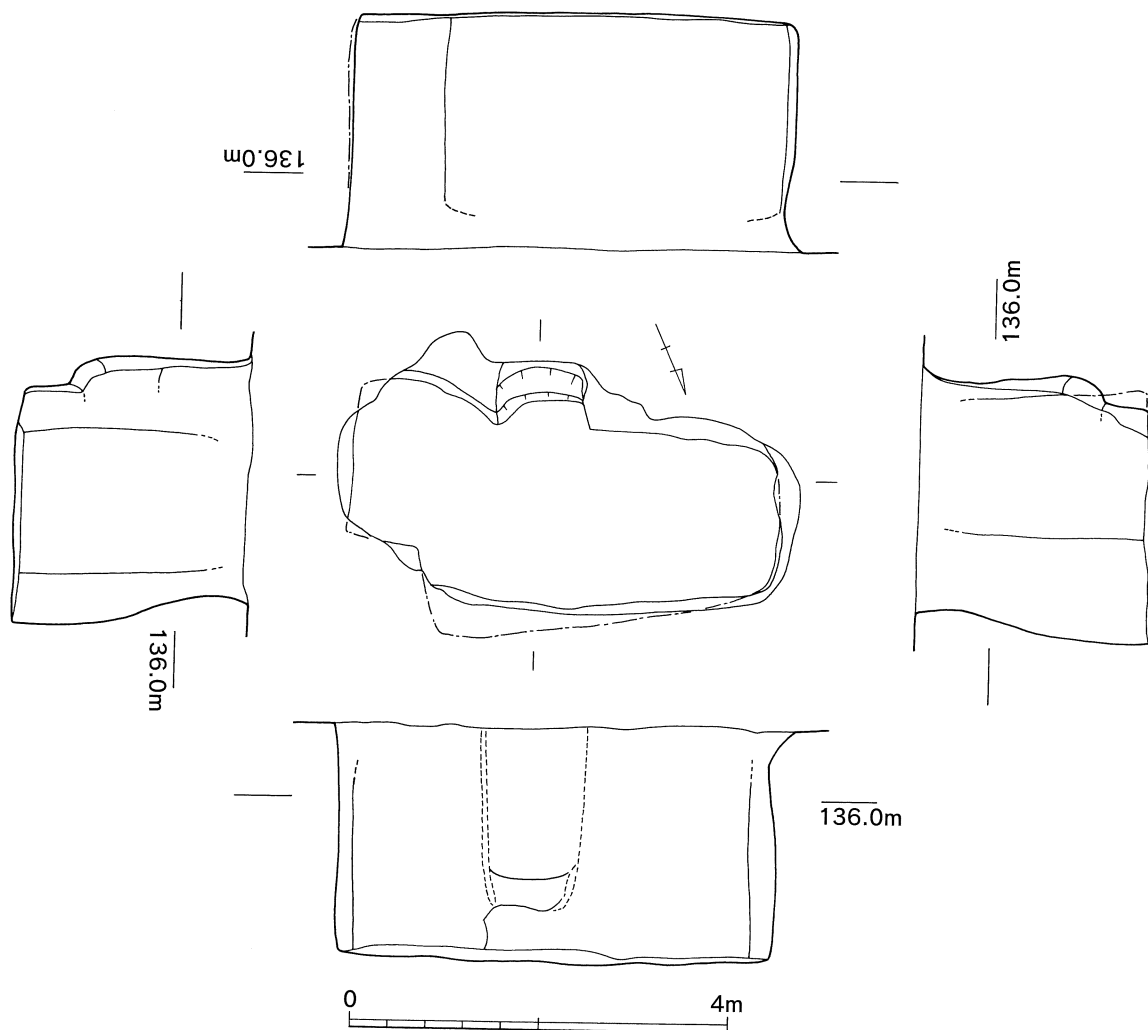


第291図 高添遺跡土木園地区2次調査区2号地下式墳出土遺物実測図① (1/3)

第294図1は龍泉窯系青磁鉢である。口縁部を「く」の字状に屈折して外反させている。内面には鏝を入れている。2・3は龍泉窯系青磁碗であり、2には細弁蓮華文がみられる。4・7・8・18は土師質土器坏である。5・6は漳州窯系青花碗である。9・15は龍泉窯系青磁皿である。腰部でくの字状に折れ、口縁は稜花状を呈する。口縁内面には櫛描波状文が施されている。10・11・12は土師質土器皿である。13は凝灰岩製茶臼の下臼である。臼面は径19cmを測り、分画数は8区画であると考えられ、副溝は5～8条存在していたことがわかる。14は細弁蓮華文をもつ龍泉窯系青磁碗である。見込み部に径2.5cmの露胎部がみられ、ここにスタンプがみられる。



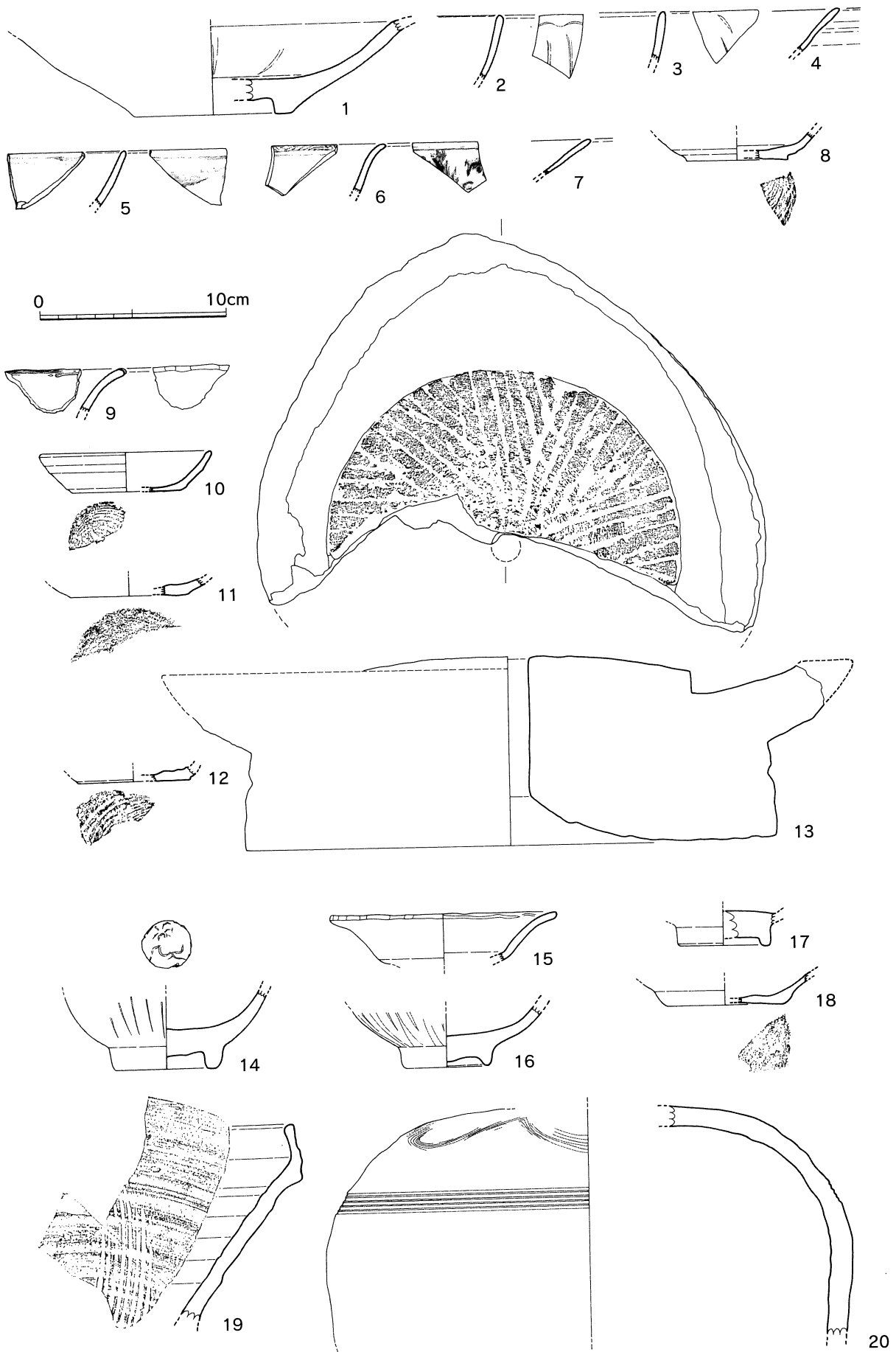
第292図 高添遺跡土木園地区2次調査区2号地下式墳出土遺物実測図② (1/1)



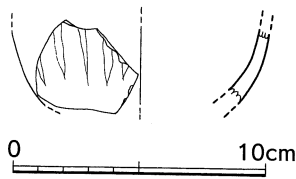
第293図 高添遺跡土木園地区2次調査区3号地下式墳実測図 (1/80)

花文であろうか。16は鏝蓮弁の龍泉窯系青磁碗である。17は龍泉窯系青磁碗の底部片である。19は備前系焼締陶器播鉢であり、乗岡編年中世VIa期（乗岡実2000）に属するものである。20は備前系焼締陶器壺であり、肩部に櫛描直線文と波状文を施している。

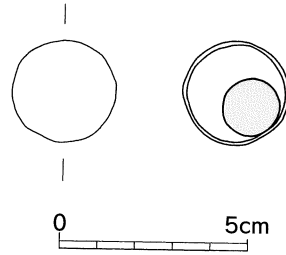
第295図は龍泉窯系青磁碗であり、外面に細弁蓮華文がみえる。第296図は銅製の鈴である。



第294图 高添遺跡土木園地区2次調査区3号地下式墳下層出土遺物実測図 (1/3)



第295図 高添遺跡土木園地区2次調査区3号
地下式墳上中層出土遺物実測図① (1/3)

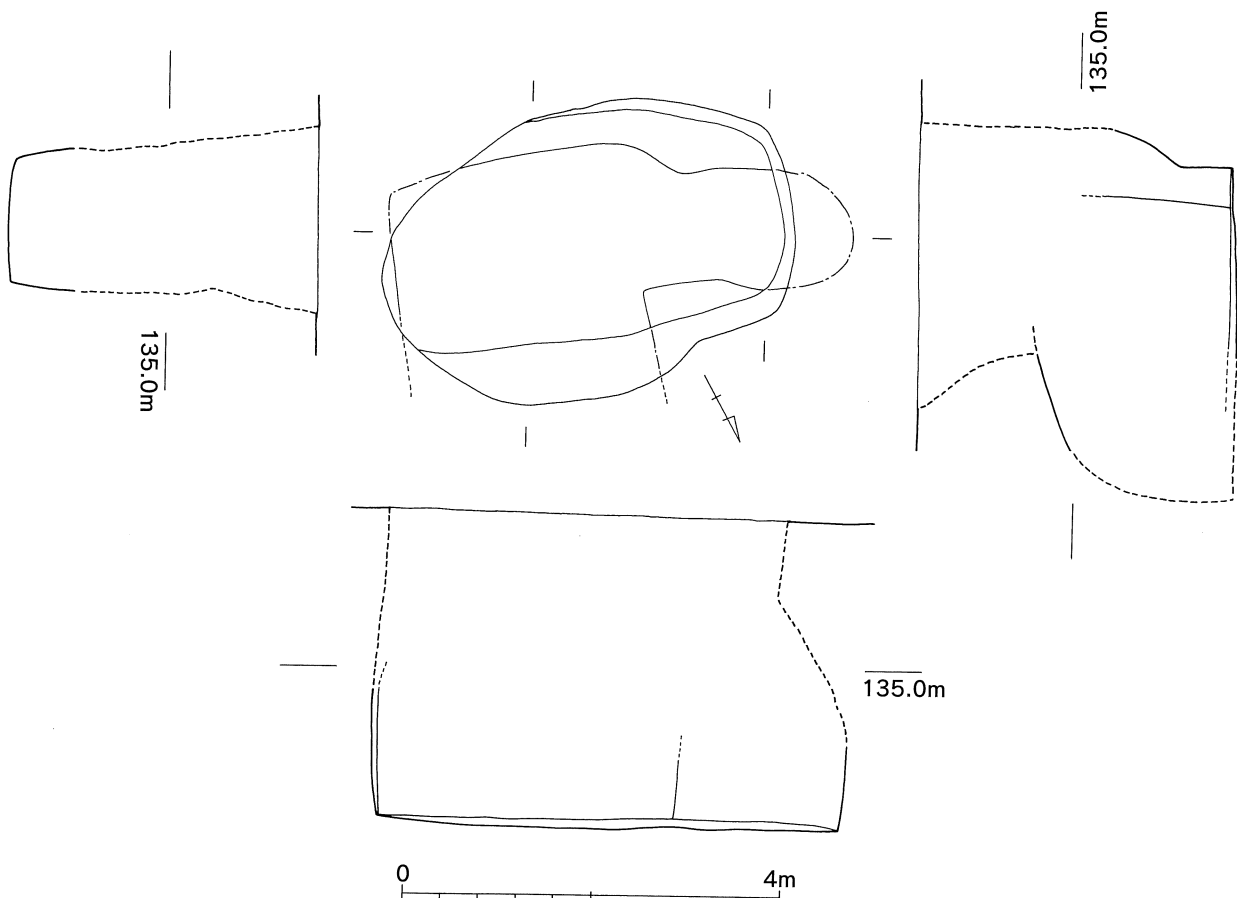


第296図 高添遺跡土木園地区2次調査区3号
地下式墳上中層出土遺物実測図② (1/2)

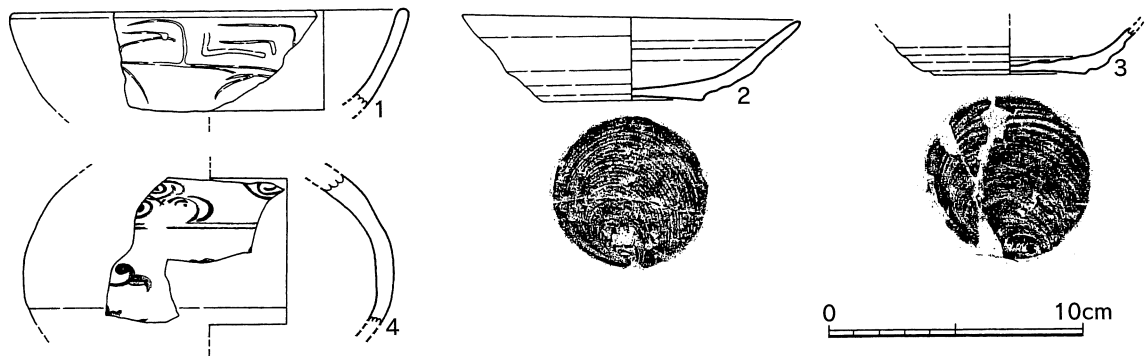
4号地下式墳 (第297図)

調査区の東側において、5号地下式墳に隣接して検出された。竪坑部は西側にみられる。平面形が奥行2.6mの横長方形を呈していたが、北側部分は安全を考慮して、完掘していない。検出面から主室の底までの深さは3.4mを測る。天井が陥没しているが、天井部は丸くドーム状に延びており、側面のカーブから天井部の高さは2m程度であったことが想定できる。天井部が陥没していたため、主室内に埋土が流れ込んでおり、この埋土中から多量の遺物が出土している。また、大型の凝灰岩製の扁平な割石が出土しているが、地下式墳竪坑部の閉塞石として利用されたものと思える。

出土遺物は第298～300図に示した。第298図は下層出土であり、本来、地下式墳内埋土中に存在していた遺物と認められる。第299図は天井部が陥没し、主室内に流れ込んだ埋土の中層から出土したものであり、第300図は



第297図 高添遺跡土木園地区2次調査区4号地下式墳実測図 (1/80)



第298図 高添遺跡土木園地区2次調査区4号地下式墳下層出土遺物実測図 (1/3)

同じく中上層から出土したものである。

第298図1は龍泉窯系青磁碗であり、外面に雷文帯を廻らせている。2・3は土師質土器坏であり、底部が回転糸切りにより切り離されている。内外面に比較的つよいロクロ目を残している。4は中国漳州窯系青花瓶である。

第299図1～4は瓦質火鉢である。1～3の口縁外面には2条の突帯が巡らされており、突帯間には2個1対の雷文帯のスタンプが認められる。5は凝灰岩製の茶臼の皿部片である。

第300図1は唐津産陶器皿である。2は中国産白磁皿であり、口縁端反りの形態をもつ。3は土師質土器皿である。4は陶器瓶の頸部である。内外に施釉されており、発色はオリーブ色を呈する。5は白磁小杯である。畳付けのみ露胎であり内外面および高台内にも施釉されている。6は白磁皿である。腰部が「く」の字状に折れ、反りながら口縁に至る。高台畳付けのみ露胎であとはすべて施釉されている。7は朝鮮王朝産白磁碗である。見込みおよび高台畳付けに砂目が確認できる。破損箇所はウルシ継ぎが施されている。8は褐釉陶器甕であり、内外面に施釉されている。9・11は土師質土器皿であり、底部が回転糸切りにより切り離されている。10は土師質土器皿であり、底部には強い板状圧痕が認められ、外面にはロクロ目が残る。13は備前系焼締陶器皿であり、放射状スリ目にナナメスリ目を付加している。14は瓦質播鉢、15は瓦質火鉢である。

5号地下式墳 (第301図)

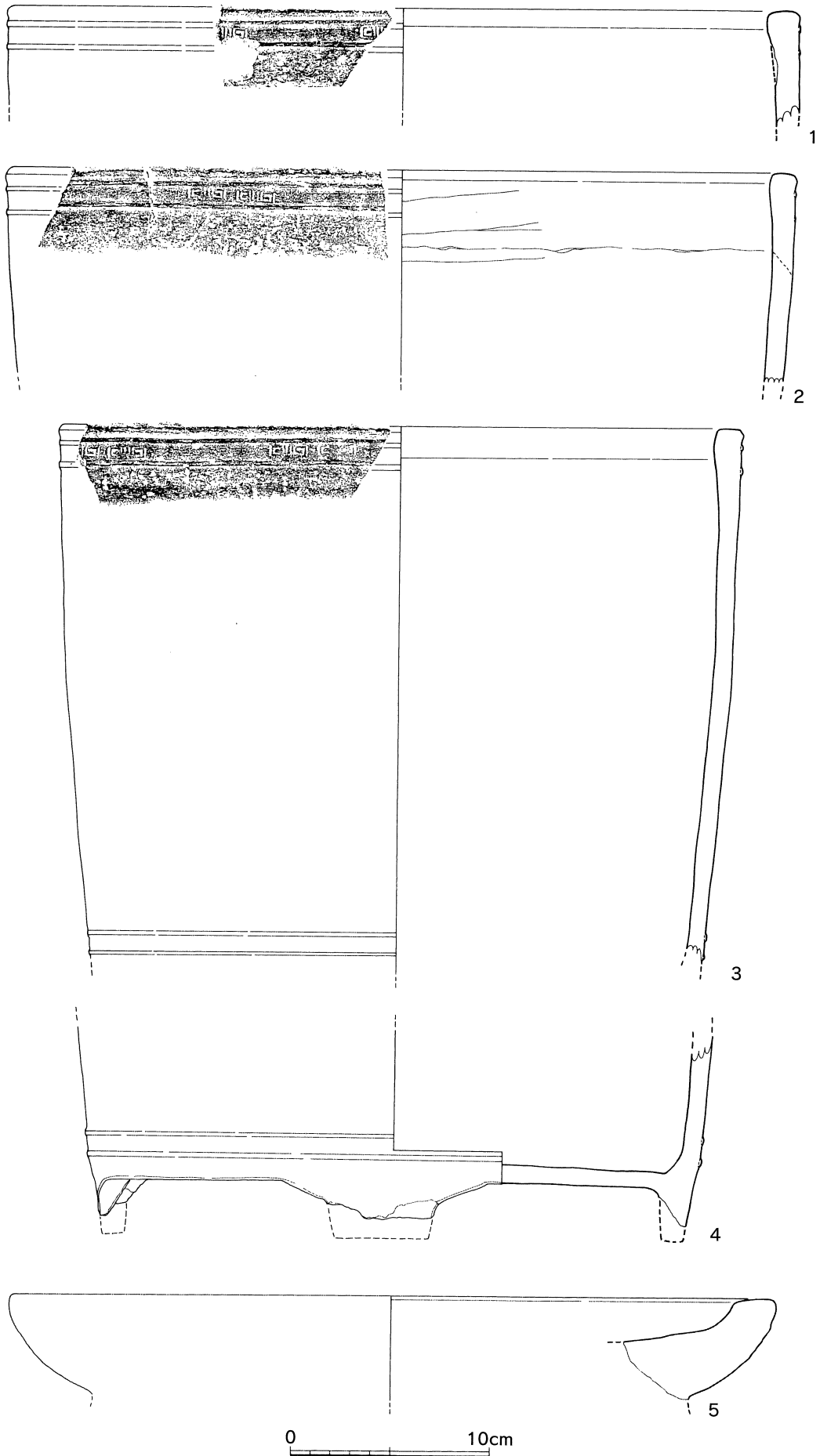
調査区の東側において、4号地下式墳に隣接して検出された。竪坑部は西側にみられ、主室の床面より40cm程度の高さにみられる。平面形が奥行2.4～2.6m、横幅3mの横長方形を呈し、検出面から主室の底までの深さは3.4mを測る。竪坑部は西側にみられ、主室の床面より40cm程度の高さにみられる。天井が陥没しているが、天井部は丸くドーム状に延びており、側面のカーブから天井部の高さは2m程度であったことが想定できる。天井部が陥没していたため、主室内に埋土が流れ込んでおり、この埋土中から多量の遺物が出土している。

出土遺物は第302～305図に示した。

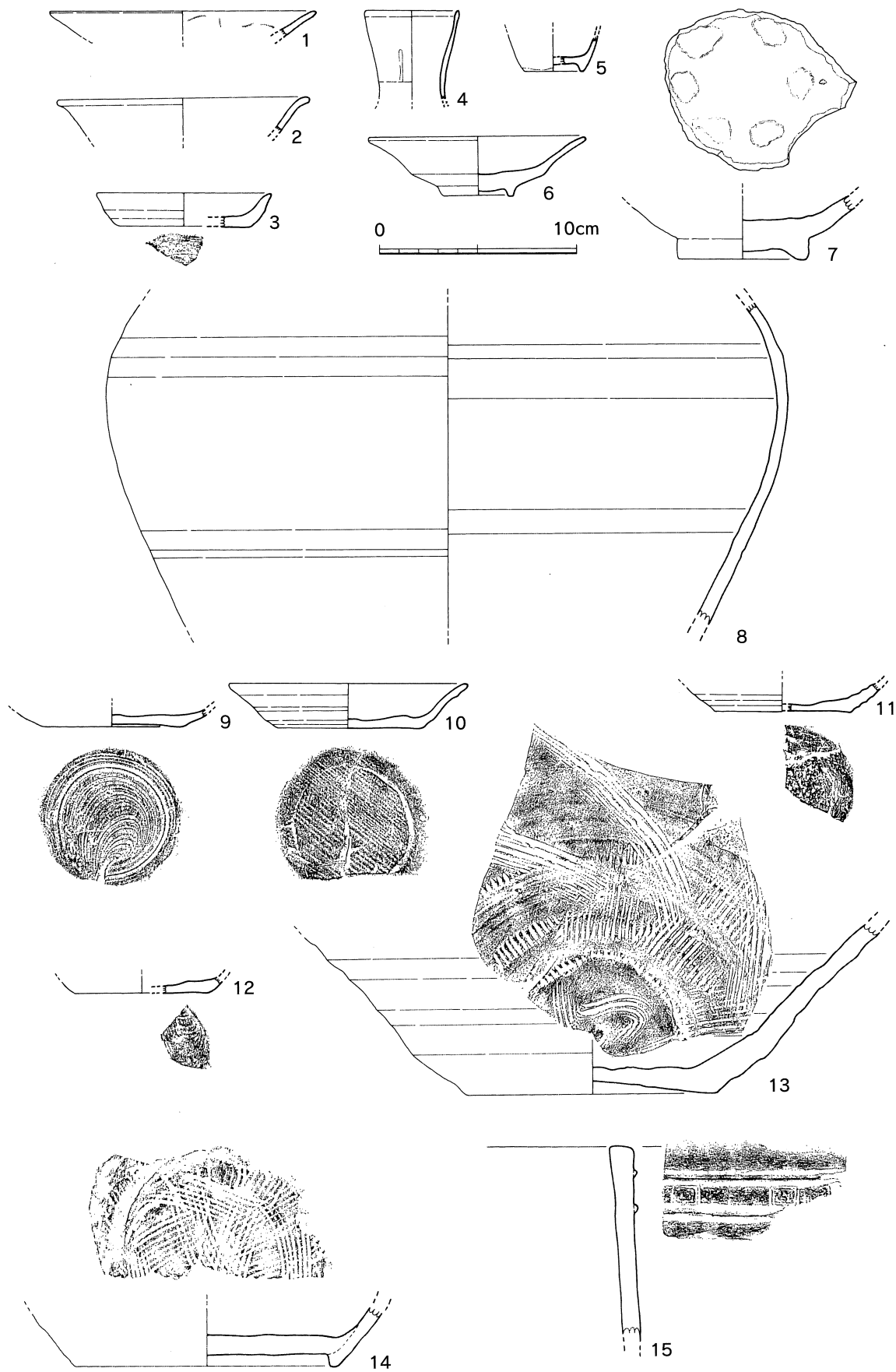
第302図は下層および床面直上から出土したものである。1・2は京都系土師器小皿である。3は土師質土器小皿である。4・5は瓦質土器甕である。6は土師質土器坏である。底部が回転糸切りにより切り離されており、外面下部には強いロクロ目が残る。7は朝鮮王朝産白磁碗である。見込みおよび高台畳付けに4ヶ所の砂目が確認できる。破損箇所はウルシ継ぎが施されている。8は軽石製の環状製品である。径7cm、厚さ2cm、孔径1.8cmを測る。用途は明らかでない。

第303図1は凝灰岩製轆の羽口である。径15cm、長さ24cm、孔径3cmを測り、金属滓が著しく付着している。2は安山岩製石臼の上臼である。径30cm程度であることが想定でき、高さ7.5cmを測る。分画数は8区画で副溝は5～8条存在していたことがわかる。3は凝灰岩製石臼の下臼で、白面の径20cmが想定できる。分画数は8区画であると考えられ、副溝は8条存在していたことがわかる。

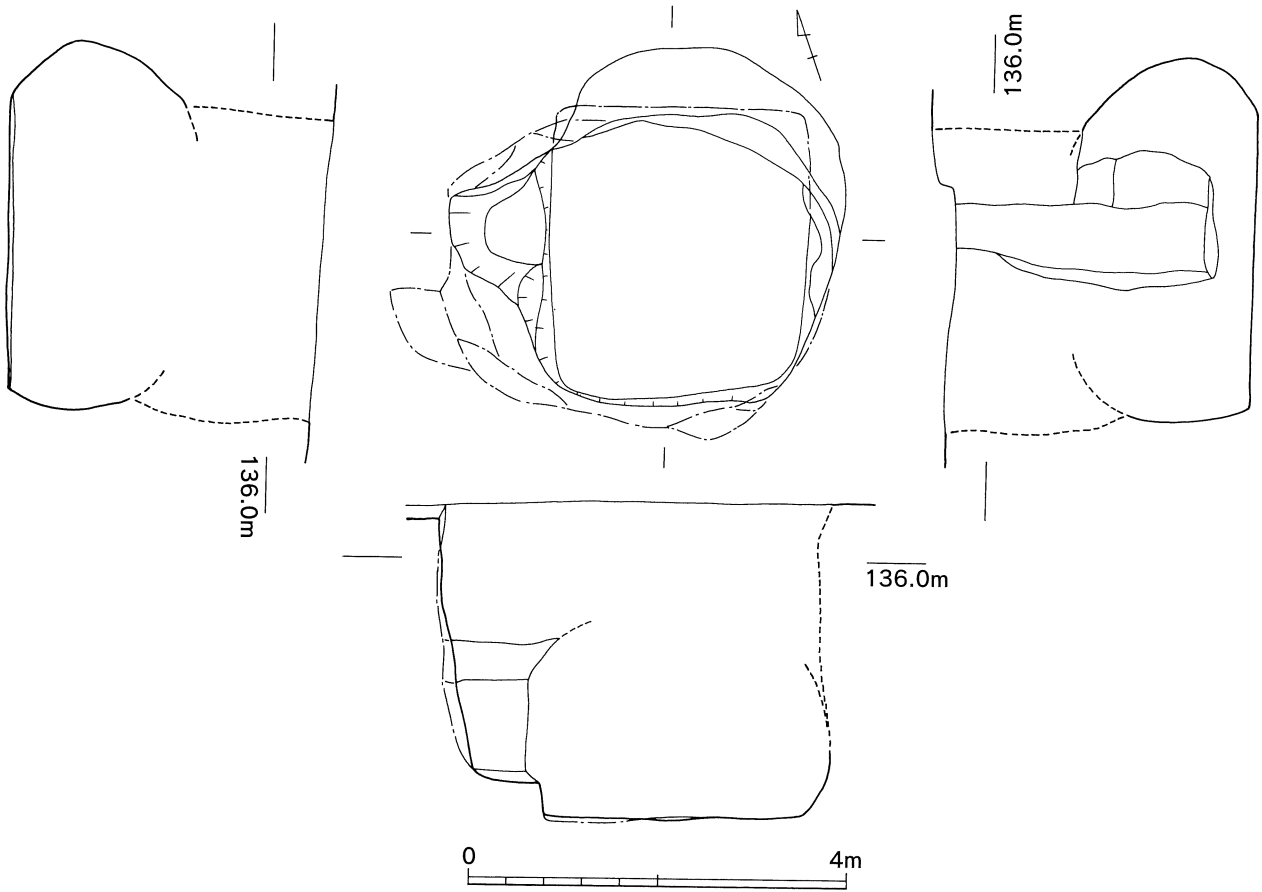
第304図1は径35cm、高さ26cmを測る凝灰岩製五輪塔水輪部である。側面に「バ」の梵字種子が小さく墨書されている。2は幅31cm、高さ13cmを測る凝灰岩製五輪塔地輪部である。



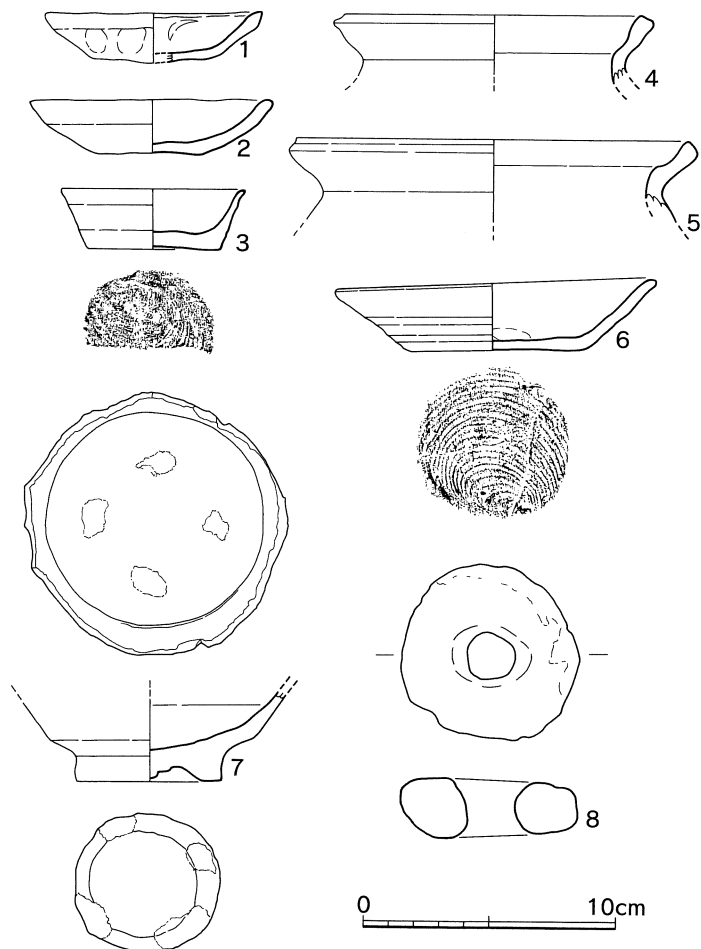
第299図 高添遺跡土木園地区2次調査区4号地下式壙中層出土遺物実測図 (1/3)



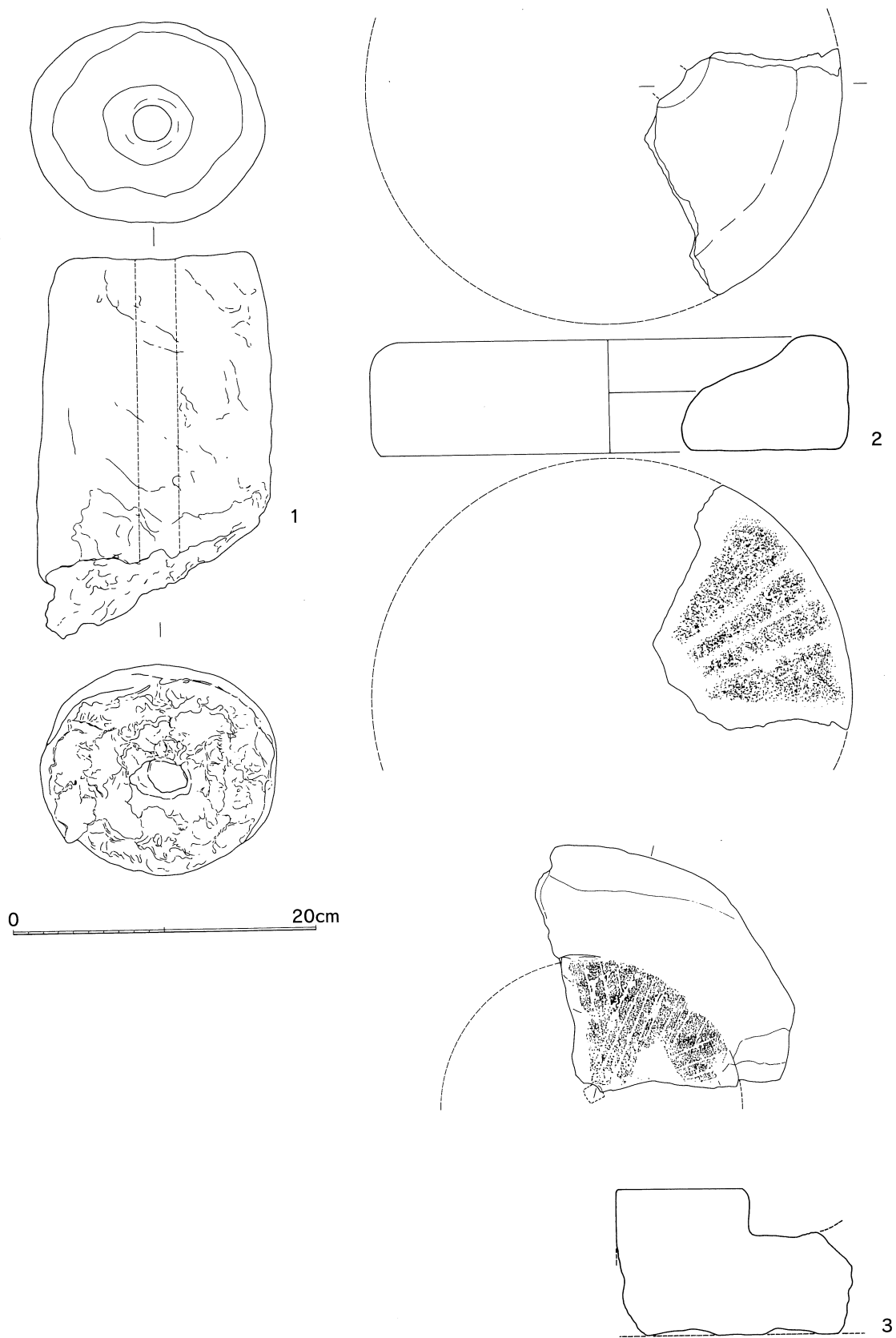
第300図 高添遺跡土木園地区2次調査区4号地下式墳上中層出土遺物実測図 (1/3)



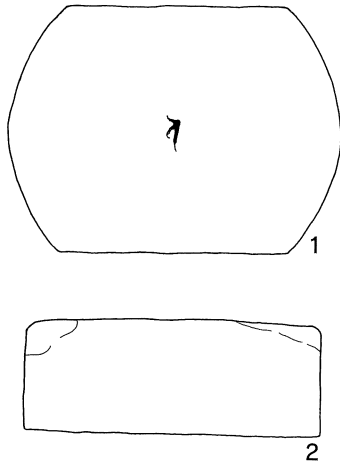
第301図 高添遺跡土木園地区2次調査区5号地下式墳実測図 (1/80)



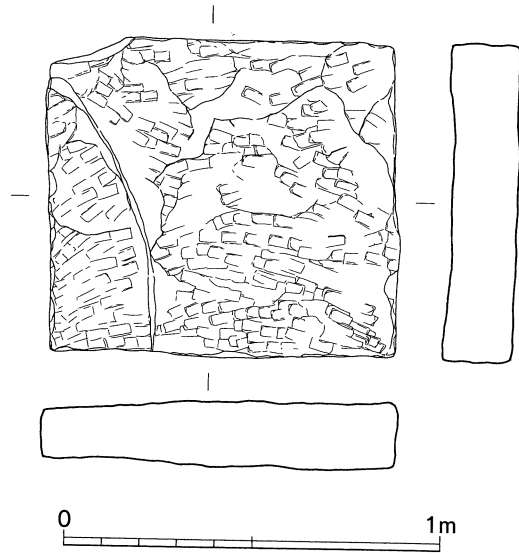
第302図 高添遺跡土木園地区2次調査区5号地下式墳出土遺物実測図① (1/3)



第303图 高添遺跡土木園地区2次調査区5号地下式墳出土遺物実測図② (1/4)



第304図 高添遺跡土木園地区2次調査区
5号地下式壙出土遺物実測図③ (1/8)

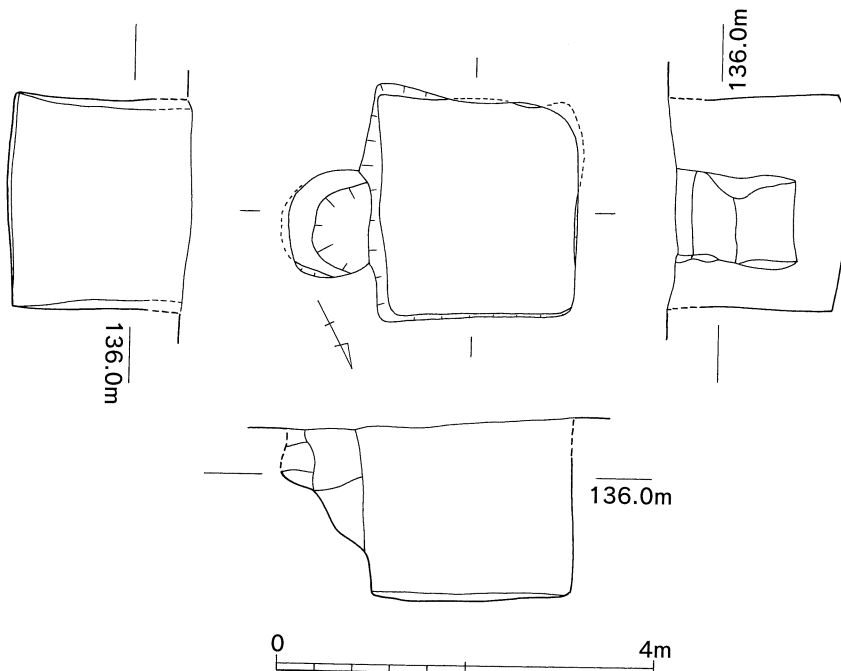


第305図 高添遺跡土木園地区2次調査区5号
地下式壙出土蓋石実測図 (1/20)

第305図は埋土の流入土中から出土した凝灰岩製の扁平な方形の板石であるが、2つに破損していたものが接合できた。石塔の部材とは異なり、地下式壙竪坑部の閉塞石であろう。縦92cm、横83cm、厚さ13~17cmを測り、器面の調整は粗く、ノミ痕がいちじるしく残る。

6号地下式壙 (第306図)

調査区中央において検出された。6基の地下式壙のうち、3号地下式壙とともにオープンカットの地下式壙であると考えられる。平面形が2.2×2.1mの正方形を呈し、検出面から主室の底までの深さは1.9mを測る。竪坑部は東側にみられ、主室の床面より40cm程度の高さにみられる。埋土は黄色ローム・クロボクが小さなブロックで混在しており、一気に埋め戻された状態を呈していた。その埋土中から土師質土器小皿25点以上、土師質土器杯21点以上、京都系土師器皿1点が埋め戻しの過程で、撒かれた状態で出土した。銭貨も同様な状態で出土し



第306図 高添遺跡土木園地区2次調査区6号地下式壙実測図 (1/80)

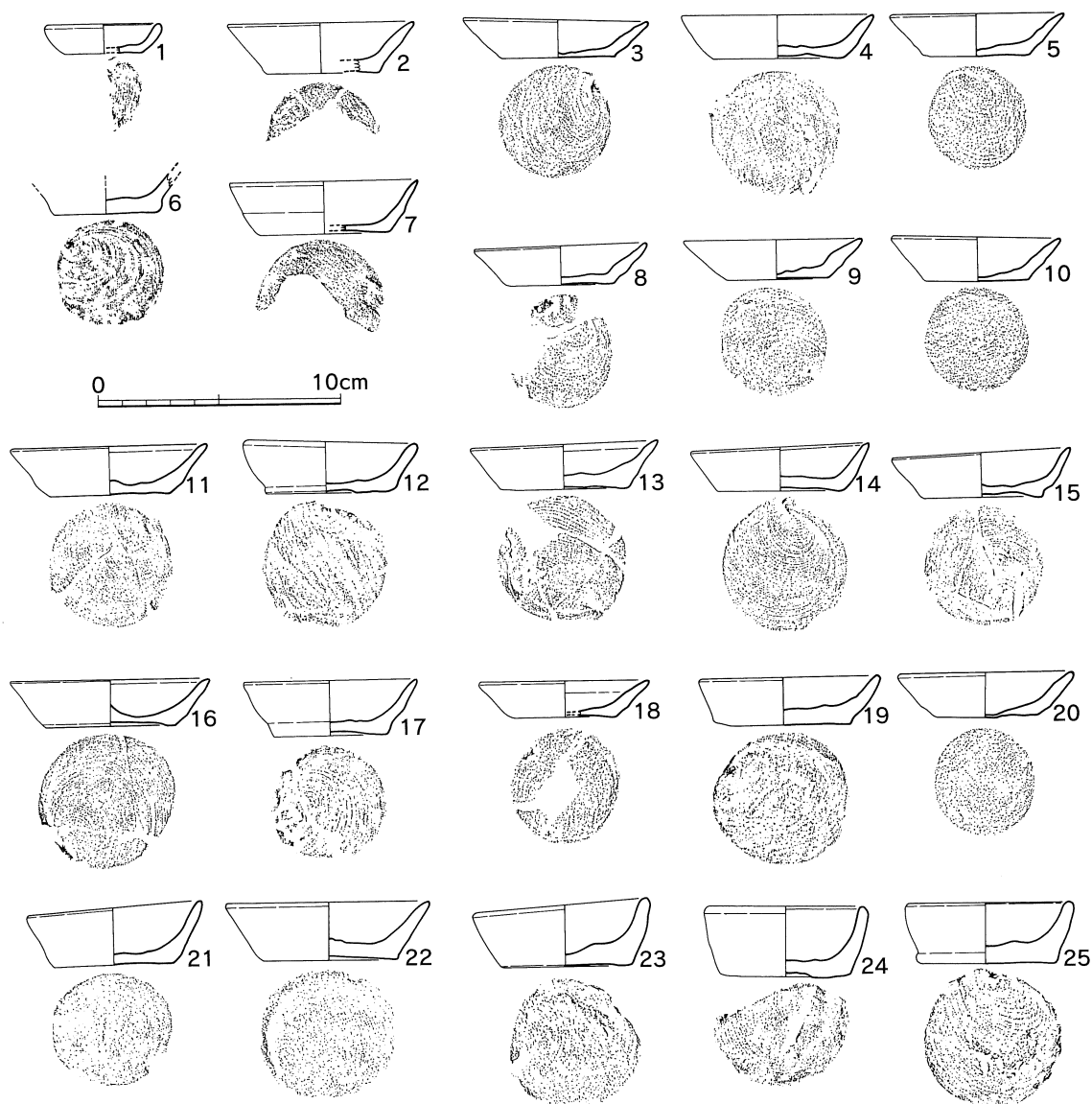
ており、中には差しに通され、2～13枚が錆着した状態のものもみられる。。特に、土師質土器小皿の中に納められて置かれているものも数点みられ、埋め戻しの過程で銭貨・土師質土器坏皿類を用いた祭祀を行ったものと考えられよう。

出土遺物は第307～312図に示した。

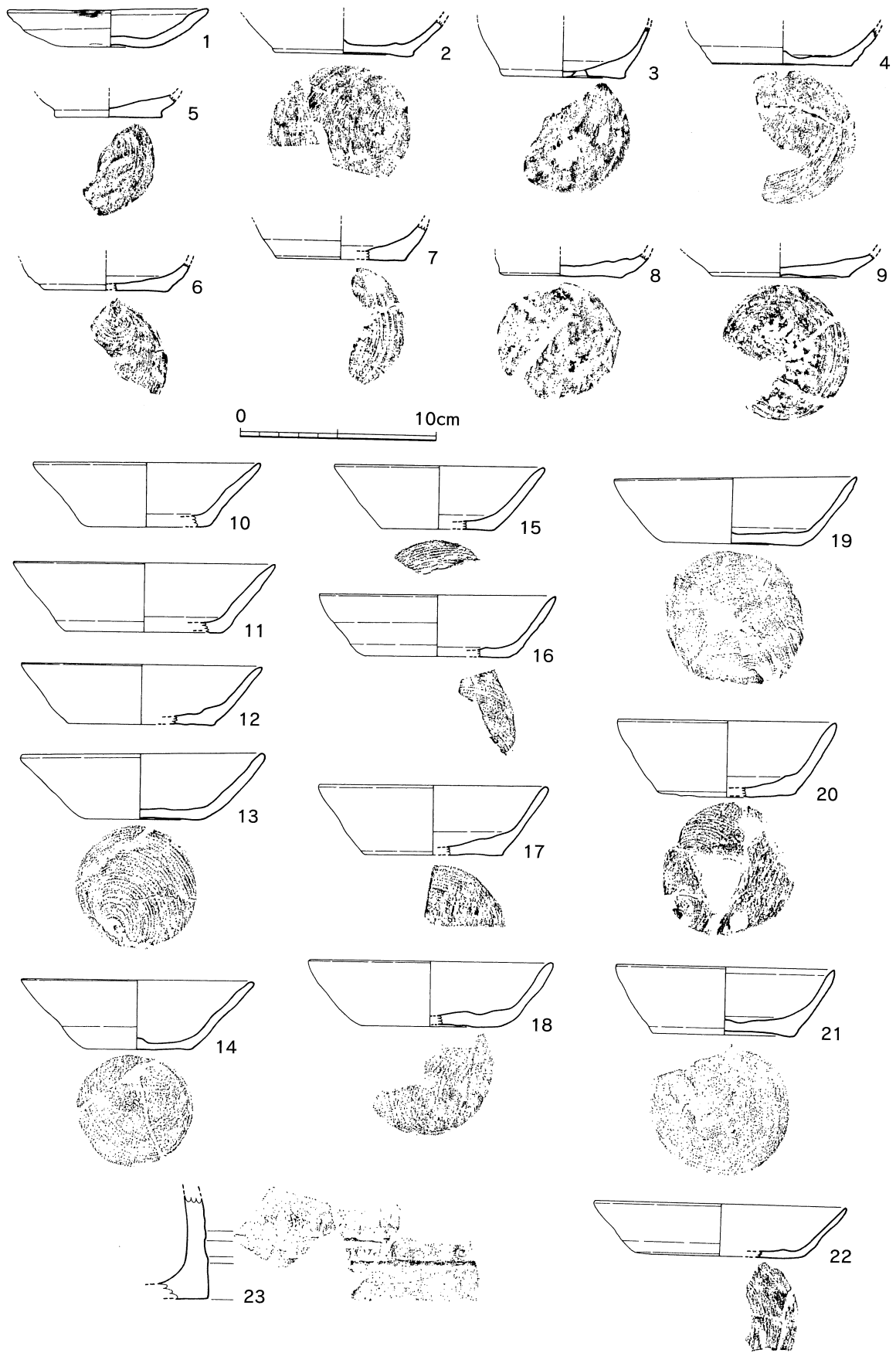
第307図は土師質土器小皿である。いずれも回転糸切りにより切り離されている。1は口径4.7cm、器高1.1cmと特に小さい。2～25は土師質土器小皿であり、2～22のように器壁が薄く、逆「ハ」の字状に開くタイプのもので、23～25のように器壁が厚く体部が直立気味に延びるタイプのものに大別できよう。

第308図1は口径10.6cm、器高2.0cmを測る京都系土師器皿であり、16世紀後半に属するものであろう。口縁部にはススが付着し、灯明皿として利用されていたことがわかる。2～22は口径10.6～12.8cmを測る土師質土器坏であり、底部は回転糸切り離しである。23は瓦質土器火鉢の底部片である。外面底部付近に2条の小さな突帯をまわし、突帯間には双頭蕨手流雲文のスタンプ模様が見られる。

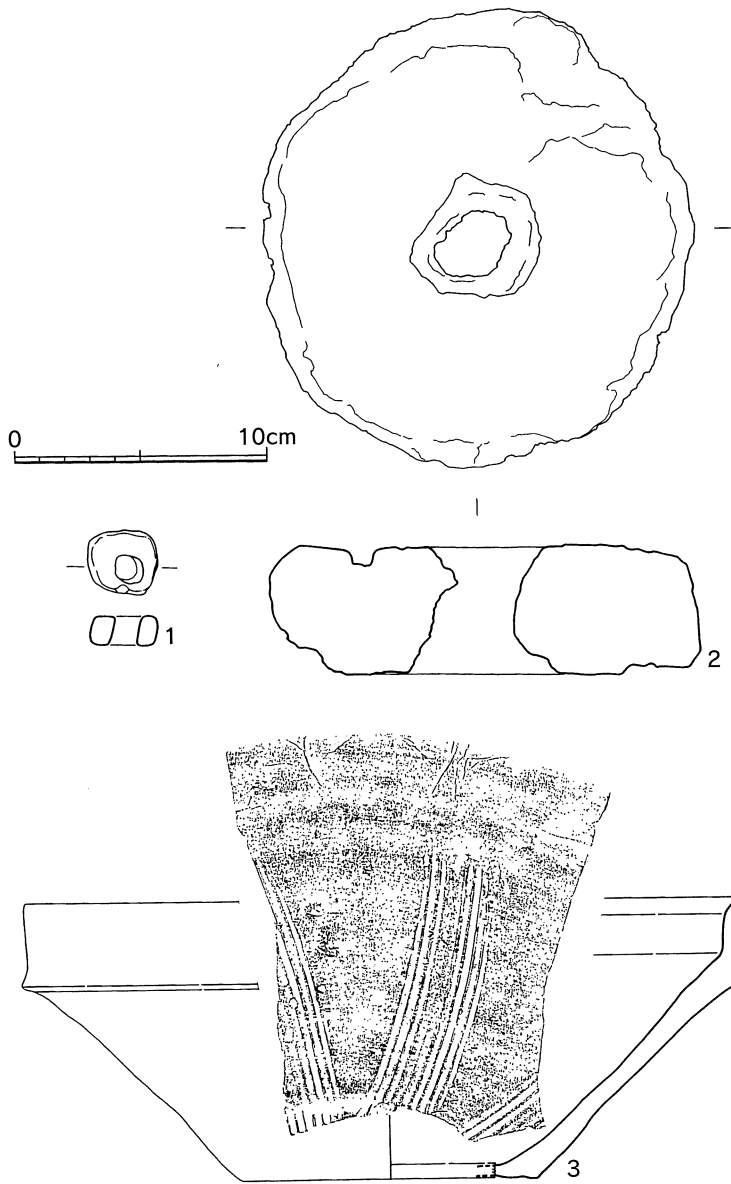
第309図1・2は凝灰岩製の環状製品である。1は径2.5cm、厚さ1cm、孔径0.8cmを測り、2は径17cm、厚さ5cm、孔径3cmを測る。用途は明らかでない。3は備前系焼締陶器播鉢であり、乗岡編年中世VIa期（乗岡



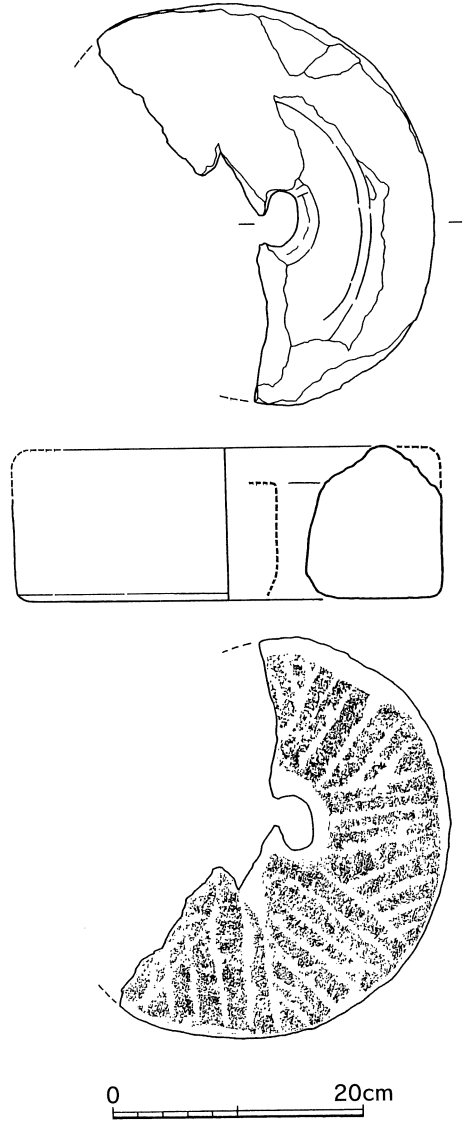
第307図 高添遺跡土木園地区2次調査区6号地下式墳出土遺物実測図① (1/3)



第308図 高添遺跡土木園地区2次調査区6号地下式壙出土遺物実測図② (1/3)



第309図 高添遺跡土木園地区2次調査区
6号地下式墳出土遺物実測図③ (1/3)

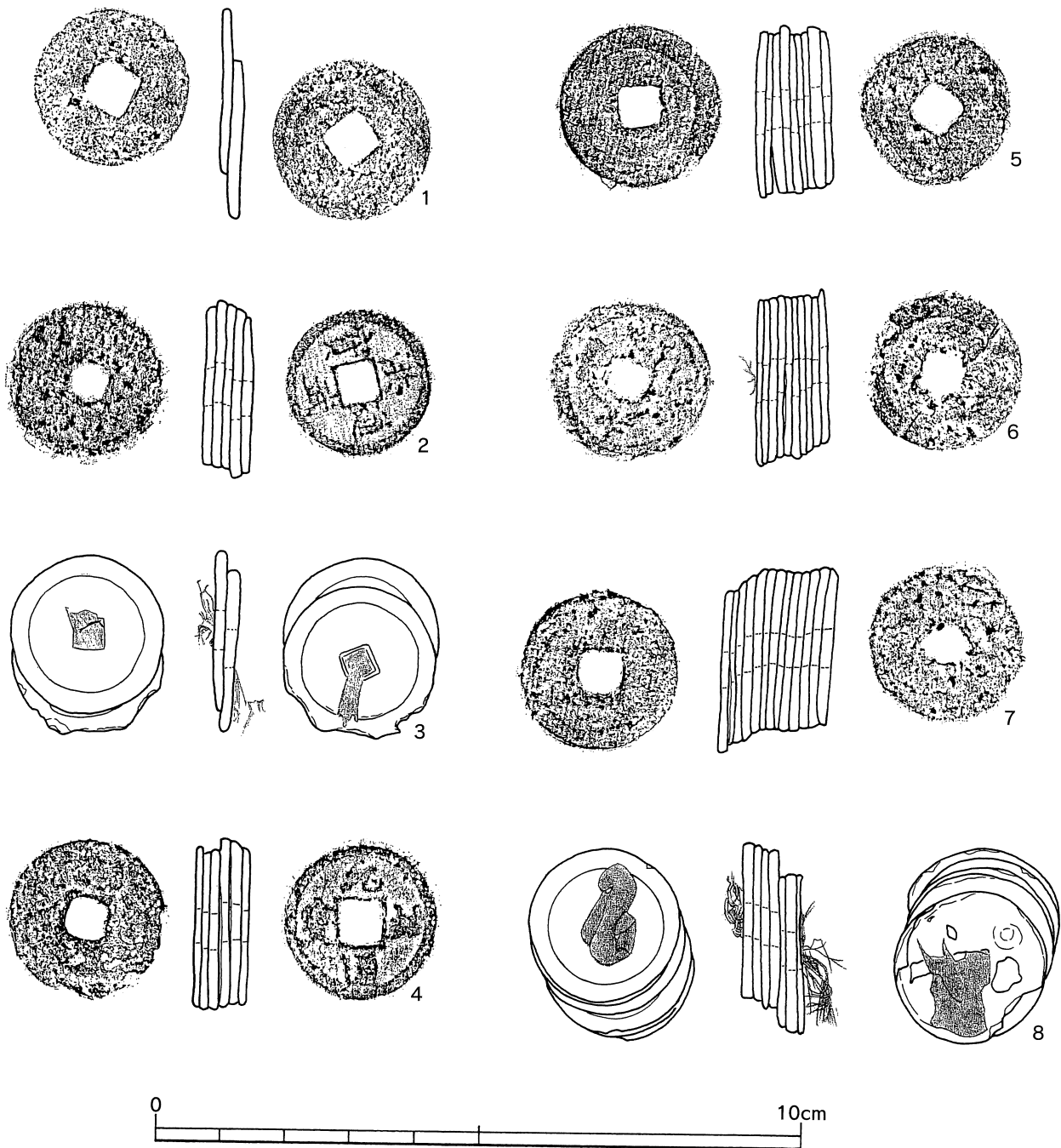


第310図 高添遺跡土木園地区2次調査区
6号地下式墳出土遺物実測図④ (1/6)

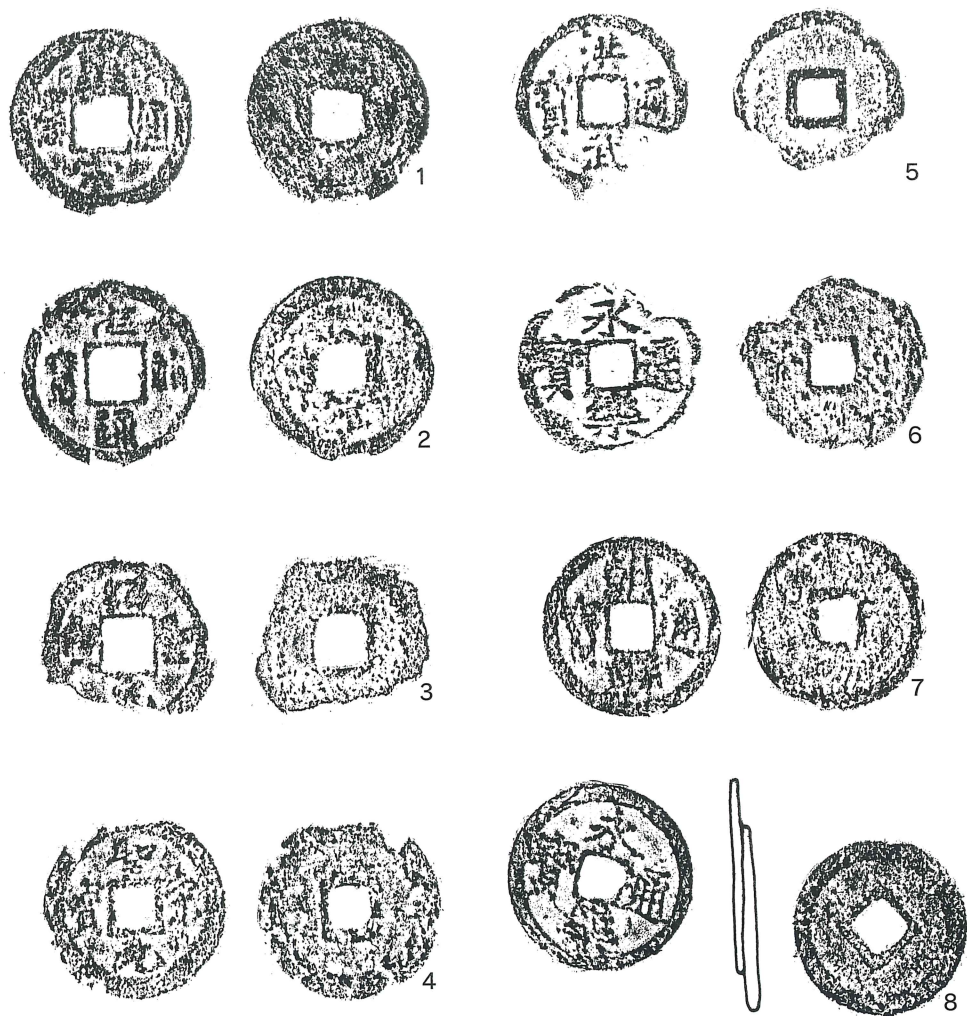
実2000) に属するものである。

第310図は安山岩製石臼の上臼である。径33cm、高さ12cmを測る。分画数は8区画で副溝は5～8条存在していたことがわかる。

第311・312図は銭貨であり、元祐通寶（北宋 1086年初鑄）～朝鮮通寶（朝鮮 1423年初鑄）の総数59枚を数える。第312図8、第311図のように融着しているものもみられ、第311図3・6・8のように植物質の縉紐が残るものもみられる。



第311图 高添遺跡土木園地区2次調査区6号地下式墳出土遺物実測図⑤ (1/1)



第312図 高添遺跡土木園地区2次調査区6号地下式墳出土遺物実測図⑥ (1/1)

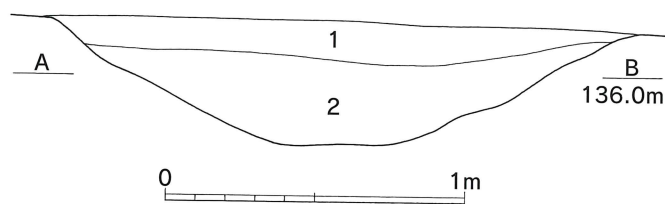
1号溝 (第239・313図)

調査区の南西部分に「コ」の字状に廻る方形溝であり、南側の調査区外にも延びることが想定できる。方位はN-25°-Eであり、北西コーナーに幅約6mの途切れた箇所が認められる。溝南側辺と北側辺との中心部幅は約30mを呈し、この内部が生活空間として利用されたと考えられる。残存する深さは浅く、20~40cmのU字形を呈する。また、現代の土地地番境に位置するため、近世以降の土地区画の機能をもつ溝であったことがわかる。

出土遺物はきわめて乏しく、開削時の根拠となる資料はえられなかったが、図化できた数少ない資料は第314図に示した。1・2は唐津産陶器碗である。高台置付けのみ露胎で高台内も含めすべてに施釉されており、浅黄色の発色をもつ。3は京都系土師器皿であり、口縁外面をつよくヨコナデする。4は肥前染付碗であり、17世紀後半のものである。5は唐津産陶器皿であり、見込み部に砂目がみえる。1600~1630年頃のものであろうか。

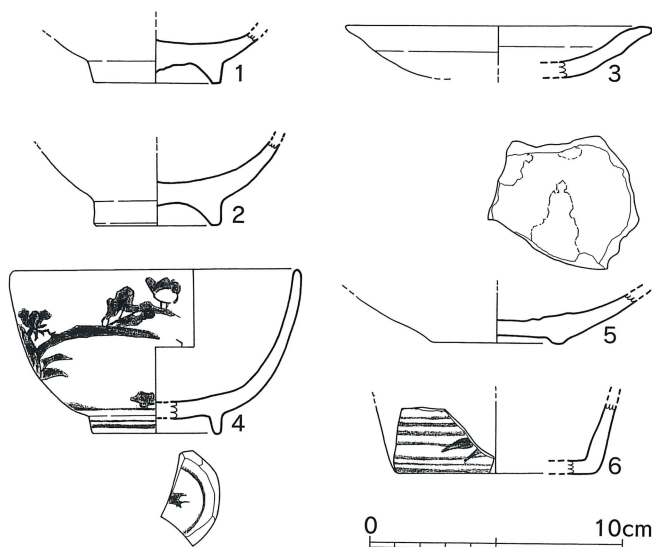
2号溝 (第239・315図)

調査区の中央に直線的に東西に走る溝である。方位はE-25°-Sであり、東端は調査区外に延びるが、西端は1号溝の北西コーナー付近で終わり、1号溝と関連する溝であると考えられる。幅1~1.5m、残存する深さ20~25cmを測り、1号溝との心心間は6mを測る。1号溝と2号溝はほぼ近接し、これらは相互に関連する施設であるものと思える。



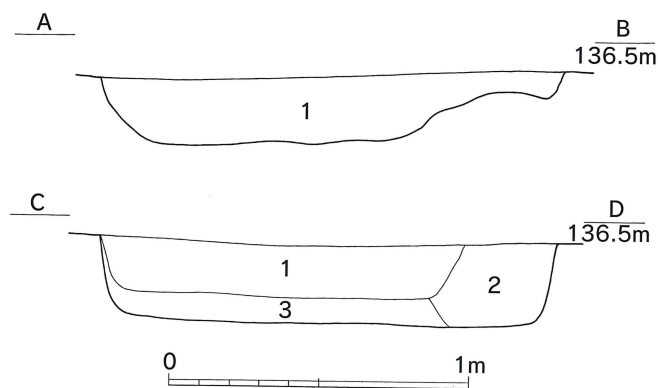
- 1 暗黄茶褐色粘質土(マメンコが混じるが、2層と比較して締まっている)
- 2 暗黄茶褐色粘質土(1層に近似するが、しまりが弱い)

第313図 高添遺跡土木園地区2次調査区1号溝断面図 (1/25)



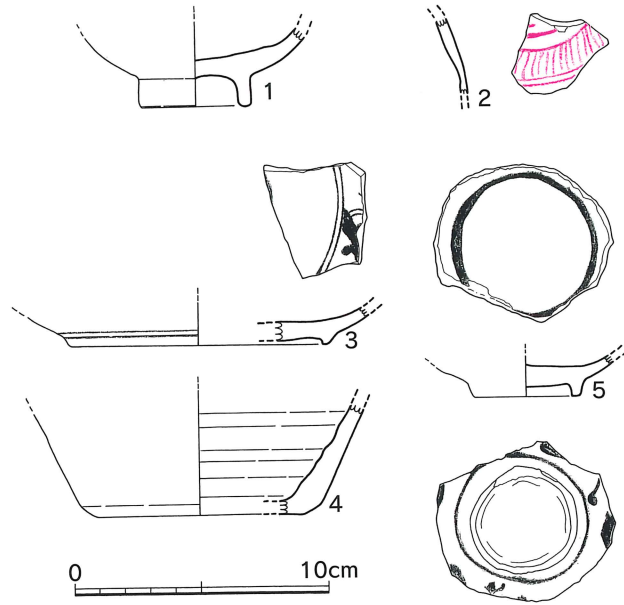
第314図 高添遺跡土木園地区2次調査区1号溝出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物はきわめて乏しく、開削時の根拠となる資料はえられなかったが、図化できた数少ない資料は第316図に示した。1は唐津産陶器碗である。高台畳付けのみ露胎で高台内も含めすべてに施釉されており、浅黄色の発色をもつ。2は赤色で上絵付けされた肥前磁器瓶の肩部であろうか。内面は露胎のままである。3は肥前染付蛇の目大型高台皿であり、18世紀後半のものである。4は褐釉陶器壺であり、底面は露胎のままである。5は中国漳州窯系青花碗であり、見込み部及び高台周辺は露胎のままである。



- 1 黒褐色粘質土
- 2 暗黄褐色粘質土 (1層より粘質が強く硬く、地山のロームを含む)
- 3 暗黒褐色粘質土

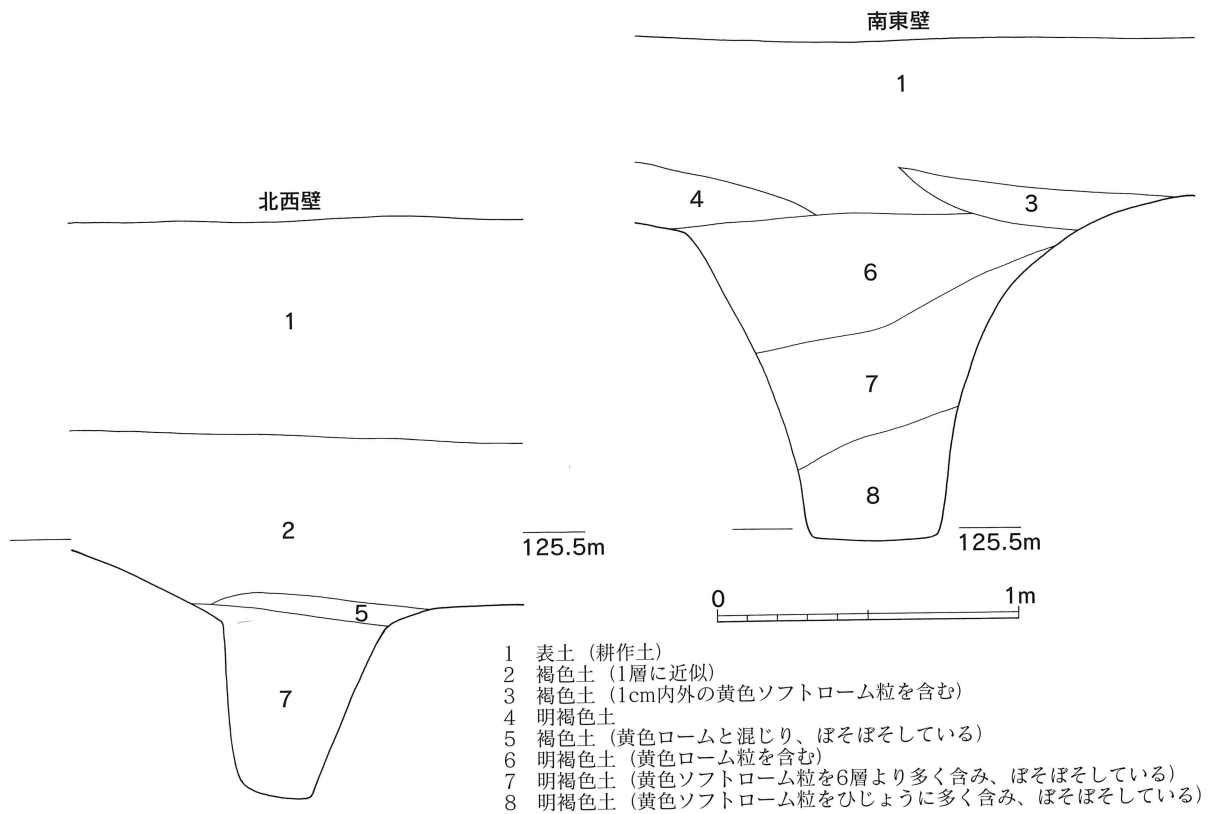
第315図 高添遺跡土木園地区2次調査区2号溝断面図 (1/25)



第316図 高添遺跡土木園地区2次調査区2号溝出土遺物実測図 (1/3)

3号溝 (第239・317図)

調査区北東に調査区を横切る形で営まれている。断面形は深い箱形の形態をもつ。2号溝に平行することや、現代の土地地番境に位置するため、中世末以降の土地区画の機能をもつ溝であったことがわかる。調査区北西壁と南東壁の断面図を第317図に示したが、南東壁の断面の溝底が標高125.45mであることに對し、北西壁の断面の溝底が標高124.62mであり、南東から北西へ下っていく傾斜をもつ溝であることがわかる。埋土は南側から流れ込んだ状態が確認できた。出土遺物はきわめて乏しく、溝底からの出土はみられず、開削時の根拠となる資料



第317図 高添遺跡土木園地区2次調査区3号溝断面図 (1/25)

- 1 表土 (耕作土)
- 2 褐色土 (1層に近似)
- 3 褐色土 (1cm内外の黄色ソフトローム粒を含む)
- 4 明褐色土
- 5 褐色土 (黄色ロームと混じり、ぼそぼそしている)
- 6 明褐色土 (黄色ローム粒を含む)
- 7 明褐色土 (黄色ソフトローム粒を6層より多く含み、ぼそぼそしている)
- 8 明褐色土 (黄色ソフトローム粒をひじょうに多く含み、ぼそぼそしている)

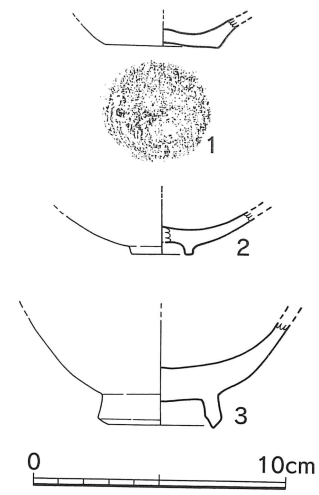
はえられなかったが、数少ない図化できた資料は第318図に示した。

1は土師質土器坏である。2は小さい高台をもつ関西系陶器碗であり、18世紀後半以降のものであろうか。3は青磁碗であり、釉が厚くて明確ではないが、外面に細線による線描蓮弁文がみられる。高台は畳付け内外面を面取しており、三角状を呈している。外面の施釉は畳付けを越えて高台途中まで施されている。15世紀後葉～16世紀前半に属するものであろうか。

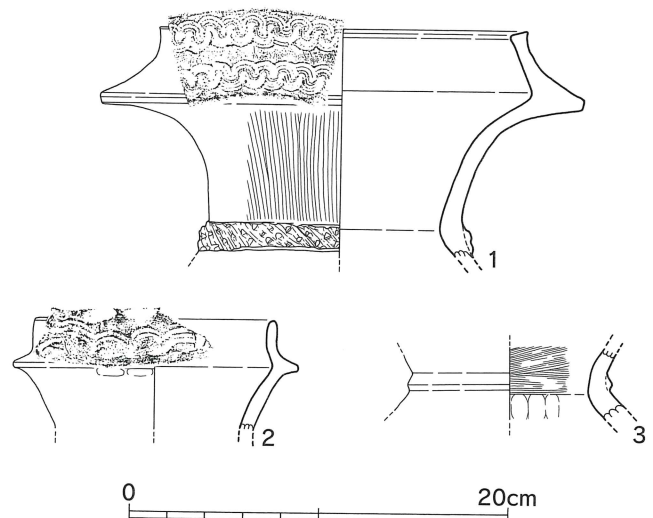
ピット (第239図)

ピットは600基を超えるものが確認されている。遺跡の遺構群が弥生～古墳時代、戦国期～近世であるため、これらの時期に属することは容易に推測できるが、いずれも意識的に埋納された状態で確認できたものはない。以下では、その主要な遺物について紹介していこう。

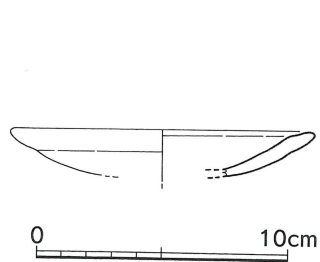
遺物は第319～321図に示した。第319図1は1号ピット、2は2号ピット、3は3号ピットからそれぞれ出土している。いずれも複合口縁壺である。1は内傾して延びる口縁をもち、外面に上下2単位の櫛描き波状文が施されており、口唇部を面取している。頸部にはヘラ状工具で格子目状文を施したベルト状突



第318図 高添遺跡土木園地区
2次調査区3号溝出
土遺物実測図 (1/3)



第319図 高添遺跡土木園地区2次調査区1～3号ピット出土遺物実測図 (1/4)



第320図 高添遺跡土木園地区2次調査区4号
ピット出土遺物実測図 (1/3)

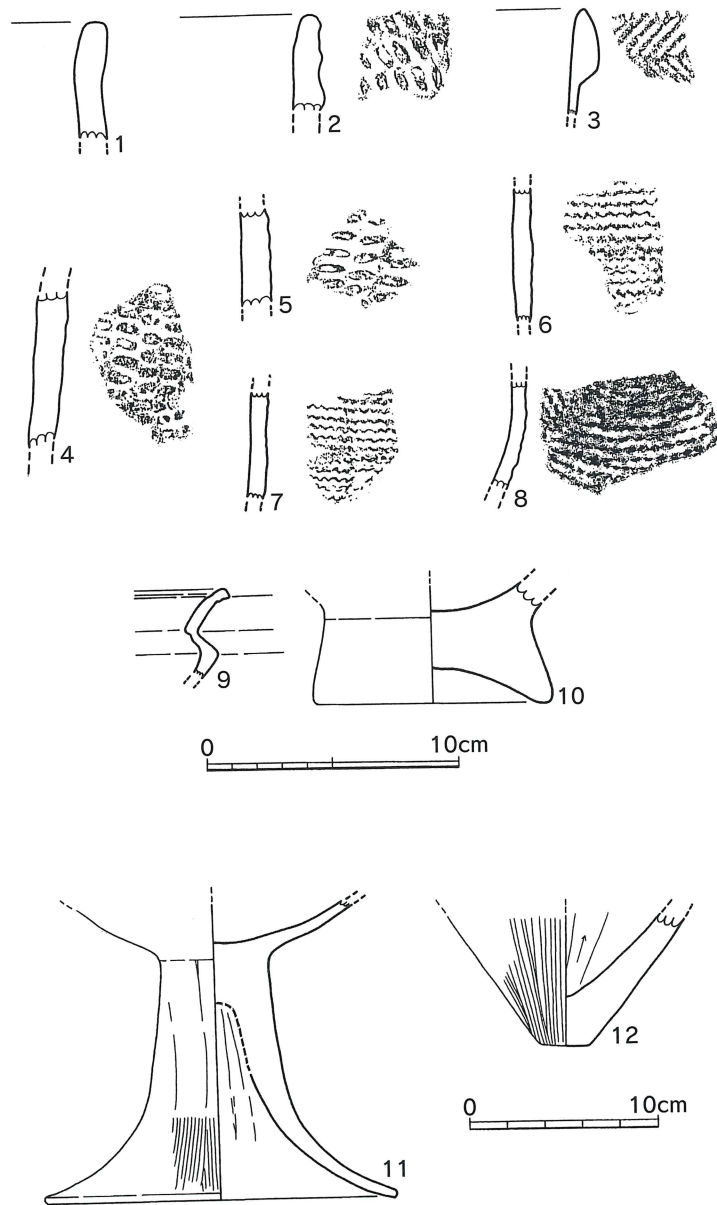


第321図 高添遺跡土木園地区2次調査区
5号ピット出土銭貨 (1/1)

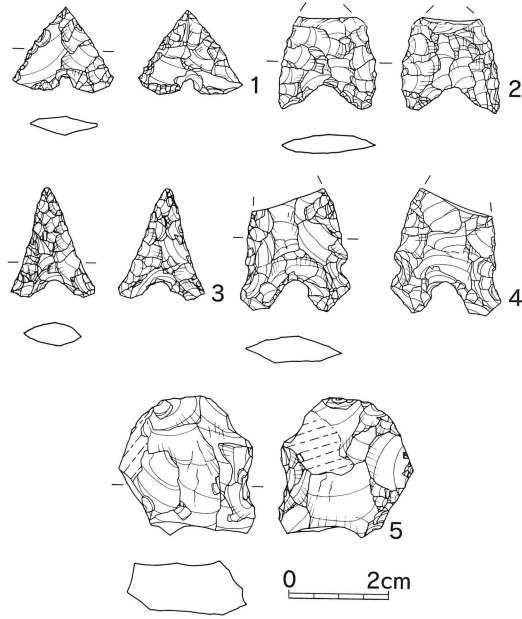
帯を巡らせている。2は上方に延びる口縁をもち、外面に1単位の櫛描波状文が施されている。3には頸部に三角突帯がみられる。第320図は4号ピットから出土した京都系土師器皿である。第321図は5号ピットから出土した「寛永通寶」である。

包含層

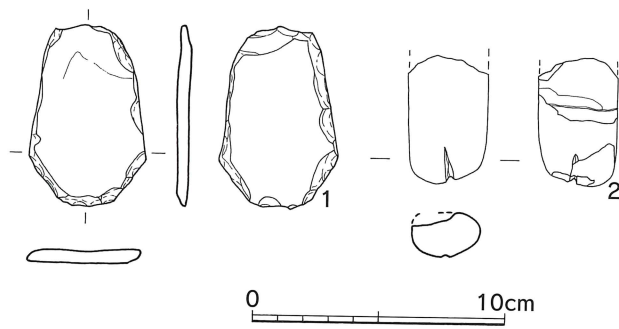
包含層の出土遺物は第322～326図に示した。第322図1～10は縄文土器である。楕円押型文土器(2・4・5)や山形押型文土器(3・6～8)がみられる。11・12は弥生時代後期の高坏と甕である。第323図1～4は石鏃、5は削器である。石材は2が佐賀県腰岳産黒曜石、1・3・4がチャートである。第324図1は結晶片岩製扁平打製石器、2は粘板岩製切目石錘である。第326図1・3は中国景德鎮窯系青花碗である。3は饅頭心タイプの碗であり、高台内に「正徳年造」の字款がみえる。2は蛇の目大型高台をもつ18世紀後半代の肥前磁器色絵皿である。4は見込み部に文様がみられる青磁碗であり、削り出した高台に沿って円形に加工して再利用したものである。5は唐津産陶器皿であり、1590～1630年代のものであろう。6～9は備前系焼締陶器甕である。6・7は玉縁状口縁をもち、14世紀後半のものであろうか。10は安山岩製石臼の上臼である。11は凝灰岩製円環状石製品であるが、用途は明らかでない。第325図は前後に型を合わせて製作した土製人形である。



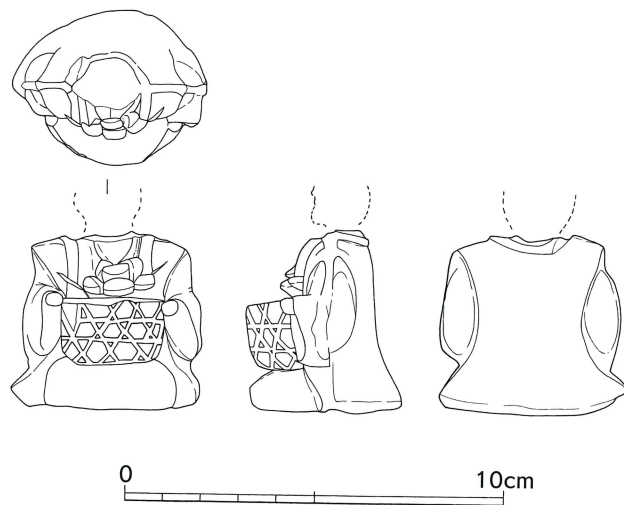
第322図 高添遺跡土木園地区2次調査区出土遺物実測図① (1/3・1/4)



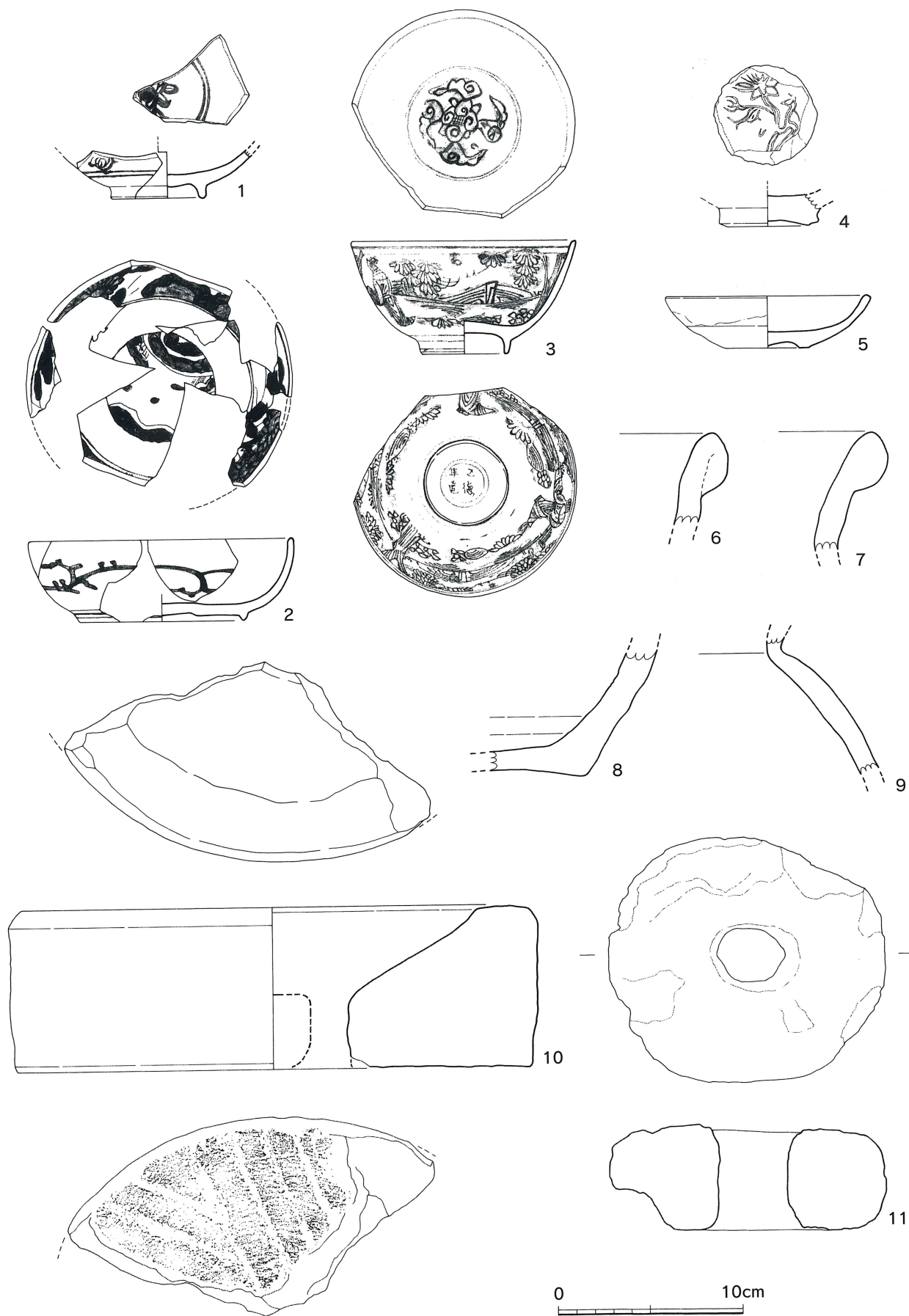
第323図 高添遺跡土木園地区2次調査区出土遺物実測図② (2/3)



第324図 高添遺跡土木園地区2次調査区出土遺物実測図③ (1/3)



第325図 高添遺跡土木園地区2次調査区出土遺物実測図④ (1/2)



第326图 高添遺跡土木園地区2次調査区出土遺物実測図⑤ (1/3)

第5節 まとめ

1 2本主柱の小型竪穴と掘立柱建物遺構について

高添遺跡の発掘調査の結果、石五道原地区2次調査は、弥生後期～古墳前期の竪穴22、掘立柱建物遺構5基、古い道路と考えられる溝状遺構1基等が検出され、石五道原地区5次調査は、弥生後期～古墳前期の竪穴1基、掘立柱建物遺構4基が検出されている。その内、明らかに後世の所産となる道路状遺構を除いて、これら検出された遺構の配置状態を考えてみると、竪穴住居跡23基と掘立柱建物遺構9基の配置には、何らかの規則的なまとまりがあることが認識できそうである。

まず、高添集落の特徴をみると、竪穴住居跡を大別してみると、細かな時期的分析を考慮しても、弥生後期前葉～古墳前期前葉の時期内に収まっていることである。これらの竪穴は、2本主柱、4本主柱、6本主柱、8本主柱等に分類できるが、4本主柱、6本主柱、8本主柱等の竪穴は、竪穴の南・東の壁寄りから、炭化物炉、二本一對の補助柱、焼土炉と配置されているのが普遍的である。つまりこれは、基本的には、竪穴住居の構成員数に対応した規模の拡大の諸相にすぎないと考えてよい。それは、4本主柱、6本主柱、8本主柱等の竪穴は、それぞれが所狭しと重なり合っただけで検出される傾向があり、それぞれの場の機能が明瞭に区分されているとは把握できないことである。

一方、2本主柱の竪穴をみると、小型竪穴の中央部に二本の主柱を立てて、その間に炭化物炉が位置している。しかし、2本主柱の竪穴は、これら竪穴の延長線上で把握することは適当ではない。なぜならば、2本主柱の竪穴の配置をみると、集落の中での配置される場所に共通性があり、その位置が限定できることである。それは、竪穴住居跡の折り重なった密集地と密集地の間隙を縫う様に、意図的に選定された配置の様相が把握できることである。例えば、石五道原地区2次・5次調査では、2本主柱の竪穴は、15号、16号、23号であるが、これらの配置された状態をみると、1号竪穴～14号竪穴とは微妙に異なった配置が把握できそうである。つまり、折り重なる竪穴住居跡群の空閑地、つまり広場の一角を占めるように位置する機会が多いのである。このような現象は、高添台地の遺跡群を巨大なトレンチのように発掘調査した中九州道路の土木園地区や出口地区の調査区からも指摘することが可能である。2本主柱の竪穴の用途や機能は判然とはしないが、集落の共有地と考えられる広場の一角を占めることから、例えば、共同炊飯等に関するの共同体の一部を担う機能をもつものと推察できそうである。

次に、石五道原地区2次・5次調査で最も注目された発見は、掘立柱建物遺構9基の検出である。これまで、大野川流域一帯の遺跡から発見された掘立柱建物遺構は、豊後大野市千歳町の鹿道原遺跡で注視され、並び倉の先駆的な様相として、その稀有な事例が認識されたことは記憶に新しいが、それ以降、僅かな事例の追加があるのみであり、地域的な特徴が普遍的な分布かを含めて、極めて注目される発見例と言っても過言ではない。掘立柱建物遺構は基本的には一間×一間の長方形の4本柱を呈するが、竪穴内の主柱穴よりもやや大きく、掘り形と柱根跡との区別が容易である。竪穴住居跡が南・東の方位からその配置を決めていくのと異なり、掘立柱建物遺構は企画的に配置された様相が顕著である。

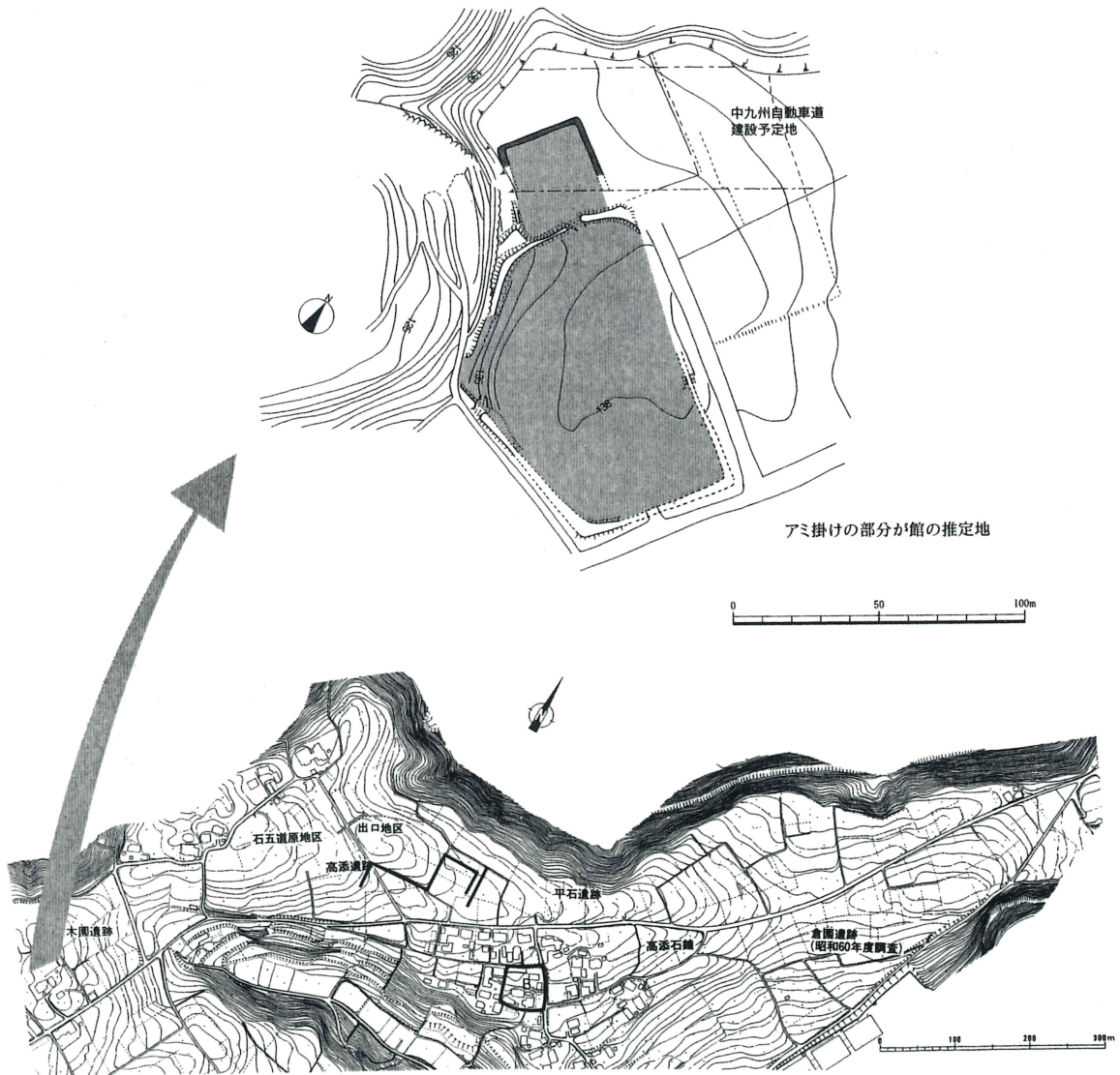
例えば、6号掘立柱建物のように一棟が単独で位置するもの。3～5号掘立柱建物のように、一定の間隔を置いて長軸を縦に並べた並び倉的なもの。1～2号掘立柱建物のように、長軸と短軸を直角に配置したもの。8～9号掘立柱建物のように、長軸を平行に並べて配置したもの。等のバリエーションがあるが、何れも2棟から3棟が一つの単位を形成している様相を呈している。そして、竪穴住居跡の配置場所とは明らかに場所を違って配置された例が多く、機能的には高床の倉庫と考えられそうである。鹿道原遺跡ではこの現象を、竪穴住居跡と掘立柱建物遺構の機能的な住み分け現象と表現した。今回の高添遺跡の中九州道路の巨大なトレンチの各調査区からも、掘立柱建物遺構の存在を指摘することが可能であった。豊後大野市千歳町の鹿道原遺跡や高添遺跡は、大野川中流域における広大な規模の遺跡である。掘立柱建物遺構の存在が地域的な特徴なのか、上流域も含めた普遍的な分布なのかを含めて、総合的に判断していく必要がある。そういう意味で、今後、大野川流域の弥生～古墳時代の集落論の考察には、掘立柱建物遺構を抜きにしては考えられないといっても過言ではない。

(栗田勝弘)

2 中世の遺構

今回、調査を行った高添遺跡出口地区3次調査区、土木園地区1・2次調査区などにおいては掘立柱建物群をはじめとして、その生活空間を区画する溝状遺構や、祭祀土坑・地下式壙などが検出されている。

高添遺跡出口地区3次調査区では、方位に合致する40m四方の溝に囲まれた中に12棟の掘立柱建物跡と2列の柵列が確認できている。掘立柱建物跡の規模が9~20㎡が5棟、20~30㎡が2棟、30㎡以上が5棟確認できているが、最高4時期の掘立柱建物跡の切り合いが確認できるため、4時期におよぶ屋敷である可能性が高い。その場合、単純にはいかないであろうが、掘立柱建物跡の軒数を割れば一時期3棟から形成されている可能性が高いことが想定できる。この屋敷地から出土する遺物からみた屋敷地の存続時期は16世紀後葉~18世紀中葉に及ぶため、200年近い存続期間が考えられよう。この方形区画溝の東西両外側には4~5m程度の間隔をあけて、浅い溝(1号溝、1号道路)が並行して走る。西側溝は底面が硬化しており、道として利用されていたことが考えられるが、このような屋敷地の景観は戦国期以降、現在に至るまで県下に多く確認できる。たとえば、本調査区の南に広がる高添集落の中には、同じく二重の溝に挟まれた土塁をもつ方形区画の屋敷地が存在し(写真図版35参



第327図 高添遺跡における中世の屋敷地(小柳和宏編2004より)

照)、土塁の外側の溝は現在でも生活道路として利用している。この屋敷地には土塁に接して天文8年(1539)銘をもつ2基の板碑がみられ、屋敷地が少なくとも16世紀中葉までさかのぼることが推測できる(写真図版35参照)。このようなことから、本遺跡も方形区画溝の外側には土塁が廻っていたことが考えられるが、このほかにも東西南側には方形区画溝と大型土坑が切り合いをもって存在するため、これらの大型土坑の機能を今後明らかにしていかななくてはならない。

また、方形区画溝の屋敷地の南側にも2条並行の溝(4号溝)が出口地区2次調査区に延び、この南側にも一つの生活空間が存在することが、想定できる。なお、この4号溝中からも戦国期後半の遺物がみられるため、埋没時期は別にして、掘削時期は同様に16世紀にさかのぼる可能性をもつ。

以上のことから、現在に伝えられる高添集落の景観は16世紀代から継続して形成されてきたものと考えられよう。

同様に、土木園地区2次調査区でも、掘立柱建物群およびそれと関連した溝状遺構が検出されている。掘立柱建物は復元できたもので32棟を数える。これとともに屋敷の空間を囲む溝状遺構が検出されている。

調査区の南に延び、「コ」の字状に取り囲む1号溝は東西幅30m程度の空間を画し、東側1号溝のさらに東側には東側1号溝と6m程度隔てて2号溝が平行して走る。また、これらと平行して2号溝より25m隔てて3号溝が走る。2号溝と3号溝は現在に残る畑地の境界として生きており、畑地の境界がかったの屋敷地を区画する溝を踏襲したものであることがわかる。これらの1~3号溝は出土遺物が乏しく、1・2号溝に関してはきわめて浅く、現在も踏襲されているため、掘削時期は明らかでないが、埋土中に近世陶磁器が含まれるため、近世に営まれた可能性が高い。この方形区画溝の南東側には近世に庄屋屋敷であった100m×60mの略方形に土塁が廻っていた空間が存在し、この両者間にも土塁が存在し、土塁の中央が6m程度切れて接続する状況が現在の地形に残っている。

掘立柱建物のうち、この方形区画溝と同じ方位にあるものは、N-20~25°-Eの1・2・17・19・20・23・26・28・29号掘立柱建物など9棟の建物であり、これとともに2号溝の北端より北側に存在する1号柵列も方位を同じくする。これらは方形区画溝の存続時期と重なるものと考えられよう。

このほかの掘立柱建物は30号掘立柱建物をのぞきN-10~18°-Eの範囲におさまる。明確に時期が押さえられる建物群はみられないが、方形区画溝やこれに平行する溝の区画が現在に踏襲されていることから、この区画に先行する企画の方位であると考えるのが自然であろう。明確な切り合い関係が確認できなかったが、この方位にのる18号掘立柱建物が1号溝と重なることからしても、18号掘立柱建物が営まれていた時期には1号溝が存在していなかった可能性が高い。遺跡中から出土する遺物から、15世紀前葉以降、中世を通じての遺物がみられ、なかでも、16号掘立柱建物を構成する5号ピットから寛永通寶が出土しており、方形区画溝に伴う建物に先行する建物にも近世の所産であるものが存在することがうかがえよう。16号掘立柱建物に関しては、何らかの地鎮め行為として銭貨の埋納が行われ、また、これのみ総柱建物であることと何らか関連があるものかもしれない。

土木園地区2次調査区において特徴的なのは、祭祀行為を物語る土坑と地下式墳の存在である。祭祀土坑については土木園地区1次調査区3号土坑でも検出されており、その検討は次項によるが、1・2号土坑が掘立柱建物群の北端に比較的近接して存在する。2号土坑は15世紀前葉の土師質土器坏と銭貨を埋納した土坑であるが、15世紀前葉が掘立柱建物群創設期にあたるため、屋敷地開設に伴う地鎮め祭祀の遺構である可能性が高い。2号土坑とともに地鎮め祭祀の遺構である可能性が高い1号土坑は瓦器椀と京都系土師器を埋納した土坑であるが、16世紀中葉におさまる土器群であるため、当該期にも何らか屋敷地造営の契機となった儀礼が存在する可能性がある。

また、地下式墳に関しては、土木園地区1次調査区3号土坑に近接して1基、また、石五道原地区において戦国期の石塔類がみられ、墓墳と考えられる土坑群中から1基検出されており(坂本嘉弘編1989)、葬送空間や祭祀遺構に近接して存在する特徴をもつ。このような存在形態は九州・山口において、ごく一般的にみられ、屋敷地に営まれる地下式墳でも何らかの宗教空間であったり、屋敷そのものが寺院等の特殊な空間である場合が多い

(原田昭一2000)。土木園地区2次調査区では、6基の地下式壙が分散して分布している。なかでも、6号地下式壙はオープンカットの地下式壙であり、きわめて特異である。しかも、埋土中から土師質土器小皿25点以上、土師質土器坏21点以上、京都系土師器皿1点、銭貨59枚以上が埋め戻しの過程で、撒かれた状態で出土した。このような様相の地下式壙は九州・山口において類例をみないが、何らかの祭祀行為に伴うことは明らかであろう。前述した1号土坑と同時期であることは、両者が何らかの関連性をもつものかもしれない。

以上、今回の調査において高添台地の集落は戦国期に営まれはじめたことが確認できたが、今に伝えられる石造物は、高添台地に限れば、貞和5年(1349)銘をもつ石五道板碑がまず確認でき、石五道地区には南北朝期～戦国期におさまる石塔の集積地がみられる(写真図版35参照)。このほかにも高添台地には永禄4年(1561)銘をもつ石幢がみられ、発掘調査により、遺構・遺物が確認できていないものの、台地上の集落は南北朝期以降に営まれはじめたことがわかる。戦国期の集落像はおぼろげながら明らかになりつつはあるが、南北朝期の集落像はまったく不明であるといわざるをえない。今後、高添台地上に新たな調査の手がはいることにより、戦国時代をさかのぼる集落の様相が明らかになっていくであろう。(原田昭一)

3 高添遺跡土木園地区1次調査区3号土坑について

1. はじめに

本報告で触れたように、3号土坑からは多量の土師質土器小皿・坏および緞銭が出土した。近年、大分県下では中世後期を中心に銭貨を伴う地鎮め遺構の報告例が増加している(原田昭一2006)。そのなかで3号土坑の土器・緞銭のセット出土とその配置は、他の報告例と比較して極めて特異性をもつものである。ここでは土器・緞銭の各分析を試み、3号土坑の性格について考えたい。

2. 出土土器について

本遺構では土師質土器小皿32点、坏24点の計56点が出土している。

小皿は概ね橙褐色の色調を有し、ロクロ成形である。底部切り離しは糸切りで明瞭に残る。内面体部はユビによる調整と考えられるロクロ成形痕が残り、内底部は粘土紐の単位が渦巻き状に残る。口径は6.6～7.7cmであり、平均口径7.1cmを測る。調整から以下に分類できる(第328図)。

1類—体部が直線気味に開く。底部と体部の境は明瞭である。器高は1.5cm前後である。

2類—体部が内湾気味に開く。底部と体部の厚さは同一で、上げ底気味が多い。体部と底部の境は明瞭である。器高は1.6cm前後である。

3類—底部から体部へと内湾気味に開く。底部は円盤状を有し、体部と比して底部の器壁が厚いものである。この円盤状は粘土柱からの切り離し位置によって生じたものと考えられる。体部と底部の境は明瞭である。器高は1.7cm前後である。

坏はおおむね橙褐色の色調を有し、ロクロ成形である。底部切り離しは糸切りで明瞭に残る。内面体部、外面体部下半はユビによる調整と考えられるロクロ成形痕が残る。口径は10.7～11.5cmであり、平均口径11.1cmを測る。器形から以下に分類ができる。(第328図)

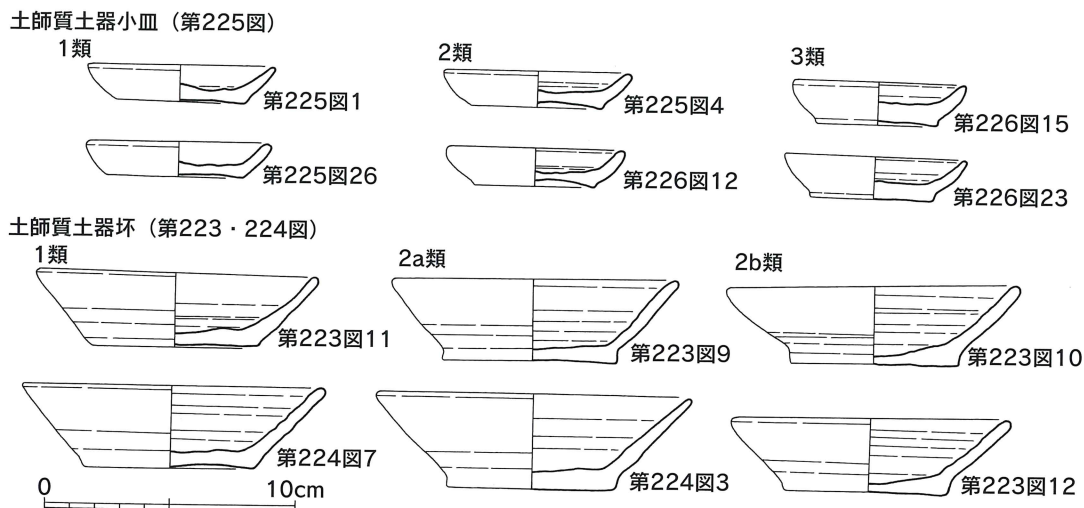
1類—体部は直線気味に開く。底部と体部の器壁は同一で、その境は明瞭である。器高は3cm前後である。

2a類—小皿3類と同様で底部が円盤状を有し、体部と比して底部の器壁が厚いものである。体部は直線気味に開き、その境は明瞭である。器高は3.5cm前後である。内底部に粘土紐の単位が渦巻き状に残る。

2b類—2a類と同様、底部は円盤状を有する。内底部は不定方向ナデによってくぼみ、ロクロ痕は消される。体部は直線気味に開き、その境は不明瞭である。器高は3.5cm前後である。

土師質土器の分類の結果、小皿は2・3類、坏は2a・2b類が主体を占めている。小皿3類、坏2類は形態上類似する器形を有している。周辺地域における中世後期の土師質土器の様相は、後藤一重や坂本嘉弘によって検討されている(後藤一重2000、坂本嘉弘2001・2003)。本遺構出土の土師質土器は、大友館・中世大友府内町周辺を中心とする地域、竹田市小路遺跡等の奥豊後地域に分布が認められており、その分布・史的背景から大友

氏の政治的影響力の関連性が考えられている（後藤一重2000）。本遺構の参考資料として中世大友府内町跡第5次調査B区のSK245出土資料が挙げられる（横島隆二2005）。出土量は少ないが、本稿で示した小皿2・3類、坏1・2a・2b類が確認できる。坏は平均口径11.1cmを測り類似している。ほぼ同時期の可能性が高く、ロクロ土師質土器の変遷観から15世紀末～16世紀初頭と考えておきたい。



第328図 高添遺跡土木園地区1次調査区3号土坑出土遺物分類図 (1/3)

3. 出土銭貨について

出土した土器の下面のほぼ中央から緡銭が出土している。緡銭は銹着しており、各銭貨の銭種を確認していないが、銭貨の径が同様な形態を呈することから無文銭の可能性が高い。

全国的に無文銭は「東北地方北部、島根県、広島県東広島市・廿日市市一帯、宮崎県高千穂地方、沖縄県」のように出土分布のまとまりが把握されている（嶋谷和彦2004）。九州出土の無文銭を集成・検討した櫻木晋一・高田倫子は、近年の博多遺跡群、北九州市域の事例の増加をふまえたうえで、九州山地を中心とする中九州、沖縄で多く出土していることを示唆されている（櫻木晋一・高田倫子2004）。

大分県では、県内の中世城館出土の銭貨を集成した原田昭一によると、城館における銭貨の出土は14世紀以降からみられるが、特に、15世紀にはいって増加する傾向があるようであり、その銭種は中国からの渡来銭が主体を占めている（原田昭一2006）。また、中世大友府内町出土の銭貨を検討した畔津宏幸によると、中世大友府内町では中国・朝鮮・ヴェトナム等の渡来銭が主体を占め、無文銭の割合は低い状況のようである（畔津宏幸2005）。県内の無文銭が出土する集落遺跡においても臼杵市荒田遺跡、杵築市馬場尾遺跡など少ない状況である（櫻木・高田2004）。

中世大友府内町・城館における無文銭の出土は、渡来銭に比べ、その割合は低く、本遺構の無文銭によって構成される緡銭の出土は県内では特異的な状況と考えられる。文献史学の中島圭一が、中世末期の九州内では各地域的な貨幣システムが流通の現場で成立・発達していることを指摘している（中島圭一1997）。本遺構の無文銭がどのような流過程でもたらされたかは明らかにできないが、周辺地域の出土事例をまって検討していきたい。

4. 3号土坑の性格

以上、出土土器、銭貨を個別に検討を加えた。これらをふまえその性格について考え、まとめたい。

近年、原田昭一が県下の城館出土銭貨を、①銭貨を大量に一括埋納した例、②銭貨を伴う井戸祭祀例、③地下式壙から土師質土器とともに銭貨が出土する祭祀遺構例、④土師質土器を伴うか、あるいは銭貨のみを用い埋納した祭祀土坑例、⑤掘立柱建物の柱穴およびその周辺のピットから銭貨が出土する祭祀遺構例、の5分類を提示している（原田2006）。原田はそのうち④⑤の例が比較的多く確認できるとして、その遺構状況から地鎮め関連遺構と捉え、建物に対するものと、土地に対するものにその性格が異なることを指摘している。原田の分類のう

ち、3号土坑は④に相当する。

3号土坑周辺の空間的位置を見ると、本遺跡及び隣接する2次調査区・大迫遺跡徳原地区（豊田徹士1999）は中世後期を主体とする屋敷空間が展開している。とくに1・2次調査区では地下式壙、2次調査区では銭貨埋納土坑、瓦質土器椀埋納土坑等が検出されている。出土遺物の年代観から本遺跡・2次調査区を中心に祭祀・宗教的な空間が長期間営まれたものと考えられ、3号土坑は祭祀・宗教的な空間のなかに位置づけられる。3号土坑周辺では掘立柱建物は検出されなかったが、ここでは祭祀・宗教的な屋敷地および土地に対する地鎮め遺構と考えておきたい。

地鎮めの方法は全国的に多様な形態が確認されているが、3号土坑は無文銭の性格、地鎮めの方法を考えるうえで貴重な事例といえよう。（山本哲也）

参考・引用文献

- 畔津宏幸 2005「中世大友城下町跡の出土銭について」『平成17年度大分県考古学会総会発表資料』大分県考古学会
- 後藤一重 2000「小路遺跡出土土器の分析と遺跡の性格」『小路遺跡上屋敷遺跡』久住町教育委員会
- 小柳和宏編2004『大分の中世城館 第四集』大分県教育委員会
- 坂本嘉弘編1989『高添台地の遺跡』千歳村教育委員会
- 坂本嘉弘 2001「考古学から見た中世大友府内城下町の成立と構造」『南蛮都市と豊後府内』大分市教育委員会・中世都市研究会
- 坂本嘉弘 2003「大友氏と中世大友府内城下町跡」『湯築城をとりまく西瀬戸の戦国群像』愛媛県教育委員会・（財）愛媛県埋蔵文化財センター
- 櫻木晋一・高田倫子 2004「九州・沖縄における無文銭の様相」『中近世移行期の無文銭』出土銭貨研究会
- 嶋谷和彦 2004「無文銭の生産と全国分布」『中近世移行期の無文銭』出土銭貨研究会
- 豊田徹士 1999『大迫遺跡徳原地区 原田第2遺跡原地区』千歳村教育委員会
- 中島圭一 1997「中世貨幣の普遍性と地域性」『中世日本列島の地域性』名著出版
- 乗岡 実 2000「備前焼播鉢の編年案」『第3回中近世備前焼研究会資料』
- 原田昭一 2000「九州・山口における中世「地下式壙」の諸様相」『古文化談叢』第45号 九州古文化研究会
- 原田昭一 2006「大分県における城館出土の銭貨」『出土銭貨』第24号 出土銭貨研究会
- 槇島隆二 2005「中世大友府内町跡第5次調査B区」『豊後府内1』大分県教育庁埋蔵文化財センター